

長野県中央道埋蔵文化財  
包蔵地発掘調査報告書

—下伊那郡阿智村斜坑広場その2—

昭和48年度

日本  
長

信州大学附属図書館



3470161849

局  
会

長野県中央道埋蔵文化財  
包蔵地発掘調査報告書

—下伊那郡阿智村斜坑広場その2—

昭和48年度



日本道路公団名古屋建設局  
長野県教育委員会

## 序

昭和48年度中央自動車道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査の一環として、恵那山トンネル飯田方斜坑掘削工事に伴い、下伊那郡阿智村圓原、斜坑広場その2杉の木平遺跡の第2次発掘調査が、7月25日から10月20日にかけて実施された。

阿智村圓原は、信濃神坂峠とともに古代東の山の道にまつわる一大祭祀圏の中心であり、記紀・万葉をはじめ、諸古典にゆかりの深いあまたの伝承・史話・古跡が、自然景観と調和して残る数少ない史跡のひとつとして知られる所である。杉の木平遺跡は、神坂峠東麓、川沿いの南向崖斜面に位置し、陶器片の多量出土地と知られていた。昭和46年度の第1次発掘調査により祭祀址と古道通過地を想定するに至り、今回の第2次発掘調査には、古代東山道確認の悲願さえこめた大きな期待がかけられていた。

発掘調査の結果は、報告書に見られるように、第1次調査にくらべて遺物出土量は少なかったが、縄文時代の住居址をはじめ、奈良・平安時代の特異な遺構の発見は多い。とくに、巖石群や焼土群に伴出する石製模造品と容器・礫を敷き傾斜地形に沿ってつづら折れる帯状の遺構は、第1次調査区の類似遺構と総合して、古代東の山の道通過経路解明を示唆するものと思われ、学界に新知見をもたらすものも多く発掘調査の成果は多大であった。

報告書の刊行に当って、この発掘調査の実施に深いご理解をいただいた日本道路公団名古屋建設局、同恵那トンネル東工事事務所、工事施工の鹿島建設事業所、炎暑きびしい7月から肌寒さおぼえる10月末にかけて、長期間辺境の地でこの発掘調査に精励された大沢団長を始めとする調査団の各位、この調査のためにご協力いただいた飯田中央道事務所・飯田教育事務所・阿智村当局等関係各位に対し、深甚な謝意を表する次第である。

昭和49年3月20日

長野県教育委員会教育長 小松孝志

## 例 言

- 1 本書は、昭和48年度に日本道路公団と長野県教育委員会との契約に基づいた発掘調査のうち、長野県下伊那郡阿智村園原斜坑広場その2（杉の木平遺跡B地域）の調査報告書である。
- 2 本書は、契約期間内（昭和48年7月2日より昭和49年3月20日まで）にまとめることが要求されており、なお調査団は他地区の報告書作成もしているので、調査結果について十分な検討・研究の時間的な余裕がないため、調査によって検出された遺構・遺物をより多く図示することに重点をおいた。また前回調査のA地域調査結果を再録することによって、杉の木平遺跡全体が理解されるものと考え、第一次調査報告書から抜粋の上今村が再編集し、遺構・遺物の図版はそのまま再版した。なお本書全体については、宮沢・今村が編集にあたった。
- 3 杉の木平遺跡の発掘調査だけにとどまらず、総合的な調査として地形・地質は松島、碑文・歴史は大沢が担当した。
- 4 遺構・遺物関係の図面類の作成は遮那・村上・小林・小平が主として担当し、伊那班深沢の応援を得た。遺構図関係中ドットは焼土を、Sは石を、囲んだ斜線は木炭を、→は傾斜を示し、コンターは20cm間隔。また遺物図中のドットは内黒を、金属器類の斜線は断面を示し、その他は文字でそれぞれ示してある。
- 5 土器類の接合・復元は、伊那班根津・辰野の応援を得た。
- 6 道路状遺構を中心に長野県文化財専門委員一志茂樹博士、長野県考古学会長藤森栄一先生の現場指導を受けた。
- 7 写真撮影は木下・今村が主として担当し、一部宮沢のものもある。
- 8 執筆は調査員が分担し、それぞれの文末に文責を記した。
- 9 遺物は、長野県上伊那郡辰野町辰野東小学校内、長野県中央道遺跡調査団本部に保管し、実測図類も同所に保管してある。

# 目 次

## 斜坑広場その2

### 序

### 例 言

I 調査状況	1
1 調査にいたるまで	1
1) 中央道関係の経過	1
2) 発掘調査委託契約	10
2 調査の実施と経過	16
1) 調査日誌	16
2) 発掘調査協力者	27
3 発掘調査の方法	27
II 園原地区の概況	28
1 自然的背景	28
1) 園原の地形と地質	28
2) 園原の気候	40
2 歴史的背景	42
1) 園原の歴史	42
2) 園原をたずねて — 園原の名勝・古碑 —	47
3) 園原周辺の遺跡	56
4) 園原周辺の祭祀遺跡	60
III 調査結果	71
1 杉の水平遺跡の位置	71
2 遺構と遺物	73
1) 住居址	73
2) テラス	74
ア 1号テラス	74
イ 2号テラス	74
3) 道路状遺構	75
ア 1号路址と5号路址	75
イ 2号路址	76
ウ 3号路址	76

エ	4号路址	77
オ	6号路址	78
カ	7号路址	79
4)	竪穴址	79
ア	1号竪穴	79
イ	2号竪穴	80
ウ	3号竪穴	80
5)	土壇址	81
ア	1号土壇	81
イ	2号土壇	81
ウ	3号土壇	82
エ	4号土壇	82
オ	5号土壇	82
カ	6号土壇	83
6)	集石址	83
ア	1号集石	83
イ	2号集石	84
7)	溝状址	84
ア	1号溝址	84
イ	2号溝址	85
ウ	3号溝址	85
エ	4号溝址	86
8)	炭層	86
ア	炭層Ⅰ	87
イ	炭層Ⅱ	87
9)	その他の遺物	88
3	杉の木平遺跡A地域調査結果	118
4	杉の木平遺跡の調査のまとめ	155
	あとがき	158

## 挿 図 目 次

第1図	園原地区史跡名勝地	67
第2図	智里西域の概略図及び園原の段丘分布図	68
第3図	杉の木平遺跡周辺地形関係図	69
第4図	園原付近の遺跡分布図	70
第5図	杉の木平(B)遺跡地形・遺構配置見取図	92
第6図	杉の木平(B)遺跡地層図	93
第7図	杉の木平(B)遺跡1号住居址・1号テラス遺構図	95
第8図	杉の木平(B)遺跡2号テラス遺構図	96
第9図	杉の木平(B)遺跡1～7号路址・1～4号溝址遺構図	97
第10図	杉の木平(B)遺跡1・3・5号路址配石遺構図	97
第11図	杉の木平(B)遺跡1～3号竪穴・1・2号集石遺構図	99
第12図	杉の木平(B)遺跡1～6号土壇遺構図、炭層範囲図	100
第13図	杉の木平(B)遺跡1号住居址・遺構外出土土器・石器	101
第14図	杉の木平(B)遺跡出土石製模造品	102
第15図	杉の木平(B)遺跡1・2号テラス出土土器	103
第16図	杉の木平(B)遺跡1号路址出土土器	104
第17図	杉の木平(B)遺跡1・2号路址出土土器	105
第18図	杉の木平(B)遺跡2号路址出土土器	106
第19図	杉の木平(B)遺跡3号路址出土土器(1)	107
第20図	杉の木平(B)遺跡3号路址出土土器(2)	108
第21図	杉の木平(B)遺跡3号路址出土土器(3)	109
第22図	杉の木平(B)遺跡4号路址・3号溝址出土土器	110
第23図	杉の木平(B)遺跡4・5号路址・1・3号溝址・2・4・6号土壇出土土器	111
第24図	杉の木平(B)遺跡1～3号竪穴址・炭層付近出土土器	112
第25図	杉の木平(B)遺跡炭層付近・遺構外出土土器	113
第26図	杉の木平(B)遺跡遺構外出土土器(1)	114
第27図	杉の木平(B)遺跡遺構外出土土器(2)	115
第28図	杉の木平(B)遺跡出土鉄製品	116
第29図	杉の木平(B)遺跡出土鉄製品・古銭	117
第30図	杉の木平(A)遺跡50ライン・炭層5地層図、1号配石遺構図	132
第31図	杉の木平(A)遺跡石製模造品出土地	133

第32図	杉の木平(A)遺跡1号住居址・カマド1遺構図	134
第33図	杉の木平(A)遺跡柱穴群1・2遺構図	135
第34図	杉の木平(A)遺跡土器(1)	136
第35図	杉の木平(A)遺跡土器(2)	137
第36図	杉の木平(A)遺跡土器(3)	138
第37図	杉の木平(A)遺跡土器(4)	139
第38図	杉の木平(A)遺跡土器(5)	140
第39図	杉の木平(A)遺跡土器(6)	141
第40図	杉の木平(A)遺跡土器(7)	142
第41図	杉の木平(A)遺跡古銭	143
第42図	神坂峠出土石製模造品(1)	144
第43図	神坂峠出土石製模造品(2)	145
第44図	神坂峠出土石製模造品(3)	146
第45図	神坂峠出土石製模造品(4)	147
第46図	神坂峠出土石製模造品(5)	148
第47図	神坂峠出土表採石製模造品	149
第48図	神坂峠・三壺洲遺跡出土石製模造品	150
第49図	杉の木平(A)遺跡・大垣外遺跡出土石製模造品	151
第50図	大垣外遺跡・大平神社(頸檢現)遺跡・川畑遺跡出土石製模造品	152
第51図	川畑遺跡・杉ヶ洞遺跡・森下遺跡・山岸遺跡・赤坂遺跡・中原遺跡出土石製模造品	153
第52図	中原遺跡出土石製模造品	154

## 表 目 次

表1	團原周辺の遺跡一覧表	64
表2	飯田・下伊那地方石製模造品・子持勾玉出土遺跡一覧表	66
表3	杉の木平遺跡B地域出土土器類一覧表	91
表4	杉の木平遺跡A地域遺構別出土土器・陶器一覧表	119
表5	杉の木平遺跡A地域地区・層別遺物一覧表	121
表6	杉の木平遺跡A地域出土古銭一覧表	123
表7	1号住居址床面出土灰釉陶器	125
表8	柱穴群1と溝3・柱穴群2出土陶器	128
表9	配石1・炭層4の1・2、炭層5出土灰釉陶器	129



## 図 版 目 次

第1図	遺跡遠景(1).....	159
第2図	遺跡遠景(2).....	160
第3図	遺跡遠景(3).....	161
第4図	斜坑口.....	162
第5図	付近の山.....	163
第6図	アズマのヤマのミチ点映 (1).....	164
第7図	アズマのヤマのミチ点映 (2).....	165
第8図	アズマのヤマのミチ点映 (3).....	166
第9図	アズマのヤマのミチ点映 (4).....	167
第10図	アズマのヤマのミチ点映 (5).....	168
第11図	アズマのヤマのミチ点映 (6).....	169
第12図	アズマのヤマのミチ点映 (7).....	170
第13図	アズマのヤマのミチ点映 (8).....	171
第14図	1号住居址.....	172
第15図	1号テラス(1).....	173
第16図	1号テラス (2).....	174
第17図	2号テラス.....	175
第18図	1号路址 (1).....	176
第19図	1号路址 (2).....	177
第20図	2号路址.....	178
第21図	3号路址 (1).....	179
第22図	3号路址 (2).....	180
第23図	3号路址 (3).....	181
第24図	3号路址出土遺物 (1).....	182
第25図	3号路址出土遺物 (2).....	183
第26図	4号路址.....	184
第27図	5・7号路址.....	185
第28図	竪 穴.....	186
第29図	土 壇 (1).....	187
第30図	土 壇 (2).....	188
第31図	1号溝址・1号集石.....	189

第32図	炭層 1・2	190
第33図	炭層 1 出土土器	191
第34図	炭層 1 鉄製品出土状況	192
第35図	炭層 2 出土遺物	193
第36図	その他の出土遺物(1)縄文式土器	194
第37図	その他の出土遺物 (2)	195
第38図	その他の出土遺物 (3)	196
第39図	その他の出土遺物 (4) II 層	197
第40図	その他の出土遺物 (5) I 層	198
第41図	石製模造品 (A・B 地域)	199
第42図	鉄製品 (1)	200
第43図	鉄製品 (2)・石製品	201
第44図	A 地域の遺構 (1)	202
第45図	A 地域の遺構 (2)	203
第46図	A 地域の遺構 (3)	204
第47図	石製模造品神坂峠出土 (1)	205
第48図	石製模造品神坂峠出土 (2)	206
第49図	石製模造品 (阿智村中原出土)	207
第50図	調査団・現地視察者	208

# I 調査状況

## 1. 調査にいたるまで

### 1) 中央道関係の経過

#### ア 整備計画とその経過

昭和32年4月、高度経済成長政策の一つとして「国土開発縦貫自動車道建設法」が公布され、その中の一つに中央自動車道予定路線も発表された。その後、諏訪回り案に改正され、本線は西宮線、岡谷から分岐し長野へ通ずるものを長野線と呼んでいる。昭和41年7月に五縦貫道整備計画が決定し、その後、道路整備施行命令が日本道路公団に出されている。中央自動車道西宮線は、小牧・東京間やく360km、そのうち長野県内は、岐阜県中津川市から恵那山トンネルで伊那盆地に通じ、天竜川に沿って北上し、諏訪盆地を横切り、八ヶ岳山麓を通過して山梨県に至る間、やく122kmとなっている。

昭和41年に、日本道路公団名古屋支社は飯田市に飯田工事事務所を設置し、その後の進展に伴い恵那山トンネル東工事事務所、伊那市・諏訪市にも工事事務所が設けられた。長野県でもこれに呼応して、県庁内に長野県中央道建設対策本部が組織され、企画部に中央道課が、その出先機関として中央道事務所が、飯田・伊那・諏訪3市に置かれた。このような現地体制の整備につれて、ルート発表・立入測量・設計協議・巾杭設置そして用地買収へと業務は段階的に進むのではあるが、現実には遅々として進まず、年月を費やしていたが、昭和45年頃から用地買収も進展し、それに伴って全線がいくつもの工区に分けられて本線工事が発注されている。昭和42年3月恵那山トンネル補助トンネル工事が始まり、昭和44年11月には恵那山トンネル本線トンネル工事に着手し、昭和45年には阿智工区から本線工事に入っている。昭和47年後半になると埋蔵文化財発掘調査の終るのを追い駆けるように、飯田・高森・松川・飯島・駒ヶ根工区には大形機械が導入されて整地作業がなされ、長期間人手をかけて掘りあげた遺跡が、短時日のうちに姿を消している。ここで問題になることは、日本道路公団から施工業者への工事仕様書の中に、調査予定の埋蔵文化財包蔵地が記載されていないことがあって、工事によって発掘調査前の遺跡が破壊されそうになった例のあったことなど今後の保存事業について、きめのこまかい対策の必要性を痛感している。

#### イ 埋蔵文化財の対策とその経過

縦貫道計画が発表された昭和41年頃、開発が全国的に広まりだして、各地で文化財保護についての問題が取りあげられていた。文化財保護委員会（現文化庁）では、開発機関との間でその保護についての調整を計っていた頃であったので、日本道路公団との間で、昭和42年9月に「日本道路公団の建設事業等工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」を交した。それより先、昭和41年には、中央自動車

車道関係県文化財主管課協議会を開催し、文化財の取扱いについて打合せている。県教育委員会では、昭和42年に入って関係市町村連絡協議会を、飯田・伊那・諏訪3地区で聞きその対策を打合せ。さらに、昭和42年国庫補助事業として、中央自動車道用地内とその周辺の遺跡分布調査を実施し、下伊那地区147遺跡、上伊那地区112遺跡、諏訪地区90遺跡計349遺跡を確認する。その後ルート発表に伴い補足調査を実施し、中央道用地内には、下伊那地区で63遺跡(含斜坑広場)、上伊那地区83遺跡、諏訪地区44遺跡の計190遺跡の存在を知る。分布調査では埋蔵文化財を除く文化財についても調査しているが、その取扱いについては「覚書」に触れられていないこともあって、関係市町村教育委員会にその交渉が任せられている。「覚書」にもとづいて、埋蔵文化財包蔵地(以下「遺跡」という)の取扱いについては、その下交渉及び発掘調査は各県教育委員会が当ることになっており、文化庁の指導もあって、長野県が中心となり愛知・岐阜・山梨の4県で「中央自動車道関係県文化財対策連絡協議会」を持ち、この会には日本道路公団関係者も加って、昭和42、43、44年に開催されたが、管轄公団支社の業務進展がまちまちであり、各県の取り組み方も一律でないため、充分な連絡調整もできないうちに、愛知・山梨・岐阜県の順で、路線内の遺跡発掘調査が開始されていった。

遺跡の取扱いについては、「覚書」の中で、A・路線計画からははずすもの、B・路線計画の中に入れるが保護するもの、C・路線計画の中に入れ、事前に発掘調査をし記録して保存するもの3区分されている。それに基づいて、中央自動車道用地内遺跡についても、A・B・Cの3区分されていたが、路線決定の後では、その変更が容易でなく、結局190遺跡すべてCとなった。この最終決定は、県教育委員会の意見聴取に基づいて文化庁でなされる。これらの遺跡の発掘調査は、日本道路公団が費用負担して、県教育委員会と契約して実施するように「覚書」で定められている。しかし、県教育委員会では、直営の発掘調査体制を組織することが困難であるとの立場から、「長野県中央道遺跡調査会」を結成し、その中に遺跡調査団をおいて業務を遂行することにし、そこへ指導主事を調査主任として出向させることにした。

この調査体制が確立する前の昭和45年3月に、飯田市上飯田地区の2遺跡(さつみ・古屋垣外)の発掘調査が行われた。この調査は、年度末も迫っているため県教育委員会が受託することは困難なためと、試み的な意味もあって、「長野県中央道遺跡調査会」を結成し、同調査会が受託して実施した。暫定的な措置であったが、長野県下最初の中央道用地内埋蔵文化財包蔵地の発掘調査である。

同年4月から、本格的な発掘調査体制確立のために、県教育委員会社会教育課(後に文化課に独立)では、担当指導主事を2名増員し、4名とする。一方では、各地区の関係市町村教育委員会との打合せ会を持ち、日本道路公団名古屋支社との協議も具体化し、6月と7月の現地協議によって昭和45年度の調査地区も決定した。そこで、7月には「長野県中央道遺跡調査会」を整備充実した。

昭和45年度は、8月に下伊那郡阿智村地区7遺跡(調査費179万円)、9月に飯田地区その1地区10遺跡(調査費1590万円)の発掘調査委託契約を相次いで結び、9月2日には、下伊那郡阿智村川畑遺跡において、長野県下中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査の導入式を挙行している。翌9月3日から2班編成の調査団によって発掘調査を開始している。10月に上伊那郡宮田村地区その1地区6遺跡(調査費500万円)の発掘調査委託契約を結び、昭和46年3月45年度の業務を完了した。

昭和46年度は、4月に、上伊那郡飯島町内その1地区(調査費1224万円)、8月に下伊那郡高森町内その1地区(調査費3120万円)、9月に下伊那郡阿智村園原斜坑広場その1杉の木平遺跡(調査費730万円)

の発掘調査委託契約が結ばれ、上伊那郡中田切川橋梁工事先工に伴う上伊那郡飯島町内その2、久根平遺跡（調査費123万円）の発掘調査委託契約も、9月に結ばれ、昭和47年3月この年度の業務を完了している。

昭和47年度になると、用地買収業務も進展し、上下伊那郡ともに各工区ごと工事発注が続出する年とあって、県教育委員会においては、担当指導主事3名を増員し、4班の調査団を組織した。飯田・下伊那地区に2班、伊那・上伊那地区に2班づつ常駐させて発掘調査に当ることとした。4月に、飯田市内その2地区17遺跡（調査費2367.5万円）、上伊那郡飯島町内その3地区8遺跡（調査費677.1万円）、伊那市西春近地区18遺跡（調査費3361.6万円）が、7月には、下伊那郡高森町内その2地区5遺跡（調査費2002万円）、下伊那郡松川町内12遺跡（調査費1864.3万円）、駒ヶ根市内8遺跡（調査費563.5万円）が、8月には、上伊那郡南箕輪村内その1地区5遺跡（調査費1051.5万円）のほか、飯田市山本地籍石子原遺跡において、多量に発見された石器群は、中期ローム層包含の旧石器としてその重要性が認められ、第2次調査の協議が成立し、飯田市その3（調査費410万円）として発掘調査委託契約が結ばれている。さらに10月に入って、上伊那郡南箕輪村内その2地区4遺跡（調査費514.4万円）と辰野町内その1地区3遺跡（調査費497.2万円）等10地区81遺跡、調査面積132,180㎡の広範囲にわたって発掘調査委託契約が結ばれている。

昭和48年度は、調査地区の主体が上伊那郡から諏訪郡に移動するため、長野県中央道遺跡調査団本部を辰野町に移設し、伊那市に作業場を置いてこの業務に当ることとした。調査地域も3郡にわたって広範囲にわたるため、県教育委員会においては、担当指導主事をさらに1名増員し調査に万全を期している。4月に、伊那市内その2地区4遺跡（調査費2121.6万円）、箕輪町内3遺跡（調査費1214.4万円）、辰野町内その2地区14遺跡（調査費3480万円）、富士見町内その1地区5遺跡（調査費1588.8万円）の発掘調査委託契約が結ばれ、伊那市から富士見町にわたる広域内の調査が開始されている。7月においては、下伊那郡阿智村斜坑広場その2杉の木平遺跡（調査費989万円）、諏訪市内その1地区7遺跡（調査費1588.8万円）、10月には、諏訪市内その2地区2遺跡（調査費888万円）の発掘調査委託契約が結ばれている。

## ウ 中央道関係の経過一覧

この経過一覧は、前項のものと重複するものも多いが、10数年にわたる道路建設の過程と発掘調査の経過は、将来活用されることがあろうと思われるので記載した。中央自動車道建設法案とそれに基づく検閲県の対策機関設置、ルート発表の経過、文化財保護のための諸協議・諸会合、発掘調査に関する経過については全部載録した。用地買収契約および工事着工については、最初のものだけ記載した。

32・4・16 国土開発縦貫自動車道建設法の公布（施行同年7月31日）

◆ 7・25 中央自動車道予定路線を定める法律制定

39・6・16 国土開発縦貫自動車道建設法の一部改正により、中央自動車道予定路線は諏訪回りに改正

41・7・25 五縦貫道整備計画決定、道路整備施行命令が日本道路公団に出る

◆ 8・12 長野県中央自動車道対策協議会開催

◆ 8・12 恵那山トンネル立入測量開始

◆ 9・22 中央自動車道長野県建設協力会開催

◆ 9・30 下伊那郡阿智村の一部、飯田市、鼎町（14km）ルート発表

- 41・11・16 長野県中央道建設対策本部設置、県企画部に中央道線および飯田中央道事務所設置
- ・12・15 中央自動車道関係県文化財主管課協議会開催（東京）
- 42・2・14 中央道建設用地内文化財の取扱いについて関係市町村連絡協議会開催（下伊那地区）
- ・2・21 " " "（上伊那地区）
- ・2・22 " " "（諏訪地区）
- ・3・23 恵那山トンネル（4.7km）ルート発表
- ・3・28 下伊那郡上郷町・飯田市座光寺・高森町・松川町（14.5km）ルート発表
- ・3・31 恵那山トンネル補助トンネル工事着工
- ・4・15 文化庁で中央自動車道用地内の埋蔵文化財保護対策打合せ会開催
- ・5・4 伊那中央道事務所設置
- ・5・30 中央道建設地域内埋蔵文化財分布調査費国庫補助申請
- ・6・13 中央自動車道関係県文化財対策連絡協議会開催（第1回 長野県庁）
- ・8・1 下伊那地区中央道建設用地内埋蔵文化財緊急分布調査 調査遺跡数 147  
～12 (団長 大沢和夫)
- ・11・1 上伊那郡飯島町・駒ヶ根市・宮田村・伊那市・南箕輪村（36.6km）ルート発表
- ・11・10 上伊那地区中央道建設用地内埋蔵文化財緊急分布調査 調査遺跡数 112  
～26 (団長 林 茂樹)
- ・11・27 諏訪地区中央道建設用地内埋蔵文化財緊急分布調査 調査遺跡数 90  
～12・15 (団長 藤森栄一)
- ・12・16 下伊那郡阿智村殿島・智里地区（5.65km）ルート発表
- 43・2・27 公団名古屋支社と中央道埋蔵文化財の保護措置について協議（43年の発掘調査について）
- ・3・5 公団本社と保護措置について協議（43年の発掘調査について）
- ・7・23 下伊那郡阿智村智風殿島地区、県内のトップをきって用地買収契約成立
- ・10・12 中央自動車道関係県文化財対策連絡協議会開催（第2回 松本市）
- 44・3・18 " " "（第3回 岐阜市）
- ・7・15 公団名古屋支社と協議（飯田市上飯田地区の発掘調査について）
- ・8・12 上伊那郡辰野町（8km）ルート発表
- ・10・3 飯田市上飯田地区3遺跡について公団名古屋支社から意見聴取（県教委問答 12・11）
- ・10・8 中央道関係市町村教委連絡協議会開催（飯田市）
- ・10・20 飯田市上飯田地区3遺跡について公団名古屋支社との現地協議
- ・10・31 中央道関係市町村教委連絡協議会開催（伊那市）
- ・11・11 恵那山トンネル本線トンネル工事起工式
- ・12・11 公団名古屋支社と協議（45年の発掘調査について）
- 45・1・29 諏訪郡富士見町（11.2km）ルート発表
- ・2・2 公団名古屋支社と協議（上飯田の3遺跡と45年度の発掘調査について）
- 45・2・23 岡谷市と諏訪市の一部（14.7km）ルート発表

- 45・2・24 下伊那郡阿智村殿島地区において、県下最初の平地地区本線工事開始
- 2・27 長野県中央道遺跡調査会結成（飯田市上飯田地区の調査に限る）
- 3・2 公団名古屋支社と長野県中央道遺跡調査会との間で、上飯田地区2遺跡の発掘調査委託契約成立（委託金額 80万円）
- 3・5 飯田市上飯田地区さつみ・古屋垣外遺跡の発掘調査開始（～3・21）（団長 大沢和夫）
- 3・31 飯田市上飯田さつみ・古屋垣外遺跡発掘調査報告書発行
- 4・22 公団名古屋支社と協議（45年度の発掘調査について）
- 4・23 上・下伊那地区中央道用地内遺跡視察（県教育委員会担当者）
- 5・8 下伊那郡阿智村～松川町間（57遺跡）埋蔵文化財包蔵地についての意見聴取（県教育委員会回答 5・26）
- 5・14 中央自動車道西の宮線起工式（於多治見市）
- 6・1 公団名古屋支社と協議（発掘調査上の問題について）
- 6・9 下伊那地区中央道関係市町村と文化財保護打合せ会開催（飯田市）
- 6・11 下伊那郡阿智村7遺跡・飯田市（上飯田・座光寺）7遺跡・鼎町2遺跡・上郷町1遺跡について、公団名古屋支社と現地協議
- 6 昭和45年度中央道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査予算案を6月県会に提出
- 6・29 上伊那地区中央道関係市町村と文化財保護打合せ会開催（伊那市）
- 6・30 諏訪地区中央道関係市町村と文化財保護打合せ会開催（諏訪市）
- 7・8 上伊那郡宮田村地内7遺跡について、公団名古屋支社と現地協議（～10日）
- 7・22 長野県中央道遺跡調査会結成準備会・第1回理事会開催（飯田市）
- 8・17 下伊那郡阿智村地内7遺跡の発掘調査委託契約成立（委託金額 179万円）
- 9・1 飯田地区その1地内10遺跡の発掘調査委託契約成立（委託金額 1590万円）
- 9・2 中央道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査銀入式挙行（下伊那郡阿智村小野川川畑遺跡）
- 9・3 下伊那郡阿智村地内7遺跡（川畑・北垣外・橋場・矢平Ⅱ・杉ヶ洞・宮の脇・坊塚）発掘調査開始（終了9・22）
- 9・3 岡谷市内中央道建設用地内埋蔵文化財分布調査（～5日）
- 9・5 伊沢県教育長、下伊那郡阿智村川畑・北垣外遺跡視察
- 9・7 諏訪郡富士見町内中央道建設用地内埋蔵文化財分布調査（～10日）
- 9・8 田中県教育次長、下伊那郡阿智村川畑・北垣外遺跡視察
- 9・22 飯田地区その1地内10遺跡（山岸・天伯B・梅現堂前・さつみ・赤坂・宮崎A・宮崎B・大門原B・大門原D・大久保）の発掘調査開始（終了46・1・18）
- 10・19 上伊那郡宮田村地内6遺跡（高河原・釈迦堂・宮の沢・元宮神社東・天伯古墳・円通寺）の発掘調査開始（終了45・12・18）
- 10・28 公団名古屋支社総務部長・田中県教育次長、梅現堂前・大門原B 遺跡視察
- 10・29 公団名古屋支社副支社長、大門原B・大門原D 遺跡視察
- 11・16 長野県中央道遺跡調査会第2回理事会開催（飯田市座光寺大門原B・宮崎A、上伊那郡宮田

村天伯古墳視察、理事会宮田村福祉センター)

- 45・11・17 公団名古屋支社との協議 (昭和46年度発掘調査地区の選定について)
- ※ 11・28 下伊那郡阿智村地内発掘調査報告会開催 (下伊那郡阿智村智里東小学校)
- ※ 12・5 上伊那郡宮田村地内発掘調査報告会開催 (上伊那郡宮田村福祉センター)
- ※ 12・25 茅野市・原村・諏訪市の一部(12.4km)ルート発表、これをもって県内やく122kmのルート発表完了
- 46・1・12 伊沢県教育長、下伊那郡森町山岸遺跡視察
- ※ 2・1 公団名古屋支社と協議 (昭和46年度の発掘調査地区について、飯田市山本・伊賀良地区用地内遺跡視察)
- ※ 2・2 下伊那郡高森町・松川町・上伊那郡飯島町地内遺跡について、公団名古屋支社と現地協議 (昭和46年度発掘調査地区決定)
- ※ 2・28 上伊那郡宮田村地内中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- ※ 3・11 飯田地区その1発掘調査報告会開催(公団・各事務所・市町村教委に対して)
- ※ 3・15 飯田地区その1発掘調査報告会開催 (一般公開)
- ※ 3・20 飯田地区その1中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- ※ 4・1 飯島町地内その1地区(七久保)7遺跡の発掘調査委託契約成立 (委託金額 1224万円)
- ※ 4・12 飯島町地内その1地区(七久保)発掘調査団結団式举行 (飯島町役場)
- ※ 4・13 飯島町地内その1、7遺跡(鑄物師原・鳴尾天白・鳴尾・尾越・道満・北原東・小段遺跡)の発掘調査開始 (終了46・7・3)
- ※ 4・26 長野県中央道遺跡調査会第3回理事会開催 (伊那市上伊那郷土館)
- ※ 5・24 恵那山トンネル斜坑口および土捨場問題協議会、長野県庁企画部長室で開催 (公団名古屋支社、恵那山トンネル東工事事務所、阿智村教育委員会、同建設課、長野県中央道課、飯田中央道事務所、下伊那地方事務所商工建築課、飯田教育事務所、長野県教育委員会)
- ※ 6・7 下伊那郡阿智村園原杉の木平・児の宮遺跡緊急分布調査 (~8)
- ※ 6・16 公団本社・同名古屋支社と協議 (下伊那郡阿智村園原恵那山トンネル斜坑口と土捨場予定地の保護措置について)
- ※ 7・1 公団名古屋支社から恵那山トンネル飯田方斜坑広場(杉の木平遺跡)埋蔵文化財について意見聴取
- ※ 7・15 飯島町地内その1発掘調査報告会開催 (飯島町役場七久保支所)
- ※ 7・20 公団名古屋支社総務部長と県教育長の協議 (恵那山トンネル斜坑土捨場問題について)
- ※ 8・1 下伊那郡高森町地内その1(10遺跡)の発掘調査委託契約成立 (委託金額 3120万円)
- ※ 8・6 下伊那郡高森町地内その1地区発掘調査団結式と打合せ会 (高森町役場)
- ※ 8・10 下伊那郡高森町地内その1地区、10遺跡(弓矢・無縁堂・神堂垣外・鑄物師原A・瑠璃寺前・大島山東部・赤羽根・出原西部・出早神社附近・正木原1)発掘調査開始(9・14中断、10・23再開、終了47・1・14)
- ※ 8・18 恵那山トンネル飯田方斜坑広場埋蔵文化財保護措置について県教委回答



- 46・8・30 公団名古屋支社と恵那山トンネル斜坑広場（杉の木平遺跡）の現地協議
- ・8・31 公団名古屋支社と上伊那郡飯島町地内その2（久根平遺跡）の現地協議
- ・9・4 伊沢長野県教育長、下伊那郡阿智村杉の木平遺跡・高森町鐘鐺原遺跡視察
- ・9・10 下伊那郡阿智村園原斜坑広場その1（杉の木平遺跡）発掘調査打合せ会（阿智村劇場公民館）
- ・9・13 下伊那郡阿智村園原斜坑広場その1（杉の木平遺跡）の発掘調査委託契約成立（委託金額730万円）
- ・9・14 赤尾長野県教育次長、下伊那郡高森町鐘鐺原遺跡視察
- ・9・16 下伊那郡阿智村園原斜坑広場その1（杉の木平遺跡）発掘調査開始（終了11・1）
- ・9・17 上伊那郡飯島町地内その2（久根平遺跡）委託契約成立（委託金額 123万円）
- ・9・20 上伊那郡飯島町地内その2（久根平遺跡）発掘調査開始（終了10・13）
- ・11・18 長野県議会社会文教委員会一行下伊那郡高森町瑞璃寺前遺跡視察
- ・11・19 長野県中央遺跡調査会第4回理事会開催（高森町畜産センター）
- 47・1・25 飯田市山本・伊賀良12遺跡、下伊那郡鹿町1遺跡について公団名古屋支社と現地協議
- ・1・26 下伊那郡高森町地内4遺跡、松川町地内10遺跡、上伊那郡飯島町地内8遺跡、富田村地内1遺跡、駒ヶ根市地内8遺跡について公団名古屋支社と現地協議
- ・1・27 伊那市西春近地内18遺跡について公団名古屋支社と現地協議
- ・2・29 上伊那郡飯島町地内その1中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- ・2・29 上伊那郡飯島町地内その2（久根平遺跡）中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- ・3・20 下伊那郡高森町地内その1中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- ・3・20 下伊那郡阿智村斜坑広場その1中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- ・3・25 下伊那郡阿智村園原斜坑広場（杉の木平遺跡）発掘調査報告会開催（智里西診療所）
- ・3・26 下伊那郡高森町地内その1地区発掘調査報告会開催（高森中学校）
- ・3・27 園原斜坑広場（杉の木平遺跡）、高森町地内その1地区発掘調査報告会開催（一般公開）
- ・4・1 飯田市内その2地区（17遺跡）の発掘調査委託契約成立（委託金額 2367.5万円）
- ・4・1 飯島町内その3地区（8遺跡）の発掘調査委託契約成立（委託金額 677.1万円）
- ・4・1 伊那市西春近地区（18遺跡）の発掘調査委託契約成立（委託金額 3361.6万円）
- ・4・3 飯田市内その2地区発掘調査打合せ会（飯田合同庁舎）
- ・4・10 飯田市内その2地区ほか下伊那地区発掘調査団結団式挙（飯田合同庁舎）
- ・4・10 飯田市内その2地区、17遺跡（かぶき畑・柳田・山田・石子原・石子原古墳・ようじ原・上の平東部・寺山・六反田・滝沢井尻・小垣外・三壺淵・上の金谷・辻垣外・大東・酒屋前・大門原B）の発掘調査開始（終了48・2・7）
- ・4・24 上伊那地区発掘調査団結団式と発掘調査打合せ会（上伊那地方事務所会議室）
- 47・4・25 飯島町内その3地区、8遺跡（うどん坂南・うどん坂II・うどん坂I・山溝・八幡林・石上神社前・庚申平・太田沢春日平）の発掘調査開始（終了47・6・28）
- ・4・25 伊那市西春近地区、18遺跡（和手・富士山下・富士塚・落瀬沢・南丘A・南丘B・名瀬南・名瀬東古墳・名瀬・白沢原・山寺垣外・細ヶ谷B・百駄刈・北丘B・大境・山の根・城平・

- 城平上)の発掘調査開始。(終了47・12・14)
- 47・4・26 長野県中央道遺跡調査会第5回理事会開催。(伊那市上伊那図書館)
- ◆ 6・20 公団名古屋支社と、上伊那地区橋梁工事に伴う調査遺跡追加と、飯田市山本石子原遺跡第2次調査について協議(県庁教育次長室)
- ◆ 6・22 公団名古屋支社と飯田市山本石子原遺跡第2次調査について現地協議。
- ◆ 7・3 下伊那郡高森町内その2地区(5遺跡)の発掘調査委託契約成立。(委託金額2,002万円)
- ◆ 7・6 下伊那郡松川町内(12遺跡)の発掘調査委託契約成立。(委託金額1,864.3万円)
- ◆ 7・6 駒ヶ根市内(8遺跡)の発掘調査委託契約成立。(委託金額563.5万円)
- ◆ 7・7 駒ヶ根市内8遺跡(大徳原南B・大徳原南A・大徳原北・横前南・中山原・新田原・女体北・切石墓地)の発掘調査開始。(終了47・9・1)
- ◆ 7・12 飯田市内その3(石子原遺跡第2次調査)の発掘調査委託契約成立。(委託金額410万円)
- ◆ 7・14 下伊那郡松川町内12遺跡の発掘調査打合せ会。(松川町福祉センター)
- ◆ 7・24 下伊那郡高森町内その2地区5遺跡(神田裏・新田西裏・増野新切・増野川子石・鐘師原A)の発掘調査開始。(終了47・11・9)
- ◆ 7・24 下伊那郡松川町内12遺跡(里見Ⅱ・里見Ⅴ・境の沢・中原Ⅰ・庚申原Ⅰ・庚申原Ⅱ・平林・やし原・片桐神社東・水上・丈源田Ⅲ・丈源田Ⅳ)の発掘調査開始。(終了47・11・11)
- ◆ 8・15 公団名古屋支社と上伊那郡南箕輪村内9遺跡と辰野町内その1地区3遺跡について現地協議。
- ◆ 8・17 飯田市内その3(石子原遺跡)発掘調査団結団式。(飯田教育事務所)
- ◆ 8・17 飯田市内その3(石子原遺跡)の発掘調査開始。(終了47・9・30)
- ◆ 8・21 上伊那郡南箕輪村内その1地区(5遺跡)の発掘調査委託契約成立。(委託金額1,051.5万円)
- ◆ 9・1 上伊那郡南箕輪村内の発掘調査打合せ会開催。(南箕輪村公民館)
- ◆ 9・4 上伊那郡南箕輪村内その1・その2地区9遺跡(南原・三本木原・曾利目・在軍・大芝原・大芝東・南高根・北高根A・北高根B)の発掘調査開始。(終了47・12・9)
- ◆ 10・9 上伊那郡南箕輪村内その2地区(4遺跡)の発掘調査委託契約成立。(委託金額514.4万円)
- ◆ 10・9 上伊那郡辰野町内その1地区(3遺跡)の発掘調査委託契約成立。(委託金額497.2万円)
- ◆ 10・11 上伊那郡辰野町内その1地区の発掘調査団結団式と発掘調査打合せ会。(辰野町公民館)
- ◆ 10・12 上伊那郡辰野町内その1地区3遺跡(五反田・越道・平出山の神)の発掘調査開始。(終了47・11・30)
- ◆ 11・15 長野県中央道遺跡調査会第6回理事会開催。(伊那市上伊那図書館)
- ◆ 12・4 公団名古屋支社と昭和48年度調査体制・調査地域について協議。(公団伊那工事事務所)
- ◆ 12・5 公団名古屋支社と伊那市内その2地区(4遺跡)・箕輪町内(3遺跡)・辰野町内その2地区(14遺跡)・諏訪郡富士見町内(7遺跡)について現地協議。
- ◆ 12・15 上伊那地区中央道埋蔵文化財包蔵地出土の遺物展示会開催。(上伊那地方事務所大会議室)
- ～ 16 一般公開)
- ◆ 12・16 上伊那郡辰野町内その1地区(3遺跡)の発掘調査報告会開催。(辰野町公民館)

- 48・2・28 上伊那郡辰野町内その1地区(3遺跡)中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- ＊・3・16 上伊那郡飯島町内その3地区発掘調査報告会開催(飯島町公民館)
- ＊・3・18 飯田市内その2・その3、高森町内その2、松川町内発掘調査報告会開催(下伊那教育参考館)
- ＊・3・19 上伊那郡南箕輪村内その1・その2地区発掘調査報告会開催(南箕輪村公民館)
- ＊・3・20 飯田市内その2地区(17遺跡)中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- ＊・3・20 飯田市内その3(石子原遺跡)中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- ＊・3・20 下伊那郡高森町その2地区(5遺跡)中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- ＊・3・20 下伊那郡松川町内(12遺跡)中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- ＊・3・20 上伊那郡飯島町内その3地区(8遺跡)中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- ＊・3・20 駒ヶ根市内(8遺跡)中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- ＊・3・20 伊那市西春近地区(18遺跡)中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- ＊・3・20 上伊那郡南箕輪村内その1・その2地区(9遺跡)中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- ＊・3・24 駒ヶ根市内発掘調査報告会開催(駒ヶ根市役所)
- ＊・3・26 伊那市西春近地区発掘調査報告会開催(伊那市福祉センター)
- ＊・4・9 昭和48年度長野県中央道遺跡調査閉結団式挙行(上伊那地方事務所会議室)
- ＊・4・12 伊那市内その2地区(4遺跡)の発掘調査委託契約成立(委託金額2121.6万円)
- ＊・4・12 上伊那郡箕輪町内(3遺跡)の発掘調査委託契約成立(委託金額1214.4万円)
- ＊・4・12 上伊那郡辰野町内その2地区(14遺跡)の発掘調査委託契約成立(委託金額3480万円)
- ＊・4・12 諏訪郡富士見町内その1地区(5遺跡)の発掘調査委託契約成立(委託金額1065.6万円)
- ＊・4・16 伊那市内その2地区、5遺跡(赤坂・ますみが丘・城楽・月見松・山本田代)発掘調査開始(終了48・7・31)
- ＊・4・17 上伊那郡箕輪町内・諏訪郡富士見町内その1地区発掘調査打合せ会(各教育委員会)
- ＊・4・18 上伊那郡箕輪町内、3遺跡(南大原・堂地・中道)発掘調査開始(終了48・8・31)
- ＊・4・18 諏訪郡富士見町内その1地区、5遺跡(手洗沢・長尾根・足場・母沢・甲六)発掘調査開始(終了48・7・11)
- ＊・4・18 上伊那郡辰野町内その2地区発掘調査打合せ会(辰野町教育委員会)
- ＊・4・19 上伊那郡辰野町内その2地区、14遺跡(手長神社旧跡・若宮・荒神社矢沢・樋口内城館址・大久保尻・神送・公家塚・牧垣外・大窪・堂ヶ入・藤の森・沢頭・沢入口・上の原)発掘調査開始(終了48・10・23)
- ＊・4・23 長野県中央道遺跡調査会第7回理事会開催(伊那市上伊那図書館)
- ＊・5・22 長野県議会社会文教委員一行、上伊那郡箕輪町中道遺跡視察
- ＊・6・4 公園名古屋建設局と、下伊那郡阿智村坑広場と、諏訪市内・富士見町内の発掘調査予定地域について現地協議(県庁教育次長室、各公園工事事務所)
- ＊・6・20 長野県教育委員一行、上伊那郡箕輪町中道遺跡視察

- 48・6・27 長野県中央道遺跡調査会一志顧問、上伊那郡笑輪町中道遺跡・諏訪市大熊城址現地指導
- ＊・7・2 下伊那郡阿智村斜坑広場その2(杉の木平)の発掘調査委託契約の成立(委託金額969万円)
- ＊・7・2 諏訪市内その1地区(7遺跡)の発掘調査委託契約成立(委託金額1588.8万円)
- ＊・7・20 諏訪市内用地問題について公団・諏訪市・被買収者組合委員と協議(諏訪市役所)
- ＊・7・21 下伊那郡阿智村斜坑広場その2地区の発掘調査団結成(飯田教育事務所)
- ＊・7・23 下伊那郡阿智村斜坑広場その2地区の発掘調査打合せ会(阿智村教育委員会)
- ＊・7・25 下伊那郡阿智村斜坑広場その2(杉の木平遺跡)発掘調査開始(終了48・10・20)
- ＊・7・26 諏訪市内その1・その2地区発掘調査打合せ会(諏訪市役所)
- ＊・7・30 諏訪市内その1地区、7遺跡(清水・小丸山古墳・金山北・城山・大熊城址・荒神山・大熊道上)、同その2地区2遺跡(平林・本城)発掘調査開始(終了48・12・14)
- ＊・8・8 長野県小泉教育次長、下伊那郡阿智村杉の木平遺跡視察
- ＊・10・10 諏訪市内その2地区(2遺跡)の発掘調査委託契約成立(委託金額888万円)
- ＊・10・10・11 長野県酒井出納次長、辰野町樋口内城館址・諏訪市大熊城址・阿智村杉の木平遺跡視察
- ＊・10・14 日本道路公団本社理事・名古屋建設局長等、下伊那郡阿智村杉の木平遺跡視察
- ＊・10・16 恵那山トンネル斜坑貫通式に伴い、公団名古屋建設局長等下伊那郡阿智村杉の木遺跡視察
- ＊・11・18 長野県中央道遺跡調査会一志顧問、下伊那郡阿智村杉の木平遺跡現地指導
- ＊・11・1 長野県中央道遺跡調査会第8回理事会開催。辰野町樋口内城館址遺跡視察(辰野町)
- ＊・11・13 昭和49年度諏訪地域用地買収状況について打合せ会(公団諏訪工事事務所・県高速道課・県諏訪中央道事務所・伊那教育事務所・同諏訪支所・県文化課、於諏訪合同庁舎)
- ＊・11・21 公団名古屋建設局と昭和49年度調査体制と発掘調査地区について協議(諏訪工事事務所)

## 2) 発掘調査委託契約

中央自動車道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査は、「日本道路公団の建設事業等工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」によると、事業施行前に、公団は県教育委員会の意見聴取の上、文化庁との間で協議することになっている。その結果、記録保存と決定され、発掘調査が必要となった場合、公団は、県教育委員会に委託して実施されることになっている。そのため、県教育委員会は、公団と現地協議などの事務接衝のうえ、調査遺跡の発掘面積、調査費、調査期間、調査方法等が決められる。その後、公団から調査依頼、県教育委員会から調査受託の文書の往来があって、つぎのような発掘調査委託契約が締結されている。

## ア 発掘調査委託契約書

- 1 委託事務の名称 中央埋蔵文化財発掘調査（斜坑広場その2）
- 2 委託期間 昭和48年7月2日～昭和49年3月20日
- 3 委託金額 ￥9,890,000円他
- 4 委託金支払場所 日本道路公団名古屋建設局

日本道路公団（以下「甲」という。）は、長野県教育委員会（以下「乙」という。）に頭書の発掘調査の実施を乙に委託する。

第1条 甲は、別紙発掘調査計画書に基づき、頭書の委託金額の範囲内で頭書の発掘調査の実施を乙に委託する。

第2条 甲又は乙の都合により委託期間を延長し若しくは発掘調査計画を変更し、又は発掘調査を中止するときは、事前に協議して書面により定めるものとする。

第3条 乙は、委託契約締結後、遅滞なく作業予定表及び資金使用計画書を作成し甲に提出しなければならない。

第4条 乙は、第3条の資金使用計画書に基づき頭書の発掘調査を実施するために必要な経費の概算払を甲に請求することができる。

2 甲は、前項の請求のあったときは頭書の発掘調査の進捗状況を勘案して請求書を受領した日から15日以内に所要の額を支払うものとする。

第5条 甲は、必要と認めるときは頭書の発掘調査の処理状況について調査し又は報告書及び作業調査日誌の提出を求めることができる。

2 乙は、甲が期限を指定して中間報告を求めたときは、これに応じなければならない。

3 乙は、発掘調査の実施にあたり作業個所に作業表示旗をかけた発掘調査関係者には、腕章等を着用させなければならない。

4 乙は、頭書の発掘調査が完了したときは、すみやかに頭書の発掘調査の実施結果に基づく報告書（B5版20部）を作成し委託期間内に甲に提出しなければならない。

5 乙は、費用精算調書を作成し、委託期間満了後1箇月以内に甲に提出しなければならない。

第6条 この契約に基づく報告書、費用精算調書その他の関係書類の作成事務の取扱は、甲が特に指定しない限り、乙の本来の事務取扱に準じて処理するものとする。

第7条 乙がこの委託契約に基づき甲の費用をもって取得した購入物件等はすべて甲に帰属するものとする。

第8条 発掘調査に関する文化財保護法及び遺失物法等に関する諸手続については、乙が代行するものとする。

第9条 乙の責に帰する事由により頭書の期間内に第5条第4項に規定する報告書を提出しないときは甲は遅滞損害金として期限満了日の翌日から起算し提出当日までの遅滞日数に応じ頭書の委託金額に対して年8.25%の割合で計算した金額を徴収することができる。

2 甲の責に帰する事由により第4条の規定による委託料の支払いが遅れた場合には、乙は、甲に対して遅滞日数に応じて年8.25%の割合で遅延利息の支払いを請求することができる。

第10条 乙の責に帰すべき事由により甲が契約を解除したときは、乙は原書の委託金額の10分の1を違約金として甲の定める期限までに甲に納付しなければならない。

第11条 この契約を変更する必要があるときは、甲乙協議して定めるものとする。

上記契約の証として本書2通を作成し、当事者記名押印の上、各自1通を保有する。

昭和48年7月2日

委託者 名古屋市中区栄4丁目1番1号(中日ビル11~12階)  
日本道路公団名古屋建設局  
局長 平野和男

受託者 長野県教育委員会  
教育長 小松孝志

#### イ 長野県中央道遺跡調査会

長野県教育委員会では、直接発掘調査する組織を持っていないので、この発掘調査にだけ当る長野県中央道遺跡調査会を結成し、同調査会に再委託し、同調査会が組織する調査団が発掘調査に当ることになっている。

昭和45年7月22日に、長野県中央道遺跡調査会が結成されて以来、年2回の理事会が開かれている。年度頭初の理事会において、発掘調査の受託を決定し、年度末のそれは、発掘調査結果や現状・対策について検討されている。県教育委員会との委託契約書の内容は、公園と県教育委員会のそれと大差ないので省略する。同調査会規約・昭和48年度役員・斜坑広場その2地区調査団組織はつぎのとおりである。

#### ウ 長野県中央道遺跡調査会規約

第1条 この調査会は、長野県教育委員会の委託を受けて、中央道建設及び関連工事用地内遺跡の発掘調査を実施し、その記録の作成、発掘された文化財の保存活用方法を研究することを目的とする。

(名称)

第2条 この調査会は長野県中央道遺跡調査会(以下「調査会」という。)と称する。

(組織)

第3条 調査会は、次に掲げる役員をもって組織する。

(1) 会長 1名 (2) 理事 若干名 (3) 監事 2名  
事務所)

第4条 調査会の事務所は、会長が別に定める事務所内に置く。

(会長及び理事)

第5条 会長は、長野県教育委員会教育長をもってあてる。

2 理事は次に掲げるものうちから会長の委嘱した者をもってあてる。

- (1) 学識経験者 (2) 関係学会の役員  
(3) 関係市町村教育委員会連絡協議会の代表者 (4) 関係市町村教育委員会の教育長  
(5) 関係行政機関の職員  
(会長及び理事の職務)

第6条 会長は調査会の業務を総理し、調査会を代表する。

2 理事は、理事会を構成し、次の事項を審議する。

- (1) 調査会の運営に関すること。 (2) 発掘調査の受託に関すること。  
(3) 規約の改正に関すること。 (4) その他必要な事項

3 会長に事故があるときは、理事のうちから会長が指名した者が、その職務を代行する。

(理事会の招集)

第7条 理事会は必要に応じて会長が招集する。

2 理事会は、理事の半数以上の出席がなければ開くことができない。

3 前項の場合、当該議事について書面をもってあらかじめ意志表示し、または他の理事を代理人として表決を委任した役員は出席したものとみなす。

4 理事会の議事は、出席理事の過半数で決し、可否同数のときは、会長の決するところによる。

(顧問)

第8条 調査会に顧問若干名を置くことができる。

2 顧問は理事会の推薦により会長が委嘱する。

3 顧問は会長の諮問に應ずるとともに、理事会に出席し調査会の業務について助言する。

(監事)

第9条 監事は、理事会の推薦により会長が委嘱する。

2 監事は、調査会の会計を監査する。

(役員の任期)

第10条 役員の任期は一年とする。ただしその職にあるゆえをもって委嘱されたものの任期は、当該職の在職期間とする。

(幹事)

第11条 調査会に幹事を置く。

2 幹事は、県教育委員会事務局職員のうちから会長が委嘱する。

3 幹事は、会長の命を受け調査会の事務を処理する。

(調査団)

第12条 調査会に調査団を置く。

2 調査団の組織及び運営について別に定める。

(事務の管理執行の規定)

第13条 調査会の事務の管理及び執行にあたっては、この規約ならびに理事会の決定する規定に従って行なう。

(経費)

第14条 調査会の事業に要する経費は、長野県教育委員会の委託料をもってあてる。

(会計の区分)

第15条 調査会の会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

2 調査会の会計は、長野県教育委員会と締結した委託契約に区分して行なう。

(出納及び現金の保管)

第16条 調査会の出納は、会長が行なう。

2 調査会に属する現金は、会長が理事会の議を経て定める銀行または、その他の金融機関にこれを預けなければならない。

(決算)

第17条 会長は、会計年度終了後1ヶ月以内に収支決算書を作成し、監事の監査を経て理事会の認定を経なければならない。

(財務に関する事項)

第18条 この規約に特別の定めがあるものを除くほか、調査会の財務に関しては、長野県の「財務規則」の例による。

(委任)

第19条 調査会の業務の運営に必要な事項は、この規約に定めるもの及び理事会で議決するものを除くほか会長がこれを定める。

(付則)

この規約は、昭和45年7月22日から施行する。

イ) 昭和48年度長野県中央道遺跡調査会役員名簿 (昭和48年11月現在)

顧問	一志 茂樹	(県文化財専門委員)			
会長	小松 孝志	(県教育長)			
理事	金井喜久一郎	(県文化財専門委員)	米山 一政	(県文化財専門委員)	
	藤沢 宗平	(県文化財専門委員)	藤森 栄一	(長野県考古学会会長)	
	原 嘉藤	(信濃史学会理事)	小泉兵次郎	(県教育次長)	
	飯島 丁巳	(県文化課長)	馬場 昌人	(飯田教育事務所長)	
	瀬尾 忠幸	(伊那郡教育事務所長)	羽生 保吉	(下伊那地区教委協議会長)	
	坂井 喜夫	(上伊那地区教委協議会長)	小松 稔	(諏訪地区教宣協議会長)	
	小林 彰	(阿智村教育長)	松沢 一美	(伊那市教育長)	
	河手 貞則	(箕輪町教育長)	熊谷 火一	(辰野町教育長)	
	小林 繁治	(富士見町教育長)	中村 文武	(諏訪市教育長)	
	倉田 利久	(下伊那教育会長)	木下 衛	(上伊那教育会長)	
	藤森 純一	(諏訪教育会長)	林 茂樹	(長藤小学校長)	



監事	岡沢 幸朝	(県文化課長補佐)	浦野 孝之	(伊那市社会教育課長)
幹事	金井 汲次	(県文化課文化財係長)	泉 勇一郎	(県文化課文化係長)
	西沢 清	(県文化課主査)	浅川 欽一	(県文化課主査)
	矢島 太郎	(県文化課主任)	堀内規矩雄	(県文化課主事)
	佐藤 文武	(飯田教育事務所総務課長)	佐藤 陸	(飯田教育事務所主任)
	下平 久雄	(飯田教育事務所主事)	矢野 公一	(伊那教育事務所総務課長)
	松沢 成海	(伊那教育事務所社会教育課長)	久保田秀明	(伊那教育事務所主任)
	麻生 弘明	(伊那教育事務所主任)	鈴木 長治	(伊那教育事務所主事)
	今村 善典	(県文化課指導主事)	桐原 健	(県文化課指導主事)
	山田 瑞穂	( )	伴 信夫	( )
	宮沢 恒之	( )	丸山巖一郎	( )
	岡田 正彦	( )		

ウ) 長野県中央道遺跡調査会 斜坑広場その2 (杉の木平遺跡) 調査団の組織

調査団長	大 沢 和 夫
調査主任	宮 沢 恒 之 今 村 善 典 (総括)
調 査 員	今 村 正 次 佐 藤 勉 信 遠 那 藤 麻 呂 片 桐 孝 男 村 上 孝 小 林 正 春 小 平 和 夫 竹 村 和 紀
特別調査員	松 島 信 幸 (地形・地質担当)
調査補助員	今 村 竜 介 今 村 俊 文

エ) 発掘調査遺跡の状況と面積

神坂峠東麓で、古代東山道と祭祀に関連する圓原祭祀遺跡群中の1つで、46年度調査の斜坑広場その1 杉の木平遺跡A地域の東側にあるB地域が、今回調査の対象区域で、A地域同様に、ここを通過した古代東山道と、祭祀関係の遺構・遺物が存在するものと思われる。現状は田・畑・宅地である。

全体面積 30,000㎡ ルート内面積 19,275㎡ 発掘面積 4,200㎡ (1,050グリット)

オ) 斜坑工事に関する保護協議

杉の木平・児の宮遺跡は、圓原祭祀遺跡群にあるため、A地域の発掘調査が決定されるまでには、何回も協議を重ねられたことは、斜坑広場その1の発掘調査報告書にくわしい。斜坑広場その2 (B地域) の調査については、斜坑第2期坑掘削前と予定されていたが、その後、用地の荒廃が進み、第1期工事作業関連事業によって遺跡の破壊の恐れが生じたため、公園名古屋建設局との協議が急速に進み、早期発掘調査が決定したものである。この協議の折にも、第2期斜坑からの土砂は、圓原地籍内には捨土はせず、工事完成後、広場とその周辺は周囲に調和する造林計画が約束されている。

## 2. 調査の実施と経過

### 1) 調査日誌

斜坑広場その2地区の調査は、事前の諸準備を含めれば7月21日から始められ、現場作業は同25日より10月20日までと、補充調査を10月28・29日と年を越して1月25日の3日間、実質60余日間にわたった。標高1000m近くの現場は、碧い空、明度さまざまな山肌の緑、園原川から吹き上げる涼気にかこまれた園原澗谷にあり、不快指数はゼロに近く快適な毎日であった。日誌をかかぎって調査日程をふり返りたい。

**7月21日** 午前10時、飯田教育事務所所長室で、調査団の結団式を行う。長野県中央道遺跡調査会飯田事務所所長・同課長・同主任・同主事・同事務員と、調査会榎原幹事・大沢団長以下調査団全員参加する。結団式終了後、調査団打合せを飯田市中央公民館二階会議場とする。今回の調査団は、上伊那の伊那市箕輪町・辰野町でそれぞれに作られている中央道遺跡調査団の中から、何名かずつをもって当てることになっていた関係から、全員が同時に合流することができなかったため、今村調査主任外、今村正・遮那・片桐・竹村・木下・佐藤がまず先発隊として現地の調査準備と調査を開始し、伊那地区調査終了とともに宮沢主任・村上・小林・小平の各調査員が合流することその他、当面の調査打合せをし、午後発掘資材の整理をする。

**7月24日** 午後1時から、阿智村役場で村当局関係者（阿智村教育委員会事務局教育長・社会教育課長・同主事・建設課長）と、中央道遺跡調査会関係者（同飯田事務所所長・同総務課長・同主任・幹事・調査主任）の調査打合せをする。調査日程・調査団宿舎・作業員募集情況その他調査に関する具体的なことにわたるが、すでに教育委員会の方で、宿舎は公民館を、また作業員30余名を募り名簿も作ってあったいただき感謝のかぎりである。打合わせ後、公民館の宿舎に当てられる婦人室をみせてもらう。蚊や蛾防ぎの網戸・水洗場・電灯などは後に施設を計画する。食事・風呂を公民館の太田さんに依頼して引き上げる。

**7月25日** 午前9時現場へ集合する。すでに斜坑広場その1調査に参加された懐しい園原の方々の方が勢ぞろいしている。園原・澗谷・戸沢地区の人々を中心に、駒場の方々も数名混っている。

斜坑工事用道路下の雑草を踏み敷き、出面りの木机を持ち出してすえ、小林教育長さんのあいさつ、今村主任の作業就労について説明があり、意々調査にとりかかる。傾斜の強い所で、段々に重ねられた水田跡のグリット設定は、なかなかの技術がある。草刈りをする人、グリット杭を運ぶ人に混って、メジャーを引く調査員の顔は緊張している。上段では、テントの設営が進行している。場なれた牛山さんの掛声一下、たちまち天井幕が張られていく。空は青く、ずっと東に綱掛山が美しい。



調査開始前の教育長さんの挨拶

7月27日 製ノ木沢を界にして、前回調査区はすでに斜坑口を中心に工事用の鉄骨や、作業場・管理棟などが並び、また今回調査区東には、作業員の宿舎が建っている。作業員宿舎よりの低い所から上へ向って



調査現場と斜坑口

調査を進めることと、全体的な遺跡の広がりを捉えるために何箇所かにグリット掘りをすることに決めた計画に従い、きょうからグリット掘りを始める。下から上に向かって、Y・A・B地区を設定したので、最下段のY区へとりかかったが、埋土が深く、130cm以上掘り下げてやっと中世の文化層らしい黒色土に当たった。埋土からはさまざまな遺物が顔を出す。土師・灰軸・中世陶器類と、すぐ上にあった田中さん宅からと思われるセトモノ類が混在している。

7月28日 Y地区の掘り下げと、A地区の田土手の掘削作業をする。Y地区は埋土深く、土上げに苦労する。黒色土から土師片が数点検出されるが、もともとの包含層ではないらしい。A区の土手掘削は巨礫も含まれているため、なかなか作業はかどらない。

7月30日 小雨の中で作業を進める。Y地区は黒色土の下に茶褐色土が堆積している。黒色土の中は、黄瀬戸片・天目橋片などが中心で、茶褐色土になると灰軸・山茶碗などが比較的多い。小雨を防ぐ合羽の下は汗になり、圃原溪谷きょうばかりは不快指数のメーターが上がる。

7月31日 A区グリット掘り、上から流れた黄砂土の下に、炭粒湿りの黒色土が一部にあるらしい。前回調査時の炭層に関連するとすれば、注意を要す。

8月1日 きょうから伊那調査団の小林・箕輪調査団の竹村調査員合流する。B区へもグリットを入れる。Y区では黒石址らしい遺構が確認される。天目橋片を含むことから、中世遺構と思われる。小林・竹村両名がしょって来たのか、雨雲が広がり、降雨。

8月2日 Y区黒色土の掘り下げ、この下の茶褐色土中に炭粒湿りの所があり、灰軸の腕が顔を出す。(後にここを1号テラスと呼ぶ)、A区L-O40-41帯はほとんど遺物なく、調査を断念する。Y区よりの耕土をはねると、土師・須恵、灰軸片などが比較的多く確認される。きょうも小雨がけふる。

8月3日 Y区・A区のグリット掘り。Y区V W60あたりまでの黒色土では、灰軸片の他、近世磁器片が多い。A区のセクションどりをする。AKあたりから南の圃原川へかけて、急激に傾斜するらしく、埋土が深くなる。AV・W61-66の黒色土中に溝状の凹みがある。土師・須恵・灰軸片が出ている。

8月4日 きょうもグリット掘り、前回にくらべて遺構・遺物がすくないらしく、かん声も上がらない。Y区の耕土はねを続行する。Y V61の黒色土の下・茶褐色土中に土師・灰軸片が含まれている。

B区AB列の耕土はねをする。朝雷雨のあと、青空が広がる。山ぎわの雷雨はすざましい。圃原川がすこし濁る。

8月8日 きょうから伊那地区の現場作業を終えた宮沢・村上が参加する。これで調査団の顔が出揃う。Y V・W61-64を中心にグリットの掘り下げをする。Y V62 黒色土下部で土師環と、石製模造品が発見される。模造品は剣型で、今調査初めてのお目見得。Y V・W64の1号黒石址を掘り上げる。

B区で溝状址を確認する。1号溝址と命名。土師・須恵・灰軸片と、鉄線が出る。遺物写真が少なかったので、写真係の木下調査員張切る。



教育次長・文化課長・教育事務所長さんの視察

県教委小泉教育次長・飯島文化課長・飯田教育事務所の馬場所長同伴して、現場視察がある。長グツに作業帽着用。今村主任の説明に耳を傾ける。1号集石址がシートの下に見えている。晴天が続くと昆虫の活動がさかん。昼食がすむと駒場の牛山さん・林さん・関さん、それに蜂とりの名手横川渡の小林先生ら、スガラ（地蜂）追いに余念がない。蛙はいい迷惑皮をむかれて竹の先きへむりやりくりくりつけられ、蜂の餌食にされる。蛙の数に比して、蜂の巣の数すくなく、調査中に

録めしは2回。宿舎整備ができないので、宮沢・村上是中間「からすの湯」へ泊る。愛嬌者のカラスが出迎えてくれる。主人の言葉を多少は解するらしく、後をついで歩く。トウモロコシをついばまれお茶だけ飲む。

**8月9日** Y区東壁のセクションをとる。最下段であるため、埋土が深くまた複雑。細分すると20層以上になる。1号集石址の計測、B区1号溝址の清掃、写真撮影をする。Y区V59茶褐色土から大形の円板、剣型の横造品が検出される。公民館宿舎の網戸・電灯・水洗場の設備を進める。今晚もからすの湯へ泊る。どこかへ散歩に出かけたのか、カラスの出迎えがない。

**8月10日** Y区1号集石址付近の掘り下げ。南側は平坦面になっており、木炭粒を含む黒色土がうすく広がっている。土師・灰釉片が比較的多い。

B区1号溝址南側一帯のグリット掘り。1号土壌を確認するが、遺物はない。このあたりは、東側の基盤が急激に落ち込んでいる。工事用道路にすぐ続いているため、この先は工事用道路を除いた後に調査をすることに。宿舎整備が終了したので、公民館へ今晚から移る。宮沢・村上・小林・小平の4名。すこし細長い部屋で、窓越しに三州街道駒場宿の灯が見える。(公民館の夜の学習会が毎夜のように続く) 太田さんの心のこもった食事に舌づつみを打つ。夜日常の小物を求めに駒場宿へ出る。昔東山道阿知の驛後に三州街道の中馬宿。今中央道と国鉄中津川線。山に囲れた伊那谷の西口駒場の今昔は、伊那谷の歴史を最も敏感に受け取れる所で、伊那谷の変化を測るバロメーターにもなっている。

**8月11日** YU-W60-63付近の、1号集石址南側の平坦面は、1号テラスと命名する。うすい木炭層が広がっていることと、模造品・土師・灰釉などが比較的集中することなどを勘案して、遺構として捉えることに。1号テラスと付近の地形測量をする。B区1号溝址の計測。

**8月13日** 出土遺物も量を増してきたので、前回調査分の遺物との比較検討をする必要が生じ、飯田の下伊那郡教育会館土蔵に仮保管してある遺物を整理し、必要分を駒場宿舎へ運搬する。

**8月17日** Y・A区にかかって竪穴址を確認し、1号竪穴と命名する。方形プランを示し土師・須恵片を伴っている。清掃・写真撮りを終える。61・62列をY区からB区まで掘り下げ、地層々序を観察することにする。B区の傾斜面から少量の須恵片が出る。

**8月18日** AB-AK56-64グリットの埋土排除と、AA-A C61・62の掘り下げをする。B区掘り下げを続ける。土師・灰釉片検出される。

矢沢正安氏見学あり、旧價をあためる。矢沢氏は戦後の下伊那考古学界の草分けの一人。会地小学校勤務時代、駒場の公民館上で下宿をしており、前回の調査主任神村透氏と共に筆者は飯田から自転車に乗

って、訪ねたことがあったし、阿智高建設の時発見された中原遺跡を矢沢氏と調査したことがある。我々の兄貴分で、「ショーアン」と呼んだ人で、現在は印刷業に精を出している。

8月20日 A B-A K56-64の埋土排除して、グリットを設定する。A E63・64付近に遺物が多い。61・62列は、黒色土までの掘り下げは完了する。近世陶磁器片が多い。A D61褐色土から、石製模造品剣型1点発見する。(後に2号テラスと呼ぶ)。1号竪穴、1号土壇の計測をする。午後、A地区を横切って施設されていた斜坑排水管がハレツする。斜坑現場の市坪主任他大衆。1分間6tの排水量があるというから大変。水圧強く猛烈な勢いで水がふき出す。市坪主任はびしょぬれ。発掘しているグリットへも水が流れ込む。水に洗われ模造品が顔を出しはせんかと調査員輪の目罵の目。収穫なし。



破烈した排水管

8月21日 A C59・61・62とA E63・64グリットの排土と掘り下げ。A E63の黒色土では、中世陶器片の出土が多い。B地区の61・62列の掘り下げ続ける。B地区へ調査区が広がってきたので、テントを調査を終えた1号溝址付近へ移す準備をする。SBC、中日、信毎記者調査情況を取材する。(SBCでは後にテレビで放映される。大腸食堂の大蔵さんの顔が大写されていた)。阿智教委社会教育課長、同西小学校長同校歯科医見学にみえる。

8月22日 A H61・62、A D-A H 58・59グリット掘り、59列に西から東に向う落ち込みがあり、2号溝址とする。(後にこれは3号道路址の続きであることが判明する) 灰種・山茶碗片など若干が含まれている。テントを移動して、調査を終えた下段の、工事用道路ぎわへ落ちつく。

8月23日 A区は63-65列にわたってグリット掘り。59列の溝址の掘り下げをする。A C61で石製模造品白玉1点発見する。(このあたりは巨礫がいくつかあり、後に2号テラスと命名する)。

B区F・I 57・58のグリット掘りをする。耕土の下の褐色土・黒色土が厚い。

8月24日 A区溝址付近のグリット掘りと、北側のE-I 65-69付近の排土。B区は昨日に引き続き掘り下げ続ける。飯田保健所長以下職員の見学がある。午後降雨のため、宿舎で遺物整理。

8月25日 降雨のため宿舎で遺物整理作業をする。遺物の水洗いをし、公民館の大広間へ遺物を広げる。片桐調査員運転で、整理箱を運ぶ。現場巡検する。

8月27日 A区グリット掘りと2号溝址の清掃。A D・E60に遺物比較多い。B F59で緑釉片が出る。

8月28日 A区2号溝址と北側の巨礫群付近の清掃をする。B区は57・59列の掘り下げをする。前回調査中の目玉であった炭層との関連がB区で捉えられる可能性もあり、確認を急ぐが、未だはっきりしない。村教委文化財担当折山さんカメラをさげて見学にみえる。

8月29日 A区2号溝址と2号テラス付近の清掃後、写真記録と地形測量をする。傾斜地に位置する遺構であることを考え、コンターを入れた図面を作ることにし、付近の地形測量を始める。B区57・58列のセクション取り準備。

8月30日 A区2号溝址と2号テラス付近の地形測量。A E-A H63-66のグリット掘り。B区57列の掘り下げ、炭層らしい黒色土が確認されるが遺物はない。前回の炭層ほどに木炭が入っていない。もうすこ

し広げてみて検討する必要がある。きょう中央道遺跡調査団の脱野・箕輪班が見学に来る。伊那谷の平坦部を調査していた者達は、杉の木平の傾斜地発掘をみて驚いている。戸沢廻りで神坂峠へ登り、往路を帰っていった。

**8月31日** A区2号テラス上方で2号竪穴、北方で3号竪穴を確認する。褐色土を方形に掘り込んであり、中世の陶器片が含まれていた。

B区は57列のセクションどり準備をする。智里農協理事会、駒ヶ根博物館吉村氏らの見学がある。昼食がすむと昼寝組、蜂追組、周辺探訪組におおむね分れるようになる。探訪組の行動範囲は広く、初めは神坂神社、團原川辺どまりであったが、そのうちに帯木や暮白の遊、神坂神社のずっと上まで、はては暮白の濃の上へ足を延ばす始末。山岳を眺めて古の東山道の往還を想い、團原川の転石に地殻の岩脈を想像し、足元の植物を愛で、時にはマタタビを求めて川辺をさまよった。「梅さ」（熊谷梅太郎さん）は庭木や古木集めの名人で、ワラで編んだ「しよいこ」へ入れて寒路につく日が多かった。今村正次調査員は元校長先生。植物に精通しておられ、育地の赤茶けた「イタドリ」の株を探ってすてきな鉢植づくり、「トリカブト」を家の庭へ移し、庭園に風情を増したとお聞きした。竹村調査員は「キリギリス」取りの名手で、ネギをつけた竹干を要心深く草群へさし込み、根気よく虫のとびつくまで草原の中で立っ続けている。下界にない静寂につつまれて、團原溪谷は秋の気配をただよわせ始めた。



帯木残欠を恋しむ

**9月1日** A H・I 63・64付近は黒土の下で、地山の砂質の黄褐色土の上に、茶褐色土からなる土師器の包含層が、かなり良い状態で残っているらしい。1・2号テラス付近でこの茶褐色土に似た層の中に石製模造品や、土師器が包含されていたことからして期待もたれる。（後に6号土城になる）

**9月3日** A区64列付近に溝状の落ち込みがあり、底は石敷状になるらしい。（後に1号路址と命名する）2・3号竪穴の清掃、写真撮りをする。B I 64の砂質褐色土から、繊維を含み、柔旗地文の上へ沈線で区画をし、その間を刺突文で埋める輪ヶ島台式に比定される深鉢土器が発見される。杉の木平では最初の縄文早期の土器に、B区担当の遠藤調査員張り切る。B区排土が多くなったので、工事用道路側へ土どめ柵をめぐらすことにする。

**9月4日** A区昨日確認された石敷状の配石を追う。A E—A I 63—65範圍に広がっており、配石の上面からは中世陶器片が多く、配石中には灰釉片が多くなるらしい。B H 61に炭層を確認し今村主任大よろこび、土師片が多い。B H 56で耕土の下に砂質の褐色土を掘り込む溝状の落ち込みがあり、茶褐色の腹土中に土師片が比較的多い。（後に2号路址と命名する）午前10時頃、早文化課の文化財担当指導主事榎原案内で、東京国立博物館の亀井正道氏、諏訪考古学研究所宮坂光昭氏、中央道調査団諏訪班と、丸山調査主任見学に来る。亀井氏は「下伊那史」を分担執筆し、また昭和43年神坂峠調査の時には、文化庁に居られ、指導視察されたこともあり、祭祀遺跡に関する研究者として知られている。峠へ一同登る。智里西小学校職員の見学があった。

**9月5日** 降雨のため、遺物整理と、飯田市教委欠亀教育長他事務局・農林課職員の現場見学の予定があったので、雨の中を現場へ向う。調査員一同斜坑の切羽まで入れてもらい、見学する。

9月6日 朝から降雨のため、宿舎で遺物整理と現場巡検。午後雨が上がったので、戸沢廻りで神坂峠へ向う。開きとされたばかりの峠越林道は雨水で路面荒れていて、ハンドルを取る片側調査員は真剣。峠



神坂峠頂のたざまい

の発掘地点は荒れ、また不心得者もいるらしく、新しい掘り返しもある。万全な保護対策を頼みながら、峠を下る。早くも山頂は秋の気配濃く、「ドーナツ」の下葉に紅がさしている。

9月7日 A区1号路址敷石の計測に入る。石の数が多く、2組の計測班を当てる。B区G53-56に断面U字状の凹みが確認される。須恵の高坏片検出する。

BHG3で炭層の広がりを追う。付近一帯を広げる必要があり排土始める。

9月8日 A区1号路址石敷の計測を引き続き行う。BG・BH53-56付近の凹みは溝状に東へ連続することがわかり、2号路址と命名する。土師・須恵片が比較的多く含まれている。

9月10日 降雨のため、宿舎で遺物整理。

9月11日 A区1号路址の平面計測を終え、レベル測量を行う。2・3号竪穴、2号テラス北で確認された2号集石址の計測をする。BH62-64の炭層追求のためグリットを掘り下げる。BH63暗褐色土で鉄線が発見される。毎日、中日、信毎記者取材。中央道調査団市沢調査員と同学の原君見学。

9月12日 A区1号路址東側に溝状の凹みあり、掘り下げる。(後に2号溝址とする)

B区2号路址を追う。東方へ延びるが、10mほどで切られるらしい。炭層面は2枚になるらしい。前回の炭層との関係は判然としない。2号土壘確認する。遺構の数がふえてきたので、6段の水田址と畑址からなる杉の水平遺跡の東半分を、旧水田面などを中心にして、a・b・c・d面に分けて整理することにし、Y区よりA区にかけてa面、A区をb面、c面に、またB区をd面と区分する。

9月13日 遺物整理。

9月14日 1号路址、2号溝址付近の調査。d面2号路址付近の排土。d面2号土壘の計測。炭層を追うために、d面北側の旧墓地の排土を始める。新しい骨が出る。南無阿弥陀仏合掌。

9月15日 b面1号路址・a面2号溝址付近の清掃。d面2号路址付近の排土、砂質褐色土(場所によって多少異なるが、耕土をI層、黒色土をII層、褐色ばいものはIII層として統一することにする)であるIII層より須恵広口壘の大片発見する。d面2号土壘と炭層断面の計測。休日であったが、見学予定が多かったので作業行う。下伊那考古学会、下伊那教育会考古学委員会の見学と調査協力があり、午後神坂神社上から、わる沢上まで山路の踏査をする。地元の小林先生先導で、神坂神社北側から横道にとりつき、尾根をたどり、熊笹をかき分け大ナギ付近で登山道と合する道筋を登りつめ、わる沢で牧牛の尻を追い、鞍部の水溜り付近一帯の遺物採集をする。神坂神社すぐ上と、わる沢上の鞍部の2箇所では前者は灰軸片、前者では常滑の壺底部片を採集する。東山道の峠路伊那側については、すでに市村威人先生などによって考定されている



網掛峠から望む神坂峠と園原渓谷

通りである。つまり峠東麓を峠一千本立一わる沢一神坂神社一園原のコースと、峠一沢道（園原川沿い）一神坂神社一園原の道筋など大きくは二筋が想定されている。今回の我々の踏査は前者の尾根通りは、一本ではなく、何本かの筋道があり、ある沢から神坂神社ないしは園原まで下るのに、すくなくとも2本以上の道筋を予測させることができることがわかった。神坂神社からみると北側を走る稜線で、「銀」拾った話が地元にあることも聞いた。地形や遺物採集地点などを更に検討すれば、予測された古道の姿がより明瞭になっていくと思う。この作業こそ地元の研究者がたんねんに、是非ともやらねばいけないことだと思う。調査会伊那事務所の白石・田中さんの見学もあった。

9月17日 a・b面にかかる1号路址、2号溝址付近の地形測量。コンターは地形をできるだけ細部にわたり観察するために、20cm間隔で落すことにする。c面に配石状のものがあり、灰軸・土師片などが認められることから、路址になる可能性大きい。（後に3号路址になる）d面2号路址付近の掘り下げ。d面炭層面の掘り下げと断面図作製。公団飯田工事事務所庶務課長見学あり。

9月18日 1号路址、2号溝址付近の地形測量と平面測量。  
c面配石付近の掘り下げと配石の清掃、d面2号路址付近一帯の拡張掘り、旧墓地付近の掃土。教育事務所々長会の視察あり、県教委庶務課長、伊那教育事務所長、飯田教育事務所総務課長、同文化財担当主事さんその他の方々見える。公団佐藤工事長案内で斜坑内を見学される。ヘルメット、長グツ姿で工事長さんの説明にうなづかれている。



斜坑の中

9月19日 1号路址、2号溝址付近の計測終了。c面配石は3号路址と命名する。配石の計測と付近の拡張を始めるが、東がすぐ工事用道路になっているので、作業がはかどらない。

d面2号土壌の清掃、計測、付近の地層断面図作製する。d面で鉄片・鉄線発見する。

9月20日 3号路址配石の計測と、断面調査、1号路址と全く形状は似ており、断面U字状を呈し、底面は礫まじりの褐色土がたたく締り、また赤褐色の酸化鉄の沈澱層が認められる。配石北東側は、旧水田の石垣土手のために欠きとられている。d面2号路址付近と、炭層付近の掃土。前回調査にも特別に地質指導を受けた天竜中学の松島信幸氏に来てもらい、地質について指導を受ける。

9月21日 3号路址西端の截断と、断面図作製。路面は複数面あったことがわかる。今までに確認されたものは、常滑の大変片を出す中世路面と、土師・灰軸片を出す平安時代の路面がある。d面では、2号路址南側の掃土、炭層付近の断面図作製。

9月22日 降雨のため、宿舎で遺物整理。現場で作製する図面類が増してきたので、整理する。

9月25日 3号路址付近の掘り下げ。北側に須恵・山茶碗片が多く発見される。露呈された部分の地形測量を始める。2号路址南側で縄文後期の土器片を含む壺穴状の落ち込みがある。床面はやや軟弱であるが柱穴などもあり、住居らしい。（後に1号住居址とする）調査区最上段のd面北隅で4号路址を確認し、計測準備をする。今まで路址と命名したものを4本を数えることになる。これで共通していることは、断面がU字状になること、底面はかたく締っており、酸化鉄沈澱層がうすく入り込み、その上に配石状に礫が並ぶこと。その礫間や礫面上に土師・須恵・灰軸・山茶碗か山皿・常滑・古瀬戸など陶片が散乱する状態が観察されることである。9月15日の山路踏査の折り、現在の山道の表面は、礫が敷きつめられたように



道巾を確保し、降雨時には流砂がその上を覆い、またそこが普通は凹地になるため側面からの比較的大型の転石があり、落葉が最上面を覆うのが認められた。これに対応すると、4本の路址としたものは、まさにその面に含まれる遺物の時期の道路址として捉えられるものであることがわかる。どの道筋が東山道であるということではなく、神取神社東麓斜面には、降雨その他による路面の荒廃が絶えずあり、そのために何本かの道筋があってもよいことになる。今回調査の目玉になると思う。

9月26日 c面3号路址東側の敷石の洗い出し、計画準備。

d面1号住居址の確認、掘り下げと計測をする。定角式磨石弁と横刃器、土器片が含まれており、縄文後期に比定される。前回は平安時代のもの2軒、今回で3軒になった。2・4号路址付近の地形測量をする。4号路址上方で敷石の下に黒褐色土があり、それに含まれて縄文中期のや・小形の深鉢型土器が単独で見られた。

9月27日 c面3号路址上方の敷石計測、断面図作り、最下部面のレベル測量をする。3号路址北側調査の必要と、工事用道路敷下の調査のため、道路になっていた所の排土を崖鳥建設にってもらうことになっており、合わせて下段a面南端ヘントを移動する。大きなダンプで排土するので、テントへ転石があり、テントの囲りへ土留めや、転石防止柵を急務作る。夕方駒場で調査会飯田事務所長・同課長・同主任同主事・阿智教委教育長・同主事さんらと調査打合わせ会をする。

9月28日 工事用道路の排土、新しい道路の掘削のため、作業員は休みにし、調査員は見廻りと遺物整理。飯田労働基準監督署職員の見学あり。

9月29日 旧道路面の排土。c面の排土終了箇所へグリット設定をする。

10月1日 b・c面の工事用道路路面の下になっていた付近の埋土が深いので、ユンボで排土する。かなりの量の埋土があるので、ユンボ一作動2・3日間を計画する。ユンボで排土してみると、3号路址西方の、地山と思われていた褐色砂質土は、田地造成時の埋土であることがわかった。d面4号路址付近の清掃。2号路址西方を地山まで排土する。きょうは阿智村の村民運動会。作業員のオジさんオバさん達も子や孫と一緒に出場とかで、出席者わずか。公団名古屋建設局の佐治氏視察あり。



ユンボによる排土

溝状に連続しており、この黒褐色土に自然植のかかった、須恵の広口壺片が散乱しており、また北側の斜面にも常滑片を比較的多く出す箇所があり、別の路址が予測される。(後に1号路址の延長部であることがわかった。)きょうもユンボ一1日動く。重機特有の重々しいウナリ声を立てている。NHK女性手帳取材班の取材があり、県考古学会長藤森先生奥さん同伴で視察にこられる。馬匹の道東山道に、古代信濃の

10月2日 c・b面のユンボ排土後の掘り下げ。3号路址の東方範囲を遡る。3号路址には支道があるらしく、西端すこし下に黒褐色土の落ち込みが



路址の傍に立たれた藤森先生

展開を結びつけられてから久しい先生が、NHK女性手帳では、望郷、郷愁、憧れ、哀しみ、喜び、等々人の本来持ち続ける喜怒哀楽を、古代信濃という状況のもとで東山路を通じて語り続けるという企画であるという。放映日が待ち遠しい。(10月17日に放映あり)先生は健康を害されており、かいがいい奥さんの脇添えで、露呈された路面に入っておられた。(12月19日急逝さるの報は、悲しかった。先生が下伊那の調査現場へ来られた最後になってしまった。)公団名古屋建設局佐治氏、恵那山トンネル飯田方工事々務所庶務課長さん視察あり。

10月3日 c・b面の3号路址の広がりを追う。3号路址は東方へかなり連続すること、これに平行して、1号路址が東から西へ連続するらしいことがわかった。3号路址付近の地形測量を始める。

きょうもウンボー動き、終日騒音が響いていた。

10月4日 3号路址付近のグリット拡張掘り下げ、4号路址付近の排土、炭層下面の清掃。4号土壌の北側で石製模造品の円板1点検出する。辰野で主任会。

10月5日 3号路址付近一帯の掘り下げと、1号路址に連続すると思われる北側の落ち込みを追う。既調査の1号路址西端が、ウンボー排土があつて確認できないことと、旧水田造成時にすでに削られた面の中へ入り込むらしいことから、北側の落ち込みとの関連がなかなか捉えられない。上面に常滑・山茶桐片が下面では土師・灰釉片が多い。4号路址の清掃と炭層面の追求を続行する。

10月6日 3号路址東方の敷石面清掃と、これに平行する路址を5号路址と仮称し(後に1号路址と改める)敷石面の清掃をする。1号路址面端部の洗い出しに力を注ぐ。d面は炭層2範囲の洗い出しと、その中に含まれる焼土群の調査。炭層より石製模造品の円板1点発見される。

10月8日 d面炭層2内の焼土群の調査と炭層範囲及び出土遺物の計測。c・b面3号路址セクションペルトの清掃と、上面敷石の計測。5号路址上面の清掃。炭層付近から石製模造品剣型1点発見する。

1号路址西端の追求。

10月9日 c・b面3・5号路址付近の清掃。3号路址南側で溝状址を確認し掘り下げ、清掃する。

1・3・5号路址の接近する東側一帯の掘り下げをし、それぞれの連続の有無を確認したいのだが、はっきりしたことはつかめない。1号路址西端がつかめれば解決は早いのだが。d面炭層2付近の掘り下げをする。

10月11日 5号路址で北側に枝分れる路面が確認され、6号路址と名付ける。(後に整理して5号路址とする)3・5・6号路址付近一帯の清掃と記録写真撮り。1号路址西端がやっと確認される。この結果1号路址と5号路址が連続するために、両方を1号路址、旧5号路址から分岐する6号路址を5号路址とし、3号路址の東方は2号路址に連続すると思われることから、2号路址は3号路址で統一することに。結局この斜面には2本のほぼ平行する路面が東西に走っていたことになる。公団恵那山トンネル飯田方工事々務所庶務課長視察。

秋色濃い園原溪谷は最近一層静けさを増し、赤トンボの翅の力も弱まってきたように見える。時計が3時半を運ると、南側の山稜の影が遺跡の上を覆ってしまい、ヒンヤリとした冷気が背中を襲うようになった。日だまりが貴くなる頃になって昼食後のテント前広場は、竹トンボ作りが盛んになった。毎日根気よく竹細工をする。出来上がると最長滞空時間は我が竹トンボが、と互に競い合う。最年少の小平君の作品はテント前からテントの屋根を越え、裏の草むらへ落ちて行え不明になり、これを優勝とする。

**10月12日** 1・3・6号路址・4号溝址付近一帯の地形測量と、敷石計測のために新たにグリット打ちをする。4m方眼にピンを打った。d面炭層、4号路址付近の清掃をする。県出納次長・同文化課々長補佐・飯田教育事務所々長・同主事さんの視察があった。

**10月13日** 降雨のため、宿舎で遺物整理をする。注記作業は肩がこる。それに10月の降雨はすでに寒く、太田さんが石油ストーブを入れてくださり、たすかる。

**10月15日** 調査も愈々おおづめ、面の広がりとなれば一番広げた1・3号路址付近一帯の、c・b面地形測量を始める。平板にかがみ込み、アリゲードをのぞく者、箱尺をかかえ、メージャを張る者、レベルをのぞく者と、最低3人がかかりつきりで配置につく。他に断面図づくりや、敷石の計測にか



古代路址を踏みしめる

かる者など、主任以下調査員の大半が計測作業に入り、他では北側斜面の茗荷畑へグリットを入れる。飯田教育事務所総務課長・同主任、同主事・阿智教委教育長・同社会教育課長、同主事さん視察。作業終了後月見堂で名物わらじ五平をちょうだいする。伊那谷の五平餅には二種あり、山間部で主として作られるのが、わらじ五平。検材を板状にはいでくしをつくり、それへオニギリ大のご飯（これはあらかじめ鉄釜で炊いた飯を、釜の中で惜ごきでくしへつけられる程度に粘るまでつぶしておく）をつけ、くしは両隣ではさんで固定し、ご飯を両手でくしへびたびたとはりつける。堅炭をよくおこしてから、焼き、季節に応じて、サンショウ、クルミ、ゴマ、ネギ、その他香気のあるものを混ぜたミソで付け焼きをする。形状がワラジや、ゾーりに似ていることから、ワラジ五平の称がある。くしへはご飯茶碗へ2杯分はついている。昔から五平五合といい、五合分は1回に平らげて一人前だと聞いた。團原のオバさん達は握力が強いのか、くしはかなり食べであった。



團原のわらじ五平

**10月16日** 1・3・5号路址・4号溝址付近一帯の地形測量と、1・5号路址面の敷石の計測。d面の旧基地から東方に向う、傾斜の強い7号路址を確認し、掘り下げをする。

公園ではきょうは斜坑貫通の祝儀があり、名古屋建設局その他から多勢の関係者が式に参列し、貫通を祝っている。夜も昼もないトンネル内の、しかも危険を絶えず伴う工事に関係される方々の苦勞は大変だと、坑内見学の折りに話したが、きょうの喜びはひとしおと推察した。飯田教育事務所々長さん。日下部新一先生案内役で、高森町伊谷公民館長さん

酒井分館長さん引率の高森町老人クラブ。駒ヶ根博物館吉村学芸員ら案内で、駒ヶ根郷土史研究会の見学があったりして、いつもは静かな杉の木平もきょうばかりは賑わしい。気ぜわしい秋日が暮れた。

**10月17日** 降雨のため、宿舎で整理作業。週末までを調査期間としてあるので、現場の計測作業の残り分が気がかりであるが、雨には勝てない。太田さんにストーブを入れてもらい、大広間で注記や遺物の分類作業をする。NHK女性手帳放映で、神坂峠とその東麓一帯というよりは、東山道信濃口を素材にした、藤森先生のお話がテレビにのる日だ。放映時間の来るのがもどかしく、何回も時間をたしかめ合う。降雨

で現場作業の進捗は気になるが、テレビで話の聞かれるのは天の助け、スイッチを入れる。鋭い観察者の眼と学問的な成果を踏まえた先生独特の、熱を帯びた口調が、映像を鮮明にしている。東山道の置かれた古代の事情や、恵那山一帯の荒振る山神へのおそれや祈りが、どんなかたちで峠路を往き帰った人々の態度にあらわれたのかというような具合で、神坂峠を登り下りした人々（東国へ移動する軍団に属した人、防人に徴発されて西国へおもむこうとする人、租税を運ぶ人、驛を結ぶ運夫、はては浮浪人等々）の、それぞれが置かれた立場に立って、その人々のその時々々の気持や、感情を代弁する先生の口調は、若々しかった。（先生が熱を注がれた峠路関連遺跡を調査した今、我々はつたなくとも持てる力の全てを投入し、正確な記録を報告書にまとめて、泉下の先生に捧げたいと思っている。）テレビの画面が現場風景に及ぶと戸沢の熊谷みかえさんの顔が大写しになった。一両手を打って喜ぶ。



NHK女性手帳出演の藤森先生

10月18日 1・3・5号路址、4号溝址付近一帯の計測。

d 面炭層付近と7号路址の清掃と計測準備。

10月19日 1・3・5号路址、4号溝址付近一帯の平板・レベル測量本日終了。7号路址の計測了。d 面地層セクション取りをすませ、現場作業全行程を消化した。調査会顧問一志先生視察に来られる。阿智村教委教育長・同主事さん同送される。



一志先生のお話に耳を傾けた

松本からの遠路をいとわず、御指導に来てくださった先生は東山道研究で学位を受けられた権威者。露呈された路址面やその置かれている地形面などを、丹念に観察され、路址と考えてよいだろうというお話をいただいて、一同安堵する。後、お茶を飲みながら、古代東山道（路）や、驛のようななどについて、かなり具体的な御指導をいただく。古代における官道の持つ役割、官道に付属する驛の性格、驛夫の仕事、驛の置かれる位置や規模、それに他に確認されている古代路址のようすなど、長時間にわたる。すでに終わった時、テント

の外は日がかげっていた。明日で関原溪谷ともお別れ、晴天を祈って帰路につく。

10月20日 朝の関原には霧が立ち込めたが、やがて碧空が透てすがすがしい。資料整理をして器材を一部は飯田へ、遺物などは、牛山政雄さんのマイクロバスで伊那作業場へ運搬する。遺物の出土量が前回ほどでなかったことから、遺物はすくなくて、運搬もたいしたことはなからうとタカをくっていたが、60余日にわたる調査をすませた今、自動車へ積み込む段になるとかなりの量になったのには驚いた。

宿舎公民館の大広間を何回も往復して整理箱を運ぶ。60余日間の調査のことが目に浮ぶ。人情こまやかな阿智村の作業員の方々のこと、静かな溪谷のたたずまい、厳然とした山麓に立ちむかうトンネル工事。なによりも、初めて確認することのできた古代の道路跡の連なりは、確実に峠へ向って延びていた。古代東山道を調査したという充足感と、報告書まとめの責任の重さが頭をかすめる。（宮沢）

## 2) 発掘調査協力者

7月25日から10月20日まで、盛夏から降霜までの60余日間、発掘調査に協力いただいた方々は、ほとんどが地元阿智村の方々で、46年度の斜坑広場その1調査で顔なじみの方々が多かった。バイクや自動車です、40分かけて出張ってくる方、または尾根を越え、溪谷を伝って戸沢や濃間から、耕うん機で朝仕事を終えてから現場へ乗込む園原の方、飯田方面から乗姿もさわやかにオートバイでかけつけてくれる人など、この伊那谷西端の谷間は、調査参加者で賑わった。傾斜の強い調査区のため、作業は困難をきわめたが、作業員の方々の頑張りで調査は順調。予定通り消化できたのは一重に参加いただいた方々の協力によるものと感謝している。参加協力の作業員の方々は次の通りである。(五十音順)

下伊那阿智村(園原) 井上こぎく 火藏りえ 熊谷成美 熊谷与四郎 熊谷マサエ 熊谷チエ  
熊谷星美 熊谷繁人 熊谷やよい 熊谷加津美 渋谷幸美 (濃間) 熊谷かずよ  
熊谷梅太郎 熊谷進 熊谷音市 水上秋太郎 (戸沢) 熊谷ひさ江 熊谷みかえ 渋谷ちゆみ  
渋谷志乃 原マサエ(駒場) 井原佐吉 牛山敏雄 牛山はつ美 関芳夫 林考一  
水上和夫(中関) 熊谷善弘(横川) 小林昭治(伍和) 井原一夫  
飯田市 飯島洋一 市瀬晋也 片山徹 塩沢元広 関島康直 吉沢堅治 北原しげ子  
松川町 御堂島正 宮沢康秀 熊谷市 田口英次

## 3. 発掘調査の方法

中央道用地内の発掘調査は、工事によって破壊される遺跡内工事区を、工事着工前に記録保存を目的とした緊急発掘調査である。従って用地内にどのような時期のどんな遺構と遺物を残しているかをさぐり、それを報告書にまとめることを目的とする。そのため、この発掘調査は用地内に限定される。

杉の木平遺跡は、トンネル斜坑口前の広場にかかり、工事が二回にわかれるために、遺跡西側の第一期工事地域をA、東側の第二期工事地域をBとし、遺跡記号をSOA(杉の木平遺跡A地域)、SOB(杉の木平遺跡B地域)と区別している。用地内の基点T-12-13-1、T-12-13-2を結び、その延長を50ラインの基線とし、2m間隔の基準方眼でグリットを設定した。調査区東から西に向ってY・A・B区とし、横軸に38-79、縦軸にY区T-Y、A区A-Y、B区A-Oまでがとれた。しかし全体が階段状の耕地、宅地、墓地などに造成されているため、調査進行上階段状の面をもとにして、後には、YT-ADまでをa面、AE-AMまでをb面、AN-AYまでをc面、それ以上をd面として区分して、造成面とグリット両方を組み遺構、遺物を整理した。「SOBaYV63」とは、杉の木平遺跡B地域調査区最下段の田で、YV63グリットということになる。調査はグリット掘りですぐりを入れ、遺構に当たると周辺を拡張する方法を基本としたが、c面は工事用道路跡であったので一部重機で排土した。なおこまかな調査方法については「長野県中央道埋蔵文化財発掘調査指針」に基づき、また発掘調査中のようすについて、「調査週報」を発行し、「調査記録」「住居址カード」「調査日誌」で諸記録をとった。(宮沢)

## II 園原地区の概況

### 1 自然的背景

#### 1) 園原の地形・地質

##### ア 地形・地質のあらまし

園原は、阿智村智里西地域のほぼ中央部に位置している。智里西地域は、阿知川上流の本谷川流域にあたる。本谷川流域は、最高峰の恵那山(2190)と富士見台(1720)・南沢山(1587)などが西側の分水嶺となり、分水嶺から東側へ、本谷川・園原川・横川などの沢となり東へ流れ、これらの水は、園原部落の下ですべてが合流し、本谷川となってさらに東へ流れ、夜鳥山(1319)・綱掛山(1133)との間を通りぬけた後、黒川と合して阿知川となる。第2図(1)に、本谷川流域の概略図を示した。

本谷川流域の地質は、領家帯に属する花崗岩類と、濃飛火砕岩類(濃飛流紋岩類)とによって占められている。また、わずかながら古世層起源のホルンフェルスも存在する。濃飛火砕岩類は、砂岩・泥岩のホルンフェルス、流紋岩質溶結凝灰岩・角礫岩などからなり、それに花崗斑岩を伴っている。これら濃飛火砕岩類の分布域は、恵那山・富士見台・南沢山などの山頂部に広く分布し、本谷川上流・園原川上流・横川上流までおよんでいる。花崗岩類は、おもに2種類の岩体に区別される。それは、伊那川花崗岩と清内路花崗岩という呼名がつけられている。恵那山トンネル地質調査報告書によると、伊那川花崗岩のことも天竜峽花崗岩・清内路花崗岩を夜鳥山花崗岩としてあるが、前者の場合はまちがった呼名であるし、後者の場合は、一般に認められている岩体名を使用した方がよいので、伊那川及び清内路花崗岩と呼ぶ。横川→園原→本谷→弓ノ又沢を連ねる一直線状の谷は、清内路断層と呼ぶ顕著な断層に支配された谷である。この清内路断層より東側の部分・夜鳥山・綱掛山・三階峰にかけての帯に露出しているのが、清内路花崗岩である。岩相は、中粒黒雲母花崗岩を主としており、岩相変化がほとんど認められない均質の岩体である。周囲の花崗岩に対しては、貫入関係が認められる。横川上流→園原川上流→京平→赤ナギを結ぶ位置に、神坂断層と呼ぶ大きな断層が存在する。前記の清内路断層とこの神坂断層との間に分布するのが、伊那川花崗岩である。清内路花崗岩には貫入されており、濃飛火砕岩類に対しては貫入している。岩相は粗粒角閃石黒雲母花崗閃緑岩を主としており、岩相変化はおおく、片麻状を呈する部分が割合に広く、神坂断層に近づくと、カリ長石の斑晶が目立つ斑状の花崗閃緑岩となっている。以上のように、智里西地域の地質は、ほぼ南北に走る顕著な2つの断層を境界として、3つの地質区に分けられる。この地質区は、西から東に向かって、濃飛火砕岩類の地域・伊那川花崗岩の地域・清内路花崗岩の地域という順序になっている。この位置については、第2図(1)の智里西地域の概略図に示してある。基盤地質・基盤岩類についてみるとつぎのとおりである。

## イ 基盤について

### ウ 基盤地質の概要

阿知川上流地域、とくに、智里西地域の基盤の地質を、圏原を中心にして紹介したい。基盤地質の項は、自然的背景の中でも、一番難解な分野であろう。けれども、すべての自然現象の基礎となるもので、その意味で、これをはじめに記述しておかなければならない。

本地域の基盤岩類は、第1表のように総括される。

第1表 智里西地域の基盤岩類総括表

地 質 時 代	名 称		岩 相	
新生代 第三紀	玄武岩質の岩脈		粗粒玄武岩	
中生代 白亜 後 期 紀	領家帯の後濃飛花崗岩類	岩脈状の花崗岩小岩体	細粒黒雲母花崗岩	
		清内路花崗岩	中粒黒雲母花崗岩	
		伊那川花崗岩	粗粒角閃石黒雲母花崗閃緑岩	
		変輝緑岩 (捕獲岩小岩体)	細粒石英閃緑岩	
	濃飛火砕岩類 (流紋岩類) とそれに伴う火成岩類	花崗斑白	花崗閃緑斑岩	ホルンフェルスとなっている後濃飛花崗岩類により
		南沢山溶結凝灰岩層	やや柱長石、斑晶質、流紋岩質、溶結凝灰岩	
		富士見台溶結凝灰岩層	本質レンズに富む、やや苦鉄質の流紋岩質溶結凝灰岩	
		恵那山溶結凝灰岩層	斑晶質、僅白色、柱長石、流紋岩質溶結凝灰岩	
		角礫岩層	黒色泥質角礫岩	
		戸沢層 (泥岩・砂岩など)	泥岩・砂岩・凝灰岩・凝灰角礫岩	
古生代 後 期	古生層ホルンフェルス (領家帯の変成岩類)		黒雲母ホルンフェルス 重晶石黒雲母ホルンフェルス	

これらのうち、主要な分布を示すものは、濃飛火砕岩類 (とくに溶結凝灰岩) ・伊那川花崗岩・清内路花崗岩の3者である。3者の分布状態については、第2図(1)に示してある。他の岩類は、いづれも、ごく小岩体として露出するにすぎない。

#### (4) 古生層ホルンフェルス

古生層起源のホルンフェルスは、主として次の2つの産出状態を示す。

- ① 伊那川花崗岩中に含まれる小岩体で、広く領家変成岩と呼ばれるもの。
- ② 神坂断層に近く、濃飛火砕岩類中に、断層ではさみこまれている小岩体。

#### A 伊那川花崗岩中のホルンフェルス

園原一追分間の林道に沿っては、千代ノ沢の屈曲部前後に露出する。園原川では、斜坑口付近の暮白沢合流点付近に露出する。暮白沢は、園原川と合流するとき滝を形成しているが、この滝の部分は全部ホルンフェルスである(写28)。なお、暮白沢に沿っては、その下流部分がホルンフェルスである。その他の小さい沢沿いでも、伊那川花崗岩中に巾2~3メートル前後の小岩体として捕獲岩状にはさまれている。ただし、長平沢断層より西側にかけては、あまり見られなくなる。これは、岩質の不均質から起こる剪断破壊によるものと考えられる。

ホルンフェルスの大部分は、源岩が粘板岩であるところの黒雲母ホルンフェルスである。細粒で、時には弱い片理をもち、新鮮な面では、黒雲母特有の黒褐色光沢が著しい。暮白沢の滝の部分とか、その付近には、源岩がチャートないし砂岩であるところの非常に珪質なホルンフェルスである。これが、滝を形成したともいえる。縞状チャート特有の縞状構造を示す部分がおおい。粘板岩に由来するホルンフェルスの鉱物組合せは、①黒雲母ホルンフェルス・②重晶石黒雲母ホルンフェルス・③白雲母黒雲母ホルンフェルスなどである。ホルンフェルスの一般走向は、N40°Eである。

#### B 濃飛火砕岩類中の古生層

恵那山頂上付近から石灰岩を産し、かつてこの石灰岩を高野谷入口までおろし、釜で焼いて生石灰を生産したことがある。今でも、釜あとがはっきり残っている。このような石灰岩は、古生層のもので、濃飛火砕岩類の基盤をなす岩石であるが、現在は、ところどころにおいて、濃飛火砕岩類中に断層ではさみこまれた小岩塊として露出する。園原川においても、追分—神坂時間において、チャートの小岩塊が見出される。このような古生層の小岩塊は、石灰岩やチャートならば、岩相によって、周囲の濃飛の地層と区別でき得るが、粘板岩の場合は非常にむずかしい。

また、伊那川花崗岩の西端にくっついて露出する古生層が、赤礫に広く露出する。ホルンフェルス化を受けて赤く風化し、赤ナギの名称がでたり、アンチモニ—鉱の鉱脈を伴っている。なお、この鉱山は、かつて戸沢鉱山として稼行されたことがあり、鉱石はベルチェ鉱( $\text{Fe Sb}_2\text{S}_4$ )である。

#### (4) 濃飛火砕岩類(濃飛流紋岩類)

本地域を最初に地質調査した石井清彦：7万5千分の1地質図幅「恵那山」および同説明書によれば、恵那山から富士見台にかけて広く分布する酸性珪質岩類に対し、石英斑岩という名称で記載されている。しかしその後、半深成岩であるべき石英斑岩が、その岩体の下底の境界線が、等高線にはほぼ平行していることなどからして、マグマが地表に溢流してできたものではなからうかという疑問が出されていた。



(たとえば、鳥山武雄・竹下寿による阿知川流域に関する砂防地質調査報告・1960)。本地域の西隣りを、広く調査していた地質調査所の“石器斑岩地質図幅グループ”は、1961年、“石器斑岩”に対し、濃飛流紋岩類と命名し、その岩体の大部分が、溶結凝灰岩であるという画期的な成果を発表した。(河田清雄ほか：中央アルプスとその西域の地質・その2、濃飛流紋岩類)

智里西地域の濃飛流紋岩類は、その山頂部(恵那山—富七見台—南沢山)に、広く流紋岩質の溶結凝灰岩を露出させるが、一方、神坂断層に接する部分において、泥岩・砂岩・凝灰質砂岩・凝灰角礫岩・角礫岩などの砕屑岩が顕著であるので、当地域の特性を強調する意味で濃飛火砕岩類と呼んでいる。

#### A 園原周辺の“濃飛”について

“濃飛”の主体は、流紋岩質の溶結凝灰岩である。富士見台・神坂山・園原川上流部に、これらが広く成層して露出する。これら溶結凝灰岩の下部に水底堆積物であるところの泥岩・礫岩・凝灰岩・凝灰角礫岩が見られる。また、溶結凝灰岩の噴出と関係し、それを貫いて、花崗斑岩が岩脈状に貫入している。神坂峠付近に露出し、神坂断層と並行するいくつかの断層群と、花崗斑岩の方向や場所が一致している。

溶結凝灰岩とはどういう岩石であるか簡単にふれておく。

##### ① 全般的に強く溶結した凝灰岩である。

火山活動によって大量に突出され、堆積した凝灰岩を主とする火山砕屑堆積物は、水底に堆積したのでなければ、温度が急激に冷却しないため、火山ガラスどうしが溶け、ゆ着する現象がおこり得る。これを“溶結”と呼ぶ。再溶結した岩片どうしでは、荷重のため、孔隙が消失し、ガラスの塑性変形がおこなわれ、岩片や、軽石片などをレンズ状にとりかこむように、流理状構造が発達してくる。

##### ② 様々な火山砕屑物の集まりである。

溶結凝灰岩を構成している物は、火山ガラス・結晶破片・軽石破片・岩石片などである。ガラス破片や結晶破片は、結晶を含んだマグマが、激しい火山爆発により、細かく粉砕されて突出されたことを物語る。それらの突出物が、厚く積み重なって溶結凝灰岩となったものである。

##### ③ 溶結凝灰岩は全面的に熱変成作用を受けている。

当地域の溶結凝灰岩層の厚さは、確実には1000メートルを越え、推定では2000メートルと考えられる。その全域にわたって、伊那川花崗岩の貫入をうけ、熱変成作用によって、ホルンフェルスとなっている。そのため、石英・長石・黒雲母・角閃石・ざくろ石・重晶石・紅柱石などが晶出している。このように、強くホルンフェルス化していることによって、従来、溶結凝灰岩を火成岩(たとえば石英斑岩)と、誤認する原因となったのである。

#### B 戸沢層

戸沢層の模式地は、本谷に沿う林道の営林署の小屋付近より、1400メートル付近までの道路沿いに好露出する。園原川においては、追分より園原川に沿い、神坂山の稜線と、さらに黒川川上流ドウト沢にかけて分布している。かつて、戸沢層は、古生層に入れられていた。(石井清彦：7万5千分の1地質図恵那山、1927・日本道路公団：恵那トンネル地質説明書、1967)、しかし、溶結凝灰岩層と整合的に重なっているところが、各所で観察されることから、溶結凝灰岩の基底をなす堆積物であることが判然とする。主

として、泥岩・砂岩・凝灰岩からなる湖沼堆積物であり、全体が200メートルの厚さはある。伊那川花崗岩と接する團原川の川底では、各所で、花崗岩に貫入されている。NW-S E方向の走向を主とし、30°くらい北に傾斜する。全体が強くホルンフェルス化している。

### C 角礫岩層

古くから、「團原の礫石」として知られていた。黒色を特徴とする礫石で、本谷川へでている転石を採集していくことが多かった。この礫岩層は、團原川上流に広く分布し、戸沢層と溶結凝灰岩との間に入ってくる。厚い部分では50メートルに達する。神坂山の方では消滅してしまう。礫は、古生層の砂岩や粘板岩を主とし、さらに戸沢層の岩石も入り、平均径5~10センチメートル、最大径50センチメートルの角礫である。これらを充填するものは、石英・長石などの結晶破片と黒色の泥質物である。

### D 恵那山溶結凝灰岩層

溶結凝灰岩層は、広大な分布を示し、全層厚3000メートルといわれる厚さをもっているものであるが、これらは数回以上におよぶ火山活動の積み重ねの結果であって、全体が連続した噴出物ではない。その間は火山活動の休止期があったりして、いくつかの火砕流堆積物の集合である。ひとつひとつの活動は、岩に特徴的な溶結凝灰岩を堆積しており、その岩相を識別することにより、数回の大きな活動単位を区分している。当地域において、最初の大きな活動として厚く分布する溶結凝灰岩が、恵那山溶結凝灰岩である。恵那山頂から、その北側に広く分布し、神坂峠付近まで広がっている。恵那山方面で500メートル、團原川上流で100メートルの厚さと推定される。岩相上の特徴は、石英・長石の大形斑晶（径3~5mm）が大半を占める極めて粗粒な溶結凝灰岩であり、そのため、白っぽく、柱長質に富んでいる。軽石片などの本質レンズは比較的少ない。

### E 富士見台溶結凝灰岩層

神坂峠付近から、富士見台山頂にかけて、黒川流域の1620三角点峰まで広く分布する。恵那山溶結凝灰岩層の上に重なる岩層である。従って、当地域における大規模な火山活動の2回目の堆積物にあたる。厚さは500メートル以上と推定される。岩相は、黒雲母・角閃石などの苦鉄質鉱物が多いため、全体に黒っぽい感じを呈し、斑晶が小さく（径2~3mm）、少量で、かつ、本質レンズ（軽石）や、石質岩片を普遍的に含んでいる。横川川最上流の南沢山山頂部には、南沢山溶結凝灰岩層とされる3回目の大規模な噴出物がみられる。

### F 花崗斑岩

濃飛流紋岩類の活動にともなって、連続して活動したと思われる選入岩がある。一般に花崗斑岩として大別しているもので、大小の岩株・岩脈として分布している。これもまわりの溶結凝灰岩と共に、花崗岩貫入による熱変成作用を強く受けている。本谷川上流部で、戸沢層および恵那山溶結凝灰岩層を貫いて、大きな岩体が露出しており、その延長部が、團原川上流、神坂峠付近において、数本の小岩体に分岐してみられる。岩相は、おもに花崗閃緑斑岩で、大きいカリ長石の斑晶が特に目立つ。一般に、暗灰色の石蓋

中に自形の石英・斜長石・カリ長石・黒雲母・角閃石などの斑晶を多量に含む。斜長石やカリ長石の斑晶の中には、長さ2～3cmが多い。熱変成を受けて、多量の黒雲母・角閃石など生じている場合、青緑色、または暗赤紫色を呈する。小岩体は分岐している部分の岩相は石英斑岩に移化する。

#### (4) 変輝緑岩類

伊那川花崗岩に含まれる小岩体で、1～2メートル内外のものを主としている。清内路方面には、数百メートルに達する大きな岩体もあるが、園原周辺に見られるものは小岩体のみである。清内路花崗岩中にはあまり見出されない。産状は、岩脈状・レンズ状・岩床状など呈し、そのほとんどは、捕獲岩のような産状を示す。岩相は、細粒の角閃石・黒雲母・石英閃緑岩である。

#### (5) 伊那川花崗岩

神坂断層と清内路断層との間に分布する粗粒の花崗岩ないし花崗閃緑岩で、園原川では、園原部落より追分の間に分布している。伊那川花崗岩は、領家帯に広く分布する花崗岩の代表で、木曾山脈のほとんどを占めている。空木岳より南は、木曾谷から伊那谷にかけ広域に露出しており、本地域からさらに南へ連続している。

園原地域の伊那川花崗岩は、比較的岩相の差が目立つ。これを次の2項に分けて説明する。

##### A 粗粒角閃石黒雲母花崗閃緑岩

##### B 粗粒斑状角閃石黒雲母花崗閃緑岩

##### A 粗粒角閃石黒雲母花崗閃緑岩

おもに神坂神社から園原までの東側半分に見られる岩相である。灰白色粗粒の角閃石黒雲母花崗閃緑岩を主体としているが、場所によっては、優白色粗粒黒雲母花崗岩の部分も見られる。片状構造は一般には認めにくい。場所によっては、弱い片状構造を呈している。有色鉱物が集合してフィルム状に配列したり、長石類をとりまいたり、クロット状を呈するのが普通で、単結晶をなすことはほとんどない。捕獲岩状に、ホルンフェルスや変輝緑岩類を含むことがしばしばあり、また、細粒黒雲母花崗岩や、アブライト質の岩脈に貫かれたことも多い。

優白色粗粒黒雲母花崗岩は、東側の清内路断層に近い方に割合多くみられる。花崗閃緑岩中に帯状に分布し、両者の移行する部分では、優白色粗粒花崗岩の方が後から固結した様相を示している。花崗閃緑岩にくらべて、カリ長石がずっと多く、黒雲母が単独自形の結晶をし、ジュリーレンやクロットを形成しない。著しい特徴として、優白色花崗岩の部分一帯がはげしく風化し、赤褐色を呈するに至り、酸化帯として特徴づけられることである。この部分が、恵那山トンネル内において、著しい熱水性粘土帯と一致している可能性もあり、領家帯中では、伊那川花崗岩の大きな岩相上の特長である。

##### B 粗粒斑状角閃石黒雲母花崗閃緑岩

主として、神坂神社から追分まで、伊那川花崗岩の西側部分を占める極めて斑晶の目立つ岩相である。そのため、恵那山回廊や恵那トンネル地質説明書などにおいて、それと同じ岩相の部分をも木曾上松花崗岩としている場所もあるくらいである。カリ長石が極めて粗粒で、ときに3～4cmに達する。その卓状斑

晶はキャラメルを散在したように顕著になる。特に、岩体の西縁部である神坂断層付近では、花崗斑岩質の岩相を示す。石英についても特徴的で、斑晶の目立つ部分では全体がアメ色を呈してくる。

#### (6) 清内路花崗岩

伊那川花崗岩中に、清内路から浪合にかけて、比較的大きな岩体として、伊那川花崗岩を貫いて分布する中粒黒雲母花崗岩である。当地域では、清内路断層より東側の部分に分布し、夜鳥山・綱掛山・三階峰と連なり、智里西地域と智里東地域を分ける山を形成している。恵那山トンネル入口は清内路花崗岩で、入口より560メートル地点で、断層により伊那川花崗岩と接している。

この花崗岩は全般に均質で、変輝緑岩質の捕獲岩や、ホルンフェルスなどをあまり含まない。片状構造は、当地域では全く認められない。場所により、角閃石を含む花崗岩閃緑岩の部分があるが、全般に中粒黒雲母花崗岩一色である。周辺部において粒度が細粒になるところも認められる。中粒均質な岩相部分では、黒雲母の自形単結晶が散在し、C軸方向に厚く成長した黒雲母は風化面においてその結晶を捨てることができる。このような黒雲母は蛭石と呼ばれている。火で焼くとC軸方向にのびる様子から名づけられたものである。

#### (7) 岩脈状の花崗岩小岩体

伊那川花崗岩中に大小の岩脈状の小岩体として分布するもので、細粒の黒雲母花崗岩が多い。團原一神坂神社間では、千代ノ沢の屈曲部付近でみられ、長平沢では1100メートル付近に露出している。その岩相から考えると、清内路花崗岩に属する一連の貫入岩体と思われる。このほか、半花崗岩質ないし、微花崗岩質の小岩脈が各所で見られる。

#### (8) 玄武岩質岩脈

恵那山トンネル内において、伊那川花崗岩中より極めて塩基性の岩脈が見出された。長平沢においてその露頭も確認された。一見して、変輝緑岩類とまちがえ易いが、変輝緑岩類のように変性を受けてはいない。幅2メートル前後の岩脈で、その境目はシャープである。これと同じような塩基性岩脈を他地域に求めると、浪合―根羽方面の各所で発見される。さらに、愛知県設楽方面に分布の中心があり、第三紀鮮新世の瀬戸内系火山活動に伴って貫入した玄武岩―安山岩類と一連のものであろう。

### ウ 断層と谷の発達

#### (1) 断層と水系との関係

基盤地質の項において、主要な岩体分布が清内路断層と神坂断層とによって規定されていることを述べた。地形の概要と、水系の分布を見ても、上記の断層は大きく影響を与えている。従って、水系図と断層分布図とがたがいに関連している。このことは、現在の地形が形成されてくる過程において、断層が深く関係していることにほかならない。その関係とは、断層の歴史的観点からみて、2つの段階にわけて追求することができる。

- ① 主要断層は、現在の地形の発達より前から存在しており、基盤の分布と密接に関係してきている。  
 ② 主要断層は、現在の地形の発達に際し、再活動しており、地形の発達に支配的要因となっている。

また、現在の地形の形成に伴って発生した新しい断層も多い。

- ①と水系との関係は次のようになる。

広い断層ほど幅広い破砕帯を伴いやすく、断層付近の基盤が脆弱となっている。そこに強く差別浸食が働いて、いわゆる断層線谷ができやすい。

- ②と水系との関係は、さらに複雑になりやすい。

地形の形成には、山地の上昇運動が支配的に働いている。上昇運動に際しては、基盤がブロック化し、そのブロックをブロックとの境界には①の断層が再活動しやすい。さらに、上昇運動に伴って、古い断層線以外の場所に新しい断層が発生し、さらにブロック化がすすむであろう。そういう断層に沿って、河川勾配の遷急点をつくりやすい。また横ずれを伴って動けば、河川の屈曲をつくりやすい。

以上のような見方から、当地域のおもな断層について記述する。

#### (4) 清内路断層

清内路断層は、木曾谷断層群の延長にあたり、木曾谷から清内路峠を通過して阿知川流域に入ることから、「清内路断層」と命名されている。清内路峠から南下し、横川部落をとおり、横川川に沿って園原に至る。園原から本谷をとおり、弓ノ又沢一野山沢に沿って換合村の麓平に続く。さらにその延長は、治部坂峠を経て根羽まで続く長大な断層である。

智里西地域では、清内路断層によって、伊那川花崗岩と清内路花崗岩とが分けられている。つまり、両層に対し、園原断層および園原東1断層・東2断層・東3断層・西1断層・西2断層などと命名している。これらは、同じくらの粘土帯をもつ断層群で、ほぼ同じ規模のため、見かけ上では、どれが主断層かきめられない。地質的に見れば、2つの花崗岩体の境界をなす断層とを主断層と判断できる。そして主断層から派生した副断層や、主断層と並走する断層群の集合が清内路断層である。

清内路断層によって現在の水系が大きく支配されている。横川川（横川一園原間）、本谷川（園原一本谷間）・弓ノ又沢などが断層線谷を形成し、智里西地域において最も広く開けた谷が開折され、そこに、横川・園原・本谷・向などの主要集落が存在している。

36年の梅雨前線による集中豪雨の際には、夜烏山の横川川に面する斜面など、清内路断層群に沿って、著しく崩壊が発生した(写12)。断層に沿う部分の花崗岩の深層風化が進み、それに伴って、崩壊が発生しやすくなっている。弓ノ又沢のほうでも同じようである。

清内路断層を南へ延長していくと、根羽をこえ、愛知県津具に至る。津具は、設楽第3紀層堆積盆地の北端にあたる。この設楽第3紀層堆積盆地には、南北方向に近い断層が瀬戸内系火山帯と一致して発生したかも知れない。つまり、両者とも領家帯の隆起部にあたるかも知れない。

#### (5) 神取断層

園原川上流、とくに追分付近で大きな破砕帯を露出させている神取断層は、古くから注目され、神取断層と命名されており、現在は恵那山トンネル掘削上から大変重要視されている。この断層は、園原川上流部

で見られるように、幅広い断層破砕帯が特徴で、このため、この破砕帯が水系や地形に強く影響している。横川上流から神坂山の北側へはいるドウト沢に破砕帯が観察され、神坂山の鞍部を越えて圓原川に出、沢沿いに追分まで通がる。圓原川と本谷川との間の尾根上には、実に見事な断層地形を保存しており、これが京平である。この地形を航空写真でみると、いかに神坂断層が顕著な破砕帯を伴っているかと納得させられる。本谷川から南への延長は、北北東—南南西へ少し向きを変え、赤ナギへ続くものと観察される。本谷川以南では、急激に破砕帯が消滅してしまうようである。一部は、御池をとおり中津川の上流黒井沢へつながるものと思われる。以上のように、神坂断層は、その中央部で大きな破砕帯を伴うが、その延長距離は大きくない。このことは、この断層の成生に起因する問題と思う。

神坂断層はどのように発生をしたか考察してみたい。現在、神坂断層を境にして東側に伊那川花崗岩、西側に濃飛火砕岩類となっている。ただし、両者が常に断層関係で接するというのではない。大きな破砕帯は濃飛火砕岩類の方に存在しているし、断層付近で、各所において伊那川花崗岩が濃飛火砕岩類を貫いている。つまり、伊那川花崗岩はほぼ神坂断層に沿うところまで遷入していることになる。断層の東側にも濃飛火砕岩類の小岩体が見られる部分もあり、そのまわりは伊那川花崗岩でとりかまれている。いずれにしても神坂断層付近で濃飛の火砕岩類の堆積した限界が存在し、また伊那川花崗岩の分布範囲も神坂断層の影響を受けている。さらに注目したいのは、神坂断層に沿って基盤の古生層がブロック状に露出していることである。どれも小岩体であるが、断層にとりかまれて、クサビ状に古生層がはさまれている。これら基盤のかたと濃飛火砕岩類の構造から考えられることは、濃飛の酸性火山活動がはじまったとき、基盤に大きな陥没構造が生じ、そこを埋めるように濃飛が堆積したと思う。その陥没構造をつくった断層の一部が神坂断層のはじめの姿であろうと考えている。濃飛の火山活動が活発になる前に、大規模な陥没が生じ、その凹地に湖ができ、そこへ戸沢層が堆積したものであろう。

現在の神坂断層は、断層より西側に厚い濃飛の溶結凝灰岩層が見られるところから、火砕岩類が堆積した後からも断層が大きく動き、西側の方がおち込んでいることを物語っている。この動きが伊那川花崗岩の遷入時期をどう関係するか重要であると思う。

#### (イ) 神坂神社断層および長平沢断層

恵那山トンネルの地質調査や、トンネル工事中に命名された断層群である。伊那川花崗岩に見られ、清内路断層と神坂断層との間にできた断層であり、その走向もほぼ前記2断層と同方向である。地形図を見ても、神坂神社付近から千代ノ沢にかけて、地形上明瞭な断層地形を示しており、その地形を北側の長平沢方面や、南側の暮白の滝方面へ追跡することができる。

これらの断層は、花崗岩を切って生じた新しい断層である。現在の山地を形成するときに伴ってできた断層である。そのため、尾根上ではケルンコルンやケルンパットを形成しており、谷底では選急点を形成している。恵那山トンネル内においては、この種の断層に伴って異状湧水をおこした例があるように、断層面がしっかりしており、その断層粘土帯に沿って地下水が動きやすくなっているため出水をおこすこととなる。また、尾根上では、この断層線上の窪地に地下水が湧きでて小さい池をつくりやすい。圓原部落の裏手にもそんな池が認められる。この付近の谷沿いを歩くと、選急点を形成し、そこには縄を形することが、非常に多い。

## エ 集落および交通路の発達と自然条件

阿知川の上流は、本谷川と黒川とに分かれる。智里西地域は本谷川流域にある。この地域に、横川・園原・本谷・外瀬間・向・戸沢などの集落が発達している。今回、中央道恵那山トンネル坑口にあたった横川渡の集落は、自然条件というより、智里地域の中央部にあたるとい交通上の条件のために新しく開けた集落であった。つまり、古くから開けていた集落は、横川渡のような、谷底の氾濫原には発達していない。谷底の氾濫原に集落ができるようになったのは、近年、自動車交通路の発達により、交通上の要所になってからのことにちがいない。古い時代にさかのぼるほど、それらの時代の交通路は、谷沿いをさけ山腹や峠をつなぐ、上り下がりの多い曲りくねった道であった。一番の特徴は、自然災害にかかわりの少ない安全な地形を選んであることである。このようなことから、山あいの集落は、谷をさけ、山腹に開けた段丘状の平坦地に発達している。園原を始めとし、智里西の集落は、いずれも、旧河床によって形成された段丘面を利用して発達している。戸沢部落だけは例外で、本谷川の氾濫原に発達している。

阿知川上流流域に発達する集落の立地条件を調べてみると、段丘を利用して開けている場合が圧倒的におおく見られる。園原もその1例に過ぎない。特に黒川流域の清内路村の場合、黒川や小黒川に沿って、奥深くまで出作り集落が見られる。おおくの場合、谷底から一番比高の小さい低位段丘に中心集落ができ、そこから山腹斜面を高く上った高位段丘を利用して、出作り集落ができていく。最高位の高位段丘は、谷底から比高200メートルも高処に残存している。これら山腹にみられる斜面が、河岸段丘であるということは、高位面の中から、円礫よりなる旧河床礫をのせているものが見出れるためである。

## オ 富士見台高原——平坦面の発達と河川の争奪

富士見台一帯は1400～1700メートルにかけ、高原性の平坦面が広く発達している。この平坦面は北方に続き、南沢山周辺にも広く分布している。南へも同高度の平坦面が追跡でき、浪合の大川入山一帯、平谷のタカネ一帯、さらに蛇峠山山頂部など、各所に高位平坦面が残存している。恵那山山頂部(写13)は、この平坦面よりさらに高く2100メートル以上の高位平坦面を温存している。現在の谷は、これら平坦面を300～400メートル浸食しており、富士見台周辺においては、平坦面と谷の浸食斜面とがなす傾斜変換点が明瞭に追跡できる。いかえてみると、現在の谷をつくる旺盛な浸食力がまだ全域にいきわたらず、山頂部には古い時代の小起伏面が温存されて、高位平坦面となっている。

もし、現在活発に浸食されている山腹の傾斜変換点より下の部分を全部埋めたてたとするならば、平坦面の上を河川が流れていたころの古い地形面を復元してみることができる。そうすることによって、次に記すような大変興味ある事実——河川の争奪——に気がつくのである。

富士見台の東側の平坦面上を流れていた旧河川は、園原の方へ流れず、そのまま南へ流れ、京平の旧河川跡へ流れ込む。その旧河谷は、戸沢・本谷方面へ屈曲せず、南東方向に向きを変え、本谷川一弓ノ又沢中間の尾根上にある1296三角点付近の平坦面を通り、そのまま南流して、恵那川上流の蘭平へと流れたであろう。これは、恵那川が、本谷川によって著しくカットされ、その上流部を争奪されてしまったことを意

味するものである。

思田川が著しく争奪されたらしいという事実は、思田川に分布する礫の種類から言える事柄である。その礫というのは、思田川から濃飛礫を発見することである。蘭平付近で最初に濃飛火砕岩類に属する礫岩の大礫を発見したのがきっかけで、一帯を注意してみると、蘭平と本谷との分水嶺まで、この濃飛礫を追跡できた。さらに、思田川から淡合川を和知野まで下ってみると、至るところの河床で濃飛礫が発見される。

現在、淡合川流域において、濃飛火砕岩類の分布が知られていない以上、この濃飛礫の起源を求めるには、次の2つのことしか考えられない。

① は、前述したように思田川の争奪である。争奪される前には、思田川は富士見台・恵那山方面の水を集めて淡合川となっていたにちがいない。そのとき、上流から濃飛礫をたえず運んでいたことになる。

② は、かつて、思田大川入山周辺に広く濃飛礫が分布していたと考えてもよい。現在は花崗岩のみであるが、この花崗岩の上に、ルーフペンダントとして、濃飛火砕岩類が分布していたかも知れない。もしルーフとするならば、現在でも、わずかながら、濃飛が残存して分布しているもよいわけである。しかし、残存した濃飛ルーフが発見できないので、思田川争奪の方をより重要視するわけである。争奪説の方が平坦面の説明ともよくマッチするからである。

では、いつごろまで、富士見台の水は淡合方面へ流れていたのか検討してみる。和合において、現河床より150メートル高い山腹に分布する旧河床礫をみると、濃飛の細礫～中礫を比較的多く含んでいる。このことは、平坦面を現在の川が浸食している量とから考えられる時間差にはほぼ一致している。旧河床礫の比高と、本谷川の浸食量とを考え合わせ、本谷川の現河床が200～300メートル前後高かったころの時代—浸食量から推定すると10年以上前—には、富士見台の水は思田川へ流れていたと考えられる。

#### カ 園原の段丘について(写1)

園原の部落は、本谷川の支流である園原川が形成した段丘上に発達した集落である。この園原の段丘は、阿智村智里西地域では、一番広い面を発達させており、また、段丘地形が典型的にみられる場所でもある。園原の段丘は、上下2段に発達をみせ、上の段丘を園原段丘Ⅰ、下の段丘を園原段丘Ⅱとする。千代ノ沢から神坂神社にかけて、園原段丘Ⅲの発達がみられる(第2表参照—次頁)。杉の木平遺跡は、園原段丘Ⅲ上の崖線性堆積物中にある。

園原の段丘は、園原川による浸食作用の結果できあがってきたものであるから、そのでき方から、富士見台をつくる山地の上昇過程が推定できる。

段丘Ⅰ(a)は、段丘面が2段に分かれている。これと大山割合流点の830メートル丘陵とが一致しており、清内路断層による影響が考えられる。段丘ⅠとⅡは、現河床よりその勾配がゆるく、段丘形成後の山地側の上昇を示している。段丘Ⅲは、現河床より勾配が急である。これは、千代ノ沢付近より上流側で神坂神社断層や、長平沢断層などの活動が、比較の後になっていることに関係する。つまり、現河床のみられる遷急点や、山腹斜面に見られる傾斜変換点の位置などと一致しており、山地の上昇が、千代ノ沢合流点より上流において、現在まで活発であることを意味している。



(第2表) 圓原の段丘

段丘区分 — 分布区域		段丘面の高さ	比高	堆積物	
完 新 世	圓原段丘Ⅲ	神坂神社前—朝日松	915~960	20~30	巨礫を含む亜角礫~亜円礫・最大の厚さ15m
	圓原段丘Ⅱ	圓原部落下段	790~835	40~30	亜円礫を主とする大礫を含む礫層。層厚15~18m
更 新 世	圓原段丘Ⅰ	(b) 圓原部落上段・月見堂より奥	880~900	80~60	表層部は火山灰質粘土が混入中円礫を主とする礫層で、くさり礫が多い。層厚10~13m
		(a) 圓原部落上段・月見堂より手前	800~850		

## キ 杉の木平遺跡についての地質学的考察

## (ア) 杉の木平遺跡付近の地形 (図2・3写5)

杉の木平遺跡のある面は、段丘状に発達した崖面である。この崖面は下流側へ続いて圓原段丘ⅡⅢに連続する面にあたる(第2図2・圓原の段丘分布図・第3図1杉の木遺跡周辺の地形説明図)。

第3図2の断面図に記したように、崖面をつくるテマリ状の崖性砂礫層は、厚さ25メートル以上に達する。亜角礫を主とする砂礫層には、最大径3メートルの角礫を混在する。これらのテマリ堆積物の表層をおった崖面の中に杉の木平遺跡がうめられている。

崖面は、圓原段丘Ⅲに連続するところから、この面の形成は圓原段丘Ⅲと同じになるであろう。A—A'断面に示される礫より、B—B'断面に見られる礫の方が、礫径が小さくなったり、亜円礫が多くなっている。さらに、C—C'断面の礫は、全部亜円礫で、段丘礫層であることを示しており、崖性礫層を混えていない。B—B'が、崖性礫層と、河床礫層とを両方混じえている。

これら、杉の木平遺跡をのせる段丘面および崖面の形成に関しては、段丘の項で記しておいたとおりである。新しい断層運動を伴う山地の上昇部が、この部分にあたるものと思われる。

## (イ) 杉の木平遺跡の断面 (図3、写7)

E・D地区発掘中の観察断面図を第3図、3に示す。遺物の産出状態は、調査の項で説明を受ける。発掘した最下層は第1黒土帯(第4層)までである。これより下層は、礫まじりの砂層で、遺物を見つけていない。第1黒土帯の成は、I面の崖状堆積物の堆積した後の休止期にあたる。この面上からは、土師器・須恵器を産出したり、炭出物(人工)がおおくでいた。

I面をうめて、II面をつくる砂層の堆積——礫まじりの崖性砂層——があり、II面形成後、第2黒土

帯をつくる休止期がくる。途中、I面のわづかばかりの休止期をはさむ。第2黒土帯(第3層C)からは土師末期国分期の遺物を産する。ほかに灰輪陶器片も混在する。

II面形成後、III面形成に至るあいだ、断続的に砂の押し出しがあり、III面形成まで崖線性の堆積が続く。III面形成後は大量の砂の押し出しはない。III面上には第3黒色土帯(第2層)の堆積が続く。

以上、I面～III面まで、順次崖線性堆積が積み重なっている様子が、発掘によって明らかになり、砂が大量に押し出すときは、堆積が急におこなわれ、休止期には、黒土帯の形成がおこなわれてきた。これらの様子を模式的に示したのが第3図4である。しかし、このような砂の押し出しと堆積は、平面図形としては、舌状を呈するのであるから、休止期というのは、崖線面全体が静穏な時期であったかどうかは大変疑問である。おそらく、ある場所が休止期にあたる時、その隣り合った場所に激しく砂が押し出していたにちがいないだろう。(松島)

#### 参考文献

- 1 1929 石井清彦：7万5千分の1地質図幅「恵那山」および同地質説明書、地質調査所
- 2 1958 山田直利・村山正郎：5万分の1地質図幅「妻籠」および同地質説明書、地質調査所
- 3 1960 島山武雄：長野県下伊那郡阿知川流域に関する砂防地質学的考察、信州大学教育学部紀要
- 4 1961 片田正人・河田清雄・坂本亨・山田直利・磯見博：20万分の1地質図幅「飯田」、地質調査所
- 5 1961 河田清雄・山田直利・磯見博・村山正郎・片田正人：中央アルプスとその西域の地質その2 地球科学、第54号
- 6 1963 山田哲雄：伊那の花崗岩、長野県の地学Ⅲ
- 7 1965 竹下寿：中生代火山岩類と傾家帯の山(山を地検する—S—)、地学研究、第16巻、第7号
- 8 1967 恵那山トンネル附近地質説明書(第1版)、日本道路公団名古屋建設局
- 9 1971 恵那山トンネル地質説明書(第2版)、日本道路公団名古屋支社
- 10 1971 山田直利・河田清雄・諸橋毅：火砕流堆積物としての濃飛流紋岩、地質科学 25—2—3
- 11 1972 松島信幸：10万分の1下伊那地質図、下伊那誌編纂会

## 2) 園原の気候

### ア 智里西小学校の気象観測値

園原の気象数値を知る直接のデータを手に入れることができなかった。そのため、ここに智里西小学校で測定した数値を、「下伊那の気象」(1965)によってあげておく。ただし、智里西小学校の数値は観測回数が少ないため累年の平均というには値値があまり高くない。よって、園原と標高もあまり差がなくとも木曾山脈中にある浪合と、清内路(村役場)での観測数値を「飯田気象41年報」(1966)より転載し

ておく。飯田の数値は、「下伊那の気象」によるものである。

一 智里西・浪合・清内路・飯田の気象数値表 一

	毎日最高気温の平均				毎日最低気温の平均				最高最低気温の平均				降水量総計				風力の平均	
	智	浪	清	飯	智	浪	清	飯	智	浪	清	飯	智	浪	清	飯	智	飯
1月	4.1	3.5	3.5	6.6	-5.5	-7.6	-6.5	-4.6	-1.4	-2.1	-1.7	1.0	56.4	91.8	87.8	71.0	1.9	1.8
2	3.6	3.4	4.1	8.8	-5.5	-7.8	-5.7	-3.4	-0.8	-2.3	-1.0	2.7	48.2	81.2	71.1	70.8	1.9	1.9
3	8.0	7.0	7.6	12.8	-2.0	-4.5	-3.2	-0.0	4.0	1.3	2.1	6.4	184.7	139.1	128.3	110.8	1.7	2.2
4	17.9	13.5	14.9	18.8	5.8	1.8	2.4	5.2	12.4	7.7	8.4	12.0	93.0	201.9	178.8	152.5	1.6	2.3
5	18.8	19.0	19.9	22.9	9.2	5.9	7.3	9.9	13.2	12.4	13.5	15.4	336.0	167.1	169.0	180.9	1.6	2.1
6	22.1	22.3	23.0	25.5	12.0	11.4	11.9	14.9	17.1	16.7	17.3	20.2	533.9	249.9	246.8	275.9	1.8	1.8
7	26.3	26.0	26.8	29.6	17.0	15.4	16.4	19.4	21.9	20.7	21.5	24.7	153.2	259.5	286.0	222.6	1.5	1.8
8	27.8	26.3	28.2	30.7	16.9	16.0	17.1	21.4	22.6	21.2	22.5	25.6	153.8	223.1	193.9	218.6	1.4	1.5
9	25.7	22.6	23.8	26.7	15.6	12.5	13.6	16.5	20.3	17.5	18.6	21.5	417.3	363.0	319.4	217.9	1.8	1.4
10	19.0	17.1	17.8	20.7	9.7	6.0	7.1	9.8	13.7	11.6	12.3	15.3	273.5	198.3	173.4	142.7	1.4	1.3
11	13.6	11.7	12.2	15.2	1.5	0.6	1.4	9.2	7.4	6.2	6.6	8.7	68.7	134.7	124.5	70.4	1.4	1.5
12	8.6	6.3	6.3	9.9	-1.4	-3.7	-3.1	-1.9	2.6	1.3	1.4	3.9	93.1	135.0	100.0	60.9	1.8	1.9
全年	16.3	14.9	15.7	19.0	6.1	3.8	4.9	7.5	11.2	9.4	10.1	13.2	2411.9	2244.6	2007.8	1795.0	1.7	1.8

智=智里西小学校 浪=浪合 清=清内路 飯=飯田測候所

#### イ 園原の気象の概要

智里西小学校は本谷にあり海拔800mで、杉の木平が1000mであるから、園原は、智里西小学校より1'ほど低温と考えてよい。早く霜が来ておそくまで雪が残っている。参考までに浪合では10月18日で、初霜終りは5月17日、雪のはじめは11月18日で、終りは4月17日となっている。冬の寒さは酷しく、春の訪れは遅いし、冷凍害のおこることも多い。夏も、朝晩は冷涼であるが、日中の気温はかなり上がることがある。

降水量は、冬少なく夏多い表日本型を示す。梅雨期と秋霖期に雨量が多く、時には、河川が氾濫し、道路が崩れることもある。また、志那山の麓のこの地方は、雷雨の発生地帯でも有名である。浪合の降雨日数は35日となっているから、園原もこれに近いことと思われる。発掘作業中も、14日間雨にあっている。冬期には、Wの雨が卓越し雪をもたらす。

冷涼多雨な園原の気候は、生業にも飯田地方とは異った形を示すが、神坂峠を越す旅人には大きな障害になったであろう。日本武尊が、白い鹿となってあらわれた山の神を殺したため山中に迷ったという伝承も、あるいは、この時の雲霧の多いことを告げているのであろうか。

## 2. 歴史的背景

### 1) 園原の歴史

#### ア 文献にあらわれた古代の園原

「その原や、ふせやに生ふる帯木の、ありとは見えてあはぬ君かな」 坂上是則（新古今集）  
園原の地名が、最初に出てくる文献はこれである。坂上是則は930年に歿している人であるから、10世紀のはじめには都の間にも園原の名は知られていた。

しかし、園原にごく近く、関係の深い科野坂（神坂峠）のことは、これより古い文献に出ている。それらあげると次の如くである。

「古事記」——景行天皇の末に「日本武尊、科野の神坂にことむけ給ひて尾張國に還り来まし」とある。

「日本書紀」——景行天皇40年に、日本武尊が信濃に入り、「遙かに大山を徑りたまふに、既に峰にいたりて飢えたまふ。山中に食す。山の神王を苦しめんとして白き鹿になりて王前に立てり。王あやしみ給ふて一箇の蒜を以て白き鹿に弾きかけたまふ。即ち眼に中りて殺しつ。ここに、王怒ち道を失ひて出でむ所を知らず、時に白き狗自ら来りて王を導きまつる状有り。狗に随ひて出でて美濃に出づることを得たり」とある。この古典に記す峠は、信濃と美濃の境である神坂峠をさすものである。

「続日本記」に、「大宝2年（702）12月、始めて美濃國岐蘇山道を開く」とあるのはこの神坂峠が政府の手によって改修されたことを記すもので、それ以前より用いられていた神坂峠の道が、東山道の官道となったのをあらわすものである。この頃より園原は交通上の要点として大切な役目を果して来た。そのことは、2回にわたる杉の木平遺跡の発掘調査によっても十分証拠づけられている。

「万葉集」に、天平勝宝7年（755）に信濃國の防人の上った歌が録せられている。

ちはやぶる神の御坂に幣（ぬさ）奉（まつ）り齋（いは）ふ命は母父（おもちち）がため 主帳  
科郡神人部子忍男

すなわち、神坂峠の神にぬさを奉って故郷にいる両親の事を祈った埴科郡出身の防人がおたつたわけであるが、これらの防人も園原を上って行ったのであった。防人のみでなく、信濃の庸や調を背負った人もこの峠を越したのであるし、都から東國へ下る役人等も、また東征の軍団の兵等もこの峠を越えて園原へ下って来たであろう。

この峠道が官道であったことは「延喜式」（927撰述）の東山道に、美濃國大井10、坂本30、信濃國阿知30、菅良10、賢領10とあることによって明らかである。数字は駅馬数を示す。坂本駅は、岐阜県中津川市阿知駅は、長野県阿智村にあったことは確実である。この両駅にのみ駅馬が30匹なのは、この中間に神坂峠があったためにほかならない。この峠が、難所であったことは、弘仁6年（815）に最澄がこの峠を越えたとき、非常に苦心したことから、美濃に広濟院、信濃に広經院を置いた「叡山大師伝」に記されてい

るし、「延喜式」に駅馬の調味が記されているが、平路では馬一匹につき8束なのに、坂本と阿知のみは、45束とあることによってもわかる。また、「日本後記」によれば延暦18年(799)には、阿知駅の駅子の調馬を長く免じたとある。それも、道路が険難であるためとされている。

道は険しくはあっても、東山道であるから多くの官人等が通り、この峠に関した地名は、都人にも次第に知れたのであろう。東国からの貢馬もすべてこの峠を越えたことは、病気になる馬を伊那郡に留めたことが、「本朝世紀」天慶4年(941)の記事によってもわかるし、「今昔物語」の信濃守藤原陳忠が、神坂峠で落馬した物語によっても理解できる。

「渡雲集」には、信濃を渉る坂山今越の峠のつており、「源氏物語」には、帯木の巻がある。平安・鎌倉・南北朝の頃の和歌には、帯木、園原、伏屋、木賊山、御坂、風越などがうたわれている。これらは実際のこの峠を越えた人の実感もあるであろうが、歌枕として都人に知られていたのも原因であろう。とにかく、園原は、これらの人が通過したり、または想見の地であったといえる。

## イ 考古学記録から見た園原

園原の地から石器時代の遺物の出土したことを最も早く記したものは、矢沢淳三著の「園原の独案内」に、「これも長者の屋敷より一際高き小山にて、明治20年と5年に多数の陶器を掘り出しが……(以下略)」とあるものであろう。

大正13年(1924)に発行された「下伊那の先史及原史時代」(鳥居竜蔵)によれば、アイヌ厚手派遺跡として、サブゴヤ・児の宮・葛蒲平・薬師平を、固有日本人遺跡として、神坂峠・長者屋敷をあげている。

昭和9年(1934)発行の「智里村誌」には、大山洞・サブゴヤ・薬師平・マサゴヤ・児の宮(朝日松所在地)・長者屋敷・神坂峠をあげている。

昭和42年発行の「全国遺跡地図」(長野県)(文化財保護委員会編)には、次の遺跡が記載されている。

3143 大山洞(矢平) 3166 長者屋敷 3167 下瀬河原 3168サブゴヤ 3169 薬師平

3171 勝勝平 3172 児の宮 3173 杉の木平 3174 クラガリ沢 3175 神坂峠 3176 千本立

これらの遺跡群が確認されるまで、古くからの調査のほか、若い学徒による研究の成果も大きくあげられよう。その後、昭和42の発掘調査によって、神坂峠頂上付近から縄文土器も確認され、園原～神坂峠ルートは、すでに縄文時代から用いられたことが明らかになった。翌年の、阿智村教育委員会が主体となって実施された神坂峠頂上の発掘調査は、多大の成果のあったことは「神坂峠」に詳しい。

園原の調査も、これらと併行して行われたが、2回にわたる杉の木平遺跡の発掘調査と、周辺の分布調査によって、さらに遺跡の数を加え、園原が、縄文時代早期から引き続いての居住地域であり、また、古代～中世には大切な交通路であったことを、遺物や道路状遺構の上からも実証された。とくに、今回の斜坑広場その2の発掘調査はその価値をより広く知らしめた。

## ウ 中世以後の園原

杉の木平遺跡の2回にわたる発掘調査によって、中世の生活の場も確認され、とくに、中世陶器片が多

量に出土したこと、更に杉の木平の水田中から発見された五輪塔は、完形ではないが法輪の如きは明らかに室町期のものであることなどからみて、園原に人々が定住したことは確実である。更に、中世の和歌にもこの地を詠じたものが多く、たとえそれが歌枕としてでも、この地を通った人々が多くあったことを物語るものである。

承久の夏の折、東山道軍を指揮した小笠原長清・武田信光は、園原から神坂峠を越えて行き、南北朝時代宗良親王も、この峠を越えて西へ上り、南朝回復のために努力したものであった。

## Ⅰ 江戸時代の園原

古来から中世にかけて栄えた園原も、江戸時代に入るや神坂峠の交通は杜絶してしまった。これは、中仙道が5街道の1つとして整備されたこと、清内路峠や三州街道の利用が多くなったこと、大平峠の道が大改修されたことなどが原因であった。そしてこの地が幕府の御林山に編入されたが、園原部落の消滅の真の原因は尋ねようもないが、人家は全くなくなってしまった。享保年間に、園原の佐々木久左衛門の著した「園原末代鑑」には次のように記してある。この園原一帯は、江戸時代の前期には、野熊山という徳川幕府直轄の御林山であって、人家はない。ただ、地元の小野川村はじめ曇神村・上中岡村・向岡村・大原倉村・備中村（すべて今日の阿智村の中）の6か村が、この山に入り木を伐って年貢として納めていた。すなわち、樺木を納めていたのであった。享保年間（1716～1736）になると、山へたびたび入っていた経験のある小野川村の人達が、網掛峠を越えて、園原地帯へ入って来て、開墾して住みついた。他の5か村は、これに反対してそれらの人達は、もとの小野川村へ移り住むように要求し、天領支配の飯島役所に訴えたりした。しかし、一度入りこんだ人達は、なかなか聞き入れずに、飯島役所へこの地を伐り開いた経験を陳述し、年貢を納めるからこの地へ永住させてほしいと願い出た。その後、しばしば頼出やら訴えをしたりしたが、元文4年（1739）に他の5か村もついに小野川村の人達が、園原山に住むことを承諾し、絵図を作成した。

寛保3年（1743）には、正式の検地が行なわれたが、その時の、「信濃国伊那郡小野川村の内管野原新田検地帳」が現存している。そのうちの地名に、下瀬原・高蒲平・子の宮平・杉の木平・薬師平・長者屋敷・殿島と残っているから、今日の園原にある農耕地には、いち早く人々が住んでいたことがわかる。その時の園原の耕地は、283畝で、屋敷は9、作人9となっている。ここに、園原が100年よりに復活したものであった。

しかし、耕地の狭い園原の人達や、隣りの本谷の人達は山に依存しなくては生活ができない。遠隣の地のため目が十分とどかないことをよいことにして、この地方の人達は、次第に野熊山の御留山へ侵入して行き、そこを開墾したり、その山の木を伐ったりして生活するようになった。幕府から山の検分に来ると書面にある地名より奥地の山の中であると案内した。実際の土地と、そのとき偽ってつけた地名との間の土地を部落の私有林として、次第に御留山を奥の方へ押しこんでしまった。このことは、時代順に絵図面を見るとよくわかる。——この項、主として筒井泰蔵氏の研究による——

当時の園原の人達は、何によって生活していたのだろうか。「伊那郡村鑑」（寛保元年1741以前の作）には、園原山は、樺枝木の名産を出し、黒もんじの「ようじ」も作ったこと、昔、伐った後の残った所を

振り出して、益・あかしにして売ったことが記されている。すなわち、山林に依存していたことがわかる。また、「中馬一件記録集」を見ると、宝暦12年(1762)飯田・下伊那地方から他地域へ送った荷物の中に山間地物産のものと考えられるものに、木地、たばこ、あく灰、柿などあげることができる。園原の人達も、換金作物としてこれらのものも生産していたに違いない。

## オ 明治以後の園原

前述のように、江戸時代には園原・本谷とも小野川村のうちであった。明治になってもこの関係はそのままであった。明治5年には、筑摩県の第156小区となり、翌6年には、他の小区と合して第20大区の中となった。明治8年には、中間・駒場・昼神・大野とともに小野川は、阿知村になることが命じられた。強制的に合併させられた阿知村では不便なことが多かったので、間もなく、中間・駒場と分れ智里村となった。その後、連合村など作ったことがあったが、明治22年(1889)新しい町村制が実施された際に、小野川(園原・本谷を含む)・大野(旧駒場村のうち)・昼神を合併して智里村となり、その後長くこの形であったが、昭和31年に町村合併によって、智里村は、会地村・伍和村とともに現在の阿智村を形作った。

明治17年(1884)に、園原の人達の努力によって、今まで綱掛峠を越えて親村の小野川に達していた道のほかに、本谷川に沿って昼神に至る道路が作られた。この道が、今日駒場から園原へ通ずる主要道路となっているが、この工事は大事業であった。この道路開通は、さらに園原から園原川沿いに神坂峠を越えて、木曾郡の神坂村の湯舟沢への峠路をも復活させている。この峠路が復活したことによって、駒場と中津川間を中馬が多く往復した。園原には、荷物の問屋ができたり、旅人宿ができたり、園原の人達が中馬を追ったりして、園原は交通集落として生き返ってきた。とくに、明治35年中央西線が中津川駅まで北上してきた後の10数年が、この峠が最もよく利用され、小学校の修学旅行隊もこの峠を越えて行った。「神坂峠を越えてくれば、あけびの口につるべ落しの日がぞく」との伊那節は、明治末期の作で、当時のこの地方の風物をあらわしている。その後、中央西線の北上と、大平峠を越える道の開通によって、神坂峠越えの道は再び衰退していったのである。

明治から大正にかけて、園原では水田が増加し、養蚕業も盛大となった。一方共有林を分割したことによって、各戸が私有林を持つことになり、屋根板・木炭・薪の生産が増加した。

## カ 現在の園原

下伊那の地誌、「木曾山脈東麓地域」(昭和41年刊)に、園原の生産について次のように記されている。「本地域は、食糧自給に主力を置き、零細的で低い農業生産力の農業と収益の低い薪炭を主とする農民の小規模生産による収入で、現金を得て来た農家経営が、ますます増大する現金の必要性のために日雇・山仕事などの地元での賃労働か、離村・出稼きによる他村流出とか、補充し合う兼業経営が増加して来た。この現象と相まって、部落共有化もしくは、その個人分割された私有林が維持され、生産および生活資材を供給していることが、農業生活をますます停滞させている。ところが、災害復旧工事とか、共有林用材売却とかいう現金収入の道は恒常的なものではなく、その中に吸収されている

農業の過剰労働の性格の濃い農民は、一時的にひっかかっているといた状態に過ぎない。復旧ブームも終末段階になっている現在、本地域の将来はどうなるであろうか。また、中央自動車道建設工事とその完成といった外部条件が、この山村の停滞的産業構造を一変させる要因となるだろうか。』と。また集落についてはつぎのように述べている。

「園原川の北、旧河床面に立地し、南面して日当りはよいが、標高は高く（平均800m以上）、東方から西方に行くほど傾斜が強くなり（8°~18°）、沖積地でなくなってしまう。飲料水は、枝川より井水で部落の上部へ引水しており、便利である。総戸数47戸中、農家が34戸、林業4・公務員4・その他5であり、耕地は一戸当たり4.5反歩という僅少さであり、水田耕作より畑作の方が多い。農業50%、山稼ぎ50%の収入源は、山への依存度は高いが、最近の離村傾向の多いのは、山林資源とその収入の少ないことを物語っている。江戸時代からの旧家は、平坦地の比較的広いところの中央部で、旧道筋に沿って南面する優位なところを占め、明治時代はその分家として近くへ出、大正時代はほとんど停滞期で、昭和の初めに山仕事で再び増加したが、近年は減少一方で、青少年の在村する者はほとんど見られぬ程である」と。

これは既に数年前の記事となってしまった今日、中央自動車道の工事が進み恵那山トンネルの斜坑工事が進行している今日、この表現が果して正しいであろうか。昭和46年の調査の折と、今回昭和48年の調査に遡った私たちの眼に写った状況に限れば、道路は改修され、水道の設備は整い民家の増築は目立つものの、道行く人は工事関係の人が殆んど、夏の盛りであったにもかかわらず、ハイカーの姿はごく稀であった。発掘現場を訪れる人がついでに神社を、登山道とよく人はいても、自然探訪の人がついでに発掘現場へ来た人がないのは、ただ単に林道の荒廃、工事の進展のためでなく、園原の将来を暗示しているかのように思える。

(大沢)

### 参考文献

園原は古くより歌の名勝として知られていたもので、これを詠じた和歌も非常に多い。また江戸時代に編集された地誌類にもよく載っているがそれらは略し、見聞に入った文献を記す。

「その原紀行」藤井方宣著 萬延元年（1860） 智里村誌中にも所載

「神坂神社由緒記」 神坂保存会編 明治35年頃 智里村誌中にも所載

「園原和歌集」 館谷宣一編

「伊那名勝志」 北原阿智之助著 明治35年（1902）

「御坂越の今昔」 市村成人著 伊那史叢書第1篇（昭和10年）中に所載

「智里村誌」 智里青年会編・市村成人校訂 昭和9年（1934）

「山村の生態—長野県智里村の研究」 筒井泰蔵著 昭和28年（1953）

「小野川本谷園原共有山史」 筒井泰蔵著 昭和36年（1961）

「下伊那の地誌—木曾山脈東麓地域」 下伊那教育会 昭和41年（1966）

「神坂峠—昭和43年度神坂峠祭祀遺跡発掘調査報告書」 阿智村教育委員会 昭和44年（1969）

「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」 下伊那郡阿智地区 昭和45年（1970）

「全

」 下伊那郡阿智村斜坑広場その1 昭和46年（1971）



### 3) 園原をたずねて

#### 一 園原の名勝・古碑一

園原は古くより歌枕として有名であり、名勝・旧蹟・伝説地(図1)も多い。それにともない幾多の碑がたてられていて、いよいよ旅情をそそる。それらを探勝順に記してみる。本文中にある碑文に関係している部分は、故牧内雅博先生(昭和48年5月29日逝去)の研究によるものであることを銘記して、先学牧内先生に敬意を現わしたい。

飯田市街地より南へ12km、国道153号線を進むと阿智村駒場につく。この地方の中心商業地で、昔の阿知駅もここに設けられたと考えられる。駒場市街を出て153号線を進むこと1kmで国道256号線との分岐点へ来る。阿知川沿いに石柱(写15)が立っている。「右阿知神社・旧蹟園原・神能御坂道」と刻まれている。即ち園原へ行くにはここで153号線とわかれ国道256号線へ進まなければならない。この道を進むこと1kmで昼神部落につく。ここに、式内阿智神社が祀られ(写16)、園道からもその社をのぞむことができる。やがて清内路から木曾に向う256号線と分れて園原・本谷へ向う道に入る。この園原方面へ行く道は、阿知川に沿って進む。

「鶴巻洲」やがて阿知川の対岸に巖が立ち、水が流んでいる洲がある。これが鶴巻洲であるが、道の川に面したところに鶴巻洲の碑(写18)が立っている。碑の高さ160cmで上方に四角形の額があり、鶴巻洲の碑廬山書と刻まれ、その下に次の文が刻まれている。

「此対岸に見ゆる小丘の下を鶴巻洲といふ古来深く右の方へ湾入し川流は旋回して長しへに藍碧を湛えたり昔園原に伏屋長者といふ者あり或日里に出でて滞る時此洲の辺に鶴の下りいるを眺め懐の黄金を投げつけたりといふ伝説ある処にして阿知川に於ける唯一の勝景上名所なり昭和十二年中央水力株式会社が会地村駒場に発電所を設ける為めこの水上に鎮まり座す式内阿智神社下里全川を悉く隧道に取り入れるに依り此名所は水溜れて唯名のみになり果てたり茲に村人等この事を碑に残して後世に伝へんと欲す則ちその梗概を叙へて之を不朽に助せしむと云爾」

昭和十二年十二月 衆議院議員 北原阿智之助撰 岳南大西勝次郎書

園原に炭焼長者の伝説がある。その昔住吉神の夢の告げで空より信濃へ来た客女姫はその地の炭焼である嘉藤治と夫婦になった。ある時嘉藤治は妻より渡された黄金を持って駒場の町へ買物に行くことになった。この洲まで来た嘉藤治は、鶴のいるのを見て(又は銅師が鶴を打とうとしている様を見て)持っていた黄金を鶴に投げつけた。鶴は空高く舞い上り黄金は深深く沈んでしまった。家に戻った嘉藤治は黄金の尊いことを妻に告げられたが、そんなものはいくらでもあると言い妻を住吉神社へ案内した。嘉藤治が炭を焼いた折、一節毎に木炭の一片を神社に奉納した。それがすべて黄金に化していた。それより夫婦は園原の長者となった。源義経を奥州へ案内した金売吉次は、嘉藤治と縁の近い者であったとの伝説もある。

「河合渡」鶴巻洲を過ぎると二つの川の合流する所にくる。右が清内路より流れ出る黒川で阿知川の本流であり、左の川が本谷川である。その合流点にうっそうたる森(写17)がある。これが式内阿智神社の

奥宮である。社伝によれば阿智神社の祭神天表春命の御陵であると。社叢の中に苔むした巨岩があって、大場繁雄博士は磐座（いわくら）に違いないと言っている。市村成人先生は、この社こそ阿智神社の最初の鎮座地であるとしている。

「夜鳥山」 道は右手が山、左手が川の危険な所を通る。川に沿って駒場発電所の貯水池があり、昼神発電所の建物がある。右手の山を夜鳥山（写12）という。この山は月の名勝として知られていて、中秋の明月の時には、昼のように明るいので山の鳥が日中とまちがえて鳴き出すので夜鳥山の名がついたと。この崖下を通る道は明治になって開通されたものである。古く土木技術の幼稚な頃には川に沿って岩を割って道を作ることは困難であったので、多くは山の尾根道などをたどった。それで、古くは駒場から園原へ行くには小野川を経て網掛峠を越えたものであった。それで網掛峠の険によらず園原駒場間の交通路を得たいというのは園原の人々の願いであった。園原の人々は、明治に入り本谷川添いの道路の計画を立てしばしば実施したが途中で挫折してしまっ。明治15年に地元の人達を中心となり郡下各地より寄付を仰いで、ようやく同17年この道が竣工した。この道に平行して右岸に中央自動車道が走っている。

「恵那山トンネル」 中央自動車道工事の一番の難所は、長野県阿智村と岐阜県中津川を結ぶ途中にある木曾山脈横断の長大トンネルである。即ち8.5kmの恵那山トンネルである。その坑口が本谷川に面した所に開かれている（写1）。そのため以前ここにあった殿島の中心部落——ここには郵便局・農協支所・バス停などがあった——は全部移転しなくてはならなくなった。今日中央自動車道の道と橋が大きく作られ網掛峠を越え、大山湧を運って来た道は昔の姿を全くとどめなくなってしまった。

「横川渡」 殿島に入る前に、横川川が本谷川に注ぐ。横川川を渡れば横川部落があり、そこには智里西小学校横川分校がある。横川渡からトンネル坑口を過ぎて進むと右から流れ来る川がある。これが園原川で園原の本部落は、園原川左岸の段丘面上に立地している（写1・19・20）。それで園原へ行くにはこれよりつづら折れの坂を登らなければならない。

「長者屋敷」 園原段丘の突端にあり、恵那山トンネル坑口の直上にあたる。その昔炭焼嘉藤治が多くのお金を得て長者となり、ここに屋敷を設けたと伝えられている。その頃の庭石であったと伝えられる巨石や長者が池（写21）の跡と称する小さい池が残っている。長者とは富有者という意味の外、宿駅の主という場合もある。あるいは東山道の阿知駅と何か関係があるかも知れない。ただ、長岳寺にある長者免許状は古めかしく書かれてはいるが、江戸時代に作られたもので信用はできない。

「月見堂」 園原部落の中央に月見堂といわれる仏堂がある（写22）。薬師如来をまつり薬師堂・瑠璃殿とも称せられる。眺望の良い所で、かつて文人等がここで木賊山から出る中秋の名月を賞した所でもある。庭前に仲正歌碑（写23）・芭蕉卓池句碑・熊谷直一翁碑・広徳院遺蹟の碑其の他があり、堂裏には平坦地があって、安永6年の棟札をもつ不動権現の祠・文政3年の御獄山大権現・秋葉大権現の碑・相生神・甲子・廿三夜塔・三十三体の石仏など多くの石碑・石仏が立っていて、ここらが古くから信仰の対象地

であったことがわかる。

伝教大師が布教のため神坂峠を越したが、途中の難儀を考へて、信濃側に広徳院美濃側に広済院をたてたことは「叡山大師伝」で明であるが、その位置は必ずしも明確ではない。しかし神坂峠の行程地形より考へるとこの月見堂の地にあったと考へるのが最も妥当と思われる。ここにある碑について記す。

○広徳院遺蹟の碑 道路に面してたっている。花崗岩の切石で高さ200cm、幅72cm、厚さ18.5cm。

碑表 傳教大師廣徳院遺蹟

右側面 比叡山開創一千五百年記念法会事務局。左側面 昭和十二年四月十七日建之。

碑陰 弘仁六年天台宗祖傳教大師東國巡化の御脚坂峠を越ゆこの坂難にして往還に宿無きを憂へ誓つて廣済廣徳の両院を置く此地廣徳院遺蹟なり。

○神正歌碑 境内にあり道路に面して建っている。花崗岩で直径86.5cm、円形の碑、厚さ12cm。

碑長 木賊かるそのはら山のこの間よりみか・れいつるあきの夜の月 源仲正

碑陰 園原名所 日本杉 神脚坂 腰掛石 帯木 駒繁桜 朝日松 金鷲跡 千代ヶ沢 伏屋廻里  
姿見池 長者墨敷跡 濁白滝 木賊山 月見堂 富士見台 恵那の雪 川合陸 弓俣の紅葉  
網掛峠 矢平閑跡 夜鳥山 將軍塚 黄金岩 鶴巻洞

明治三十五年八月 園原古蹟保存会 主唱者熊谷直一園原中

解説 源仲正（—1156）平安末期の歌人。生年不詳、五位にて兵庫頭であった。かの源三位頼朝の父この歌は保元元年（1135）中納言家成家の歌合に月を詠んだもので、「夫木集」に載せられている。書者は上郷町の故北原熊山翁で、若い頃のものといわれている。

○芭蕉と卓池の句碑 月見堂の境内にある。花崗岩、自然石の棹石は高さ130cm、幅85cm、芭蕉の句を右に、卓池の句を左に2行に書かれている。

碑表 かがやきのますばかりなりけふの月 卓池 この道や行人なしに秋の暮 翁

碑陰 発願主 宗円寺十三世明譽堂布、井原九右衛門重種舟橋平

左側 天保十二年辛丑星八月十有五日建之。

解説 卓池（1768～1846）は、愛知県三河国岡崎の俳人。本姓鶴田。享和元年（1801）飯田に來遊して松井蕉雨主催の俳諧興行に参加した後、伊那地方各所を歴訪して、文化8年漸く岡崎に帰ったという。弘化3年歿。行年79才。この句は園原にての詠といわれている。卓池の句碑はこの外、漕内路にもある。

翁は松尾芭蕉（1644～1694）の別号。この道やの句は元禄7年大阪にての吟詠である。自然に仮託して自分の厭世的な感情を表現した句といわれているが、卓池が園原に來て神坂越を思い、祖師芭蕉の感慨を思つて自分の句と共に比喩に遣したと考へられている。碑の発願者堂布と重種は、ともに伍和の人で俳人として自他共に相許した人たちである。

○熊谷直一翁碑 月見堂の境内にあり、棹石は大門石、高さ112cm、幅100cm、前面を磨いて上に頌徳碑と顔作りにし、その下に翁の評世の和歌を刻つてある。

碑表 熊谷直一翁（大字）我魂は神の御坂に止りて樂行く御代を樂しぞぞ見む。直一、日夏歌之介書。

碑陰 熊谷直一翁は天保六年園原の里、定兵衛の長男に生れ幼にして同地薬師寺僧園淨坊について学び成人と共に敬神の念厚く一生を通し園原の名所旧蹟を全國に頌め、文化を導入し公益に寄與すること偉大なり。その功績たるや人の世の鑑たり。大正四年八十一才にして永遠に世を去る茲に翁

逝きて五十年生前力を盡されたる神坂路が中央高速道として実現の近きを悦び神坂杜氏子總代相謀らぬ広く淨資を得て之を建つ。

昭和四十年四月 神坂杜氏子中 石工花井仁逸

解説 碑面の書者日夏秋之介は飯田市知久町の出身樋口国登のペンネーム。文学博士。早稲田大学の教授を退きて後、郷里飯田に静居、飯田市名誉市民となり昭和45年逝去。碑面は当時の智里西小学校長北沢保徳氏書と聞く。北沢氏は豊丘村神稻笹久保の人。

「伏屋の里」 園原は古く平安時代より伏屋の里と呼ばれている。伏屋は伏したような小さい家、貧しい農家を連想させる。平安の都の公家達は伏屋という名を好んで歌に詠んでいる。しかし、私は布施屋のことであると思っている。前述の広徳院こそ「公私損ずることなからしめた」旅舎即ち飲食を給した布施屋であった。広徳院＝布施屋がいつしか伏屋となり貧しい里と考えられた。

「木賊山」 園原部落の東にあたる一帯の山を「木賊山」と総称する。古くは木賊を産したのであろう。名はよいので、歌枕として有名である。謡曲「木賊狩」もこうした風物を背景として作られたものであろう。

「駒籠の桜」 月見堂から300mばかり進むと道下にこんもりした桜の古木(写24)がある。これが源義経が奥州へ下るとき、この桜へ馬をつないだという伝説がある桜である。この付近はマサゴヤといわれ、石製模造品・土師器・須恵器の出土地として知られる。旧道(写26)をくぐると千代の沢の土橋がある。

「妻見の池」 旧道のかたわら新道の目の下に小さい池がある。(写27) その昔都の在原家の姫客女姫(又は天の姫ともいう)は、日頃信仰している住吉大明神の御神託によって、はるばる信濃へやって来て炭焼葛藤治を尋ね夫婦となった。この姫は鏡がないのでこの池に身をうつしては身だしなみを忘れなかったという。また池の傍には川柳が生えているが、これは姫が都からついてきた杖が根着いたものであると伝えられている。年々この池も小さくなっていく。

「朝日松」 駒籠桜から旧道をたどり千代の沢を渡る。このあたりはとくに古い面影を残しててなつかしく、この一帯を兎の宮とよんでいる。旧道の左に松の木がある。これが朝日松である(写29)。その昔園原長者が滅亡するとき、この松の根本に金の鑄を埋めた。それが毎年1月1日の朝にはこの木の下へ行くと、鐘の音が聞えると伝えられている。また園原で一番先に朝日がさすのはこの松である。だから朝日の名がついたとも言われている。もとは大きい松があったが、昭和34年9月の大嵐のため倒れてしまい今日ではその代りの松が次第に大きくなった。斜坑の土捨て場候補地となった折、ここの保護が問題になった。石製模造品をはじめ土師器片が非常に多く拾える所で、地形・景観から見ても、園原の史跡解明の鍵を握る重要な場所のひとつとして、完全に保護したい所である。また斜坑工事のため杉の木平の旧道が煙滅した今日、古道の面影を残す所は、ここだけになってしまった。この松の根本に歌碑(写30)があり、次のごとく刻まれている。碑は花崗岩の切石で高さ95cm、幅30cm、厚さ13cmである。

碑表 日かけさすこのそのはらのあき日松梢もたかし色もめでたし 美静

右側面 紀元二千六百年記念 昭和十五年十一月十日 神坂神社

左側面 朝日松が故アリテ伐採セラレントスルヲ憂ヒ山本村伊坪源太郎氏が名所保存ノタメニ之ヲ買収シ土地六十坪ヲ附シ神坂神社ニ奉獻セシモノナリ 近藤赤嶺書

解説 美静(1831~1907)本性福羽、天保2年島根県石見津和野藩の人。国学者で勤王志士との交遊もあり、文久3年8月には七郎と共に西下している。明治維新と共に官につき、数々の功績を積み官途は漸次累進して、元老院議員・貴族院議員をつとめている。明治40年8月歿、年77、正2位勲1等子爵。「近世学者歌人年表」他その著書も少なくない。美静が園原へ来訪したかどうかは知らぬ。建碑は歿後30数年後のことだから、或は既経を刻んだものであろう。又名木朝日松が伐採の厄を免れ得たのは、当時の本谷小学校長の伊坪先生の美挙であることは、この碑によって分明している。

「帯木」 新道から右の方へ100m位登った千代の沢に面した尾根のところにある(写31)。源氏物語以来の名木である。種類は「ひのき」でも2股になっておた。片方は数十年前の大嵐のため倒され、片方の幹のみ残されていたが、昭和33年9月22日の台風のため根本を残しただけで倒されてしまった。今日僅かに根跡を残しているのみであるが、遠くより見れば帯の如く見えるが、近よって見れば何もわからないという伝説のある帯木、そして母木木という音より来る母について伝説を生み、歌枕としてまた伝承や文学にしばしば名の載っている名木である。

「帯木の碑」 斜坑広場(杉の木平遺跡)の用地内に、発掘調査の前には、旧道の分岐点に建てられていたが(写32)、今は新道(林道)のほとりに移されている。花崗岩の自然石で煉石の高さ115cm、幅48cm、厚さ30cmである。前面は僅かに磨いてあるが、風化が甚しくや、読みづらい。

碑面 うつせみの世のちはかてその原の伏屋にひとりおふるははき木 有賀光彦

碑陰 上伊那郡南殿ノ里人 有賀光彦 明治二十七年四月 熊谷直一常平中

解説 有賀光彦(1804~1912)天保12年4月上伊那郡南箕輪村南殿に生れ、若くして江戸に出て勉学、帰郷後明治初年より村治に携り、殖産興業・林業経営・用水路の開通・開田など公共のことに盡すとともに敬神尊皇の志厚く、村教育のことに極めて熱心で人望浅からざるものがあつた。また、和歌の道にも深い造詣をもっていた。この碑の変態仮名の文字は光彦の筆になるものである。

なお、この碑とともにこの地(B地域\*の田)から発掘された五輪塔(写33)(空輪風輪を欠く)・文化14年の地内荒神碑・文政10年4月の南無阿弥陀仏碑(写34)・文化14年の三界万靈塔などが、林道弯曲部の先端に金網に囲まれた中にまつられている。斜坑工事開始前にはこのあたりの旧道添いにあつたものを、里人の手によってここへ集められたものである。

「斜坑坑口」 中央自動車道の恵那山トンネルは、延長8.5kmで、道路トンネルとしては、モンブラントンネルに次ぐ世界第2のものである。しかも、このトンネルを通過する自動車の数も昭和79年以前に毎時2,000台に達すると推定される。従ってその排気・換気のためにはその途中で換気坑を作らなければならない。飯田方斜坑口が神坂神社から100m位東、杉の木平にあくことになった。この斜坑は2本以上計画され、第1期坑は角度14°で本トンネルに達するが、坑断面25m<sup>2</sup>(写7~11)その延長1046mとなっている。その第1期斜坑設備を設ける広場を昭和46年に、第2期斜坑広場を昭和48年に発掘調査をしたわけ

である。この斜坑が完成した際には、新しい換気設備が可動するわけであるが、日本道路公園と長野県教育委員会の申合せによって、日本道路公園は、その設備も歴史的風土圏原にマッチしたものとし、その周辺は景観に調和する造林計画が立案されている。この換気坑が完成した折には、園原の星の自然が生かされる新しい名勝になることを希求している。なお、このあたりの旧道は壊滅してしまったが、対岸に見える暮白の滝（28）の清楚な姿は一幅の絵である。

「神坂神社」 園原部落の立地する旧い段丘の最奥、部落から山地に移る要衝に神坂神社が祀られている（写36・37）。大きい日本杉（もとは2本あったが、明治25年の大風のため1本は倒れてしまった）や古いとちの木などから見、川の出口に祭られた3海神御住吉様の奉祀、更に近くから多くの祭祀遺物の出土したことより考えて、この神社は古代東山道時代からこの地にあったものと信ずる。古びたやしろがあり、良い地を占めている。現存の社殿は、明治22年にできた1間社流造であり大きくはないが、精巧な彫刻で飾られており、覆屋がある。本殿の前に拝殿があり、近くに社務所がある。境内は古木が多く静かな神域となっており、園原の碑・万葉の歌碑・磐石と思われる日本武尊の腰掛石（写38）・石燈籠（明治9・13年建立）・銅の鳥居（昭和46年再建）などがある。

○園原碑（写38） 花崗岩の自然石、前面を研磨してある。碑石の高さ230cm、底部の幅133cm、厚さ最大80cm、上部に大きく「園原碑」の篆額をしつらえ、その下にやまと銅の碑文が彫られている。

碑面 園原碑 正二位伯耆東久世通禪 題碑

真駕刈倍邊園伊那郡園原能里波瑠垣乃久志俊昔仁開氣千早振神代爾志天波八意思兼神能御子天表  
奉之命天降著給比奴阿智神社川合陵等叙其靈跡奈爾現身乃人王登成天波景行天皇能皇子陸建軍巡  
行志呂御坂神真賞向給比奴神坂能社在留波其遺蹟爾奈奉斯自夙園道宗體婆自然都人乃往來多加  
理之故爾萬葉集仁毛神乃御坂登詠美又園原伏屋等水等毛古人能歌詞仁毛見衣天園風登共爾其聞世  
仁高久將業女波物語乃卷名仁左反負世多利俊期名所多在留地奈留仁雲久岐縣路開計志以後清内路  
大平等乃支道母漸漸多成來此所乎往反人甚稀稀奈體婆達仁波斯在名所乃消滅奉事長久既  
美其地之萬志者等相讓里弓其由乎碑文仁胎之後世仁傳反或者好古忠人乃導爾母登其概概乎如此奈  
舞

熱田神宮司司從五位 角田忠行 撰  
正七位 富岡百鍊 書

左側面 明治三十四年八月 園原古蹟保存會 主唱者餘谷直一、園原里中 花井前憲 撰

解説 東久世禪（1833～1912）天保4年京都に生れ、少社にして尊王討幕論を主唱して幕府の嫌忌にふれ、文久3年三条実美等と共に京都を脱して長州に走る。所謂七脚落の一人である。維新の際東征軍に参加して参謀となり功を積む。後神奈川県知事。開拓長官・侍從長・元老院議員・枢密院副議長などを勤め、明治45年2月薨ず、年80才、正2位勲1等。

角田忠行（1824～1914）文政13年岩村田に生る。藤田東湖に、後平田鉄風の門人として修学、文久3年京都三条の足利將軍象鼻首事件に連座して幕府に追及され、伊那地方に連れて来て所々に匿れていて、かの水戸浪士伊那路通過についてはなす所が多かった。後、米川信濃と変名し、明治7年熱田神宮の神官となり宮司に進む。大正3年宮司を辞し、全年12月逝去。年85才、從4位。

富岡百鍊（1836～1914）は鉄齊の別号である。富岡鉄齊は天保7年京都に生れた画家で、明治大正の画

壇の第一人者と推賞せられた人。初め湊川神社の神官となり、後官幣大社大鳥神社の大宮司。明治18年正7位に叙せられた。全年大鳥神社を辭し、全国各地に行脚して忠臣義子孝子節婦などの遺蹟を尋ねた。伊伊那地方へは、明治8年と全36年の2回来訪あり、何れも浪合の伊良親王の顯稱のためであった。

この碑文を仮名交り文に改めると次のようになる。

みずずかる信濃国伊那の郡（こほり）園原の里は、みず垣の久しき昔に開け、ちはやぶる神代にしては、八意思兼神（やごころおもがねのかみ）の御子天表春之命（あめのうははるのみこと）あま降りつき給ひぬ。阿智神社川合の陵（みささぎ）などそのみあととなる。うつし身の人の王となりては、景行天皇の御子やまとたけるのみこといまして御坂の神をことむけ給ひぬ。神坂の社あるはそのみあとになむ。かく爪（はや）くよりの……官道（つかさみち）なれば、おのづから都人のゆききも多かりし故に、万葉集にも神の神坂とよみ、また園原伏屋箒木などいしへ人の歌のこたばにも見えて、国風（くにぶり）とともにその聞え世に高く、また紫女（むらさきのとじ）の物語の巻の名にさへおはせたりき。かく名どころ多くある地なるに、かつて久しく岐路（きさぢ）ひらけし以後（このかた）清内路大平などの伎道もやうやうに多くなり来て、ここを往きかへる人いとまれなれば、つひにはここにある名所の消え滅びむことをいたく假美（うれたみ）、その地の志篤き者たち相議（はか）りて、その由をいぶしみに残し、後の世に伝へ或は好古忠人（いにしへのしのぶまめびと）の導きにもそのあらましをかくの如くになむ。

○万葉歌碑（写39） 拝殿前にあり花崗石の自然石で、高さ117cm、幅85cm、厚さ16cmで、碑石が自然石の上にたてられている。

碑表 萬葉集  
 知波夜布留賀美乃  
 美佐賀爾怒佐麻都  
 里伊波負伊能知波  
 意毛知知我多米  
 主張埴科郡神人部子忍男

碑陰には、古蹟保存芳名録と上部に顔書し、その下に特別会員として樋口興平、その他飯田下伊那の人119名の名を刻み、ついで通常会員凡二百名余 本谷里中小野川里中と記されている。

解説 この歌は、万葉集巻20に載せられているもので

千早振る神の御坂に幣（ぬさ）奉（まつ）り齊（いは）ふ命は母父（おもちち）がためであり、主張は郡の書記である。この歌は当時西国に派遣せられた防人の歌として人口にうたわれていて古代東山道が神坂神を越えたことを証する。建碑は「園原碑」と同じ頃かと推定される。この碑は碑表が神社の方向と逆、碑の方向へ向いているため、見落ししやすい。

- 社標 神社前にある。碑表は神坂神社、元帥正二位伯耆祐季書 明治四十四年二月建之 保存会 熊谷直一とある。
- 日本武尊駐禰之旧跡碑 拝殿の横にある。熱田神宮宮司従五位角田忠行書之 科野御坂之住人熊谷直一建之 明治三十五年六月 とある。

「峠への道」 神坂神社の裏手、ひの木の本立越しの道は昼なお暗く、古道の面影が残る。峠への道は二筋ある。一つは圓原川つたいの沢道と、神坂山越えの尾根道である。尾根道のひとつは、神社の裏手から山腹を取り巻くように登る峻しい道で、尾根で圓原部落から来る小路に合流する(写42・43)。一方林道を登ること30分、追分の堰堤につく。ここから登山道は右側の山腹へと登る。昭和8年に開削した富士見台登山道で曲折した急坂を登りきると、先述の尾根道と合流して、神坂山へと続いている。しかし、国土地理院の中津川図幅には、川に沿った点線路が峠へと登っている。村人はこの道を新道と呼んでいるが、それは明治時代に改修されたためである。今日は川の荒れがひどく里人の往来はないが、昔の道形は所々に残り、数か所の川渡を覚悟すれば、峠への道法は近い。これが東山道であった筈と一志茂樹氏は論考している。山腹へかかる道は屈曲しながら尾根に出る。ここからは大体尾根を通過して進む。眼下に横川部落を見、遠くに天竜川が見える。わる沢(写44)・池の平・千本立(写45)・万岳荘などでは、須恵器や灰釉陶器片が発見されており、古代東山道はこのルートを通ったものと考えられる。落合からの屈曲した道は新しいもので、神社から直に尾根へ登る道にも遺物の発見があるので、それが古代の道かも知れない。

「神坂峠」(写47～51) 信濃と美濃の境、海拔1596mの峠である。縄文時代から用いられた峠であり、特に古代・中世においては東山道の険として有名であった。峠頂上より石製模造品・須恵器・土師器・灰釉陶器・鏡・刀子その他多くの遺物が発見された。古くより歌に詠まれ漢詩に詠じられている。古代祭祀遺跡とし、交通史上の要地として全国的に有名である。長野県史跡として指定されているが、国の史跡としての価値は十分であると信じている。この峠より美濃側も眺められ、恵那山(2189m)が眼前に大きく立っている。ただ最近車越し林道が開かれ頂上まで自動車で行かれるようになった。これがこの大切な歴史的风土に悪い影響を与えないかと心にかかる。

「富士見台」 神坂峠の北につづく頂上の平坦な山で海拔1600～1700m、熊笹が密生し珍しい景観をもっている。もと富士教信者が信仰のため登った山である。富士山は見えない。最近牧場としましたハイキングやキャンプにも好適地となって来た。

崩りには圓原より駒場へ昔の東山道をたどることにする。殿島より本谷川を渡って綱掛峠にかかる。山の中腹に矢平という二戸の家より成る部落がある。熊谷直一翁の圓原名所の中には矢平関址と記してあるが、関所のあったという記録はない。

「綱掛峠」 圓原と小野川を結ぶ峠で海拔1000m。古代の東山道はここを越えた。なかなかの峻であるが江戸時代に小野川の人々はこの峠を越えて圓原へ入り、新田を開き遂に住みついたのである。峠の頂上に蛇瘤杉という大きい杉の木があったが昭和25年頃伐られてしまい、今は杉株だけ残っている。かつてこの峠の頂上より籬籬を発見し今日下伊那教育会館の資料室に陳列されている。今日の中央道はこの峠の下を1.5kmのトンネルをあけて通っている。



「蛇纏杉」 その昔近江の琵琶湖のほとりに美しい娘がいた。その娘は貧しいが正直な男と恋におちそれと結婚したが、村の若者たちのうらみをかった。若者たちは夫婦の家も焼き漁具もこわし、2人を湖のほとりより追放してしまった。2人は網1つをもって魚を捕りながら旅をしてこの峠まで来たが、男は旅の疲れと飢のためこの峠で息が絶えた。これを見た妻は腹の中の子供とともに跡を追い死んでしまった。村人はこれを哀んで峠の頂上に榎の杉の苗を植えた。苗は忽ち成長して雲つた大木となった。その頃琵琶湖では毎日大荒れが続いて多くの船はこわれてしまった。やや波の静まった時に湖の底をみると大きい杉の影がうつり、その頂に3疋の大蛇がからみあっているではないか。そこで漁夫たちは杉の木を探しながらはるばる信濃に下り、この杉の所で3人の亡霊を祀ったら漸く湖の荒れがおさまったという。

「大垣外」 網掛峠を下った所を大垣外という。多くの石製模造品を出したことは大正年代より知られていて、今日その熊谷鋭三郎氏方に保存されているが、峠麓の祭祀関係遺跡として注意される。

「富士石」 大垣外に近い農家の屋敷内に富士石と称する花崗岩の大きい石がある。この家の先祖が富士登山して無事帰郷したが、その時気づいたら袂の中に小さい石が入っていた。その石が次第に大きくなって今日のものとなったと伝えられている。しかしこの石に触れると祟りがあるのでこの石を神として祀った。それで富士石というのであると。大場盤雄博士はかつてこの石を見て歸座（いわくら）の名残ではないかとの話があった。

「頭痛現」 その昔1人の山伏がこの地を通りかかった折何故か殺されて草むらの中に埋められてしまった。その後数年小野川の村に疫病が物すごく流行した。その時病人の1人が突然おきあがり、我はかつて殺された浪人である。草むらの中に埋められたが眼より樹の根が入って痛くてたまらない、速く掘り起して祀ってくれたらこの疫病をすぐ治してやると言った。村人はおどろいて草むらを掘り出したしやれこうべを丁寧にまつた、そしたら疫病はたちまちなくなってしまうという。それでこの祠を頭痛現と言ひ、今でも頭痛や眼の病によく御利益があるとて参詣者も多い。

「小野川関址」 武田信玄が伊那地方を平定しこれを支配していた頃、ここに関所を設け美濃一神坂峠一園原一網掛峠の交通路を扼した。その後江戸時代に入っても阿島知久氏や飯島代官所でこの関を支配し通行人取締・白木の取締を行った。今日そのあとに小さい碑が立って小野川関址と刻まれている。

「川畑・赤坂」 小野川の中央にあり、昔は智里村の役場もあり、中心であった。今日でも農協・小学校がありこのあたりの中心集落である。中央道と国道153号線がここで交差している。ここの川畑(昭和45年発掘)・赤坂(昭和47年発掘)より石製模造品が発見され、古代東山道の道筋を暗示している。

これより阿知川を渡れば駒場となる。

(大沢)

### 3) 園原周辺の遺跡 (図4, 表1)

阿智村のうち、中央道本線や恵那山トンネルに関連する駒場、小野川、園原地域を中心にした範囲にはやく90ヶ所の遺跡がある。これらの遺跡の分布をみると、(図4) 地形的にはめぐまれている盆地状の駒場周辺に集中する遺跡群を除けば、ほとんどが阿知川と、その支流を臨む河辺の段丘面か、その上を覆う扇状地性の押し出しによる傾斜面上を占拠する小さな規模の遺跡が多く、または交通路に関連する山腹や、鞍部の鞍部で神坂峠のような特殊な例を除けば、きわめて少量の遺物を残す遺跡がある。

もともとが、岐阜県境に接する伊那谷西端の地域であり、中央アルプス南端の主壁、恵那山系の山岳地帯に連なる一帯に位置しており、駒場付近がわずかに伊那盆地外縁の小盆地地形をなしているだけで、従って駒場より西寄りの、智里地区は飯田付近からすれば遺跡の山間部ということになる。

この山間を一番広げるのが阿知川で、これに沿う遺跡は駒場の町はずれから、曾山部落までに兩岸の段丘面を占拠して1つのかたまりをなしている。曾山部落の西側から奥へ大沢川や寺沢川が、阿知川から分岐して入り込むが、この両支流沿いに遺跡の集中がみられる。阿知川へもどって逆のぼると、埴神部落の南向斜面に残されたいくつかの遺跡群がある。阿知川という呼称は、河合陸から下流を指しているが、横川渡で北から流れる横川川と、園原川を合わせて南からくる本谷川が合流して、河巾を広げるようになる。この合流点付近には数ヶ所の遺跡があるが、横川川を逆のぼると遺跡はほとんど見あたらなくなる。また本谷川を南へ逆のぼれば、本谷部落に数ヶ所の遺跡を残すだけになり、もはや遺跡立地には適さない山岳地帯となる。本谷川へ流れ込む園原川沿いは、地形的には横川川や、本谷川縁辺とさして変わらないが、古くは天竜川水系地域と、木曾川水系地域との接点であり、後の古代東山道関連の交通要地であったことにより、他の支流にはみられない濃密な遺跡の分布を示している。

以上の阿知川かその支流縁辺の段丘または、その上を覆う扇状地性の押し出し斜面を占拠する遺跡群とはや、性格を異にする山腹や鞍部の鞍部に残された、交通路跡的色彩をもつ小遺跡がある。(もともと、大きな地形区分からみれば、阿智村全体が、盆地外縁地帯にあり、木曾川水系への橋頭堡的位置であってみれば、山腹や鞍部の遺跡のみならず、河川沿いの遺跡もまた交通路跡的といわねばならないが、ここでは、特にその立地からして色濃いものを一括した。) 飯田市山本の青木から埴神へ下りかけた梨子野や、清内路へ通ずる梨子野神遺跡、神坂峠からわずかな南側の、富士見台と恵那山に続く鞍部の一番低い鞍部などは、縄文時代の遺物を残しており、一方古代東山道にかかわる古墳時代以降、とくに官道布設後の交通路跡は、祭祀址と重なって数を増すようになる。この古墳時代以降、平安時代を中心とするものを結べばそのまゝ、古代東山道の道筋としてみる事ができる。西からみれば、神坂峠と神坂神社を結ぶ山腹や鞍部、沢に臨む傾斜面に10ヶ所ほどを数える事ができる。(今回の現場作業終了後の、10月28・29日に中央道遺跡調査団の伊那班班野・根津・深沢調査員を加えて、斜坑班全員が神坂神社北からと、帯木横の鞍部を踏査し、尾根道沿いに峠まで、また踏路は峠から直線的に下る沢道を神坂神社まで踏査した。

この踏査の結果、3ヶ所の遺物採集地を新しく加える事ができた。更に精密な調査を重ねれば、遺物採集箇所はふえるであろうし、東山道の道筋を確実にとらえる事ができるだろうと考えている。)

神坂神社以東についてみると、團原川沿いに続く遺跡をたどり團原部落へ、更に本谷川を渡河して矢平から網掛峠へ、峠東麓の大垣外やその付近の北沢、大平神社（頭権現）遺跡へ連なり、小野川からは寺沢川に従ってその阿知川との合流点付近で渡河して駒場へ至ることになる。以上は、祭祀遺跡を重ねた交通路跡を連続させたわけであるが、上述の、古代東山道の路筋として、市村成人先生らによってすでに考査されているところである。

駒場以西のやく90ヶ所を数える遺跡のうち、発掘調査などでその遺跡の性格や特質の抽出されたものはすくない。昭和42・43年の神坂峠祭祀遺跡（「神坂峠」昭44・阿智村教育委員会）では、古代祭祀址とすれば全国的にも数すくない種々の学術的成果を上げていて、すでに周知の通りである。45年には、中央道関連の川畑、北垣外、橋場、矢平Ⅱ、宮の脇、杉ヶ洞、坊塚遺跡（「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書・阿智地区」昭46・日本道路公団名古屋支社・長野県教育委員会）の調査がなされ、川畑遺跡で縄文早期からの生活が確認され、縄文中期の住居址を調査したし、過去石製模造品多数が発見されていて古くから知られた所でもある。北垣外遺跡で縄文中期の住居址と火葬墓が調査された。矢平Ⅱ遺跡では縄文時代の遺物が発見され、宮の脇遺跡では、縄文・弥生・土師・須恵の土器類が発見された。杉ヶ洞遺跡では、先土器時代の石槌と思われるものの外、縄文前・中期と古墳時代の遺物が発見され、中期の住居址が4軒調査された。坊塚遺跡では、石囲の信仰壇が調査されている。46年には、斜坑広場となる杉の木平遺跡のA地域が調査され（「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書・斜坑広場の1」昭47・日本道路公団名古屋支社・長野県教育委員会）古墳時代から中世にかけて、実に多量の遺物を見出し、住居址、柱穴群址をはじめとする遺構の数を調査し、信濃坂東麓における交通路関連遺跡の姿を知らせてくれた。他では、国道153号改修工事に先立つ小野川地区の調査がある。46年には、森下、さがり遺跡（「森下・さがり、国道153号改良工事阿智村小野川地区昭和46年度緊急発掘調査報告書」昭47、建設省飯田国道工事事務所、阿智村教育委員会）では、森下で、縄文中期から中世にいたる遺物と、縄文中期、弥生後期、古墳時代の住居址4軒他の遺構が、さがりでは、縄文中期の土壇が調査された。47年には、赤坂遺跡（「赤坂、国道153号改良工事阿智村小野川地区昭和47年度緊急発掘調査報告書」昭48・建設省飯田国道工事事務所、阿智村教育委員会）では、縄文早期から近世初頭にわたる遺物が含まれており、縄文中期の住居址1軒と、中世末と考えられる火葬墓を6基調査している。なお、駒場の東、中間の阿智高校敷地の中原遺跡が、昭和27・42年の二度にわたり調査され、縄文中期の住居址4、弥生後期の住居址2、古墳時代の住居址14を調査または確認し、古墳時代土師器の好資料を提示した。また地元の原治幸は、昭和10年代からこの周辺で石製模造品の採集を続け、現在その数は160点に及んでいる。（「長野県下伊那郡阿智村中原遺跡調査報告」大沢外、昭和43・長野県考古学会機関誌）

一方この地の考古学的調査の歴史は古く、大正10年鳥居龍藏博士の團原から神坂峠を越えるものが最初で、その後を引き継いだ市村成人先生らの成果は、「下伊那の先史及原始時代」に図録編でまとめられ、後に「御坂峠の今昔」「智里村誌」で更に詳細をきわめるようになる。

第二次大戦後の昭和26年、下伊那郡史編纂が始められ大場磐雄博士を指導者とする東山道調査が再開されると考古学熱が高まり、神坂峠を中心とするいくつかの研究が発表されるようになる。松島透（現神村）による「御坂峠出土遺物について」（飯田高校々友会誌4）、「神坂峠」「神坂峠の二、三の問題」（ミクロリス6・7、28・7・12）が、また團原周辺の遺跡について、宮沢恒之が「智里・清内路の先史時代」

(伊那298号)でふれているし、昭和20年から30年代にかかる集大成が、「下伊那史第三・四巻」で市村先生らによってなされている。昭和42・43年にかけては、神坂峠の調査が阿智村主体でなされ、上述の報告書が刊行されている。なお、神坂峠ないしはそれに連なる東山道東麓方面は、それだけをとり出して論じたものではないが、一志茂樹博士、大場賢雄博士、藤森栄一先生などの研究物が公にされている。地元において遺跡踏査や、遺物採集を続けている小林昭治は、新しい遺跡・遺物の発見も多く、村外からの調査研究者の道案内をいつでも引き受け、この地域の考古学的研究の除の功労者であり、自らも神坂峠に関する考えを「神坂峠の発掘調査について」（昭44・下伊那教育）また「園原の名跡・古跡」（昭49・阿智村）で紹介をするなど、啓蒙活動を続けている。

駒場以西の遺跡に関しては、上述のように発掘調査のなされた所がすくないこともあり、また産錫性の堆積物が、遺跡上面を厚く覆っていることが多く、遺跡の性格が不明のままであることが多い。現在判明している範囲では、先土器時代1、縄文早期4、縄文前期10、縄文中期64、縄文後期7、縄文晩期8、弥生中期2、弥生後期15、古墳時代から平安時代で土師器の発見される所24、河須恵器20、同灰輪陶器11、石製模造品18、中世陶磁器7箇所となる。発掘調査のなされた遺跡で共通することは、単純遺跡はほとんどなく、複合遺跡が多いことから、今後上述の数字は大巾に変更されるであろうと推定される。なお、駒場周辺を中心にして16箇所の古墳が知られているが、中には坊塚のように、中・近世の信仰壇などが混っているらしく、従って古墳の数はこれよりも少くなる。

園原の遺跡については、前回の調査報告書、3)園原の遺跡で、神村がふれているが、それを転載すれば、(図4の10-25まで)以下の通りである。

10. 神坂神社裏の沢遺跡(今回調査で第二河遺跡とする)神社北の沢から小林が中世陶器片を採集している。
11. 神坂神社境内遺跡 ここから土師器片を採集している。
12. 杉の木平遺跡 兎の宮遺跡から神坂神社にいたる最奥の傾斜地が遺跡で、遺物の散布は多く、梨の木沢から西よりの水田地帯を今回調査した。3566-3576番地がここにあたる。(梨の木沢以東を今年度調査した。なお、前回調査の梨の木沢以西をA地域、以東をB地域としている。)
13. チゴノミヤ(兎の宮)遺跡 姿兎の池、朝日松のある水田地帯が遺跡で、遺物の包含も表採も多い。縄文時代中期土器、土師器片、打石斧、灰輪陶器片、須恵器片、石製模造品を採集する。3559-3564番地がここにあたる。
14. マサゴヤ遺跡 千代の沢東岸の、駒籠の桜のある台地が遺跡で、土師器片、須恵器片と石製模造品を採集している。3557-3558番地がここにあたる。
15. クラガリ沢遺跡 マサゴヤ遺跡北東の、山よりの沢をクラガリ沢と呼び、その両側の尾根から沢にかけてが遺跡で、土師器片を採集した。最近の水道工事の時も土師器片を採集している。3584番地がここにあたる。
16. 薬師平遺跡 月見堂から旧道を上った山麓の桑畑、水田一帯が遺跡で、縄文時代中期土器、打石斧、凹石、土師器片を採集している。3530-3540、3594番地がここにあたる。
17. 高瀬平遺跡 月見堂西の道路をはさんである傾斜地の桑畑が遺跡である。土師器製のほぼ完形土器がでており、須恵器片も採集している。3515-3517番地がここにあたる。
18. 上の平遺跡 月見堂のある東側の桑畑で、勾玉を採集している。この付近一帯が遺跡と思われる。

3592—3594番地がここにあたる。

19. 下瀬河原B遺跡 旧道に沿って少しあがった家のある一帯が遺跡で、土師器片を採集している。山よりの所で、石鏃を採集したということも聞く。3506—3507番地がここにある。
20. 下瀬河原A遺跡 團原部落は2段の台地状になっていて、團原川に沿って下の台地が下瀬河原で、道路を上っていき、旧道とわかれて大きくカーブするところから東側がA地点で、家のある近くから遺物を採集している。水田と桑畑とあり、縄文時代中期土器片、土師器片を採集している。3674—3680番地にある。
21. 長者屋敷A遺跡 團原部落のある台地へ上って東端の、水田地帯が遺跡で、ちょうどトンネル口の上にあたる。炭焼長者の屋敷があったといわれるところで、畦の一角所に長者が池という小さな池がある。この一帯が遺跡で、明治年代に土師器が掘り出されている。3674—3680番地がここにあたる。
22. 長者屋敷B遺跡 A地点より横川の方へと北に入ると、東面する小平地が見られ桑畑がある。小林の調査で土師器片を採集している。3640—3644、3659—3661番地がここにあたる。
23. サブゴヤ遺跡 長者屋敷遺跡とともに鳥居博士が大正10年調査の時、歩かれていた。長者屋敷B遺跡よりさらに横川に沿って上流にある比較的広い平坦地で、チヨンバ遺跡と相対している。縄文中期土器片・石鏃を採集している。しかし鳥居博士の記録によると、月見堂から余り遠くない小高いところとあるので、丸山といわれているところではないかと思う。3691—3697番地があたる。智里村誌では番地がらがっている。
24. チヨンバ遺跡 横川川に沿ってある遺跡の一つで、横川部落への道を上っていくと、えん堤のある所で大きくカーブしている。その一段上の台地が遺跡である。西へのびてきた尾根が、舌状台地になっていて、その上が一部畑となっている。そこから縄文時代中期土器片が採集されている。なおもう少し上流へ上ったところの同じような台地のリング畑でも遺物を採集している。
25. ホド平遺跡 横川川と本谷川が合流する地点北岸の、道路から一段上った山麓緩傾斜地が遺跡である。南面傾斜で日当たりもよい。縄文時代中期土器片を採集している。小林は自分の畑を耕作中、住居址の一部を確認している。(ホド平は縄文前期、後期の土器も出している。宮沢註)

以上、團原の遺跡についてふれたが、更に神坂神社から峠までの尾根道で、灰釉陶器片、中世陶器片などの採集地点がある。神坂峠から、尾根道を降る順に上げると次のようになる。(番号は図4と同じ)

1. 神坂峠遺跡 富士台と恵那山の間のたるみの部分が2箇所ある。神坂峠と西の鳥越峠がそれで、標高は神坂峠の方が高いが、交通要地として縄文時代より使われていることは、再三ふれた通りである。遺跡の中心は、42・43年の調査区となった手向が丘付近であるが、これより西側の鞍部2箇所でも縄文中・後期の遺物を採集している。峠からは縄文時代から中・近世までの豊富な遺物が発見されている。
2. 神坂峠東遺跡 峠から万岳荘へ向う道が、東へ張り出す尾根へ出た所で、灰釉・須恵器片を採集している。
3. 千本立遺跡、万岳荘から神坂山の山頂近くをまいて東に向う自然林の木立の径一番で須恵器片・灰釉陶器片が採集されている。
4. 池の平遺跡 千本立の木立の中の道を更に東に向うと、團原川の支流白川沢の源頭に出る。放牧の牛馬の水飲場になっている所で、水飲場や道の苔踏をした時、灰釉の壺が出土したという。

5. わる沢上遺跡 池の平遺跡から道は南に向って降りることになるが、神坂山のうちの山頂東のコブに水準点があり、その水準点のあるコブから南に延びる尾根があり、池の平からの道がこの尾根に出た所は、東の横川部落からそのずっと先々が見渡せる眺望よき所でもある。地元の人達は「首つり場」と呼んでいる。灰釉陶器片を採集している。
6. わる沢遺跡 横川部落を左下に見ながら、尾根から山腹へくだると、放牧場の柵がある。この柵を越す手前で、灰釉陶器片が採集されている。
7. ソブ沢遺跡 わる沢の放牧場柵をまたぐと、道筋は白川沢に面する尾根の西側寄りを通るようになるが、この白川沢へ入る溪流の源泉は、峠道を行く人の飲水になっており、この水飲場で小林が常滑壺片を採集している。
8. イワガシヤ遺跡 園原川沿いの道分岐から入る登山道と、神坂神社北から入る道が合流するあたりは、神坂峠がよく見られる所で、園原川の崩す大ナギが西の足下に絶壁をつくっている。ここから道分岐に向わず、東の尾根を越して神坂神社を目標とすると、千代の沢側へ向う尾根道と、神坂神社北へ向う道とに分れる分岐点がある。この分岐点の下で常滑壺片が採集されていて、地元の人達は「ナナツカ」とも呼ぶらしい。
9. 井尻遺跡 神坂神社北から山道を登り始めて最初の尾根にとりつく所で、常滑の壺片が採集されている。

神坂峠までの道筋の大ざっぱなものはつかまれているが、その道筋以外に、まだ何本かのものがある。わる沢下のソブ沢から上や、それから下のイワガシヤへ向う途中から千代の沢へ向う袖道の痕跡もあり、古代東山道と、後の道筋については更に実地踏査の積み重ねが必要である。ともあれ、道筋に沿う平坦地や緩傾斜地には、点々と交通路跡が残されているわけである。 (宮沢)

#### 4) 園原周辺の祭祀遺跡

ここでいう祭祀遺跡とは、主として東山道に関連するものと思われる時期の、石製模造品を出土することによって知られる遺跡をさす。祭祀のための施設とか、石製模造品以外の祭祀用供献具とかが明らかでないもの、従って「下伊那史第三巻・祭祀址地名表」などを参考にはしたが、石製模造品の発見されていない同地名表の「祭祀址」は除外する。つまりここでいう祭祀址とは、石製模造品出土遺跡ということになる。(表2, 図14, 42-52, 写41, 47, 48, 49)

飯田・下伊那地方で確認されている祭祀遺跡は、33箇所ある。そのうち阿智村内で20箇所を占める。阿智村の中では、中原と前原を除けば、園原と小野川だけで17箇所を数えている。旅人の折祀が神所に集中していたことがよくわかる。本稿は、園原周辺の石製模造品集成図に加え、その出土遺跡を簡単に紹介することを目的とした。(3)項と一部重複するが、祭祀遺跡として一括し再載する。)

1. 神坂峠遺跡 恵那山と富士見台を結ぶ鞍線の、鳥越峠に次いで低い標高1570mを潤るタルミが、神坂峠である。鞍線の東側にあるわずかな平坦面が、遺跡の中心部になる。なお、縄文時代の遺物を中心にする所は、降越林道通過によって掘削された付近に2・3箇所を数えている

- 42・43年の調査その他で、石製模造品1850点余その外土器類多数と、獣首鏡片などが発見されている。
2. 杉の木平遺跡 園原川縁辺の段丘や、扇状地性斜面が最後に展開する所で、園原谷最奥の地点であり、里道が尽き、愈々「横石千里峻 危途九折分 人逃辺地雷 馬踏半天雲 云々」と板上忌寸が誇ったという、信濃坂の峽にかかる神坂神社東方の位置にある。46・48年剣坑工事前の調査で、巨礫の傍を平坦化して、または板石積の一部を除き取り、土師器などが伴って石製模造品を出した遺跡である。
  3. 兎の宮遺跡 杉の木平の東に続く地帯で、「姿見の池」、「朝日松」などの伝承が残る一帯。大正10年鳥居博士入園の際、同行の牧内雅博先生が剣形模造品を採集された。
  4. マサゴヤ遺跡 千代の沢をはきんで、兎の宮と対する一帯で、「駒鬘の板」のある台地にある。剣形模造品が採集されている。
  5. クラガリ沢遺跡 マサゴヤ遺跡の北を通過する林道から山より一帯が遺跡で、器種不明であるが、模造品の出土があったという。
- 以上の5箇所が、神坂峠東麓に位置する、園原祭祀遺跡群と呼ばれるものであるが、杉の木平の調査結果からは、園原の他の遺跡もまた石製模造品を包含する可能性が大きい。
6. 大垣外遺跡 綱掛峠東麓にあり、峠登口から北の大平神社（頭権現）へ向うちょうど中間点、中平部落の山裾に位置している。熊谷鏡三郎の採集品を中心に310点余を数えている。ここの模造品は、剣形と円板形が数を占め、玉類はすくない。
  7. 北沢遺跡 綱掛峠東麓の、峠登口北側の東面山裾一帯にある。剣形模造品が採集されている。
  8. 藤ノ戸遺跡 北沢遺跡の対岸にあり、峠登口南側の東面傾斜地に位置し、円板・剣形模造品が採集されている。
  9. 奥根木遺跡 藤ノ戸遺跡の南方、大沢川から分れる奥根木沢と、たぬき洞に挟まれて、大沢川へ突出す舌状台地が遺跡で、器種不明であるが、模造品採集の記録がある。
  10. 大平神社（頭権現）遺跡 寺沢川の上流・本沢が綱掛山へわける所で、大垣外遺跡の北東にあたる。コウベボンゲンで知られる社前一帯が遺跡になっていて、剣形・円板形模造品が採集されている。
  11. 若林遺跡 大平神社から本沢沿いに、伏谷橋をめざして東に下ると、起伏の多い細長い台地が沢の西側に続いているが、この台地の中ほどに水田と桑畑がある。この一帯が遺跡で、勾玉形模造品が採集されている。
  12. 杉ヶ洞遺跡 綱掛山トンネルの東、伏谷神社の北側にある舌状台地の先端部が遺跡で、阿智村智里568番地にある。45年中央道用地内調査区に該当し、調査がなされた。調査区西の丘で円板形模造品が採集された。
  13. 川畑遺跡 智里東小学校の西裏にあたり、寺沢川北岸の台地が遺跡で、阿智村智里1770番地付近一帯に広がっている。45年中央道用地内調査区が、台地の先端にかかり、調査がなされた。ここは古くから模造品出土地として知られた所で、付近の地主でもあった石原喜治の採集品が多い。剣形、円板形勾玉形など合わせて50点ほどを数えている。
  14. 橋場遺跡 大沢川と寺沢川に挟まれた台地のほぼ中央にあたり、智里東小学校の校庭南側桑畑が遺跡で、阿智村智里962番地にあたる。45年中央道用地内調査区にかかり、調査がなされたが、すでにこの時宅地造成によって、原地形は破壊されていた。器種不明の模造品出土地と記録されている。

15. 赤坂遺跡 大沢川と寺沢川に挟まれた、智里東地区の中心をなす台地の南側一帯が遺跡で、智里農協の南西にあたる。阿智村智里1008-1・2番地付近がここにあっている。47年、国道153号改修工事に先立ち、遺跡東端が調査された。ここでは、祭壇状のロームマウンドがあり、その付近で横造品が発見されたという。剣・円板形横造品が発見されている。
16. 森下遺跡 大沢川と寺沢川に挟まれた、智里東地区の中心をなす台地の先端部を占める遺跡で、赤坂遺跡の北続きになる。阿智村智里1884番地付近が横造品出土地点になる。46年、国道153号改修工事に先立ち、遺跡の南・北端が調査され、円板形横造品が発見された。
17. 梅ヶ久保遺跡 大沢川上流の大野部落と中野を限る、北沢川南岸にあり、東向きの台地で大野部落上段に位置する。遺跡西上に皇太神社がある。剣形横造品が採集されている。

以上が、網掛峠東麓面に分布する小野川祭祀遺跡群といわれるものであるが、真根木、梅ヶ久保などは網掛峠へむかう方向からはずれている。これについて市村先生は、「御坂古道から分岐し国境の群嶺を押しわけて、東海方面に通ずる交通路もすでにこの頃から開けていたことを実証するものではあるまいか」と述べられている。

以下は、駒場以北で石製横造品を出す遺跡である。

18. 中原遺跡 中間の東側に北から南に向けて細長く延びる丘陵がある。この丘陵の中間あたりに位置する県立阿智高校敷地一帯が中原遺跡で、27・42年の二度にわたり、校地拡張工事に伴う調査がなされ5世紀末ないしは6世紀初頭と考えられる住居址より、剣形横造品が発見された。これより以前から地元の原治幸は、この一帯で横造品の採集を始め、現在まで160点におよぶ剣・円板・勾玉・管玉・白玉・ガラス小玉からなる横造品類を採集している。横造品が確実に住居址に伴う例はここだけである。なお、大場博士は「西方に網掛峠を遠望し、その奥に神坂峠の存在を暗示する地点にあって、神坂峠遺跡の場とも考えられ、遺物の性質もそれに関連するものであろう」と述べられている。
19. 前原遺跡 駒場から飯田方面へ国道153号で向うと、春日神社を過ぎるともう飯田市山本地籍に入るが、国道のすぐ下は、阿智村北端の前原部落の地籍がまだ続く。前原集落の北端が、北から流れてくる湯川に面して張り出した所が遺跡で、円板形横造品が採集されている。
20. サルコヒラ遺跡 飯田市山本の箱川台地東端で、長田洞に面する傾斜から、剣形の横造品が採集されている。
21. 梅ヶ久保遺跡 飯田市山本の箱川台地の東南にあり、台地端が遺跡で、剣形と勾玉形の横造品が採集されている。
22. 砂子田遺跡 飯田市山本の中尾丘陵の西端にあり、長田洞を間にしてサルコヒラと相対している。円板形横造品が採集されている。(20-22は近接する遺跡で、箱川祭祀遺跡群とも呼ぶべきである。)
23. 寺沢遺跡 飯田市山本の竹佐にあり、前記箱川の遺跡が台地端や斜面にあるのに反し、谷地に位置している。円板形の横造品が採集されている。
24. 北村遺跡 飯田市伊賀良下段岡の円通寺東にあり、円板形横造品が採集されている。古代東山道「育良驛」に考定される市場屋敷に近い。
25. よ志原遺跡 飯田市伊賀良中村にあり、二ツ山北側で、茂都毛川南岸国道153号上に位置する。剣形横造品が採集されている。なお、47年中央道用地内調査区にかかり、遺跡東端を調査している。



26. 寺山遺跡 飯田市伊賀良中村の、国道沿い集落の東側にあり、茂都計川北岸台地の南東縁が遺跡で、長清寺西裏にあたる。円板形模造品が採集されている。47年中央道用地内調査区にかかり、調査がなされた。
27. 三ヶ瀬遺跡 飯田市伊賀良北方にある。北方の大瀬木寄り、南沢川につくった扇状地端の台地先端付近で、北側の凹地をへだてて上の金谷遺跡と相対している。47年中央道用地内調査区にかかり、古墳時代と平安時代の住居址を調査した。この古墳時代の住居址に関連すると思われる剣形模造品がグリット掘りで発見された。
28. 山岸遺跡 鼻町切石の、妙琴原へ向う雑道をすこし上った所で、天伯神社南一帯が遺跡である。45年中央道用地内調査区にかかり、25軒の古墳時代住居址が調査され、このうちの11号住居址の南から、円板形模造品が発見された。
29. 中島遺跡 上郷町別府の雲形寺古墳群近くの台地東斜面に位置しており、剣形模造品が採集されている。
30. 新屋敷遺跡 飯田市座光寺の高岡古墳群の広がる新井原の東端にあり、地元の吉川庄作はここで、円板形模造品を採集している。
31. 東養寺遺跡 豊丘村神田村の北西端、県道東側の小台地にある東養寺第2号古墳で、地主の岩崎太郎が、古墳副葬品と思われる遺物と共に、円板形模造品を採集している。(古墳副葬品で、他とは異なる)
32. 伊久間原遺跡 喬木村南西で、天竜川に面して広がる伊久間原段丘上で発見された古墳時代集落に関連して剣・勾玉・白玉が採集されている。下伊那史第三巻で市村先生は「喬木村伊久間の土師住居址からも石製模造品が発見せられている」と述べられているが、伊久間原遺跡調査主査の今村善典によれば住居址内ではないらしい。
33. 中間遺跡 中原の西側下段で白玉が採集されている。

以上、模造品出土遺跡についてふれたが、駒場以北では中原を除くと、数はすくなくなり、しかも単独で1点という例が多い。また住居址に確實に伴うとは断言できないまでも、住居址付近であることが、発掘調査例でわかる。また単独発見の場合、円板や剣形が多いことも、祭祀遺物の性格を示すものであると考えられる。

模造品と同様に、祭祀関係遺物とされている子持勾玉が、飯田・下伊那地方で4例知られている。次で簡単にふれておきたい。

1. 五反田遺跡 阿智村駒場の会地小学校東方畑の中に三基の古墳があり、北端の古墳から発見されたという伝承がある。6.9×4.5cm、背に2、腹に1、両側に4つずつの小突起をつける。(以下市村先生の調査による。)
  2. 別所原遺跡 飯田市三穂下瀬の別所原の古墳から発見されたという伝承がある。7.2×3.3cm、背に2、腹部に1、両側に4つずつの突起をつける。つくりはかなりよい。
  3. 中谷遺跡 高森町下市田の座光寺寄り、国鉄軌道下の段丘面が遺跡で、黒沢川の出水で押し出した土砂中で発見された。9.8×5.4cm、背と同側に4つずつの突起がある。
  4. 鐘鈴原遺跡 高森町牛牧鐘鈴原で発見されたといわれている。8.7×4.5cm、腹部に大きな突起がある。伝承や、原位置とは思われない発見場所がほとんどで、遺跡とするには問題が残ると思う。
- 模造品・子持勾玉出土遺跡については、「下伊那史第三巻」を参照されたい。(富沢)

表1 園原周辺の遺跡一覧

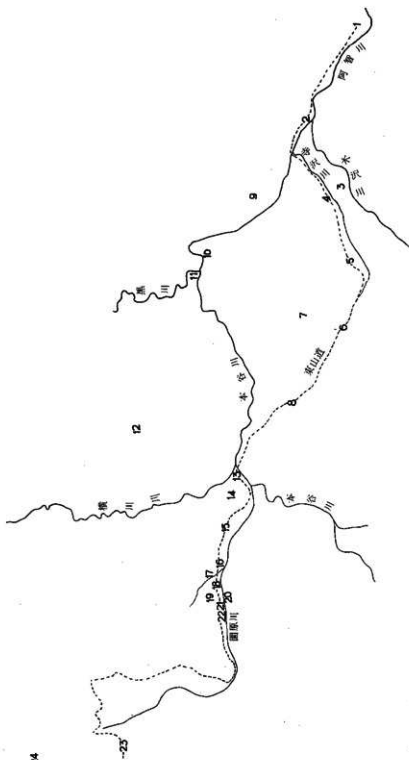
番号	遺跡名	所在地	縄文時代					弥生時代		古墳時代～歴史時代				備考		
			北土器	早	前	中	後	晩	中	後	土器	須恵	瀬田品		灰胎	陶・瓦
1	神原跡	阿智村智原神原山			○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	昭42・43発掘
2	神原跡重	*									○		○			
3	千本立	*									○		○			
4	池の平	*											○			
5	おる沢上	*											○			
6	おる沢	*											○			
7	ソブ沢	*													○	
8	イワゴシヤ	*													○	
9	井尻割	*													○	
10	第二沢	*													○	
11	神原神社境内	園原									○					
12	杉の木平	*	○?					○	○		○	○	○	○	○	昭45・48発掘(中央道)
13	兎の宮	*				○					○	○	○	○		
14	マキゴヤ	*									○	○	○			
15	クラダリ沢	*									○					
16	鷹師平	*				○					○					
17	葛藤平	*									○	○				
18	上の平	*											○			
19	下瀬河原B	*									○					
20	下瀬河原A	*				○					○					
21	長者原敷A	*									○					
22	長者原敷B	*									○					
23	サブゴヤ	*				○										
24	チョンバ	*				○										
25	ホド平	瀬川			○	○	○									
26	漢人松	*		○												
27	まきだち	殿森				○										
28	下の平	本谷				○										
29	中組	*				○										
30	瀬川	*				○										
31	カミのお山	*				○										
32	外溝割	*	○?													
33	上の平	*			○	○										
34	向平	本谷				○	○									
35	矢平Ⅰ	矢平				○					○					昭45発掘(中央道)
36	矢平Ⅱ	*			○?											
37	鷹掛跡	小野川									○		○	○		
38	北沢	*				○							○			
39	藤ノ川	*											○			
40	奥榎木	*				○							○			
41	餅田	中野				○										
42	長平	*				○										
43	権ヶ久保	大野											○			
44	草刈場	*				○?										
45	牧ヶ平	*				○?										
46	向山	*	○													
47	大畑外	小野川				○					○	○	○			

番号	遺跡名	所在地	縄文時代					弥生時代		古墳時代～歴史時代				備考		
			光土器	早期	前期	中期	後期	中	後	土器	須恵	埴輪	瓦		銅・鉄	
48	大平神社	阿智村智屋小野川														
49	岩林	*														
50	中ツル木	*				○										
51	杉ヶ原	* ○?			○	○										昭和46・発掘(中央道) 破損
52	古塚	*				○										
53	平林	*		○	○	○										
54	中原	*				○										
55	イモウ	*				○										
56	きがり	*				○										昭和46・発掘(国道)
57	森下	*			○	○	○			○	○	○				住居址
58	横場	*				○					○		○			昭和46・発掘(中央道)
59	北越外	*				○					○			○		住居址
60	川畑	*		○				○		○	○	○	○			*
61	赤坂	*		○	○	○	○				○	○	○	○		昭和46・発掘(国道)
62	原ノ平	大沢				○										
63	長塚原	*				○										
64	棚原	*				○										
65	横塚	合地磐山														宇・管等遺物あり?
66	坊塚	*														
67	曾山	*			○	○		○	○							昭和46・発掘(中央道) 遺物出土: 土器・土器 破損
68	三本木	駒場				○			○							
69	中平	*			○	○				○						
70	えきの平	*				○					○					
71	熊四ヶ沢	智屋屋神				○										住居址
72	森の脇	*				○										
73	高木	*				○										
74	中平	*				○										
75	前田	*				○										
76	宮の原	*				○										
77	二本松	*				○										
78	藁子野	*				○		○								
79	藁子野村	*					○									
80	長塚古墳	駒場									○				○	刀子・寛永通宝・四耳壺
81	源正平	合地駒場			○	○					○					○
82	おち	*				○					○					○
83	島田外古墳	*									○					短石・甕・甕穴(破損?)・破損
84	養ヶ原	*				○					○	○				
85	千人塚古墳	*									○					円墳 9.5×1.7m
86	日向畑	*				○										
87	古城古墳	*														短石・甕・甕穴(破損?) 破損
88	城原古墳	*									○					破損
89	五反田古墳群	*									○	○				円墳約5.1.2.3号 破損
90	原原	*				○										
91	大六	*				○										
92	かぶき畑	*				○					○	○			○	昭和47・発掘(中央道)
93	源原外古墳	*									○	○				破損
94	東田原古墳	春日		○	○			○	○		○	○				古墳以外に古田遺跡 破損

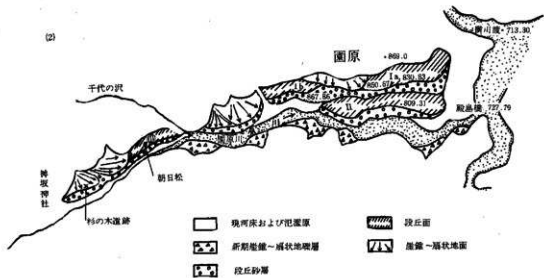
番号	遺跡名	所在地	縄文時代										備考								
			先土器	早	前	中	後	晩	中	後	土師	須恵		横倉	灰土	陶磁					
95	向山	阿智村会地	春日																		
96	下原	中関				○						○									昭47・発掘
97	中関					○															
98	内畑	春日																			
99	前田																				
100	中	中関				○						○	○	○							昭27・42発掘 住居址
101	的場	煎原				○						○	○								
102	前原					○															
103	横	奥				○															
104	十六					○															
105	小山	佐和古野				○															
106	新	河内				○						○	○								土器はR&Bの古瀬川のあり
107	新	備中				○						○									
108	備中	備中				○															円墳 7.1×1.4m
109	宮	奥				○															
110	備中	備中				○															
111	宮	倉地御場				○						○	○								昭45・発掘(中心遺)
112	備中					○						○	○								黒刀・黒玉 黒穴式石室?
113	備中	備中				○						○	○								黒穴式石室? 破壊
114	備中	備中				○						○	○								黒穴式石室? 破壊
115	備中	備中				○						○	○								黒穴式石室? 破壊

表2 飯田・下伊那郡地方石製模造品、子持勾玉出土遺跡

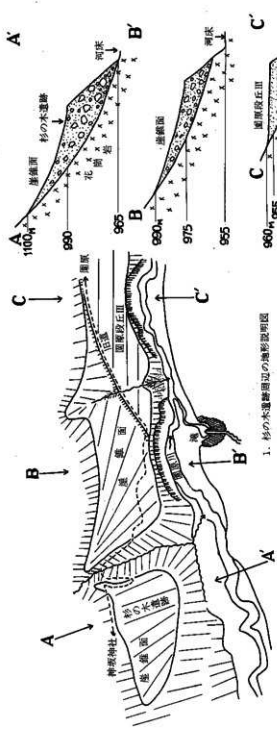
遺跡名	所在地	石製模造品										備考(表4中の番号)	
		円板	剣	刀子	勾玉	管玉	白玉	ナツメ玉	ガラス玉	計			
1	神原	阿智村	智原	171	370	16	15	22	1231	2	29	1856	(1)
2	杉の木	平		10	15				1			26	(12)
3	瓦ノ	宮			1							1	(13)
4	マナゴ	宮			1							1	(14)
5	アラガ	宮			1							1	(15)
6	大	外	小野川	36	270	1	1	18	19			350	(47)
7	北	宮			1							1	(38)
8	藤ノ	宮			2	1						3	(39)
9	農	宮				1	不明					1	(40)
10	大	宮			2	5						7	(48)
11	若	宮						2				2	(49)
12	杉	宮			1	1						2	(51)
13	川	宮			14	29		5				48	(60)
14	備	宮				1	不明					1	(58)
15	赤	宮			7	10						17	(61)
16	森	宮			2							2	(57)
17	備	宮				1						1	(43)
18	中	宮	中関	11	27		2	4	114		2	160	(100)
19	前	宮	春日	1								1	(102)
20	サルコ	飯田市	山本			1						1	
21	備	宮			3		1					4	
22	砂	宮			1							1	
23	寺	宮	竹佐		1							1	
24	北	宮	伊賀島	1								1	
25	上	宮	、中村		1							1	
26	寺	宮			1							1	
27	三	宮	北方		1							1	
28	山	宮	下伊那郡	1								1	
29	中	宮	上野町		1							1	
30	新	宮	飯田市	1								1	
31	東	宮	飯田市		1							1	
32	松	宮	伊久保			1		2		1		4	
1	五	宮	阿智村									1	(89)
2	別	宮	三穂									1	
3	中	宮	下市田									1	
4	備	宮	手取									1	
33	中	宮	中関						2			2	(100)



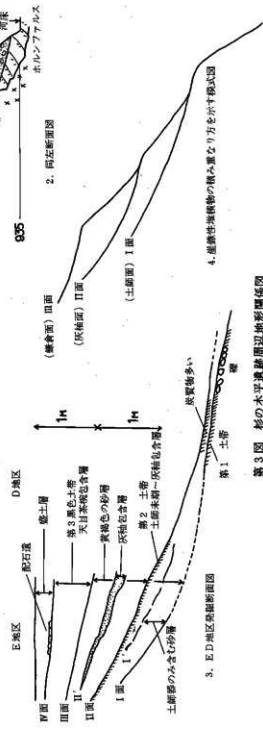
第1図 團原地区史跡名勝地 1. 跡地 2. 阿曾山脈 3. 小野川 4. 相模山脈 5. 大野内邊跡 6. 磯部跡 7. 磯伊山 8. 大甲 9. 基神 10. 龍巻園 11. 阿曾神社 12. 度島山(平塚山)  
13. 度島 14. 長谷川橋 15. 月見堂 16. 新御所 17. 千代内川 18. 赤見の池 新井谷 19. 三本木 20. 瀬川の池 21. 利根水字遺跡 22. 神成神社 23. 神成神社 24. 以上紹介



第2図 智里西域の概略図及び園原の段丘分布図



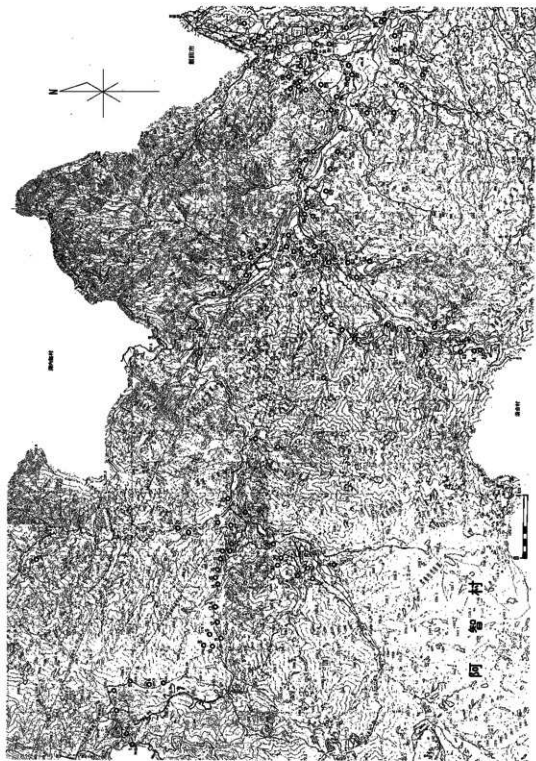
1. 杉の木道跡周辺の地形説明図



3. E, D地区発露断面図

4. 崖線性堆積物の積み重なり方を示す模式図

第3図 杉の木道跡周辺地形関係図



第4図 国原付近の遺跡分布図



### Ⅲ 調査結果

#### I 杉の木平遺跡の位置

杉の木平遺跡は、長野県下伊那郡阿智村園原 3565～3576 番地一帯に所在する。(図1, 4, 写2, 3, 4) 阿智村は昭和31年、広城市町村行政推進の大綱にもとづき、三州街道(現国道153号)に沿った駒場宿を中心とした旧会地村、南の下条山塊東麓を占める伍和村、阿智川以南の三州街道に沿う東地区と、阿智川や本谷川とその支流沿いの西地区を合せて一村をなしていた智里村が合併して、広城の村づくりを開始した、伊那谷西端をかためる枢要の村でもある。北は清内路村と木曾郡南木曾町に、西は岐阜県中津川市に、南は浪合村に、東は飯田市と下条村にそれぞれ境を重ね、東西約15.5km、中心部で南北約5.5km、四国の島影に似た分銅形の村界を巡らねており、総面積113.25K㎡、人口6,300余人を数えている。

村への入り口は、北から国鉄飯田駅から国道153号へ抜ける信南バスで、また南からは、国鉄名古屋駅から国道153号へ道をとって、名飯バスが通じている。将来は中央自動車、国鉄飯田・中津川線が通過する。

園原は、阿智村のうちでは旧智里村智里西地区の西端にあたる部落である。つまり伊那谷では最も西に寄る所にあたるわけである。天竜川に注ぐ阿知川の上流の一つである園原川に沿う小さな段丘面と、それを覆う星蝕性の堆積が、扇状地状の地形面を造っているが、これより上方はすべて山地帯となる。園原川縁辺の段丘面や、その外側で、山地帯の裾に貼付いた扇状地状の崖錐面を耕地としましたこれらを取りまく囲りの山地帯から山林資源が供給される、純山村であったが、過疎化の波に大きくゆられている。

部落の北側を限る尾根は、神坂山の張り出しで、この神坂山から北の富士見台一帯が、準平原状のなだらかな起伏を重ねており、古くから牛馬の放牧がさかんである。またこの準平原状の地形が夏のキャンプ場として開発され、一方中央アルプス南端の主稜恵那山登山のキャンプ・サイトにも利用され、春から秋にかけて行楽の人影が絶えない。園原は、富士見台キャンプや、恵那山登山をめざする人達の通り抜ける山裾の部落でもある。(写1, 2, 5, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13)

杉の木平遺跡は、本谷川の支流、園原川上流左岸沿いに位置し、園原段丘Ⅲと呼ばれる段丘面と、それを覆う扇状地性の押し出しの斜面に、ほぼ30,000㎡にわたる範囲で広がっている遺跡である。遺跡の中央を南東に向かって園原川へ注ぐ梨の木沢があり、従ってこれを境にして西側を杉の木平遺跡A地域、東側を杉の木平遺跡B地域として便宜的に区分して呼んでいる。(写3, 4)

A地域は、標高1000m付近を通る林道周辺から、南東に強く傾斜して園原川に面する斜面の先端部までで、先端で標高985mを測り、急崖をもつてのぞむ園原川との比高は40mほどである。林道上は畑地になっており、林道下は、4枚の水田と4枚の畑地が階段状に造成されている。昭和46年度斜坑広場その1地区として、発掘調査のなされたのが、このA地域で、全体6000㎡ほどの面積中、やく3200㎡が調査対象になっ

た。(これについては、「46年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書・下伊那郡阿智村斜坑広場その1」によられたい。) (写3, 4)

B地域は、梨の木沢西側ほどの強い傾斜はないが、西から東に向う崖線性堆積面は、西側林道辺が急で、東へ降るに従って傾きは緩くなって、南東側を流れる園原川に面するようになる。標高1000~970mの間にあり、地域の南端で園原川との比高は25mほどを測る。この林道下から園原川までのB地域は、広さや8000㎡の範囲にわたっており、10余枚からなる水田・畑などの耕地と、旧地主の宅地および旧墓場が、全体とすれば東向きの日だまり地形面へ、階段状に連続して、この間を峠への旧道が通過しており、東へ向えば、情緒豊かな伝承の地「姿見の池」や「朝日松」のある児の宮地蔵から、「千代の沢」を越して、「駒嵜の板」のわきを通り「月見堂」に至り、更に園原部落の中心へ続き、部落越しにテーブル状の綱掛山を望む。西に向うと、200mほどで園原川沿いの山腰に、柵の大樹と老杉の叢に囲まれた「神坂神社」(地元では住吉様ともいう)があり、境内には「日本武尊御腰石」の伝承がある。この辺りから谷は狭ばまり、山腹を折れ曲る林道は、急勾配な坂道となり、終点の追分まで続く。深まった谷の底を流れる園原川はすでに、崖端を縫う溪流となり、やがて枝状に分れて神坂山の山腹深くわけ入るようになる。南を望むと、園原川の対岸に「暮白の滝」の垂水が白い帯になって見え、滝頭から奥に矢野洞が、京平から東に向う1200m級の連続線に続いて、屏風のように南の空をさえぎっている。北は、林道上の一部を除けば神坂山になり、急峻な山岳地形をなしている。神坂山の南東へ張り出す連続線は、園原部落の北側を限る山稜となり、この連続線にほぼ平行する方向で、中央自動車道恵那山トンネルが通過することになっている。

恵那山トンネルの送換気用の斜坑口は、現地表景観物でいえば、神坂神社の東側、林道下の傾斜地に設計され、梨の木沢西側に第一期工事が、また梨の木沢東側に第二期工事が計画され、二期工事に関連して今年度の発掘調査がなされたわけである。今回調査は、B地域全体面積8000㎡のうち、4200㎡が調査対象となり、従って調査は対象区域内に限られている。(写3, 4)

園原川を挟むこの谷間には、20ヶ所ほどの遺跡ないしは、遺物採集地がある。園原川沿いの小さな段丘面や、山腰の傾斜面、または神坂峠も含めて山路に点々と続いていて、その規模や、遺物の量は伊那盆地の平坦部とは様相を違えている。地図へ落してみるとわかるが(図4)、園原川の左岸から、神坂峠へ至る山路の各所に点在し、それを結べばそのまま古代交通路の筋を示すことにもなっている。(写6, 8, 12, 13) 園原川が本谷川に合流する付近から、神坂神社付近までは谷間に小さな平坦面や比較的緩やかな斜面が展開するため、遺跡の規模は広めで、部落の東口にある長者屋敷A、部落の中心部の下瀬河原A・B、部落西側の業師平、杉の水平の東に続く児の宮などの遺跡は、出土遺物も多く、また複合遺跡でもある。ところが、神坂神社より奥の、山路に点在する遺物採集地は、まさに路傍へ置かれ、また散布された遺物の相を示し、土器類など細片がほとんどであり、交通路か交通安全を祈祀する祭祀遺跡、または仮泊の遺跡が多いと考えられている。この交通に関連する遺跡群ないしは遺物群で共通することは、古くは縄文早期の遺物を出す所もあり、縄文から弥生にかけての遺物は多くが単独で発見される傾向があり、量もすくない。しかし古墳時代以降、とくに平安時代を中心に遺物の出土量が急激に増加することである。古代東山道開設に伴う交通路の整備と、官道としての東山道最難の信濃坂東麓に位置していたことによることを、この遺物量の変化が物語ると考えられる。信濃坂を上下した旅人が眼前の急峻を仰ぎ、来し方を振り返る所は、まさに杉の水平遺跡を除いて他にはない。(宮沢)

## 2. 遺構と遺物 (図5, 6)

今回の調査によって確認された遺構は、縄文時代後期の竪穴式住居址1軒。古墳時代の祭祀址と考えられるテラス状の小広場2、土壌1、遺物の出土状況からみて遺構に同状と考えた炭層<sup>1</sup>。奈良時代の竪穴1。平安時代の土壌3、溝址と溝状址3、炭層1および、平安時代を中心として前後にもわたると考えられる道路状遺構7。中世の竪穴2、集石址1。その他時代不詳の土壌1、集石址1、溝状址1がある。予想外に多量の遺物を出したA地域より、全体地形が緩やかであることから、相当量の遺物出土が期待されたが、結果的にはそれぞれの遺構に関連して少量の遺物の検出にとどまった。

崖錐性地積物が、西にきつく、東に緩やかな傾斜面を覆っていることと、その傾斜面が一様でなく、微細にわたれば緩急凹凸のある原地形面であることなどから、今回調査区の地層々序は場所により、かなり複雑な相を示していた。それぞれについては、関連する遺構説明の項によられたいが、全体的には黄褐色系の砂質土が基盤となり、その上に褐色系の砂質土があって、古墳時代—平安時代の文化層を形成し、その上へは黒色系の砂質土が覆っており、鎌倉—室町時代の文化層をなしており、その上は耕地造成時の埋土や耕土になっていて、近世—現代の文化層として区別することができた。最上段d面に存在した2枚の炭層の広がりについては、耕地造成や墓塚による擾乱などで部分的にしかつかめていない。なお黄褐色系の基盤層とは、この遺跡の中核をなす古墳時代以降の基盤層ということである。(高沢)

### 1) 住居址 (図5, 7, 9, 13の1—3, 写14)

遺構 調査区d面の南端、BE・BF 48・49グリットにかかって発見された竪穴式住居址である。梨の木沢の縁を通過する旧道にかかり、また平安時代か中世と考えられる3号溝状址によって切られているため、遺構の3分の1ほど調査できただけである。

d面の南端は、原地形面に狭い蹄場状の平坦面があり、この面は東側ではc面へ続く急斜面になって東へ向いて低くなり、南の梨の木沢へ面する側は、崖状に切り立っている。また平坦面も全体的には東に面して緩く傾く。旧道や溝状址に破壊されているが、復元的に遺構の位置をみれば、南と東に沢と斜面を持つ平坦面の先端に構築された住居址であることがわかる。細礫を含む黄褐色砂土を掘り込み、木炭粒を含む暗褐色砂土を覆土としている。確認された範囲では径約5mの円形プランを呈し、3本の柱穴と、床面中央よりやや西側で地床炉の一部が検出された。床面は掘り込んだ地層が砂質土であるためか、荒れていて軟弱でわずかに壁が残されているが、20cm前後の高さを測る。

遺物 木炭粒を含む暗褐色砂質の覆土から、深鉢の胴部破片(図13の1, 写14)、定角式磨石斧(図13の2, 写14)、横刃型石器(図13の3, 写14)が出土している。土器は暗褐色、比較的良好に焼き締ったもので、ヘラ描の沈線が縦位に数条つけられている。磨石斧は蛇紋岩製、横刃型石器は硬砂岩製である。1号住居址は、遺物相からして、縄文後期初頭のものである。(通那)

## 2) テラス

### ア 1号テラス (図5, 6, 7, 9, 14の1-8, 15の1-15, 写15, 16)

遺構 調査区a面の南東端、YV・YW 61-65グリットにかかって発見された、祭祀址状の小広場である。西上方に2号テラスがある。調査区境で発見されたために、南東縁は調査区外へ延びている。図6の地層断面図でわかるようにa面平坦面が終って、南東側へ傾斜を強めだす所であり、地山である黄褐色砂土を平坦化しており、その上へは巨礫がいくつかのり、また巨礫の周辺には茶褐色の砂質土が、北側ではとくに木炭粒混りの黒褐色砂土が、南北に長い半月形で、360×190cm範囲に薄く広がっている。巨礫付近を中心にして、石製模造品、土師、須恵器類が、また木炭粒混りの黒褐色砂土を中心に灰釉陶器柄類が主として出土している。

遺物 茶褐色砂土から出たものに石製模造品(図14の1-3, 写15の56・57)があり、比較大形である。他に土師器類(図15の1-7, 写16の58-61)、須恵器類(図15の8・9)。炭粒混りの黒褐色砂土の灰釉類(図15の10-15, 写16の62・63)があり、「水」と読める墨書検もある。15はおろし皿である。

祭祀形態を示す遺構と考えられ、時期は古墳時代を中心としていると思われる。(村上)

### イ 2号テラス (図5, 8, 9, 14の4-6, 15の16, 写17)

遺構 b面のほぼ中央部、東端に近い所に位置する緩傾斜面である。北側山寄りの勾配の強い傾斜面と、南側扇原川に面する崖端部からの傾斜面の狭い低地内にあつて、南へ傾きながら東面する傾斜地となっている。北側を東走する1号路址と南側を東走する3号路址に間し、10数コの巨大な転石が群をなし中には、4m×2mの巨大なものさえある。この巨礫群を含めて10×12mほどの範囲内は、周囲よりやや低め、茶褐色砂質土の堆積が20cmほど見られ、剣形石製模造品2、白玉1、土師器杯形土器が出土しているので、崩石と石製模造品を関連づけた遺構と見たい。とくに白玉と杯形土器は、黄灰色砂礫土中に密着した台形上の巨礫の傍に置くような状態で発見されているのは、ただ偶然ではなさそうである。この巨礫は南側を走る3号路址の北壁に接し、巨礫群は、3号路址と、東側急傾斜面に対してやや小高い緩傾斜の小広場となり、伴出する遺物もあるのでテラスと呼称した。杯形土器や石製模造品の発見はあったが、この周辺には炭化物や焼土等の発見は見られなかったが、神坂峠西麓の山畑遺跡での事例と共通しており、山神祭祀の一形態と考えられる。

遺物 剣形石製模造品2(図14の4・5)、白玉1(6)と杯形土師器(図15の16)である。石製模造品は、みな滑石製である。4は、両面擦痕を残し、両面に錆なく板状のもので、2孔、5は同形態の剣頭である。6は、白玉で杉の水平遺跡唯一のものである。石質、形状、製法等神坂峠出土のものに類似している。杯形土器は、口縁が外反し、口唇の仕上げ良、黄褐色の精選された胎土で、ヘラ状工具による調整を残している。古墳期のものに比定されよう。この周辺出土の土師器片は同個体のものである。(今村)

### 3) 道路状遺構

#### ア 1号路址と5号路址 (図5, 9, 10, 16, 17の1-16, 23の3, 28の1・2, 写真18, 19, 27)

遺構 調査区北端のb・c面にかかって検出された道路状遺構で、1号路址から分岐するものを5号路址とする。このあたりは、細礫を含む黄砂土を地山として、黒褐色土、黒色土、埋土、耕土の順に堆積する地層々序を観察することができるが、この最下層の黄砂土を断面U字状に凹めて道とするものである。この断面に示された地層面を復元的に観察するならば、地山をU字状に凹めるために、路底は堅くなり、薄い酸化鉄の沈澱層が路底面を覆い、その上へは砂質の黒褐色土が凸レンズ状に流れ込んでいる。この砂質の黒褐色土の上面には、大は人頭大から、小は細礫にいたる礫が場所によっては敷きつめられたような形状で広がっている。この上面の黒色土以上は路址に関連する時期以降にこのあたり一帯を覆ったものと思われることから、除外して考えてみると、まず路巾をきめて地山を凹め、その凹みが道筋になって踏みかためられる。全体地形が西から東に傾いているために、凹められた溝状の路面には、降雨のたびに上方や、路側面からの流砂や、流細礫、時には転石が路底へ堆積する。その上を往還する人が踏みつけていく。降雨のたびに侵透する流れに含まれる鉄分は、やがて路底に沈澱層をつくり上げていく。路面が荒らされた時には、路面整備がなされ、場所によっては敷石状に礫を置きなおす。

b面は、過去の田地造成時に掘削された範囲が広いので、路址もその時に欠き取られてしまった所があり、また後になって、西から東に向って流れた2号溝址が、1号路面を切るため、特に南東側で路址の不明な箇所が多い。東端では、北側の6号土壌のある側がや、高くなるために、路縁だけが2号溝状址に沿って5mほど残されている。路底巾は160cm、路縁巾(凹めた道の上端)は約240cmで、b面西端では路底巾80cm路縁巾120cmを測ることができる。c面では、b面境が田地造成時に広く削られているため、南側は欠きとられている。最大巾路底で460cm、路縁巾520cm、上方で路底巾220cm、路縁巾340cmを計ることができる。1号路址が道巾を一番広げる所の北側から、5号路址が分岐するが、分岐点で路底巾220cm、1mほどしか調査できなかったが、一番北端で路底巾120cm、路縁巾220cmを測る。1号路址の全長は約28mが確認されたが、道巾は一定でなく、b面西端は路縁巾120cmで狭く、また5号路址と合する所は路縁巾520cmを測るわけで、路面構築時になされた路巾がどのくらいであったかは判断としない。ただ予測されることは、この路址が占める地形は、西高東低の傾斜地であるために、降雨などによる水の流れや、礫、砂などの流れが考えられ、調査によって露呈された姿は、路面構築時のものよりは巾が広げられたものと思われる。

遺物の出土状況は、敷石状の礫面上の黒褐色土に、常滑焼の壺類片と山茶碗・山皿片が多く、礫面上から礫間にはさまれて灰釉片が多く、他に土師・須恵片が主として発見され、まれに敷石状礫下の砂質土中に土師片が含まれていた。

遺物 路址に関連しないと思われる黒色土では、古瀬戸片・青磁片も含まれるが量はすくなく、主として、路址に関連する黒褐色土・敷石上または敷石間に含まれており、土器片数では灰釉・土師・須恵・中

世施器類の順になる。土師器類には(図16の1・2)があり、灰釉類には(図16の3-25、図17の1-11、写19の73)があり、図16の14は輪花柄である。常滑焼には(図17の10・14・15、写19の73)があり、山皿、山茶碗に(図17の12・13)がある。古瀬戸(図17の15・16)や、鉄製品(図28の1・2)もある。

1号路址は、3号路址とともに、調査区中央を東西に貫いており、他の何本かの路址中、もともと整然とした姿を見せており、杉の木平遺跡B面での中核的な位置を占めていたものと思われ、そして遺物の出土状況からして、この遺構は平安時代を中心に繁用された道路址であると考えられる。(今村正次・富沢)

#### イ 2号路址 (図5, 9, 17の17-23, 18, 28の3・4, 写20)

遺構 調査区d面西端で検出された道路状遺構である。調査区中、最も傾斜の強い所であったため、西と東側は田地造成時に削りとられてしまい、確認し得た範囲は広くない。このあたりは、黄褐色砂質土を地山として、角礫混りの褐色土、角礫混りの黒色土、田地造成時の埋土、耕土の順に地層が堆積している。地山になる黄褐色砂質土を全体とすればわずかに凹めるだけであるが、凹面はかたく締っており、踏み堅められたものであることは確かである。凹面へは角礫を含む褐色土が落ち込んで覆土になっている。

1・3・5号路址のように明確な断面U字状を呈さないのは、この路址の延びる東西方向の原地形が、かなりの傾斜になっているためと思われ、従って路面は南北に巾をもって移動することがあったのではないかと考えられる。なお上述のように西側は田地造成時に、東側は田地造成時と、後の溝址のために切られている。路址の規模は、西端で路縁巾480cm、東端で路縁巾280cmを測り、不整形であり、調査全長6mで、東西に延びること以外には、その関連を窺むことができなかった。なお他の路址に認められた敷石状の確証はなかった。

遺物の出土状況は、踏み堅められた黄褐色砂質土上面に土師・須恵片が分布し、褐色覆土には灰釉・山茶碗片が、また黒色土には古瀬戸、青磁片などが含まれていた。

遺物 2号路址に関連する遺物は、土師・山茶碗・平鉢・須恵・灰釉・古瀬戸・常滑の順に量を減じている。土師・須恵片が他の路址よりも多い。須恵器は高杯(図17の17-20、写20)と鉢(図17の21、写20)があり、比較的薄手で暗灰色か黒灰色を呈し、焼きもよい。灰釉碗(図17の23)山茶碗には(図18の1-6、写20)があり、平鉢(図18の7・8)、常滑の壺や片口(図18の9・10)その他古瀬戸(図18の12・13)、青磁碗(図18の14、写38の130)などがある。なお器種不明の鉄製品(図28の3・4)も発見されている。土師・須恵の多いことから2号路址は奈良-平安時代に属すと思う。(進那)

#### ウ 3号路址 (図5, 9, 10, 19, 20, 21, 28の5-15, 写21-25)

遺構 調査区a面よりc面にかけて検出された道路状遺構である。西高東低の地形面に構築されていたため、後の田地造成時に階段状に掘削していくつかの平坦面を造った折りに、c面の西端と、b・c面境は遺構が削りとられている。この付近の地層々序は、黄褐色砂質土を地山にして、褐色砂質土・黒褐色砂質土・黒色土・田地造成時の埋土・耕土の順に堆積するが、路面は地山の黄褐色砂質土と上面の褐色砂質土をU字状に掘り凹めて構築されている。路址断面は図10でみられる通り、凹められた路底へは、

後の降雨などで流出した青灰色の砂質土が凸レンズ状に堆積し、その下面には酸化鉄の沈着層が薄く挟まり、この砂質土の上を敷石もしくは、上方や路側面からの転石が、木炭粒混りの黒褐色砂質土とともに、比較的厚く覆っている。この木炭粒は、前回調査のA地域炭層にかかわりをもつものかわからない。いずれにせよ、断面で観察される路面は、北隣で連続する1号路趾と似ており、後述の遺物相などをも勘案すれば、複数時期にわたる利用が想像されるものである。

a 面では、全長12mが確認され、平均的な数値をとれば、路底巾180cm、路縁巾240cmを測り、路面への大形の転石が多い。付近には巨礫の傍が選ばれた2号テラスがある。b面からc面への連続は詳細にわたっては不明であるが、c面東端へ続くものである点は疑いない。c面では全長約31mの主筋と、途中から分岐して、おそらくはやがて合流したと思われる副筋が7mにわたって確認されている。(図9)路面規模はまちまちであるが、東端で路底巾240cm、路縁巾360cm、副筋の分れる付近の路底巾250cm、路縁巾370cmと広くなる。西に向っていた道筋が南にすこし振るようになる所で路底巾180cm、路縁巾320cm、西端では路底巾50cm、路縁巾120cmとせばまっている。ただしこの西端は、田地造成時に削られた所でもあり、路底近くまですき取られている。副筋の方はや、狭く、路底巾80cm、路縁巾160cmを測る。なおこの副筋の方は路面への敷石ないしは転石がすくない。

遺物の出土状況は、敷石状の礫をもとにすれば、礫面の含まれる木炭粒混りの黒褐色土中に、山茶柄・常滑・古瀬戸と少量の青磁片が多く、礫間や、礫面下、路底辺に堆積する青灰色の砂質土にかかって、土師・須恵・灰釉片が多く検出され、また土器類とともに鉄製の刀子・鎌・釘なども出土している。

遺物 最も広い範囲にわたって調査できた路趾であったせいか、発見された遺物の量が多い。量的には土師・灰釉・須恵・山茶柄類・常滑・古瀬戸類・青磁片の順になる。

土器類には(図19の1-3)があり、坏・甕類が多い。須恵器には(図19の4・5、写24、25)があるが、甕は暗灰色の胎土で、大形・自然釉が美しい。灰釉陶器には(図19の6-18、図20の1-20、写25)があるが、図19の6・7は輪花模である。模様がほとんどを占めるが、図20の15-20のような変類も含まれている。山茶柄類には(図20の21-24、図21の1-13、写25)があり、平鉢・椀・皿類に分けられる。常滑(図21の14)、古瀬戸のおろし皿(図21の15)、青磁椀(図21の16・17、写38)などが、土器類の主なもの、他に鉄製品として刀子(図28の10・11、写43)平鎌(図28の13、写42)があり、釘と思われるもの、その他器種の不明な(図28の5-9・12・14・15)などもある。

3号路趾は、1号路趾とともに、杉の水平進路B面で中核的位置を占めた主要道筋であって、土師・灰釉などを多く含むことからして、平安時代を中心に繁用された道路趾であると考えられる。(木下・宮沢)

#### エ 4号路趾 (図5, 9, 22, 23の1, 28の16, 写26)

遺構 調査区最上段にあたるd面の北端で、上の林道に続く急傾斜な土手裾にかかって発見された道路状遺構である。ここは林道側から東に向急傾斜を階段状に削って田地にした所であったことと、東側には旧墓地があり、墓壇のための擾乱があり、調査できた範囲は広くない。

西から強く傾斜する黄灰色砂質土が地山になっているが、この地山の上には上方からの流出する土砂が幾層にもなっており、細分すると、褐色土・砂利・褐色土・黒色土・田地造成時の埋土・耕土というような

複雑な地層々序を示しているし、更には部分的に上方の傾斜地からの影響の大きい所・小さい所もあり、黄灰色砂質土とした地山が、西端へ行くと細礫混りの黒褐色土になる所もある。これは上方からの傾斜方向が一定でなく、圓原段丘Ⅲと呼ばれる平坦面の山裾側が受けている崖錐性堆積作用による結果と思われる。

路面は、黄灰色砂質土をわずかにU字状に凹め、拳大以下の礫や砂質土が踏み締められた状態で確認されたものであるが、北側からの傾斜が強いために、路面もそれに従って、南側の方がや・低くなっている。全体的には西から東へ傾斜し、東端は7号路址面よりレベルが高い。上述の旧基地に当たるため、攪乱が激しく正確に7号路址との関連が捉えられなかったのが残念であった。

調査し得た範囲は、長さ10mで、路底巾80~180cmを測るが、墓塚による攪乱などを受けた所は狭くなっている。なお、1・3・5号路址のように、U字状の掘り込みが明瞭でないので、路底巾などは判然としなかった。

遺物の出土状況は、砂礫が堅く締められた路面に土師・須恵・灰釉片が多く、他に山茶碗類・古瀬戸・常滑類片が含まれており、砂礫中や、砂礫間に挟まれるものは比較的少なかった。

遺物 発見された遺物は、灰釉・土師・須恵・山茶碗・古瀬戸・常滑の順に量を減じている。土師器には承切り痕を残す甕(図22の1、写26の91)、須恵器には坏類(図22の2-4)灰釉陶器碗(図22の7)、山茶碗(図22の5・6・8・9、図23の3)、平鉢(図23の1)釘と思われる鉄製品(図28の16)などがある。

(小林)

#### オ 6号路址 (図5, 6, 9)

遺構 調査区d面はほぼ中央で、BG-BH 60-62にかかって発見された道路状遺構である。調査区最上段に位置するこのあたりは、上方を走る林道側からの傾斜が強く、従って崖錐性の堆積物からなる地層々序も、複雑な相を示している。下から黄褐色の砂礫土・黒褐色砂礫土・黄褐色砂礫土・炭層・茶褐色砂質土・黒色砂質土・耕土というような具合で、またこの堆積も一様ではなく、地山と考えられる黄褐色の砂礫土が、全体的には北西から南東に向う傾斜を有するが、部分的には北側を低くする傾きもあり、その上を覆う上層の各は、この地山の傾きに平行して厚さを増減させ、また北側の方からは、南に向う急な斜面もあるため、図6の3でみられるような層序を示すことになる。

ここは、他のd面に造られた道路状遺構同様に、田地造成時の傾斜面掘削により、削り取られた面が広く、発見された遺構は範囲が狭い。地山をわずかに凹めた程度であるが、細礫と木炭粒を混じた堅い路底が確認されている。全体は南から西に曲る形状で4mの長さで、路底巾100~170cmほどを測る。

遺物 遺物はほとんどなく、細礫と木炭粒の混じた堅い路底面から、土師片が発見されているだけである。

6号路址は、杉の木平遺跡B面のほぼ中央最上段を通過する路址の一部であったが、遺物もすくなく、遺構全体も、路底面だけの確認であったので、もともとの姿を復元的に捉えることが苦難である。少量ながら、包含される遺物からみれば、奈良-平安時代に関連する路址といえる。

(竹村)



#### カ 7号路址 (図5, 6, 9, 写27)

遺構 調査区最上段にあたるd面の北端で、上の林道から続く急傾斜な土手裾から、旧墓地と、更にその土手裾にわたって発見された道路状遺構である。

もともとが、山裾の急斜面を階段状に土地造成した所であることと、墓塚のために攪乱を強く受けており、調査範囲は狭い。細礫を含む黄褐色砂質土を地山とし、その上へは、北と北西方から流出する土砂が、幾層にもわたって堆積しており、加えて上述の墓塚を掘り込んだ際の攪乱により、かなり複雑な地層々序を示している。

確認された路面は、全体とすれば、北側の急傾斜な山裾を迂廻するように、山裾に沿って延びるが、西高東低の傾きをもっている。細礫を含む黄褐色砂質土が踏み堅められて路面を形成し、その堅い路底面上へは、北側斜面からと考えられる人頭大から拳大の転石が多い。

確認し得た遺構の規模は、多少蛇行する曲りをもって長さ7m、路底巾100cm内外であるが、北側は山裾に接するためか、攪乱をまぬがれていて、南側よりは長い範囲にわたって路縁が残されていた。遺物は発見されていない。

すぐ西上方に4号路址があるが、7号路址西端と、4号路址東端とでは、路面のレベルと、路址の延びると思われる方向に違いがあり、上になる4号路址東端の続きが極端に下がるものならば、あるいは連続する可能性もあるが、調査時には確認できなかった。4号路址以前の道路状遺構である。(小平)

### 4) 竪穴

#### ア 1号竪穴 (図5, 6, 9, 11, 24の1, 写28)

遺構 調査区最下段のa面、YX 61~63グリットにかかって発見された、竪穴穴である。このあたりは、調査区中では最も広い水田跡にあり、杉の木平遺跡中では最も平坦な面をなしているが、原地形そのままではなく、ことに西側は水田造成時に削られている。ただし水田造成によって削られた範囲も含めて、地山面へコンターを落して作製した地形図(図9)で観察すると、竪穴の構築された所は、上・下にやや広い平坦面が、原地形にあったことかわかる。つまり原地形面には、階段状のあまり広くないが、平坦面をもって、平坦面間の斜面に1号竪穴が構築されていたことになる。

この付近は、東に寄るほど厚い地層の堆積をみせるが、全体的には、赤褐色の砂質土を地山にして、奈良時代の遺物を含む黒褐色土、平安時代の遺物を含む褐色土、中世陶器類を含む黒色土、田地造成時に埋土にされたために最も厚い新しい近世以降の地層とが類別できる。遺構は赤褐色の砂質土を掘り込むもので、北東から南西方向に長軸をとって、230×160cmの長方形を呈する。北西側では垂直に近い40cmほどの壁があるが、南東側では、竪穴の中央迄までが掘りが浅く、また大は40cm径ほどの礫が入っており、石積状をなしている。なかには壁外からの転石もあるようであるが、判然としない。竪穴内へは、黒褐色土が

落ち込んで覆土をなしている。掘り込む赤褐色土が砂質であることから、床面、壁面とも軟弱である。遺物の出土状況は、ほとんどが、床面近い覆土中に含まれていた。

遺物 土師器片と須恵器片が発見されているが、量はすくない。土師器は環・甕の破片で小さい。須恵器には、ロクロ目を直す環(図24の1)がある。

1号竪穴は、a面東南端近くで発見され、付近には1・2号テラス1・3号路址東端、1号集石址などあり、赤褐色砂質土を掘り込み、黒褐色土を覆土とする遺構で、掘り込みや遺物相からみて、奈良時代に属す竪穴址といえる。  
(村上)

#### イ 2号竪穴 (図5, 9, 11, 24の2・3, 写28)

遺構 調査区b面、AG・AH61グリットにかかって発見された、竪穴址である。b面は、a面につく広さをもった水田跡であるが、地形図(図9)でみられるように、原地形は、2号テラス東側と、2号竪穴西側にやや広めの平坦面があり、この2つの平坦面の中間帯は緩い斜面になっているが、西から東に傾く斜面に2号竪穴は構築されていたことがわかる。

遺構は、角礫を含む黄褐色砂質土を掘り込み、褐色がかった黒土を覆土としており、東西に長軸をもって、220×150cmの長方形を呈し、西高東低の斜面にあることから、西側で50cm、東側では5cmほどの、垂直に近い掘り方の壁をもっている。床面は堅いタタキになっており、東側中央に40cm径の扁平な石が置かれており、西隅に径40cm、深さ15cmのピットが1つがたれている。

遺物の出土状況は、褐色がかった黒色覆土中に含まれて中世陶器片少量が発見されている。

遺物 中世陶器のうち、梅枝花様の絵付のある椀(図24の2)と、やや厚手の黄瀬戸の鉢(図24の3)がある。

2号竪穴は、b面東向の斜面に構築された長方形の竪穴址で、地山と考えられる角礫混りの黄褐色砂土を掘り込み、黒色覆土をもつ中世の竪穴址である。  
(片桐)

#### ウ 3号竪穴 (図5, 9, 11, 24の4, 写28)

遺構 調査区b面の北東端AF66・67にかかって発見された、竪穴址である。b面北側は、中央の路址などが検出された一番を包むような形で、上方からの尾根の先端に影響されて西から東に張り出す地形になっており、従って全体的には、西高東低の傾斜面ではあるが、北へ寄るほど、南に向う傾斜が強くなっていく。遺構は、細礫混りの黄褐色砂質土を掘り込み、黒褐色砂質土を覆土にもつもので、南西-北東に長軸をもって、270×145cmの長方形を呈し、西側で30cm、東側で10cmほどに立ち上る壁を有し、30cm辺を測る四角な礎が2つ床面に置かれている。床面はタタキになっており、東隅近くに径40cmのピットがある。ただしこのピットは後にうがれたもので、落ち込んでいるのは黒色の耕土であった。なお、竪穴の北隅は、風化の進んだ大きな花崗岩があり、竪穴構築時にはこの風化した花崗岩を掘り込んでいる。

遺物の出土状況は、床面東隅近くに後になって掘られたピット内から青い染付のある茶碗(図24の4)が出ているがこれは除外して考えてよく、床面近くでは鉄積のかかった天目椀片、酸化が激しくて形状の

はっきりしない鉄片が、また黒褐色の覆土中からは、灰釉・土師の小片が発見されている。

遺物 出土状況でふれたように、3号竪穴に伴うものは床面近くで検出された天目椀片で、黒褐色土中の灰釉・土師片は上方からの流れ込みと考えられる。

3号竪穴は、b面北東端の、南面する斜面に構築された竪穴址で、天目茶椀片などを伴う、中世遺構である。(今村正次・宮沢)

## 5) 土 壌

### ア 1号土壌 (図5, 9, 12, 写29)

遺構 調査区d面の東端、BB54グリットにかかって発見された土壌である。図9のコンターでもわかるように、d面からc面へ移行する所は、比較的傾斜が強くなっているが、c面へ傾斜が強まるところに位置して、1号土壌が構築されている。黄褐色の砂質土を切り込むもので、90×50cm 楕円形を呈し、鍋底状に40cmの深さに掘り込み、黒色の覆土が入り、拳大の礫が覆土中に存した。遺物はない。(竹村)

### イ 2号土壌 (図5, 6, 9, 12, 23の11, 28の24, 写29)

遺構 調査区d面にあり、BG・BH62・63付近にかかって他の3・4号土壌に近接して発見された土壌である。この付近は、南西の梨の木沢の影響と思われる押し出しがあり、南西から北東に向う傾斜と、杉の水平遺跡B地域全体が西より東に傾くために東面する斜面と、北側の山裾が延びるために部分的には南傾する斜面が、それぞれに錯綜していて、その主たる傾斜の方向にむかう上方からの土石の流れが互に組み込み合う所が、ちょうど2～4号土壌付近になるため、観察される地層々序は複雑である。

図6にみられるように、角礫を含む灰褐色砂礫土を地山として、黒褐色砂質土・炭粒混りの黒色砂質土と黄灰色砂礫土・炭粒混りの黒色砂土と黄褐色砂礫土・茶褐色砂質土・黒色砂質土・耕土の順に堆積しているが、上述のように錯綜する傾斜面上にあるため、この地層々序がどこでも一様に認められているわけではない。遺構は炭粒混りの黒色砂質土から地山になる灰褐色砂礫土にかけて掘り込むもので、別項炭層1(4層b)から下へうがたれていたことになる。北西—南東方向に長軸を有し、170×100cmの楕円形を呈し、2段になる底面をもっていて、深い方で横縁より90cmを測る。炭粒混りの黒色砂土が凹レンズ状に入り、覆土をなしていた。

遺物の出土状況は、底面近くで平根鐵が、またその上方から土師片が比較的多く、須恵片・灰釉片を少量上部に伴っていた。

遺物 土器類は小破片が多く、図化できるものがすくない。土師器が多く、甕片と坏片であることがわかるが器形全体の窺えるものはない。須恵器には坏片があるが少破片で、わずかに図23の11が図化できた。灰釉陶器には椀片が認められた。金属器には、有蓋で逆刺のある両丸造腸扶柳葉式の鉄鍋(図28の24)がある。

2号土壌は、d面の東に傾斜のはじまる付近に構えられた他の3・4号土壌に近接して発見されたもので、覆土や含まれた遺物からみて、奈良時代ないしは平安時代に所属する遺構と思われる。(竹村)

#### ウ 3号土壌 (図5, 6, 9, 12)

遺構 調査区d面にあり、BH63グリットにかかり、2号土壌から140cm北で発見された土壌である。上述2号土壌が南に、西2mに4号土壌がある。2号土壌と同様、炭粒混りの黒色砂質土から掘り込むもので、墳底は地山まではいっていない。東西に長軸を有し125×75cmの楕円形を呈し、深さ64cmを測る。墳中には、上部に炭粒混りの黒色砂質土が、下部には黒褐色砂質土が落ち込んでいる。遺物の出土状況は、上部の炭粒混りの黒色砂質土に土師器と須恵器小片が含まれていた。

なお、墳内上方に50×20cm大の木炭片が入っていた。

遺物 土師器・須恵器の小破片が発見されているが、小さすぎて図化できない。

3号土壌は、d面の東に傾斜のはじまる付近に構えられた3基のうちの一基北側にあるもので、覆土や含まれた遺物からみて、奈良時代ないしは平安時代の土壌と思われる。(竹村)

#### エ 4号土壌 (図5, 6, 9, 12, 23の12, 写29)

遺構 調査区d面にあり、BI 62グリットにかかり、3号土壌から2m西で発見された土壌である。この土壌の発見されたBI 62グリット付近から南側は、地山が高く、北側に向って低くなるため、2・3号土壌付近とは多少地層の堆積状況が異なる。即ち炭層1と呼ぶ炭粒混りの黒色砂土と黄褐色砂礫土はうすくなっており、この上層の茶褐色砂質土の下へわずかに挟まっているに過ぎず、もともとの墳の切り込みの層がはっきりしないが、2・3号土壌同様に、黒色砂質土から切り、地山の灰褐色砂礫土にかかっている。85×70cm径で、墳底は2段になっていた。このあたりの地山は角礫が多く含まれるようになり、墳底にはこの礫が顔をのぞかせている。茶褐色砂質の覆土を落ち込ませ、少量の土師片が含まれていた。

遺物 土師器環、甕の小破片がほとんどで、高環(図23の12)がわずかに図化できた。

4号土壌は、d面の東に傾斜のはじまる付近で、2・3号土壌に近接して発見された土壌で、2・3号土壌とほとんど同時期の遺構と思われる。(竹村)

#### オ 5号土壌 (図5, 9, 12, 21の18, 写30)

遺構 調査区c面の中央付近で、3号路址中へ掘り回められた土壌である。3号路址の上面は、関連項ですでにふれてきたように、路面は黄褐色砂質土を囲めるもので、凹めた上面には青灰色の流砂が覆い、この上へ敷石状の礫が置かれるのが普通で、礫の上へは木炭混りの黒褐色砂質土が中世土器類を含んで堆積していた。5号土壌は、この木炭混りの黒褐色砂質土が、90×60cm楕円形に敷石状の礫をはずし、青灰色の砂層から、地山の黄褐色砂質土を更に30cmほど凹めて充填されていたものである。墳壁は墳縁からゆるやかに底へむかい、またかなりタタキのきいた壁面で、鍋底状の形状をなしている。遺物は墳を埋める

木炭粒混りの黒褐色砂質土中に常滑の同一個体の大甕片が含まれて発見されている。

遺物 常滑の同一個体の大甕片を図化したものが図21の18、写30の103・104である。口径44cm、底部を欠くが丈は34cmを測る大形のもので、肩をはって、ずんぐりした形状を呈し、器体上部に緑の自然釉をかぶり、下部は茶色の鉄釉をうすく浮かせている。丸に米字状か、または数本からたたる斜状の印花文を胴部へ刻している。

5号土壌は、平安時代に繁用された3号路址中へうがたれた土壌で、常滑の大甕片を含む鎌倉末室町時代にかかる遺構であろう。(片桐)

#### カ 6号土壌 (図5, 9, 12, 23の13)

遺構 調査区b面の北端、AH 66グリットにかかって発見された土壌である。東に3号整穴が、南には1号路址がある。b面の北側には、西から東に上方からの張り出す山裾の影響があり、従って、1号路址や2号テラスのある凹みにむかって、南に傾斜する地形を呈すようになっている。この南への傾斜は北へ行くに従って急になり、やがては旧田中さん宅地東側の高い土手に続いていく。つまり、旧田中さん宅地を限る東側の高い土手裾に6号土壌は位置しているわけである。花崗岩の巨礫を含む黄褐色砂質土を地山として、その上へ部分的にうすい茶褐色土をのせ、褐色砂土・黒褐色土・耕土の順に地層々序が観察できる。土壌は地山をわずかに凹めるだけで、茶褐色土を覆土にしている。土壌の形状は、東西に長軸を有し西側をせばめ、東側を広げたスプーン状をなしており、長軸で110cm、深さ10cmほどを測る。遺物は土師器壺が破片で1/2個体分ほど茶褐色の覆土中に含まれて発見された。

遺物 土師器壺(図23の13)は、図上復元でみると、口径17cm、器丈17.5cmを測るもので、比較的長く外張する口辺部を有し、頸部をや、きつく締めて丸味のある胴部から平底に続く形状をなしている。器壁表面は赤褐色をなし、ていねいにみがき上げて光沢を見せる部分もある。胎土は精選されていてこまかい。

6号土壌は、b面北端で発見された土壌で、浅い横中に入り込んだ茶褐色覆土中に土師器壺を含むもので、遺物の相や、覆土からみて古墳時代に属する土壌と考えられる。(宮沢)

## 6) 集石址

### ア 1号集石址 (図5, 9, 11, 写31)

遺構 a面ほぼ中央部、東端土堤に近い所、1号テラスの北側、黒色砂質土から黄褐色砂土を掘り込んだ整穴中に人頭大から拳大の石がぎっしり詰められた遺構である。整穴は280×60、壁高30cmの長方形を呈し、中につまった石の間は空間が多く、上から流入したと思われる砂礫まじりの黒土が所々に挿入されている。下層から堆積層序を見ると、黄灰色砂礫土からなる地山の上に粘質の強い茶褐色土、礫まじりの黄褐色砂質土・茶褐色砂質土・黄褐色砂質土、礫層(集石)・集石上だけに見られる茶褐色砂質土、傾斜の強い黒色砂質土が自然成層され、この上層に、薄い茶褐色土・黄褐色土・茶褐色土・黄褐色土・褐色土

混り砂礫土と複雑な埋土が厚く載り、最上は水田の耕土である。埋土下に集石されているが、黒色砂質土の堆積層がはさまれているので、近世以前の集石址であろう。この下方に同類の集石址が並んでいたが、長さ1mほどの範囲に集石されたものである。その用途は不明である。

遺物 集石間から検出された遺物は、土師器破片・須恵器片・灰釉陶器片・天目椀片が少量づつである。とくに天目椀片は集石下層から検出されているので、この集石址は中世以降のものと推量されよう。なおこの集石中から検出された灰釉陶器片が、1号テラスから出土した灰釉陶器椀形土器（図15の10）の破片であった。

（今村）

#### イ 2号集石址（図5，9，11）

遺構 調査区b面の東端で発見された集石址である。2号溝址の南枝東端に近く、また南側には2号テラスがある。地山になる礫混りの暗褐色砂質土を20～30cm凹め、東西に長軸を持って20.0×70cmほどの痕があり、その中には砂質の黄褐色土と、砂質の黒色土が入り、上層をなす黒色土の上面に礫を置いている。1号集石址とは様相の異なるもので、北の2号溝址の延長部かもわからない。遺物はなく時期不詳。（片桐）

### 7) 溝状址

#### ア 1号溝址（図5，9，23の4-10，28の17，写31）

遺構 調査c面、中央から北寄りに発見された溝址である。西上方には7・4号路址と炭層、2-4号土壌が、南東側には1・3号路址がある。旧田中さん宅地にかかっていたため、遺構は10mほどにわたって遺存し、他は宅地造成時に破壊されていて調査不能であった。

この付近は、d面の東縁が傾斜してきて、せまい平坦面にかかわるところにあっており、全体とすると西高東低の緩い斜面をなし北側には南に向って強く傾斜する斜面が迫ってきている。従ってここに立つと、北に南傾する斜面を負い、南側は西から東に傾斜する斜面を見下ろすことになる。宅地造成などで削り取られているため、原地層々序を観察することはできないが、黄褐色砂質土を地山として、黒褐色の表土が堆積している。遺構は北東-南西方向に延びる溝状のもので、南西端は耕作時に欠きとられ、北東端は宅地造成時に欠きとられたものと思われるが、長さ10m、巾南西端で1m、北東端で2m、深さ30-150cmを測る。溝内へは、下から褐色砂質土・木炭粒混りの黒色土・砂質黒色土の順に覆土が堆積しており、それぞれに細礫が混じっている。遺物の出土状況は、雑然としていて、3つに分けて確認された地層ごとに文化層を確認することはできなかった。土師・須恵・灰釉・山茶椀類・常滑・古瀬戸・青磁片などの土器類・鉄鎌・釘などの金属器類は、溝中へ流れ込んだもののように観察される。

遺物 灰釉陶器類・土師器類・須恵器類・常滑・古瀬戸・山茶椀類の順に減じる土器類がある。須恵器には杯（図23の4-6）、灰釉椀（図23の8）、平鉢（図23の9）、山茶椀（図23の7）、常滑の壺（図23の10）、金属器には先端を欠くが現長13cm、巾3cm、内弯する鎌（図28の17，写31，42）がある。

1号溝址は、c面西縁の緩る斜面上、南西から北東に向う傾斜を持つ溝状址で、古墳時代から中世に至る遺物を含むものであった。遺構の性格からして、構築時期がはっきりしないが、最下層をなす褐色砂質土は、杉の水平遺跡B地域の場合、古墳時代以降平安時代までにわたることが多い。従って本遺構の時期はこれを勘案して、平安時代までに位置づけることができる。(小林)

#### イ 2号溝状址 (図5, 9)

遺構 調査区b面のほぼ中央で発見された溝状の凹みである。西から東に向う傾斜は、各面に段状のせまい平坦面を持っているが、この平坦面を結ぶ斜面は、西に行くに従って急である。東側に近いb面では、比較的傾斜は緩るやかになっている。最も広い平坦面であるa面を東下に見下ろすこのb面緩斜面を利用する遺構は多く、1・3号路址の続きをはじめとして、2号テラス、2・3号竪穴、2号集石が集中しているが、本2号溝状址は、2号竪穴、2号テラス、2号集石の北側から、1号路址の南東をかすめて南西—北東方向に向って流下していたことがわかる。南西端は、b面西縁全体が田地造成時に削られたために溝状址もまた切られており、北東端もまたa面西縁が田地造成時に削られたために途切れている。

溝状址の形状は、ももとの原地形の傾きに沿い、b面の凹低地面を貫くように、南西から北東に向って12mにわたる主筋と、途中から分岐する副筋が8mほどある。ただし副筋は途中で途切れている。主筋の方は多少の広狭はあれ、約120cm、深さは10cm前後、深い所では30cmほどを測る。地山になる砂礫を含む黄褐色土を掘り込み、黒褐色の砂質土を落ち込ませている。副筋の方は溝巾の広狭が激しく、主筋を越溢した流水が造り上げたものとも考えられる。なお、副筋東端近くの2号集石は、副筋に続くものである可能性もある。遺物は土師・須恵・灰釉・山茶碗類・常滑・古瀬戸などが雑然として黒褐色砂質土に含まれており、層位的な遺物の出土状況を確認することはできなかった。

2号溝状址は、b面の凹低地面に原地形の傾斜に沿って南西から北東に向うものであった。1号路址を切っていることからして、中世に所属するものと考えられる。(宮沢)

#### ウ 3号溝状址 (図5, 9, 22の10, 23の2)

遺構 調査区d面の東縁で発見された溝状址である。d面の南側は梨の木沢の影響からか、全体的にはやや傾斜を強めて東へ傾く地形をなしている。この斜面には1号住居址、2号路址、1号土壇があり、斜面の東縁には、3号路址の西端が延びてきている。遺構は、南側の1号住居址と、北側の2号路址を切って、ほぼ南から北に向っていて、溝状址の東縁は、田地造成時に削られたらしく、欠き取られている。礫を含む黄褐色土を凹め、その中には砂質の黒色土が上層をなし、下層には黄灰色の砂質土が入って覆土をなしている。

遺物の出土状況は、覆土上層の砂質の黒色土から山茶碗・常滑・天目碗片などが主として発見され、黄灰色の砂質土からは須恵・灰釉片などが主として含まれていたが、層によって判然とした文化層としてのまとまりはなく、混在する遺物の出土状況が観察された。

遺物 出土遺物は小破片がほとんどで、図化できたものに須恵器の大形甕(図22の10)と、常滑の片口

(図23の2)がある。

3号溝状址は、黄褐色の砂質土を掘り込むものであったが、構築時期がはっきりしない。2号路址を切っていることから、平安後代以降中世にかかるものと考えられる。

(遮那)

#### エ 4号溝状址 (図5, 9, 28の25・26)

○面南縁で、3号路址の南側に、3号路址に平行して延びる形で発見された溝状の凹みである。このあたり一帯の地山をなす黄褐色砂質土を長さ350cm、巾15~20cm、深さ5~30cmほどの規模に凹め、その中へは黒褐色の砂質土を落している。流れの方向は原地形面の傾斜に沿い、ほぼ西から東を指している。凹みは広狭の巾を持ち、また凹底はポットホール状に極端に凹む所もある。凹みを覆う黒褐色砂質土中には、灰釉・山茶碗の小破片がごく少量含まれていた。

4号溝状址は、原地形面に沿って不均等な凹みを連続させるものであることなどから、自然流水の凹めたものと考えられる。

(木下・宮沢)

#### 8) 炭層 (図6)

調査区上段、d面の北側山裾一帯の緩傾斜地、茶褐色砂質土中に、何層かの砂利層にはさまれた炭混りの黒色砂質土の堆積層が確認された。このあたりは、北からの斜面と西からの斜面が交錯し、二方の急斜面を背にする東南向きの日だまり地形の緩傾斜面である。茶褐色砂質土から炭混り黒色砂質土は、灰釉陶器・土師器片の包含が多く、焼土群、土壌も検出されている。さらに、4・6・7号路址とも重複が見られ、上方の下部黒土層から縄文中期変形土器・縄文早期の土器1個体の発見もあって、複雑な様相の見える所である。傾斜度・方向の相異により、所によって土層堆積に大きな差異もあるが、d・Hラインで地層々序を見ると、角礫を含む灰褐色砂礫土からなる地山の上に、縄文時代の包含層と推定される黒褐色砂質土(5層)、古墳~奈良時代の土師器片を含む炭混り黒色砂質土(4層d)と黄灰色砂礫土(4層c)、平安時代の遺物を包含する炭混り黒色砂質土(4層b)と黄褐色砂礫土(4層a)、中世陶磁器類を包含する茶褐色砂質土(3層)、中世陶磁器と近世陶磁器類を包含する黒色砂質土(2層)が堆積し、最上は擾乱の耕土(1層)になっている。(図6)西方山裾では、この層序の区分は困難で、縄文中期土器の出土した黒土も、国分期の壜や灰釉陶器片の出土した炭混りの黒土も4号路址面の砂礫土もわずか7~8cmに圧縮されているが、東下方になるについてその層序は明確である。上部焼土群を含めて上層の炭混り黒色砂質土と砂礫土(4層b・a)を炭層1、下部焼土を含めて、下部炭混り黒色砂質土と砂礫土(4層d・c)を炭層2と呼称する。なお、炭層の確認は、B地域ではここと、テラス1だけである。先の調査の行われたA地域では7か所以上で確認され、木炭質の極めて多い炭層4・5・6と、炭混り黒色土の炭層1・2・3に区分される。焼土を伴う炭層としてはA地域炭層1と類似したものである。



#### ア 炭層 1 (図5, 6, 9, 12, 24の6-20, 25の1-4, 28の19-23, 写32, 33, 34)

遺構 所によって堆積の厚い所と薄い所がある。西側上方は自然礫群が地山に接し、その下方辺に僅かに炭粒が混入する程度、北側山裾沿いを西走する4号路地下層には炭層が認められる。東南下方ほど炭層は厚く、グリットH列上方付近で急激に厚さを増して下方へ続く。南北方向でも炭層の堆積は一樣でなく、総体的には南と北側が薄く、中央部グリット64のH・Gあたりが最厚で、上層砂礫土5cm、炭層10cmを測る。東側は耕地造成で削られその限界は不詳であるが、炭層の範囲は、東西6m・南北8mぐらである。4号路地下の炭層まで含めると、東西8m・南北10mの楕円形状に広がる。焼土が4か所以上認められる。焼土1は、土壌2の上面のもの、焼土2は土壌の東にあって、楕円状の囲み縁に焼石が配され、炭粒も多く焚火の形跡を示す。焼土3は、2の北3mほどの位置にあり、上層は焼土混りの炭層、焼土は下の砂礫土に続き、厚さ5cm、径100cmの範囲に広がり、この面の焼土中最大である。焼土4は、上方から続く礫群が消滅するあたりにあり、炭層の中にわずかに焼土が認められた。この周辺に焼けの見える石が散乱していた。焼土5は、4号路地の西上方、黄灰色の固い砂礫土の下に炭層と焼土が圧縮され、周囲の石も焼けている。その範囲は、50cmほどである。この焼土に食いこむように国分期の土師甕底部が逆位で出土しその上層を固い砂礫が覆っていた。従って4号路地は後時期のものである。焼土6の周辺は墓穴によって擾乱が甚しい、層序の識別は不能であるが、地山と思われる礫群に近いので、7とともに炭層2のものと見られる。出土遺物は、灰陶陶器片を主体として土器片の出土が多いが、1・2例を除いては細片である。土器片がとくに集中する場所は焼土周辺で、焼土1・3の周辺は多量である。

西北山寄り斜面を背にした日だまり地形で、東側は急勾配の斜面と推定されるので、テラス状地形を利用して焚火をした遺構であろう。建築址の痕跡は見当たらないので、休憩か、仮泊の場所かもしれない。出土遺物から見て平安時代のものと思われる。

遺物 上層茶褐色砂質土(3層)出土のものは、図24の7・16-20、図25の1-4等で、図24の7は土師質のカワラケ、16-20、1-4は山茶樹の皿・椀・鉢・平鉢・片口鉢等である。

図24の6は、須恵質の小鉢椀である。口辺付近はロクロ整形、底部付近にはへら状工具による調整痕が残る。胎土は精選されているが、焼成度はやや低めのものである。出土層がややはっきりしないが、炭層1直上と思われる。9-13は灰釉陶器椀、皿の口辺部、14・15は高台、8は広口壺の口縁部片である。胎土は、灰白色・白灰色のもの、施釉は、透明のもの、白濁のぬっとりしたものの二種が見られ、東濃永田と猿投産のものであろう。土師器は多量出土しているが、器形の知れるものは殆んどない。環片と甕片に限られているが、環片が多い。内面黒色・両面黒色土器のものも見られる。須恵器は、6のほかは、口片1片だけである。

鉄製品は4点検出されているが、炭層1と同レベルのものは、図28の21鉄斧である。割斧で中形、保存状態のよいものである。4号路地上方の西側、砂礫中から検出しているが、炭層の存在ははっきりしない。図28の23は平根鏃、19・20は刀子、22はのみか、茎と思われるが、みな茶褐色砂質土からの出土である。

(今村)

#### イ 炭層 2 (図5, 6, 9, 12, 14の7-9, 24の5, 写32, 35)

遺構 炭層1の下層に検出された炭層である。傾斜面の東先端部は、耕地造成時に削られその広がり是不詳であるが、確認された範囲は、東西6m、南北5mである。炭層の堆積は傾斜の度合、方向によって差異はあるが、中央部の焼土7付近で最も厚く20cmを測り、その周辺は薄めである。総体的には、西側は薄く東は厚めである。炭層1とは、厚さ5cmほどの砂利層(4層c)によって区別される。炭層中に焼土が2か所(焼土6・7)ある。焼土6は東北方、急勾配に落ちこんだ所であって礫群上100cmほどの広がりである。焼土7は、中央部にあつて130cmの広がりをみせ、厚さも10cmで焼けの強さを示している。焚火の前に穴が掘られたものか、灰褐色の地山に炭層が凹レンズ状に落ちこんでいる。遺物は、砂利層(4層c)下部に多く、焼土周辺に集中している。焼土7付近がとくに多く、土器は土師器に限られ、環形土器1個体のほか、杯片だけである。石製模造品・鉄製品も検出される。64列の土層断面を見ると、炭層の下層に上方で見られる黒褐色砂質土(5層)が、忽然と消滅している。これは、この場の使用前に削り取りがなされたようにも思える。炭層1と同様に、建築址を語る遺構の検出はなかったが、焚火とともに何らの人の生活のなされた場所と考えられ、遺物から見て古墳～奈良時代のもと思われる。

遺物 石製模造品・鉄製品・土師器と土師器片が出土している。石製模造品は、図14の7～9の3点で、石質はすべて滑石である。7・8は円板形石製模造品で、7は径2.7cm、厚さ0.2cm、双孔で、円形に整形されたもので、磨かれてはいない。8は、径2.8cm、厚さ0.4cm、半分を欠損しているが、孔の位置から双孔であったと思われる。磨痕は1ないし2方向である。9は、剣形石製模造品の未完形品である。鉄製品(図28の18)は釜金具であろうかと思うが、用途不明である。土師器は図24の5の環形土器と多数の杯片である。杯は、石製模造品と同一層にあつて炭層2の上層から炭層中に正位でつぶれこんでいたもので、奈良期の所産であるが、カワラケの一種かもしれない。(小平)

## 9) その他の遺物 (図13の4-10, 25の5-15, 26, 27, 29, 写36, 37, 38, 39, 40)

杉の木平遺跡B地域の調査区、遺構外で検出された遺物の量は、前回調査のA地域ほど多くはない。ちなみに、器種の判別できるものの個体数を集計してみれば、土師器類110、須恵器類40、灰釉陶器類86、緑釉陶器類2、山茶碗類46、常滑類25、古瀬戸類12、青磁類8、その他近世雑器類多数となる。近世雑器類としたものは、調査区b面南端と、c面北端にあつた旧地主の宅地付近と、d面北端の旧墓跡で発見されたものが多く、正確には近世雑器だけでなく、極く近い過去のものも含まれていることをつけたしておく。

調査区全体が、西から東に傾く斜面であるため、層位的にはかなり複雑な様相を示しており、全体を統一的に扱うには多少の問題を残すが、黄褐色の砂質土を地山にし、褐色系統の砂質土(茶・黒・暗褐色の砂質土)がその上に、黒色土と田地造成時の埋土か耕土が更に上へ堆積する地層々序が、基本になると思われることから、これをもとにして褐色系統の砂質土をⅠ、黒色系統の土層をⅡ、攪乱を受けている埋土、耕土をⅢとそれぞれに分けて統一した。この大きな区分に立って土器類をみると、下層のⅢ層は、主

として古墳時代から平安時代までにおけると思われる文化層であることがわかる。即ち、先にもふれた遺構外の遺物個体数では、土師器類 39、須恵器類 4、灰釉陶器類 24 となり、中世陶磁器類はみあたらない。

Ⅱ層では、土師器類 38、須恵器類 23、灰釉陶器類 49、緑釉陶器類 2、山茶碗類 38、常滑類 20、古瀬戸類 5、青磁類 6 となり、平安時代から鎌倉・室町時代にかかる文化層であり、Ⅰ層は中世以降の文化層として、それぞれを大きくとらえることができる。(なお、Ⅲ層以下に縄文早・中・後・晩期の土師器があるか後述する) 攪乱を受けているⅠ層は除外すると、褐色系統の砂礫を混在する土層が、崖線性堆積物であるといわれていることからすれば、Ⅲ層は堆積の進行している時に当ることになり、黒色系統の土層であるⅡ層は、堆積の休止前後に相当することになる。前回調査区である A 地域にみられた地層堆積の関係は、比較的整然としているが、今回調査区である B 地域では、A 地域ほど整然としていない。これは A 地域の方が全体的に傾斜が強いこと、従って A 地域ほどの傾斜を有しない今回調査区では、地層の堆積がやや緩慢であり、堆積関係が A 地域のように整然とはしていなかったものと考えられる。

また調査の進行上、便宜的に旧水田面をもとにして、調査区東縁から西に向い、地形面をいえば下から上に向って、a 面 (1号テラス・1号集石・1号竪穴を中心とする範囲)、b 面 (1・3号跡址東縁、2号テラス、2・3号竪穴、6号土壌、2号溝状址を中心とする範囲)、c 面 (1・3・5号跡址、5号土壌、1号溝址を中心とする範囲)、d 面 (1号住居址、2・4・6・7号跡址、2・3・4号土壌、炭層 1・2、3号溝状址を中心とする範囲) と区別してきた。この面としての区画は、上述のように水田面をもとにした分け方であるが、旧地形面である階段状の平坦面を中心とした田地造成であつたらしいこと、従って a-d 面は旧地形面の平坦部とそれに続いてつぎの平坦面にかかる斜面とからなっていることになる。この各面では、土師器類・須恵器類が d 面に、灰釉陶器類が c 面に、また山茶碗類・常滑類・古瀬戸類などが b 面にそれぞれ多かった。このことは、d 面には炭層・土壌など平安時代までに関連する遺構が多いこと、b・c 面では、比較的広範にわたって連続する、平安時代からそれ以降にも関連する遺構の存在に関連することとして理解されることであり、反面全体的には西高東低の日だまり地形、杉の木平遺跡 B 地域は、場所により、時代によりその目的に従った使いわけのなされていたことがわかる。

a 面の遺物の一部を図化したのが図 25 である。Ⅲ層では 5 の土師器と、8 の灰釉碗がある。5 はテラスなどに関連するものかもわからない。古墳時代の土師器である。Ⅱ層のものに 11・12 の山茶碗、平鉢がある。11 は灰白色の胎土で、薄い仕上げに特徴があり、12 は暗灰色、多孔質の胎土で、口辺内側を凹めている。6・7・9・10・13・14 はⅠ層のもので、6 は須恵器の浅い杯で、暗灰色のよく精選された胎土で焼成もよい。奈良時代に属す。7 は須恵器壺の口辺部で、大粒の石英粒を夾雑する胎土で、焼成はよい。平安時代に属す。9・10 は灰釉碗の高台付近、ともに胎土焼成よくない、13・14 は平鉢の口辺である。15 は旧地主宅地付近で発見された安山岩製の臼である。

b 面の遺物の一部を図化したのが図 26 である。Ⅲ層のものに 5・6・8 の灰釉陶器類がある。5・6 は比較的小形の碗で、5 は暗灰色、6 は灰白色で猿投窯産であろう。8 は灰白色の胎土で透明に近い施釉の、手付小瓶と思われる。Ⅱ層のものには、1・2 の土師器杯、9 の小皿、11 の仏花瓶、14 の小皿などがある。土師器は古墳時代、9 は行基焼の小皿で室町初期まで下るものと思われる。11 は胴下部に茶の中へ黒のまだらの混る鉄釉を施し、上部は透明の施釉をするもので、胎土はや、荒いがよく焼き締まった明るい灰色を呈す古瀬戸で、室町時代に属すと思われる。14 は内面と口唇に黒褐色の鉄釉を施す古瀬戸である。

Ⅰ層では、3・4・7・10・12・13・15・16 がある。3 は須恵器広口壺の肩部付近で、明るい灰色、よく

締まった胎土と焼成であり、表面には格子目の、また裏面にはすこしくずれた青海波文のタタキ目を残している。奈良時代後半に属す。7は灰釉碗で、胎土黄味がかった灰色で悪質、白濁した施釉に特徴あり、美濃須衛窯産と思われる。10は山茶碗底部で、低い高台尻にはモミガラ瓦痕が付いている。12は黒褐色の比較的厚い鉄釉を施す小碗、13も黒と茶のまだらになる鉄釉が厚く施された壺の底部付近で、高台尻は面取りがしてある。15は青灰色の施釉をする灯明皿である。16は丸に剣カタバミの印花文を持つもので、灰色の釉が施されている。

c面の遺物の一部を図化したものが図27の12~21である。Ⅲ層のものは15の灰釉皿だけで、Ⅱ層では12~14・16・17は灰釉碗、18・19は平鉢、20は山茶碗の底部付近、21は行基焼の小皿底部付近である。14は刷毛がけの釉が縞状に施されている猿投窯産のものと思われる。

d面の遺物の一部を図化したものが、図27の1~11であるⅢ層のものには1の灰釉壺がある。Ⅱ層には緑釉碗の底部付近で、赤褐色をおびた胎土である。3・4は平鉢と山茶碗の底部付近で、4の高台尻にはモミガラ瓦痕がある。5は青磁碗底部付近でネズミ色の胎土釉は緑味がかっていてうすい面取りをした高台尻は薄いU形をなし、高台尻から底面にかけては釉がない。竜泉傍系窯産。6は厚くて低い挽き出し高台を持つ古瀬戸の鉢である。7~11は、旧墓地付近で発見された供献の茶碗である。8・9と、10・11は同じ意匠による染付けであり、対になっていたものらしい。磁器碗である。

金属器類には図29のものがあるが、遺存状態悪く、器種のはっきりしたものが少ない。a面では1の鍔、2の鐮、3の茎があり、b面では10・12の鍔、14の刀子刃区付近、15のキセルの吸口、8の火打金具6の茎などがある。9は携帯用火打金具であろう。d面では6・7の茎、18の火打金具などがある。

図13の4~10、写36は今回調査区で発見された縄文時代の遺物である。4はd面で古墳時代以降の基盤と考えていた黄灰色の砂礫土の中へ、流れ込んだような状態の褐灰色の砂質土中で検出したもので、少量の繊維を含む縄文早期の土器である。4~6mmの厚さ、口径13cm、残在器丈15cmを測るもので、尖底になると思われる。口縁は波状になり、口辺部に浅い沈線と区画した中へ刺突文を配している。柄部の2孔を有す。騎ケ島台式に比定される。5は4号路地西端の路面下に細線を含む黒褐色土があり、その中で検出されたもので、口径10cm強、器丈16cm、薄手小形の縄文中期の土器である口辺部へ文様を集約して、腰帯で小判形に区画した中を、平行竹管文で飾っている。6は口径16cm弱で、1cmほどの厚さを有し、貝殻腹線による晩期系痕文土器である。7は無文の底部付近。8は舌状の先端縁を使う敲打器。9は石匙で濃朱色の珪岩を用いている。10は黒曜石製の削器である。

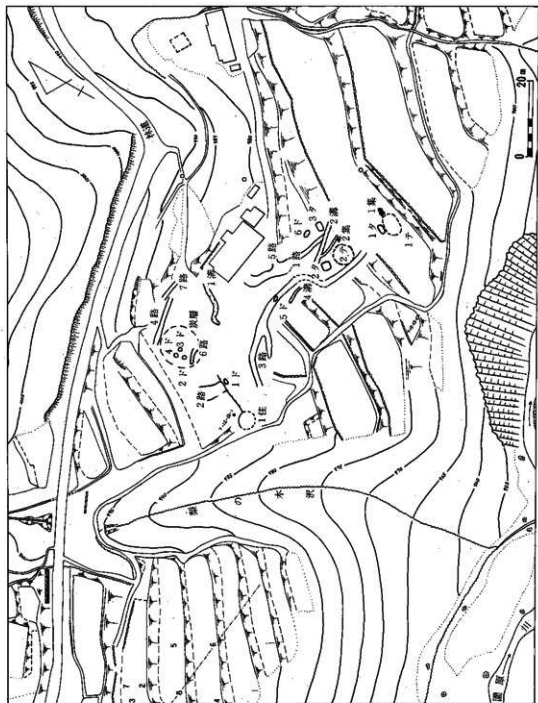
縄文時代の遺物は極めて少量であったが、b・d面に集中している。もっともb面のもの(6)は、南端の國原川縁で見つかっているが、田地造成時に土が移動された可能性が強く、原位置はここでないかわからない。縄文の住居址は今回がはじめてで、唯一のものである。この住居址もd面に位置していることを考えると、縄文時代は杉の水平の上段方面が使われていたことがわかる。

信濃坂を中心とする古代東山道開設以前の交通を裏付けるものに、峠西の「水またぎ」で縄文中期、峠縁線の南側、恵那山寄りの鞍部で縄文中期、後期の遺物が、前回調査で縄文時代の剝片石器、弥生後期の遺物などがあったが、今回の調査結果からすれば、峠東麓で生活がなされたことが住居址から判明したことと、交通の時期がすでに縄文早期からであったことが確認されたことになる。木曾川水系と、天竜川水系の谷々を結ぶ信濃坂の歴史はずっと古くにさかのぼったことになる。

(高沢)

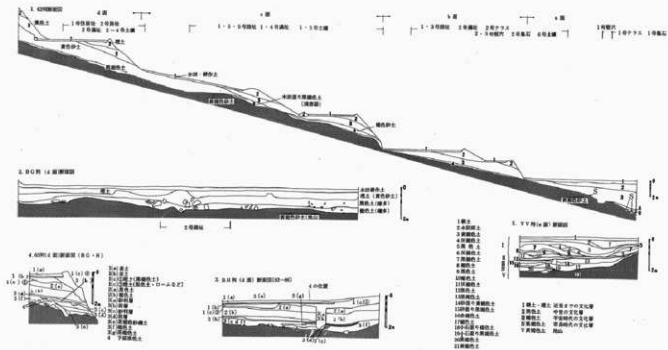
表3 杉の木平遺跡B地域出土土器類一覧表

	土 師 器			須 恵 器			灰 輪 陶 器		緑 青 山 茶 碗		常 滑		瀬 戸		近 世 陶 器								
	杯	高 環	壺	壺	環	高 環	壺	皿	おろし 皿	輪 陶 器	鉢・片口	壺	皿	鉢		皿							
1号テラス	4	14	6	6	20	5	2		8	16	2	1	3		2		1						
2号テラス	2			6	3																		
1号路址	91	28	1	4	9	32	11		10	60	25		1	12		5	1	1	1				
2号路址	3			1	1	3	5	1	2	8			1	8	3	11	1		1	1			
3号路址	111	13		10	2	46	5		5	63	25	2	4	22	3	2	3		6				
4号路址	15	15			1	5	9		3	21	11			2	5	1			6		2		
5号路址	4	1				5	1		5	11													
6号路址	1																						
1号整穴	1	7		2			1																
2号整穴																			1		3		
3号整穴	4								1										1	1	1		
2号土壌	30	10				3			3														
3号土壌	2					1																	
4号土壌	10	5																					
5号土壌																1							
6号土壌	1																						
1号溝址	13	16			3	6	8		4	26	14		1	4		7		4			2		
3号溝址						1											1						
炭層付近(B)	19	27			4	7			3	27	17		27	7		6				1			
炭層付近(F)	47			6																			
その他Ⅰ	23	10			1	8	4		3	8	2		2	8		5		1	4	2	1		
その他Ⅱ	32	6			1	16	5	1	18	26	5		2	6	18	6	13	1	20	1	2	1	1
その他Ⅲ	21	18				4			1	23													
そ の 他	a面				21			8			11				6		4				1	1	
	b面				27			5			18	1			18		13				5	1	
	c面				19			9			32	2			12		2				3	1	
	d面				43			18			25	5			10		6					3	
備 考																							



(A)地域の遺構 1 石製樽型高出土塊 2 1号住居址 3 2号住居址 4 柱穴群 5 柱穴群 6 土器 7 土器 8 土器 9 土器 10 土器 11 土器 12 土器 13 土器 14 土器 15 土器 16 土器 17 土器 18 土器 19 土器 20 土器 21 土器 22 土器 23 土器 24 土器 25 土器 26 土器 27 土器 28 土器 29 土器 30 土器 31 土器 32 土器 33 土器 34 土器 35 土器 36 土器 37 土器 38 土器 39 土器 40 土器 41 土器 42 土器 43 土器 44 土器 45 土器 46 土器 47 土器 48 土器 49 土器 50 土器 51 土器 52 土器 53 土器 54 土器 55 土器 56 土器 57 土器 58 土器 59 土器 60 土器 61 土器 62 土器 63 土器 64 土器 65 土器 66 土器 67 土器 68 土器 69 土器 70 土器 71 土器 72 土器 73 土器 74 土器 75 土器 76 土器 77 土器 78 土器 79 土器 80 土器 81 土器 82 土器 83 土器 84 土器 85 土器 86 土器 87 土器 88 土器 89 土器 90 土器 91 土器 92 土器 93 土器 94 土器 95 土器 96 土器 97 土器 98 土器 99 土器 100 土器

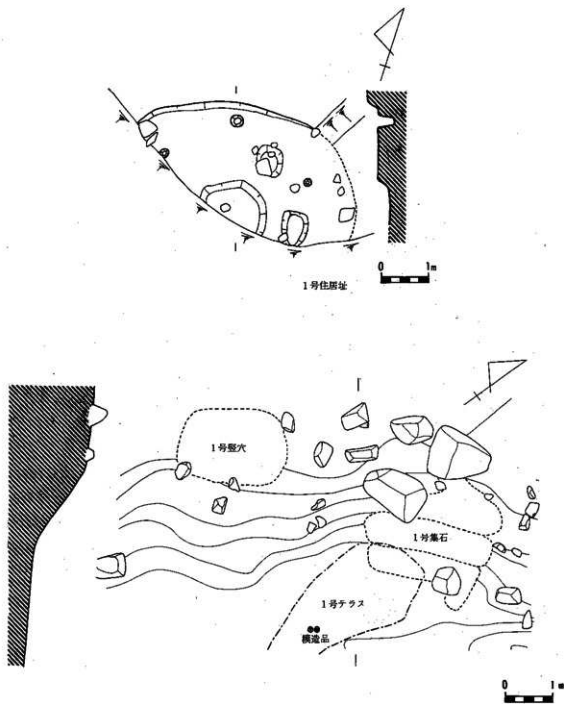
第5図 杉の木平 (B) 遺跡地形・遺構配置見取図



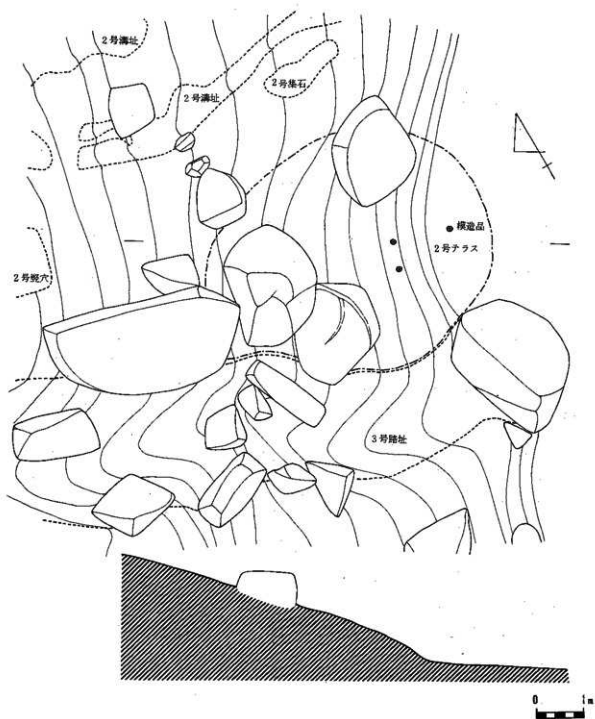
第4図 砂の水平(北)遷移地層図 1. 1km断面 2. 2km断面 3. 3km断面 4. 4km断面 5. 5km断面







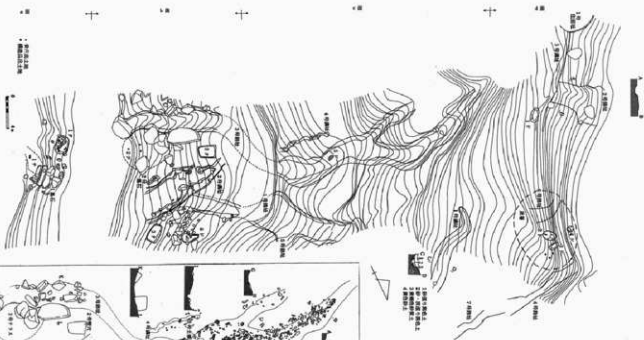
第7図 杉の水平(B)遺跡1号住居址, 1号テラス遺構図(1:80)



第8図 杉の水平(B)遺跡2号テラス遺構図 (1:80)

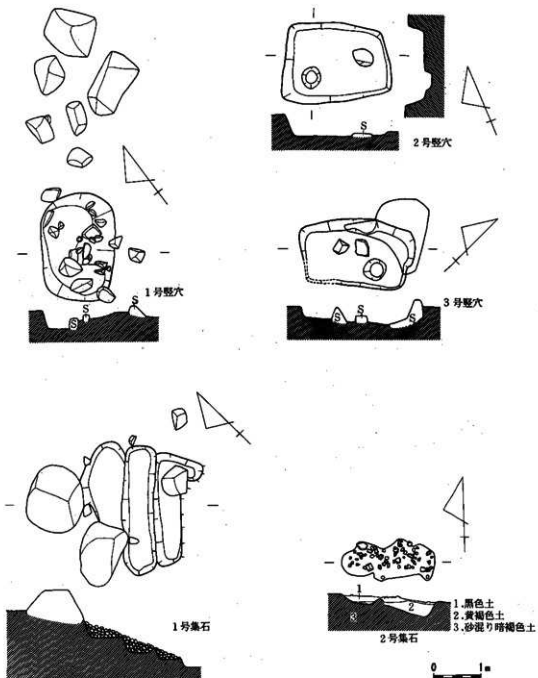


第10図 杉の水平(中) 遺跡1・3・5号跡地配石遺構図

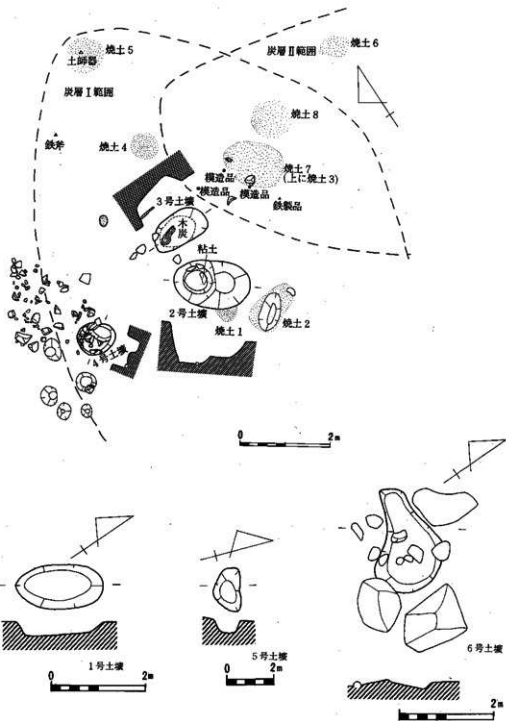


第9図 杉の水平(右) 遺跡1-7号跡地・1-4号跡地遺構図

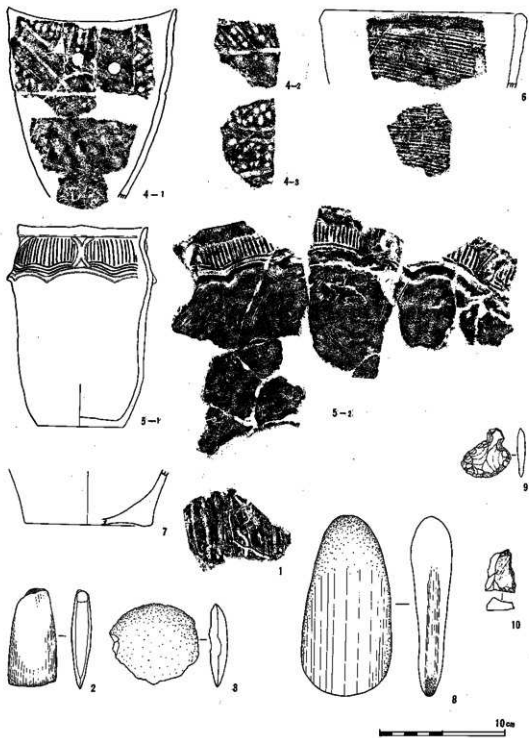




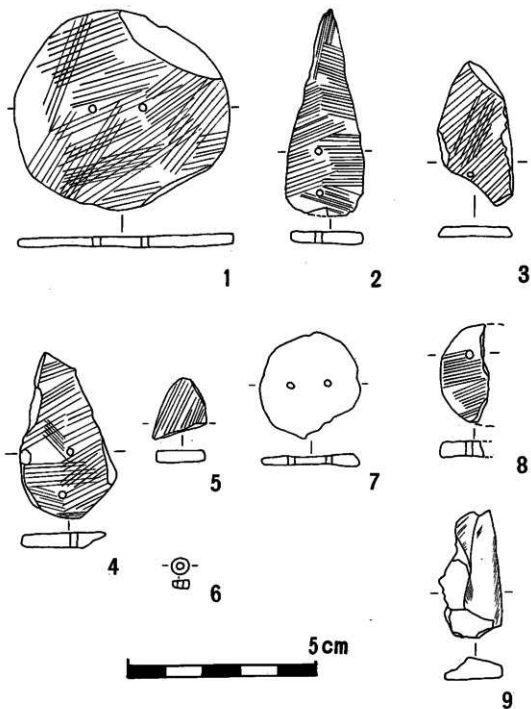
第11図 杉の木平 (B) 遺跡1～3号壺穴, 1・2号集石遺構図



第12図 杉の木平 (B) 遺跡 1~6号土壇遺構図炭層範囲図 (1:80 5号土壇のみ 1:160)

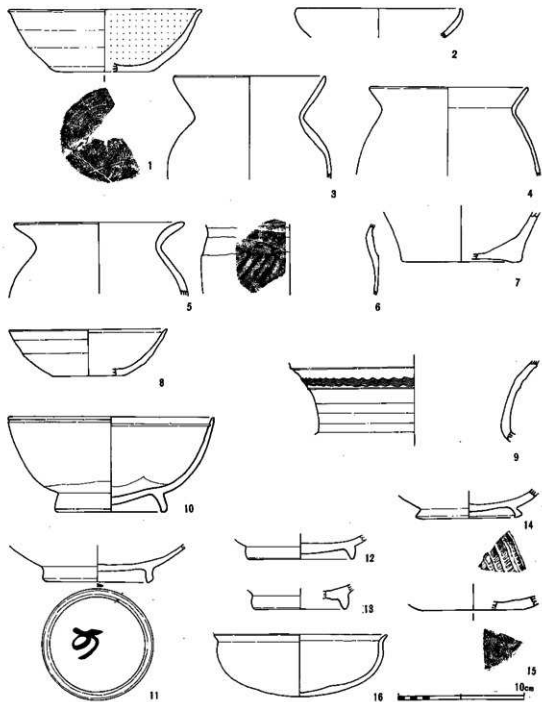


第13図 杉の木平(B)遺跡1号住居址・遺構外出土土器・石器 1~3 1号住居址  
4~10 縄文時代遺物

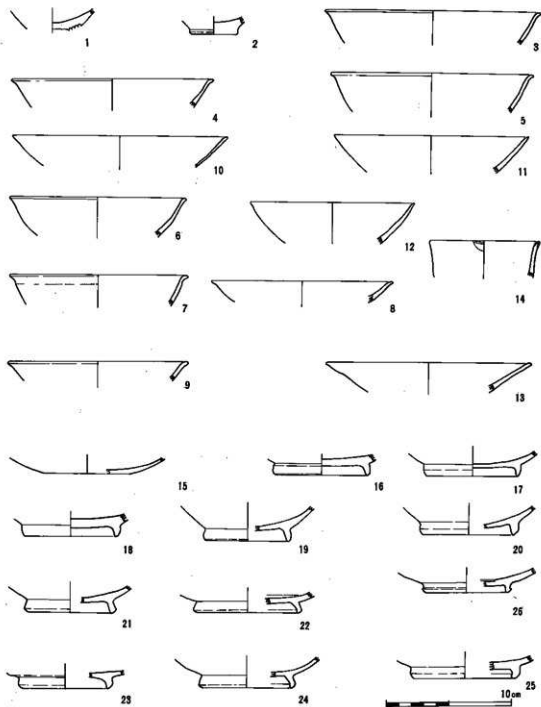


第14図 杉の木平(B)遺跡出土石製模造品(1~3 1号テラス, 4~6 2号テラス, 7~9 炭層付近)

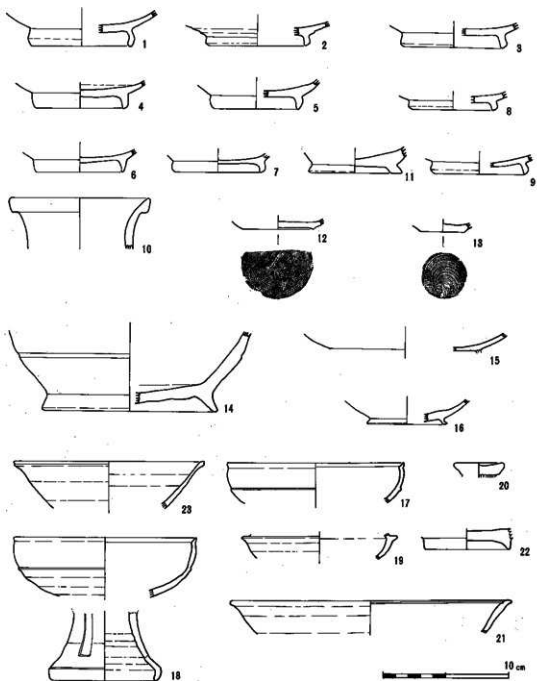




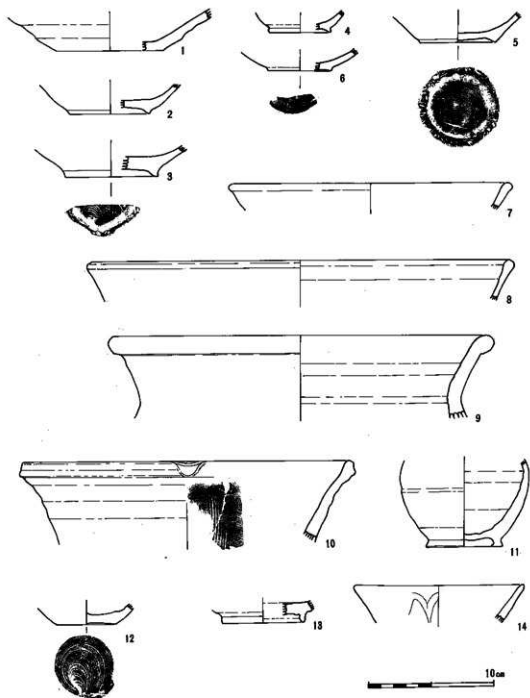
第15図 杉の木平(B) 遺跡1・2号テラス出土土器(1~15 1号テラス, 16 2号テラス)



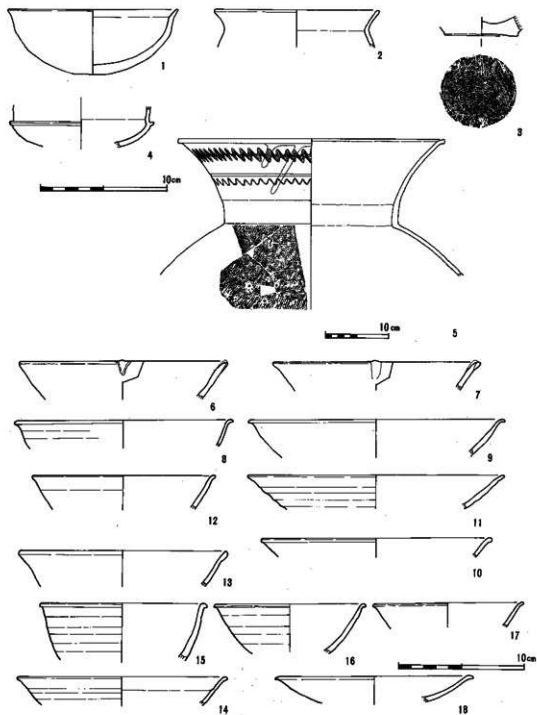
第16図 杉の木平(B)遺跡1号跡址出土土器



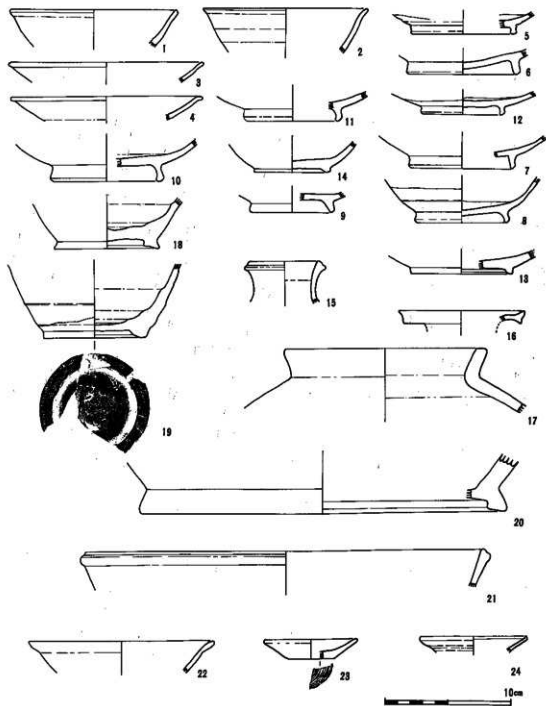
第17図 杉の木平(B)遺跡1・2号路址出土土器(1~16 1号路址, 17~23 2号路址)



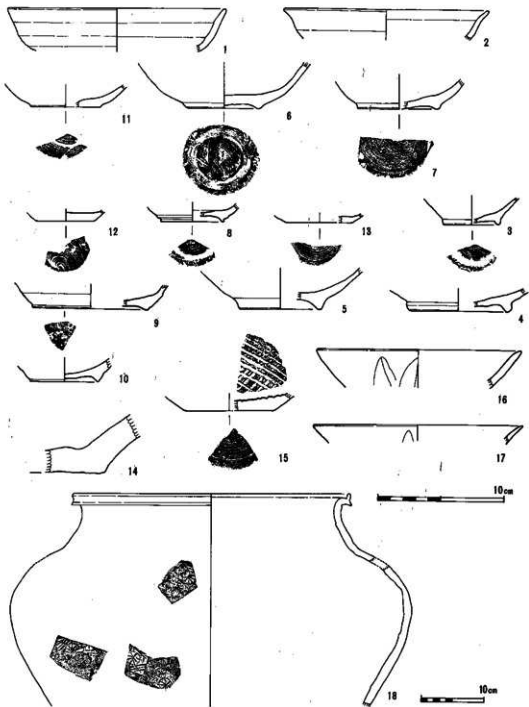
第18図 杉の木平(B)遺跡2号跡址出土土器



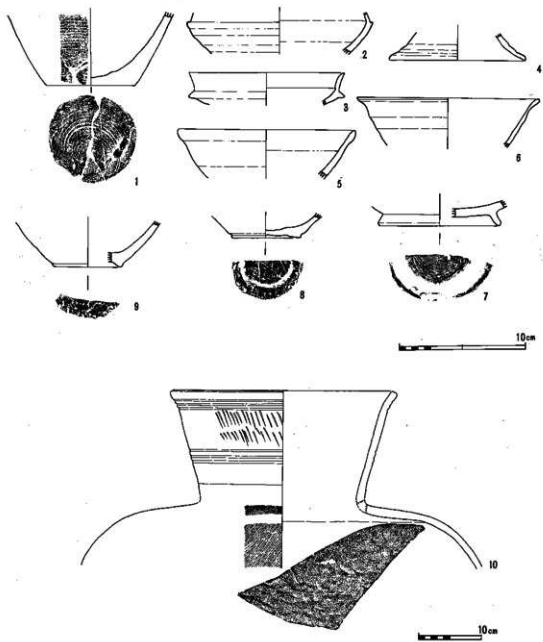
第19図 杉の木平(B)遺跡3号路址出土土器



第20図 杉の木平 (B) 遺跡3号路址出土土器

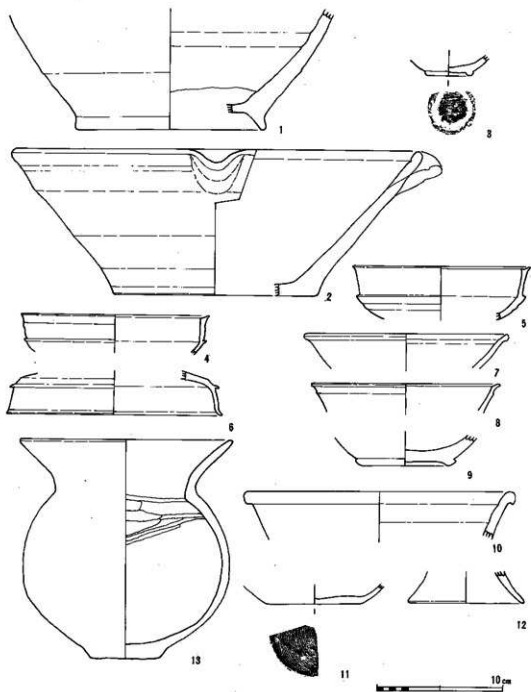


第21図 杉の木平 (B) 遺跡 3号路址出土土器

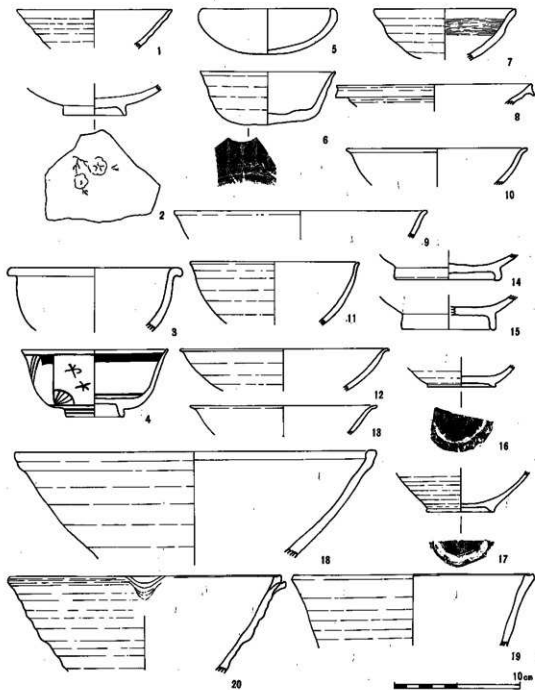


第22図 杉の木平(B) 遺跡4号跡址・3号溝址出土土器(1-9 4号跡址, 10 3号溝址)

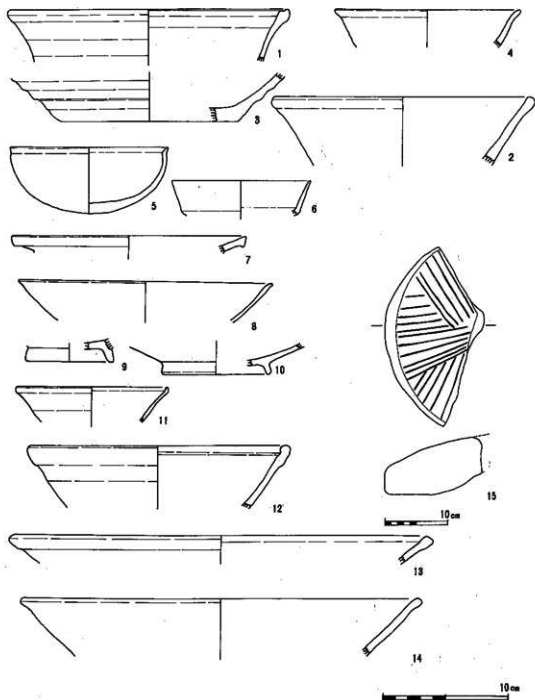




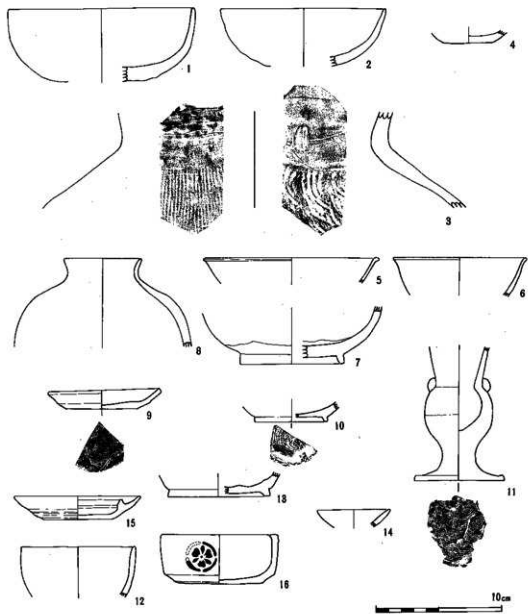
第23図 杉の木平(B)遺跡4・6号跡址, 1・3号溝址, 2・4・6号土坑出土土器  
 (1 4号跡址, 2 3号跡址, 3 6号跡址, 4~10 1号溝址, 11 2号土坑, 12 4号土坑, 13 6号土坑)



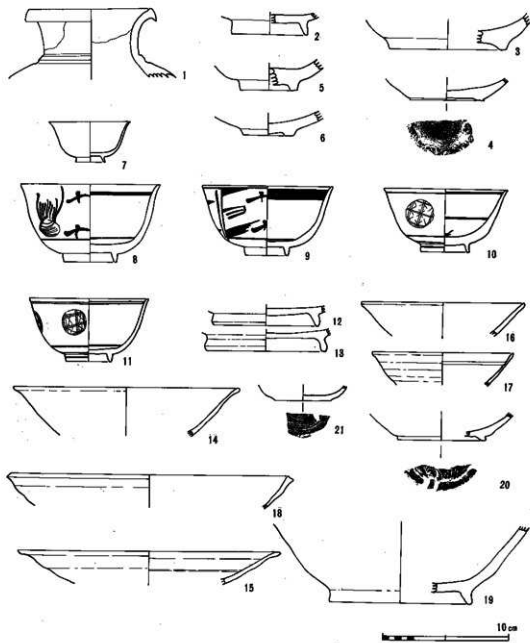
第24図 杉の木平(B)遺跡1~3号竪穴址・炭層付近出土土器(1 1号竪穴址, 2~3 2号竪穴址  
4 3号竪穴址, 5~20 炭層付近)



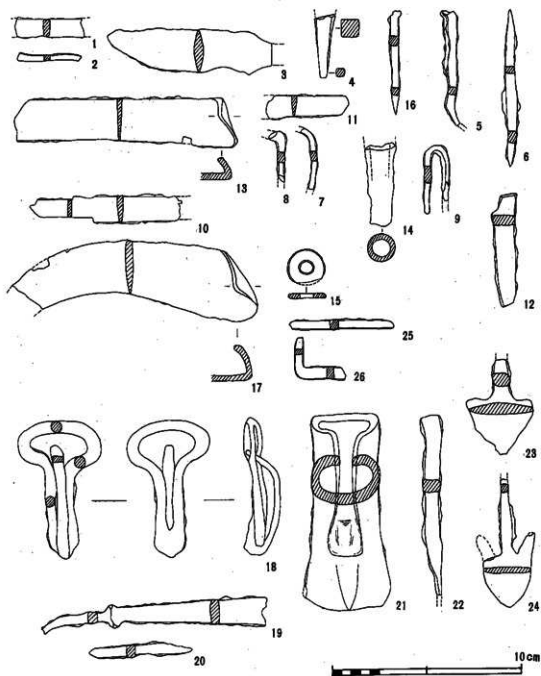
第25図 杉の木平 (B) 遺跡炭層付近・遺構外出土土器 (1~4 炭層付近, 5~15 その他)



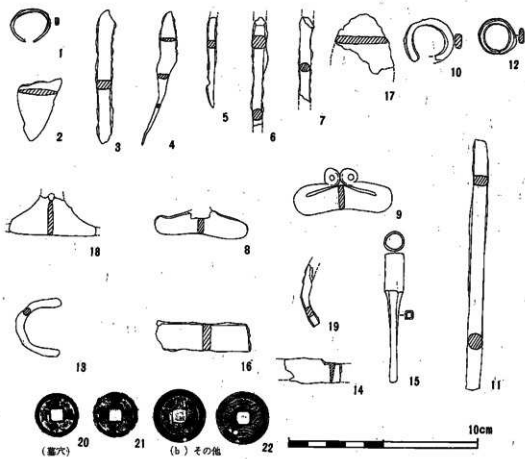
第26図 杉の木平 (B) 遺跡遺構外出土土器 (その輪b)



第27図 杉の木平 (B) 遺跡遺構外出土土器(その他c・d) (1~11 その他d, 12~21 その他c)



第28図 杉の木平(B)遺跡出土鉄製品(1~2 1号跡址, 3~4 2号跡址, 5~15 3号跡址, 16 4号跡址  
 17 1号溝址, 18 炭層2, 19~23 炭層1, 24 2号土城, 25~26 4号溝址)



第29図 杉の木平(B)遺跡出土鉄製品・古銭

### 3 杉の木平遺跡A 地域調査結果

#### 1) A 地域の位置

杉の木平遺跡は、圓原段丘の最上段、富士見台から流れ出る圓原川の谷がや・開けるあたり、神坂神社前から梨の木沢をはきんで形成される崖面上に立地する遺跡である。以前から土師器や中世陶器の完型品をはじめ、縄文時代から中世にいたる遺物包蔵の多い所として知られていた。とくに林道から南東へ続く階段状耕地には、土師器片・須恵器片・灰釉陶器片・中世陶器片の表採が多くでき、圓原遺跡群の中でも注目される遺跡のひとつである。この遺跡は、その中央を侵食して流れる梨の木沢によって区切られ、この沢を境にして恵那山トンネル飯田方斜坑の第1期坑と第2期坑の用地に分かれているので、梨の木沢と神坂神社にかけての地帯をA地域、梨の木沢から下方朝日松を含む児の宮遺跡にかけての一带をB地域と呼び、A地区の発掘調査は、昭和46年9月から10月末にかけて実施され、そのあと、斜坑掘削工事が進んでいるので、原地形は殆んど残っていない。林道から圓原川に面する崖端にかけて造成された8段の耕地(写2・3・4)のほぼ全地域から出土した遺物の量は夥しく、調査の成果は多大であった。段丘状に発達した崖面上にあるため、その堆積層は厚く、遺物の包含層が3m～4mの深さに及ぶ所さえあった。土層を大別すると、上層から耕土・黒色砂土・黄褐色砂土・茶褐色砂土があり、その下層は黄灰色砂礫土の地山である。茶褐色砂土層までが遺物包含層であって、とくに、黄褐色砂土層の堆積は厚く、上層は砂質、下層は粘質土で、所によっては、その中間に何層かの炭層がはさまれ、この炭層中にはとくに遺物包含が多かった。(図30、写45)遺物を見ると、黒色砂土層は中世陶磁器まで、黄褐色砂土は平安時代、茶褐色砂土は古墳～奈良時代の包含層で、それぞれの文化層に分かれていることが歴然としていた。(今村)

#### 2) 遺物の種類と遺構

主な遺物をあげて見ると、縄文時代中期初頭の土器片のほか、不定形の割片石器、弥生時代の最終末と思われる変形土器片10数点が出土している。土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・各種中世陶器片は各種各様多量に出土しているので、一覽にしたものが表4・5・7～9である。表中のA・B・Cは8段の耕作面を圓原川崖端から上方にかけて呼称したものである。石製模造品は21こ、そのうち剣形模造品9、円板形模造品7、未成品5で、うち9こは石製模造品出土地からの出土である。緑釉陶器片は、総数197点で器形を確実に知れるものは少ないが、器種は碗形17、段皿4、輪花碗5などが推定される。その所産をみると、器内・滋賀泉涌・尾張産のものである。青磁陶器片も総数171片あり、すべて北宋電泉窯のものである。白陶器は3点出土している。鉄製品・銅製品は200以上、古銭は179枚で江戸時代の幕藩出土のものを除けばみな渡来銭である。硯は5こ、磁石は164こが出土している。



表4 杉の木平遺跡A地域遺構別出土土器・陶器一覧表

遺物	石製遺品 出土数	住 居 址			灰 層						
		1住灰土	1住灰	2住	灰1	灰2	灰3	灰4の1	灰4の2	灰5	灰6
土	埴	● 2	●	● 2	●	●	●		●	●	●
	内息埴		● 1	●	● 3	●	●	●		●	●
	まり	● 2									
部	覆	● 3	●	● 3	● 1	● 3	● 1		● 1	● 1	●
	片埴	●	● 1	● 1	●	●			● 1	●	
	片口蓋	●				● 1					
須	埴(蓋)	● 1	●	● 1		●	●		●	● 蓋密1	
	蓋		●		●			●		● 1	
	鉢	● 1	●	● 1	●	● 2	●	●	●	●	
灰	鉢			●		● 1			●	●	●
	皿		●	● 6				●	● 1	● 1	●
	段皿		●	● 1				● 1	●	●	●
陶	耳皿		● 1	● 2			●	● 蓋密1			
	碗	● 1	● 1	● 3	● 1	●	●	● 蓋密1	● 4	● 2	●
	輪碗		●		●	●		●	●	●	
群	蓋	●	● 1	● 3	●	●	●	●	● 1	●	● 1
	瓶		●	●				●	●	●	
	群陶器	● 2	● 4					● 2	● 1	●	● 1
瓦	蓋							●	●		
	鉢									● 鉢1	● 鉢1
	皿	●									
山	瓶										
	鉢										
	瓶										
常	下皿										
	片口										
	蓋										
占	蓋										
	鉢										
	鉢										
川	片口										
	下皿										
	火鉢										
他	蓋										
	瓶										
	合子										
水	蓋										
	蓋										
	水溝										
説 明	除石の部分に遺物多	灰層多			土層多	土層・灰層多 灰層少	下層は土層のみ	灰層多	灰層多	灰層少者少の付帯は台式	灰層多
其の他の遺物	石製遺品 土器 高杯 カブト 網罟片	鉄器10						鉄器多 磁石多			

●遺物有、○の数字……報告書記載枚数

産物	配石産地						柱穴産地		磚	
	産1	産2	産3	産5	産6	産1	産2	産1	産2	
環	●				●	●	●		●	
内環	●		●		●	●	●			
まり										
環	●		●			●	●		● ●	
台環	●					● 1	●			
高環										
片口環							● 2			
環(盤)	●				●	●	●		●	
盤	●		●	●			●			
盤	● 2				●		●			
鉢										
環	● 1					● 1	●			
紋環	● 1						● 2			
耳環	● 1						●			
鉢	● 2			●	●	● 高器1			● 高器	
陶花鉢						●	●			
盤	● 2			●	●	●	●			
灰										
鉢陶器	●									
甕			● 1		● 1		●			
甕				●	●		●			
瓦				●	●		●			
瓦		●	●				● 2			
山							● 1	●		
鉢		●	●	●	●		● 1	●		
鉢			●	●	●		● 1	●		
下環			●	●			●			
片口			●				●	●		
盤							●	●		
環										
甕			●	●		1	● (市1)			
甕			●	●			● 1			
片口			●	●	●		●			
下環							● 1	●		
天目		●	●	●	●	1	●	●		
指鉢		●	●	●	●		●			
甕		●	●		●	1	● 1	●		
鉢				●			●			
合子						1	● 5			
甕							● 1			
水筒							● 1			
説明	土質・灰質は 1/2同量	全体少	土質灰 質少量			灰質多				
其他の産物	鉄器 6 磁石 6					鉄器 8 磁石 6 陶器		鉄製品 磁石 石字 に多		

表5 杉の木平遺跡A地域・地区・層別遺物一覧表

地区	遺物	第 1 層 ( 耕土 )										第 2 層 (黒褐色砂土)														
		土器	須恵物	雑物	青銅	山文瓦	古瀬戸	近陶	石製硯	石製品	鉄器	青銅品	古銭	土器	須恵	雑物	青銅	山文瓦	古瀬戸	近陶	石製硯	石製品	鉄器	青銅品	古銭	
A		○	○	○	○	○	○	○																		
															オシロコ瓦											
B		○	○	○	○	○	○																			
				網																						
C		○	○	○	○	○	○																			
				花文1																			網			
D		○	○	○	○	○	○																			
		漆器1								漆器1	漆器1	漆器1	漆器1	漆器1	漆器1	漆器1	漆器1	漆器1	漆器1	漆器1	漆器1					
E		○	○	○	○	○	○																			
			漆器2	網1	木製	漆器3									漆器4	漆器4	漆器4	漆器4	漆器4	漆器4	漆器4					
F		○	○	○	○	○	○																			
			漆器			漆器2													漆器4							
G		○	○	○	○	○	●																			
		漆印				漆器3	漆器2	漆器2							漆器1	漆器2	漆器2	漆器2	漆器2	漆器2	漆器2					
H		○	○	○			●																			
															漆器	漆器1	漆器1	漆器1	漆器1	漆器1	漆器1					

地区	第 3 層 b (黄褐色砂土)										第 3 層 c				第 4 層 (高褐色砂土)								
	土	灰	砂	砂	山	近	石	石	粘	古	土	灰	砂	砂	山	土	灰	砂	砂	山	近	石	
A	○	○	○	○	○	○																	
A	○	○	○	○	○	○										○	○						○
		泥																					
C	○	○	○	○	○	○										○	○						○
D	○	○	○	○	○	○				○						○							○
		泥														高							
E	○	○	●	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○									
		泥	段		泥						泥		○	○									
F	○	○	●	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○									
																高	泥						
G	○	○	●	○	○	○		○	○	○	○	○	○										
	泥	段	泥		泥																		
H	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○										
																高							

表 6 杉の木平遺跡 A 地域出土古銭一覽表

期	銭名	铸造年	柱穴 群1	柱穴 群2	配石 群2	土質 群3	A	B	C	II	D	II	E	IV	III	F	II	G	II	III	III	III	不明	計	%	医番号 (32箇)	
Ⅷ	開光通宝	621		2			1							2	1	1	1	1	1	1	1	1		9	6.5	1.柱穴群2.G13.A24.H2	
	淳化元宝	991																						3	2.2	5.G3	
	至道元宝	995~997											1											1	0.7	6.E2	
	咸平元宝	998~1003		1									1											4	2.9	7.柱穴群2.SD2	
	景德元宝	1004~1007																						2	1.4	9.H2	
	祥符元宝	1008		1																				2	1.4	10.柱穴群2.11F2	
	祥符通宝	#		1										1										5	3.5	12.G2	
	天禧通宝	1017~1021																						2	1.4		
	天聖元宝	1023		2								1												5	3.5	13.14.柱穴群2.15D1.16E3	
	明道元宝	#		1										1									1	2	1.4	17.E2	
	景祐元宝	1034		1																				3	2.2	18.柱穴群2.19H3	
	嘉祐通宝	1038		3																				15	16.5	20.21.H2.22.C3.23.H3	
	嘉祐通宝	1050~1063																						2	1.4	24.E1.25.G3	
	至和元宝	1054																						2	1.4	26.G2	
	熙寧元宝	1068		1																				14	9.9	27.柱穴群1.28.柱穴群21.29.30.E2 31.33F2.34.35.G3	
	元豐通宝	1078		3																				1	13	9.3	35.36.柱穴群2.39E3.40F2
	元祐通宝	1083		2		1																		19	13.2	41.柱穴群2.42.柱穴群243-45E2.46-47F2.48.49G2.50-54G3	
	紹聖元宝	1094~1097		1																				3	2.2		
	元符通宝	1100																						1	0.7		
	聖宗元宝	1101																						2	1.4		
大觀通宝	1107																						3	2.2	55H2		
政和通宝	1111																						6	4.3	56.57F2.58H2		
宣和通宝	1125																						1	0.7			
宣和通宝	1174				1																		1	0.7			
洪武通宝	1368																						2	1.4	59E		
永樂通宝	1411						1																6	4.3	60B.61.62F2		
正德通宝	1433																						1	0.7	63D2		
不明																							1	0.7			
計			1	24	2	1	1	1	2	1	1	3	2	21	4	3	26	2	28	17	18	5	1	165	100		

遺構については、この遺跡の性格上判然としたものは少なかったが、判然としたものは住居址2軒、土  
壇4こ、配石遺構2～3か所であるが、遺物の集中的出土状況と周辺の状況とを合わせて遺構と考えられ  
るものは、石製模造品出土地1か所、柱穴群2か所、配石遺構3か所、炭層6か所、溝状遺構3本である。  
このうち石製模造品出土地と炭層1・2は古墳時代、住居址1・2、柱穴群1、配石遺構1、炭層3・4・  
5・6は平安時代、柱穴群2、配石遺構2・3・4・5・6、炭層6、溝状遺構1・2は中世、土壇1・  
2は江戸時代のものである。

石製模造品出土地、1号住居址、2号住居址、柱穴群1・2、配石遺構1、炭層4について説明するど  
つぎのとおりである。

#### ア 石製模造品出土地 (図31, 34の1-13, 49の3・7-14, 写44の152)

下方B地区とD地区の中央辺で確認されたもので、その範囲は幅6～10m、長さ12mほどにわたった緩  
傾斜面である。西側崖端部には、積石のような自然礫層が土堤状に続き、そこから東へ急勾配に落ちこん  
でいる。累石の間には須恵坯蓋、石製模造品のほか、土師器片・須恵器片が出土している。東側に続く緩  
傾斜面は、下方では砂質面、上方には石畳状の面があって、わずかではあるが炭まじりの黒土があり、石  
製模造品や何か所に集中する土師器片が発見されている。この面は茶褐色砂土層で、その下層は地山であ  
る。土器片の集中か所は、下方砂土の面で10か所、上方自然礫層上に3か所あって、1個体の土器片が1  
mほどの範囲に散乱し、打ち壊されたようにも思われる。石製模造品9こは散在している。この緩傾斜面  
は、意図的に石を取り除いて平地を作ったように思われ、焼土はないが炭の集中が見られること、土器片  
の出土状況から推して一種の祭祀場かも知れない。上方自然礫層上や、上段西側の礫層上からも遺物の発  
見が多かったが、堆積の深さと排土の都合で未調査区が残ってしまったが、第2次調査の結果から見て、  
或いは道路状遺構の一部かも知れない。

遺物 ここから発見された遺物は多いが、土師器の胎土は粗悪で細片が多いので器形の知れるものは少  
ない。弥生終末土器片、須恵器もあるが大部分は土師器である。石製模造品は9こである。

弥生末期のものは、甕(図34の9～11)、高環形土器(12)で、このほかにS字状口縁の変形土器もあり  
欠山期併行のものである。土師器は碗(2～5)、甕(6～8)、高環形土器(13)、須恵器は蓋(1)  
が出土している。碗形土器では口縁の立ちあがるもの(2)、底部に近く段を構成するもの(3)、鉢形  
に近いもの(4～5)がある。甕形土器は口辺部が大きく外反し、球形網になるもの(8)と長胴化し備  
目状の整形痕を残すものがある。このほかに球形網の変形土器片2個体がある。須恵器の蓋は、暗灰色を  
呈し、胎土は精選された薄手のもので、体部の突出部は鈍く、深い沈線が刻みこまれる。Ⅱ期に比定され  
るもので、土師器とともに古墳時代中期のものである。

石製模造品は9こ出土し、剣形4・有孔円板4・未製品1で全部滑石製である。剣形は、片面のみ鋸の  
あるもの(図49の3)、両面に鋸状板状のもの(7・8・10)の2種類で、9は未製品である。円板は、  
外周がほぼ円形で双孔のもの(11～13)と隅丸長方形で一方に片よった単孔のもの(14)があり、上方か  
らは滑石原石片が2こ出土している。出土状況はみな単独で、玉類は1こも発見されていない。形状、石  
質、製法等神坂峠出土のものに類似している。

(今村)

イ 1号住居址 (図32, 34の14-21, 35, 36, 写44の153・154)

遺構 林道下方2枚目の水田のはば中央あたり、現在の斜坑トンネル坑口の西前に位置する。住居址は黄褐色砂土下層と地山を掘りこみ、地面から床面まで2.25mを測る。北壁は急勾配に上昇する地山を削り、その南に続く緩傾斜面を掘り下げているので、崖面を背にし、東西は掘りこみの深い壁、南は傾斜面に開口する状態で、日照、防風面から見ても好適な自然立地を示している。覆土は二層あって、床面直上までは薄い炭まじりの黒褐色砂土、その上に粘質の茶褐色土が堆積している。覆土上は、厚い炭層が重なり、この炭層は西側から東へ傾斜しながら長く続いているが、とくに住居址の上方では厚く40cm以上である。後述の炭層4である。プランは主軸8.2m、南北7.08mの隅丸方形で、主軸方向はN 80° Eである床面は非常に固く、東南隅付近では二重の床面が確認され、上面は木炭片を多く含む張り床である。壁高は、北が96cm、西は72cm、東は北側で70cm、南側で36cm、南は26cmで、山を背にした傾斜面の利用を如実に物語っている。カマドは3基あった。カマド1は、東南隅壁沿いにあり多量の平状石と角礫で構築され、保存状態は最もよい。カマド2は東南隅壁沿い、カマド3は東隅壁に構築されていたが、2・3ともたき口の数この石と焼土を残すのみで廃絶されたものようである。カマド1は、たき口部とその軸はつぶれていたが、煙道部は保存状態がよく門形のトンネル状に石が組まれていて、残存部は4mあるので原形は5mはあったであろう。柱穴は内部はさだかでないが、中央部主軸方向に2こ、各壁沿いに深いもの11こ、他のピットは支柱穴であろう。住居内各所に焼土が見られた。伴出遺物は灰軸陶器が主体で、住居内全域から出土しているが、完形品はカマド1周辺からの出土が多い。何回か使用された形跡を持つが、平安時代末期のものと思われる。

遺物 土器は、灰軸陶器を主体として多量に出土し、刀子、鉄銚、礫石も出土している。土器は覆土と床面のものに分ける。図34のものは覆土出土土器である。土師器は内面黒色、暗文を付す椀形土器(14)、台付甕形土器(19)で胎土は茶褐色、精製されたものである。緑軸陶器は、軟質の尾張産の坏(16)、硬質で深緑色の畿内窯のものや、灰軸陶器は、篠岡窯の椀と耳皿(15・21)、虎渓山窯の瓶(18)などで、小皿(20)もまぎれこんでいる。

床面からは多量の灰軸陶器・土師器が出土し、須恵器も相当量出土している。灰軸陶器はとくに多く図35の4~20、図36の1~5までのもので、表7にまとめて見た。胎土を見ると、図35の6・7は黒灰色、8・12は灰白色、其の他は白灰色である。

表7 1号住居址床面出土灰軸陶器 (内は国内番号を示す)

陶器名	窯址群名	図番号	器種
灰軸陶器	美濃須賀	35	皿(6) 椀(7)
	築投	35	手付小瓶(2) 段皿(8) 輪花椀
	尾北(篠岡)	35・36	椀(10・13・1) 耳皿(9)
	美濃(多治見)	35	大形広口壺(20)
	東濃(永田)	35・36	皿(4・5・7・9) 椀(11・12・14・16・2・4・5) 耳皿(20)

施釉は、透明なものが多く、白色がかったものもある。表で見ると永田窯とされるものが多い。21は手付瓶の口縁と手のとれたもの、図36の4は墨書土器であるが、その文字の読みは不詳である。このほかに灰軸陶器片の出土も多い。

土師器の坏形土器(図35の1)は、胴部に稜を有する黄褐色のもので、ヘラ状

器具による整形痕を残している。変形土器（図36の7・8・10）は、ロクロ水引技法による成形で、櫛状工具による横なで整形痕を残してしている。台付変形土器（9・12）は、巻き上げ成形で、胴上部は横に、下部にかけては縦にへらけずりのものである。須恵器系の坏（図35の2・3）もある。図36の6は、片口鉢である。内面と口辺部の一部は黒色処理されている。このほかに、内面黒色、両面黒色椀形土器も出土している。このほかに須恵変形土器片や、緑釉陶器片4点が出土した。

鉄製品は、刀子、鉄鏃、釘等である。鉄鏃は、両丸造腰袂柳葉式と片刃式鉄鏃の類であろう。石器は7個すべて砥石で、粘板岩製と砂岩製である。（矢口）

#### ウ 2号住居址（図37の1-4）

遺構 1号住居址の西側やく1.5mの所にあり、上層を炭層4が覆っている。茶褐色がかった黄褐色砂土下層から掘りこんでいるが、その土層断面は10cmに過ぎず、しかも住居の北西側は高い石垣の下にあるため、そのプラン、様相は不明である。床面は、1号住居址の床面より80cmも高い位置にある。床面は軟弱ではっきりしないが、焼土と木炭の多い面が続いている。柱穴は11こを数えるが不規則で主柱穴は不詳である。カマドは東壁沿い南寄りにつくられるがすでに破壊されて原形を止めないが、焼石と粘土が見られる。1号住居址とともに平安時代末期のものと思われる。

遺物 比較的少ないが、図示したものはすべて土器である（図37の1-4）。1・2は内面黒色、3は両面黒色処理され、ロクロ成形の環形土器である。4は変形土器で、櫛状工具による横なで整形痕が残る。このほかに土器片・須恵器片・灰釉陶器片が出土している。これらは皆平安時代末期のものである。

鉄製品は、鉄鏃と茎である。鉄鏃は両丸造三角形式のものである。（矢口）

#### エ 柱穴群1（図33, 37の5-11）

遺構 傾斜面の中ほど、西側先端部にあった。現在の斜坑工事場の西南隅あたりであろう。西側崖端から15m くらいの間は人頭大以上の自然礫層が続き、この礫層が切れるあたりから東西3m、南北4.5m くらいの範囲内の緩傾斜面に、径30cmほどのピットが30以上発見された。中には列状に並ぶところもあるが、全体的には不規則で、深さもまちまちである。遺構面は黄褐色砂土上層にあたる。その面には焼土が続き、や・固さを持っている。焼土の範囲は北東部で5m～6mのほぼ円形状に広がり、その上には10cmほどの厚さで消灰と灰土の混入の多い層がのって、炭混りの範囲は径10mほどに広がっている。柱穴の集中する所は、この炭の層の中間部から南にあたる。この炭層の下部からは、灰釉陶器片と土器片が多量に含まれ、あたかも土器片の層をなしているほどである。焼土面の所はほぼ平坦に近く、この平地は西南の礫層の一部に連っている。南側では地形の傾斜に沿って東南に緩く傾斜し、わずかな段がついていた。この中で焼土や炭層はとくに集中したところはなく全体に広がっていて、この付近で火をたいたことは明瞭である。数多くの柱穴と合わせて推量すれば、何回かにわたって燃立柱でも建てた所と思われる。この場所南側に溝が掘られていたが、これは中世のものと思われ、焼土や炭層中からの遺物から見て柱穴群は平安時代末のものであろう。この柱穴群の南東は、黒土の堆積が厚く大きな転石群がある所から、



崖端上に存在するテラス状遺構のひとつであろう。

遺物 柱穴群1の上層の堆積は浅く、水田の床土下から出土する土器片はほとんど灰釉陶器と土師器であり、炭層下部は灰釉陶器と土師器に限られる。炭層下部から剣形石製模造品と未製品が出土している。灰釉陶器片の出土は多量であったが、細片が殆んどで器形の知れるものは、碗(図37の5・6)だけである。6の底面に墨書があるが読み方は不詳である。5は美濃須術、6は東濃水田窯のものという。7は台付変形土器である。8～11は溝状遺構3からの出土品でみな古瀬戸の陶器である。8は口縁部のみに黄緑色の釉のかかった小皿、9の胎土は白灰色、鉄釉がかかる天目茶碗、10は底面にオロシ目のある皿の底の一部、11は、全面に薄い灰釉のかかる合子である。この一帯ではほかに、青磁陶器片2点のほか、土師器片・須恵器片・灰釉陶器片・中世陶器片の出土が多いが、柱穴群は平安時代のもの、溝状遺構は中世のものである。

鉄製品は4こあり、片刃状の鉄鏃、刀子の茎、鏃の茎、釘のほか、古銭1枚も出土している。

石器は8こ出土しており敲打器と砥石で、緑泥岩のものもあるが、大部分は砂岩製である。なお柱穴群と溝とは区別すべきであるが、区別せずに図版が作られたため説明の上で区別した。(山岡)

#### オ 柱穴群2 (図33, 写45の155)

遺構 林道から下方3枚目と2枚目の水田下で発見されたもので、現在工事中の斜坑坑口前、トロッコ軌道下とその東側あたりにあったものである。G地区においては1号住居址の東方3mあたりから梨の木沢崖端近くまで続いていた。その範囲は、東西やく16m、南北やく14mでおよそ200mに及ぶ。そのうち下地区西側ではグリット調査による地域、G地区においては、斜坑ボーリング口からの出水のための未調査区を除いて大小150以上の柱穴が集中し、焼土が所々に点在し、平状の巨礫が各所にすわり、下地区の西南側においては、広範囲にわたって炭混りの層が存在していた。この炭層や焼土付近には豊富な遺物が包含されている。遺構面は、黄褐色砂土中にあり、その面では床らしい固さは見当たらないが、焼土面が残っているのでそこを遺構面と考えている。この上層を覆う炭混りの黒褐色砂土層中にはとくに遺物の包含が多い。

周辺の地形を見ると、G地区上方には傾斜の強い地山があり、この急傾斜面から角度を変えて緩傾斜に移るあたりから柱穴が見られる。上方の地山の傾斜面は上に行くにつれて傾斜がきつくなり、自然の土塊をなし、その高さは調査時で1m以上もあり、水田造成時の堀削を考えるとこの高さは更に増すであろう。東へ行くにつれてその高さを減じ、崖端に近い所から南へ弯曲して柱穴面へ接している。土堤下面沿には列状に続く柱穴があり、このあたりから傾斜は緩やかとなり焼土群が存在する。下方に行くにつれてさらに傾斜は緩まり、平坦に近くなる。ここには焼土4か所が認められ、柱穴も著しく数を増し遺物の存在も最も多い地域となっている。さらに下方へ行くと水田造成で削り取られたためもあるが、自然地形は急激に落ちこみ、その途中から黄褐色砂土中に存在する炭層の堆積がはじまり、後述の配石遺構1の存在する帯状の溝様の地形に続いている。ここにある柱穴は大小さまざま、深さもまちまち、規則的なものは見つけ難い状態である。この柱穴群を推定するならば、何回となく建て直された孤立柱と思われ、その構築を推量するならば、山寄りの傾斜面を削り下げで平坦地をつくり、下方鞍部状に続く低い地形を見下すテラ

ス状地形上に立地している。山寄りの勾配のきつい斜面に屋根を支える支柱や支柱が建てられたり、下方緩傾斜面にまで支柱や支柱が建てられたものか、或い別棟のいくつかを想定しても見たい。柱穴数の多き、焼土の所が各所にあること、遺物の集中場所の確認がなかったことなど、数戸の建物があったかも知れない。また、何回となく生活の場として使われたものであろうか。園原にまつわる「ふせ屋」とはこんな所に建てられた建物と呼んだのであろう。出土遺物は殆んど中世後半のものである。

遺物 土器は、室町時代の古瀬戸陶器を中心とした陶磁器が大部分である。土師器・灰釉陶器も少量あり、土師器（図37の12・13）は杯形土器で、白黄褐色で胎土も精選され焼成もよい。灰釉陶器（図37の14・15、図38の1）は段皿と碗である。図38の1は墨書土器である。中世陶器の主なものは表8のとおりである。柱穴群1を切る溝3からも類似陶器が多いので同表に入れた。行基焼小皿・山茶碗は多治見窯のもので、片口鉢は坂本窯という。図37の19には印花文がある。24・25・27・30は鉄軸がかり、黒褐色・茶褐色を呈する。26・28・29には透明の灰釉がほどこされる。28は口辺部を欠くが、欠損部を磨き再使用する。

図38の2には透明の釉、3・7は黄緑色の釉がかかる。3の口辺部は片口になる。5は把手部と思うが焼成台だろうか。土師質である。9は壺の口縁で大形のもので、胎土は白灰色で長石の粒子が多い。このほかに青磁器片2、土師器・須恵器・灰釉陶器も多く出土しているが、まぎれこんだものである。

表8 柱穴群1と溝3・柱穴群2出土陶器

時代	窯名	図番号	柱穴群1(溝)	図番号	柱穴群2	
南北朝	古瀬戸			37	合子(28・29) 鉄軸合子20	
室町時代	後	古瀬戸	37	天目(9)	37	小皿(20-22) 段花小皿19 天目24 水注25 無蓋小皿26
	中	古瀬戸瓦器	37	小皿(8) 皿10 鉢2	37	平碗 23
	前	古瀬戸行基	37	合子 11	37・38	オロシ目皿(4) 水注3 高坏2 鉄軸壺 蓋39 小皿(16・18) 山茶碗17 片口鉢(6)
	後	古瀬戸常滑			38 38	四耳壺(7) 壺(8)
鎌倉時代	中	備前			38	壺(9)
	前					

鉄・銅製品も非常に多く、遺構面から出土したものが多く。銅鉢、鉄鍋の残欠、錠前らしきものがあり柄木部の残る大形の鎌・火打金・かすがい・鑿か遣り鉈かきさげ・鉄鎌・刀・刀子・鉋・釜など数と種類も多い。鉄芯に銅箔をつけた小形の剣があり、剣身片面のみ錆を有するもので献神具かと思われる。

石製品は硯（写46の160）と砥石がある。硯は粘板岩製の良好なもので4こが出土している。ともに小型のもので携帯用であろうか。砥石は、総数46個出土している。自然石を利用したものが多く、黄褐色の粘板岩質で、石質の細かい形態の整った定角形の仕上げが多いのに注意したい。また、宝珠形のつまみを持つが、形態を整える程度の擦痕を残すのみで、砥石として使用したものでなく儀器かもしれない。

古銭も多く、とくに集中して出土はしていないが、開元通宝2枚、咸平元宝、祥符通宝、天聖元宝、皇宋通宝各3枚、熙寧元宝2枚、元豊通宝3枚、元祐通宝2枚、紹聖元宝のほか4枚出土している。

遺物の殆んどは中世後半のものであり、陶器は室町時代のもので出土している。室町頃のもので

杉の木平遺跡で確認された唯一の中世の住居と考えられよう。(神 村)

カ 配石遺構 1 (図30, 38の10-17, 39の1, 写45の156)

E地区のほぼ中央部あたりで確認された遺構である。現在の斜坑坑口前面、ずり掘出機橋の北端あたり  
に位置している。柱穴群2のあるF地区の南端から急傾斜にさがる黄褐色砂土層の下に厚さ10cm-15cmの  
炭層があり、傾斜の緩やかになるあたりはとく炭層が厚く、溝状の凹みに堆積している。この溝状の凹み  
には、50cm-60cmほどの転石が並びこの石の間には人頭大から拳大の石がぎっしりつまっている。帯状に  
続く集石はほぼ北西から南東に走り地形の傾斜に沿って続いている。集石は幅1.5m、その南はや、高め  
の砂土の露出帯が並び、それと平行して並ぶ石列が存在する。この石列から南側には茶褐色土の地積があり  
その下に自然礫層が平らな緩傾斜面をつくって下方の石製模造品出土地に接している。溝中の集石上面  
までは炭層の堆積は厚く、多量の灰軸陶器片、土師器片が含まれ、集石の石の間には灰軸陶器の坏高台  
が10数こ発見されている。南側の砂土の露出部までくると炭の混入は著しく減り、遺物の出土は稀となる。  
人工的な配石か、凹地に自然に転入した石の集合かははっきりしないが、炭層中に極め遺物包含が多いこと、  
集石は帯状に続きその中に炭の混入が多く、しかも石間や下から灰軸陶器の出土が多いこと、両側の石列  
の中間には除石した形跡のある砂土面が並ぶことから遺構の一つと考えたものである。この遺構部は、水  
田の土堤直下であって、表土から深さ3.5mもあり、斜坑の測量基点が土堤上にあつたため拡張が難しく、  
左右の確認ができず心残りの遺構のひとつである。東側に立てこの配石を見ると、緩い傾斜をもってこ  
の地籍を対角線状に横切り、その延長線上に神坂神社が位置しており、各所に確認された炭層(6か所)  
の位置が、その方向にほぼ一致するようで、道筋の一つではないかとも思えたものである。昭和48年の第  
2次調査によってB地域で確認された数か所の道跡跡との類似点も多く、とくに1号道跡跡が、B地域の  
傾斜面を東から西へ曲折して登り、梨の木沢左岸に向っているのは、沢を越えてA地域へ渡り、配石遺構  
1のコースへ通じているように思えて来る。遺物の状況から見て平安時代のものである。

配石遺構を覆う炭層は、上の段では、柱穴群2の西側のもの、さらにその上では1号住居址を覆う炭層  
4とその南で確認された炭層5に連続するものと思われる。

遺物 出土した遺物は極  
めて多量であったが、細片  
が多く器形の知れるものは  
数個に過ぎない。灰軸陶器  
片が最も多く、そのほかに、  
土師器片・須臾器片や緑釉  
陶器片も4点出土している。  
図38の10は緑釉陶器の段  
皿である。胎土は、灰白色  
で全面に淡緑の釉のかかっ  
た逸品である。灰軸陶器は

表9 配石1、炭層4の1・2、炭層5出土灰軸陶器  
(内は図内番号を示す)

	窯址群名	図 番号	配石1 図 番号	炭層4の1 図 番号	炭層4の2 図 番号	炭層5 図 番号
	美濃須臾	38	大形広 口壺04	39 段皿06		
灰	産 投	38	大形広 口壺10		40 柄(7)	
釉	尾 北 (篠岡)	38	柄(12 ・13)	40 柄(2)	40 柄(5・8)	
陶	美 濃 (多治見)	39	長重壺 (1)			
器	東 濃 (永田)	38	皿01		40 皿(6)大形広 口壺02	40 皿03柄 05

表6に炭層4・5出土の灰軸陶器と比較表示してある。

図38の17は三叉トチで灰軸がかかる。灰軸陶器としては、11は口辺部の立ち上る皿で、胎土は白灰色で半透明の軸がかかる。12・13は椀、15は広口壺の胴底部でともに胎土は灰白色、16は広口壺の頸部で灰黒色、図39の1は長頸壺の底部で灰褐色を呈している。

鉄製品は4点出土し、片刃矢式鉄鏃、鏃の茎、かすがいである。石製品は、大きな自然石の一端を利用する流紋岩製の砥石が1点出土している。

(遮那)

#### キ 炭層4

遺構 林道から下段2枚目の水田のほぼ中央部、G地区の1号・2号住居址とその周辺を覆う炭層である。2号住居址の西側では、南東へ向って急勾配で傾斜しており後述の炭層5に連続するものと思う。さらに続けば、配石遺構1を覆う炭層に続くものと推定される。下段のD・C地区においてはこれに類似するものは確認されていない。

この一帯の炭層は、木炭質のものに近い状態で、湿気を含みも多く掘り上げるに重いほどである。1号住居址の覆土上の堆積は最も厚く35cmに及び、その中間に薄く黄褐色土が間入しているので、上層を1、下層を2と区分している。従ってこの周辺に堆積する炭層の大部分は4層の1として取扱っている。1号住居址の北側で見ると、西から東へ傾斜し、住居址の東側で最も厚く、その東では勿然と消える。柱穴群2の造成時に削り取られたのか、或いは、住居址の廃絶地へ自然堆積したもともとと考えられる。北上方は、地山が急上昇しているとその形跡は不詳であったが、調査後斜坑口の削断り斜面中段に、緩やかな内湾状の炭層が確認されているので、最上段H地区の炭層6に連続するものがあつたわけで、現在でも斜坑口のすぐ西側斜面にその1部が露出している。炭層中には灰軸陶器片を主体に多量の遺物が包含されている。遺物の状況から推して、平安時代末期に堆積したものであろうと考えている。

遺物 土器と鉄製品については、上層(炭層4の1)、下層(炭層4の2)に分けて説明する。

##### ア) 炭層4の1の遺物(図39の16・17、40の1-4)

図39の16は胎土は白灰色で透明の黄緑色の軸がかかる段皿である。17は畿内産の緑軸陶器である。図40の1は、黄褐色の軸が全面にかかる輪花椀で、北宋青磁の1種である。この種類のものは、この層から3個体分検出しているが、他からは出土していない。古い青磁器である。2は、内側底部に黒書のある椀である。3・4は弥生末期の変形土器片で、4は台付甕である。このほか灰軸陶器は圧倒的に多く、緑軸陶器片21点、青磁器片3片が出土している。灰軸陶器の主なものは表9に表示してある。土器器片、須恵器片も若干混じる。

鉄製品は、のみ、火打金、鉄鏃、刀子、刀などで鉄鏃は、のみ矢式と、陶丸造柳葉式鉄鏃であろう。石製品は、ほぼ完形に近い粘板岩製の硯が出土している。

##### イ) 炭層4の2の遺物(図40の5-12)

図40の9は、この遺跡唯一の完形に近い緑軸陶器である。胎土は白茶色で軟質である全面に淡黄緑色

の釉がかかる椀形土器で、尾張産である。11は、台付変形土器の上部、10は、変形土器とともに土師器である。5・7・8は、灰釉陶器の椀形土器で、胎土、焼成とも良好である。5・8は尾北磯同窯、7は猿投窯といわれる。6は、東濃永田窯の皿、12は同窯の大形広口壺の頸部である。このほか、灰釉陶器片が非常に多く、緑釉陶器片は、ほかのどの層より多く30点以上を数え、青磁器片も2点混入している。

鉄製品は異形釘1、石製品は砥石が4こ出土している。

(潘井)

#### ク 炭層5 (図30, 40の13-18)

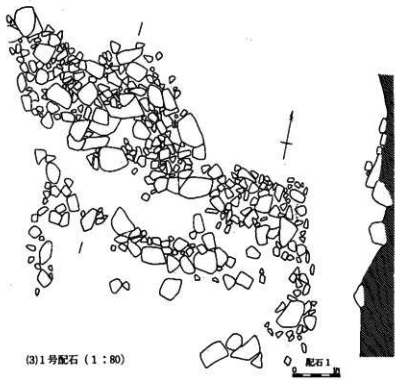
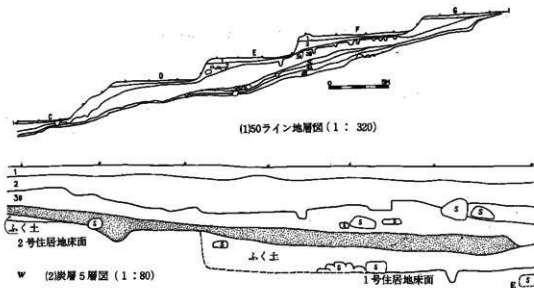
遺構 1号住居地の西南、土堤下において住居址検出のためのブルドーザー掘削作業中に確認されたものである。炭層の厚さは20cmほどで、北上方は厚目、南下方は薄目で、炭化物の混入は非常に多く、先述上方の炭層4に連なるものであろう。この層は南側においては、水田造成時に削り取られたものか、或いは深く落ちこんでいるものと思うが、配石遺構1を覆う炭層に連続するものであろう。

遺物 この層から出土する遺物は、土師器・須恵器・灰釉陶器であるが、大部分は灰釉陶器である。図40の17は、平安時代初期の須恵器杯形土器片に墨書されたもの、18は、古墳時代変形土器の胴部片である。13・14・15・16は灰釉陶器で、13は永田窯の皿、14・15は永田窯の椀である。ともに胎土は白灰色で、釉は半透明状のわっとした感じを持っている。16は、胎土は灰白色、半透明の淡緑色の釉の小口壺の頸部であるが、窯は不明である。緑釉陶器片1片と土師器・須恵器片は数点出土している。 (今村)

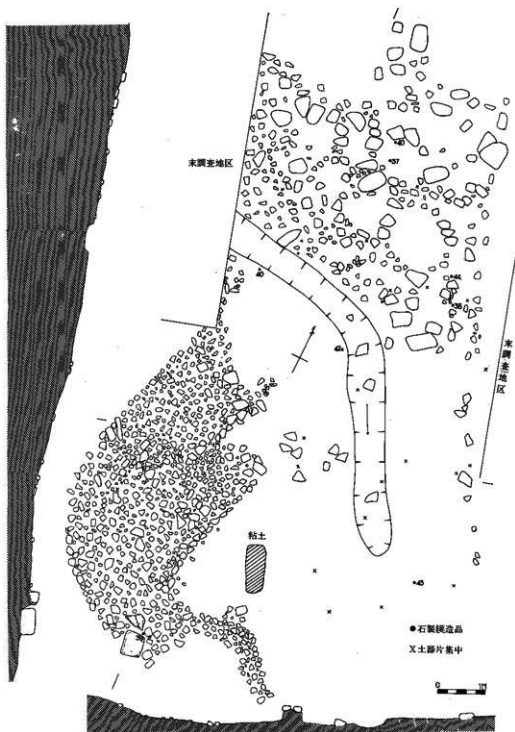
炭層4・5に類似している炭層6が林道沿最上段、H地区の水田の中央部、表土下250cm以上の深い所で確認されている。現在斜坑工事中の鹿島建設の事務所と、坑道の中間に位置しよう。この地区は、明治の頃、宿屋経営の民家があったとかで、埋土が非常に厚く1m50cm以上もあり、黄褐色土層中に攪乱が目立ち、その間に焼土や炭層が連続し、黄褐色土下層までには10層もの炭層が確認された所である。炭層6は、最下層のもので、深緑釉のかかった畿内産の緑釉陶器坏高台をはじめ、灰釉陶器片を包含する木炭質の強い炭層である。ここは非常に深いためと、斜坑工事による掘削は行われず、この一期工事終了後は、自然林として保存される計画のため拡張はしなかった。従って、斜坑坑口から上段林道までの地域は、自然堆積層がそのまま保存されている。

炭層6、炭層4、炭層5、配石遺構1を覆う炭層を、地図上で追うと、團原川の崖端に平行し、A地域の崖面を対角線状に横切ることになる。下方東南側、梨の木沢沿いに立って見ると、右上方は傾斜のきつい山寄りの斜面であり、左側は團原川の断崖に接する傾斜面である。所が原地形は、左崖沿いの方が高いので、中ほどにこの崖面を横切る帯状の鞍部があり、ここに上方から炭の堆積が続いているのではなからうか。この鞍部に面する両側の傾斜地は、単純なものでなく、緩傾斜地あり、急傾斜地ありの連続のようである。そうすれば、緩傾斜地はテラス状地形となり、人の生活の場になり易い。左側に位置する石製模造品出土地、柱穴群1、右側に位置する1号住居址、2号住居址、柱穴群2はそれぞれテラス状の地形上にある。故に、これら炭層の存在は一連のコースがあり、杉の木平遺跡A地域の性格を究明する大きな鍵を握っているといっても過言ではない。

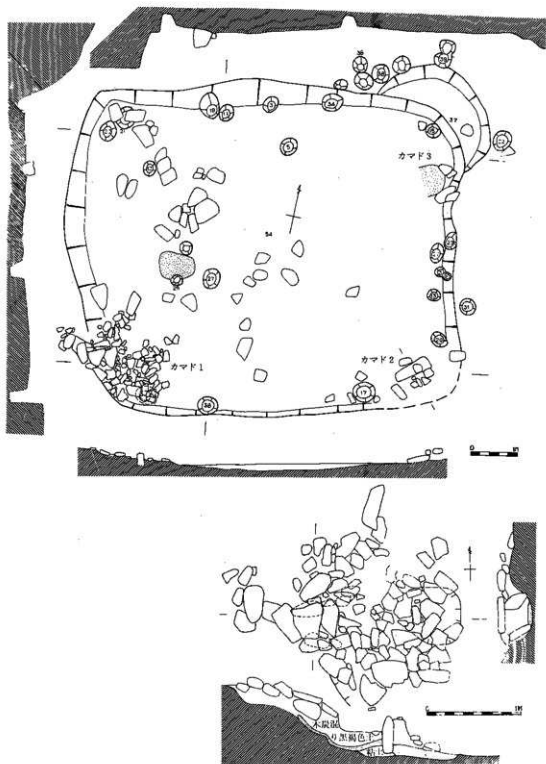
(今村)



第30図 杉の木平(A)遺跡50ライン・炭層5地層図, 1号配石遺構図

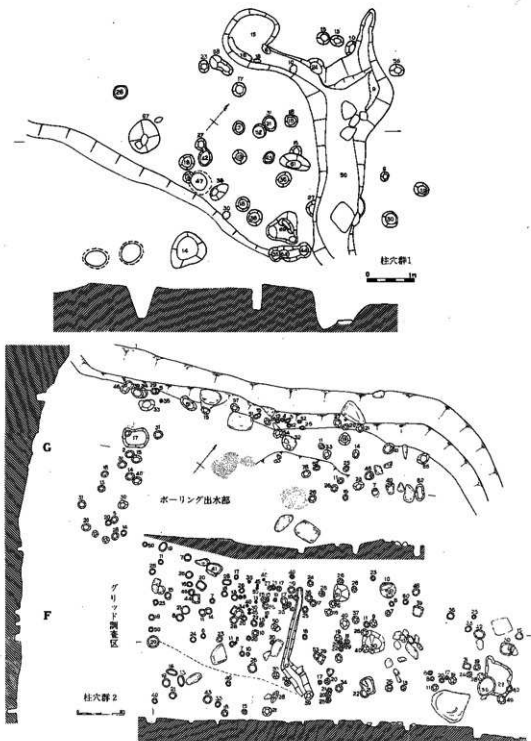


第31図 杉の木平(A) 遺跡石製模造品出土地

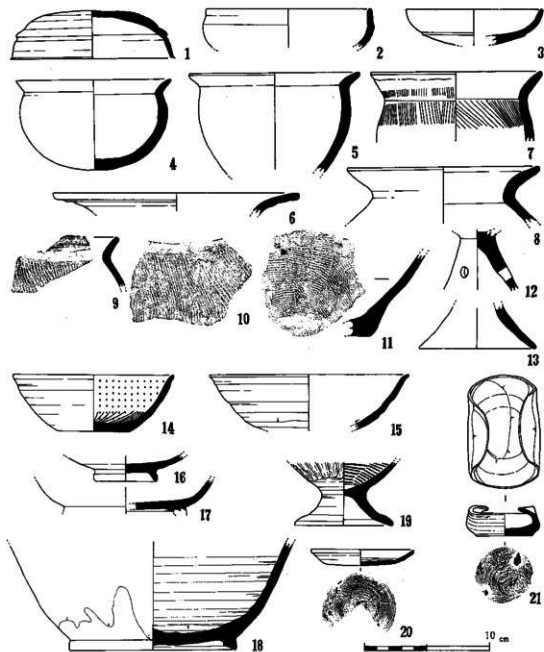


第32図 杉の木平 (A) 遺跡1号住居址・カマド1遺構図

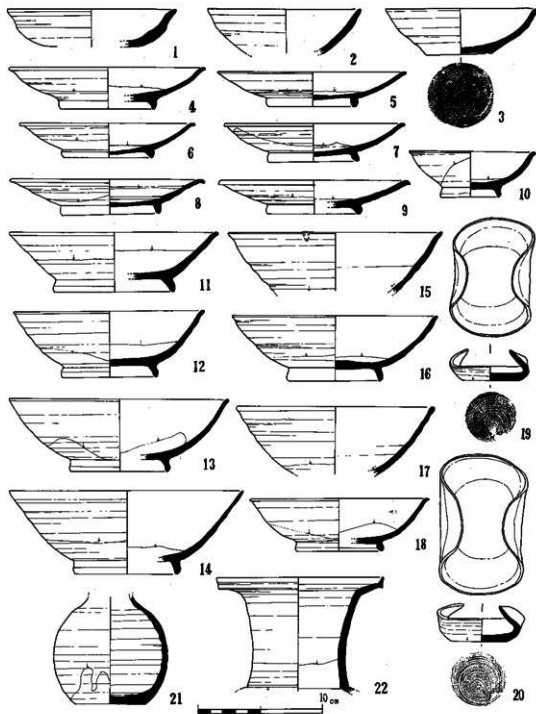




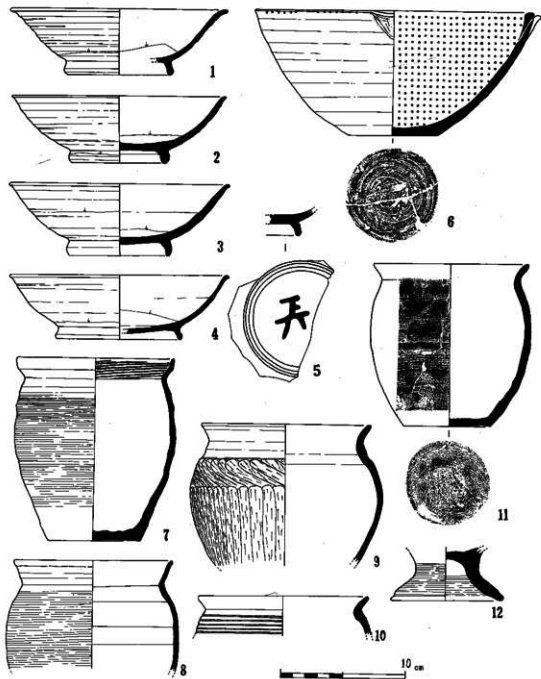
第33図 杉の木平 (A) 遺跡柱穴群1・2遺構図



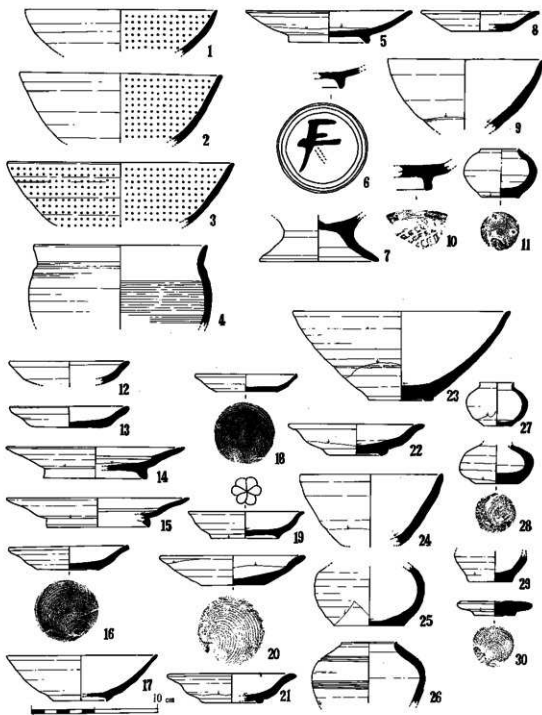
第34図 杉の木平 (A) 遺跡土器・石製模造品出土地 (1~13) 1号住居址覆土 (14~21)



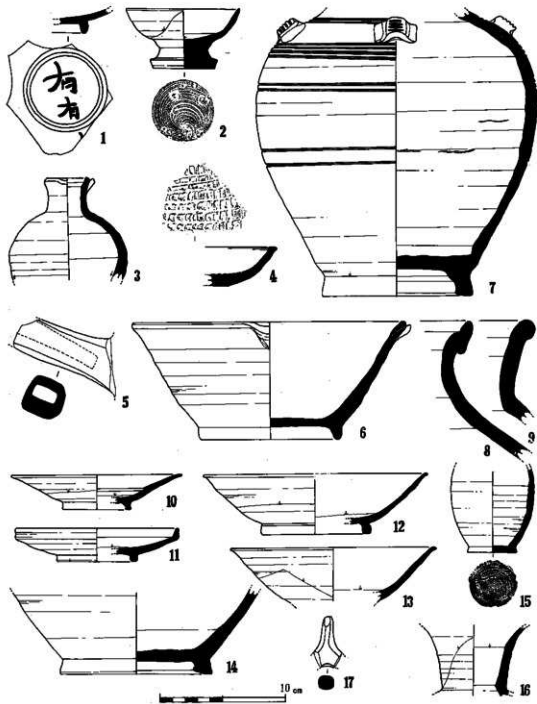
第35図 杉の水平 (A) 遺跡土器 1号住居址床



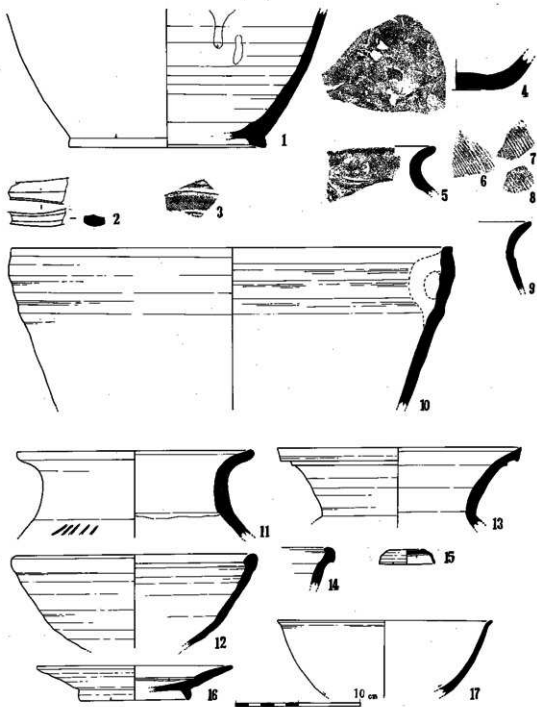
第36図 杉の木平 (A) 遺跡土器. 1号住居址床



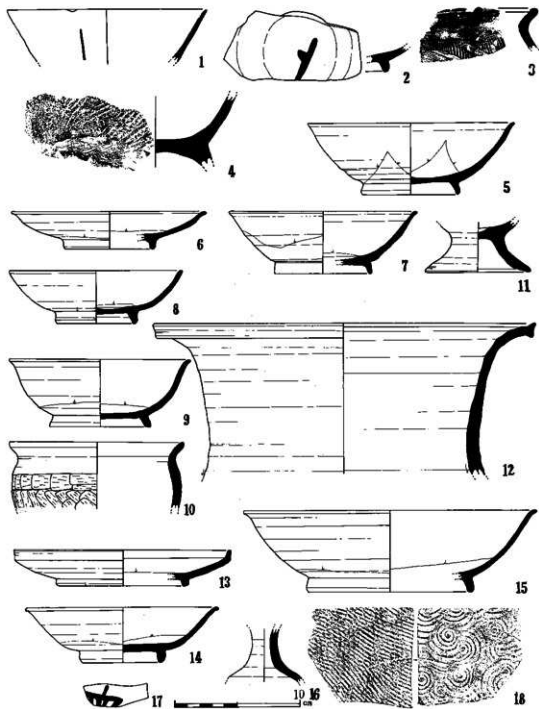
第37図 杉の木平(A)遺跡土器 2号住居址(1~4)柱穴群1(5~11)柱穴群2(12~30)



第38図 杉の木平(A)遺跡土器 柱穴群2(1~9)配石1(10~17)

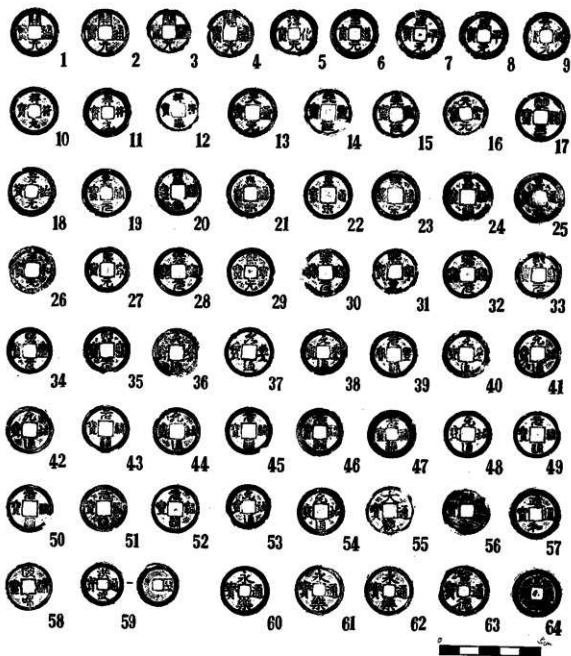


第39図 杉の水平 (A) 遺跡土器 配石 1(1), 配石 3(2), 配石 5(3), 土模 304, 炭層 1 (4-9)  
炭層 2 (11-14), 炭層 309, 炭層 4の1 (16-17)

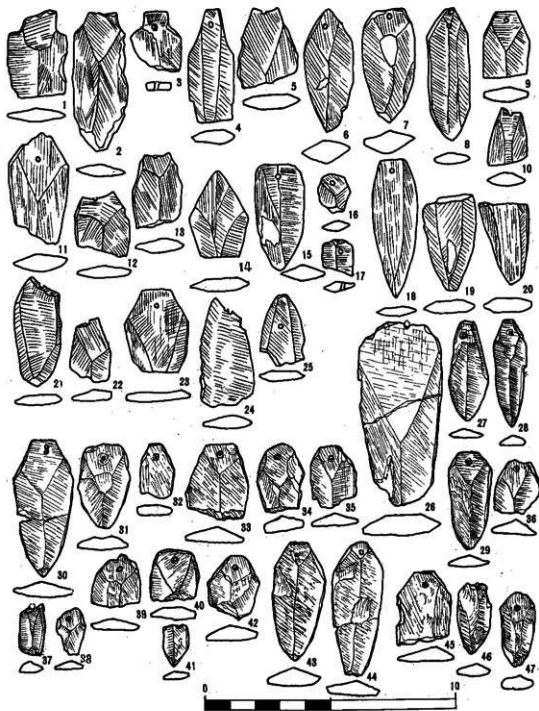


第40図 杉の木平 (A) 遺跡土器 炭層4の1 (1~4), 炭層4の2 (5~12), 炭層5 (13~18)

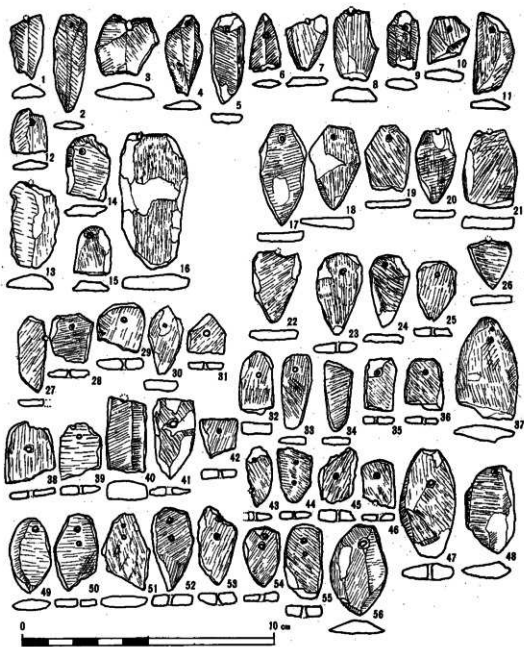




第41図 杉の木平 (A) 遺跡古銭



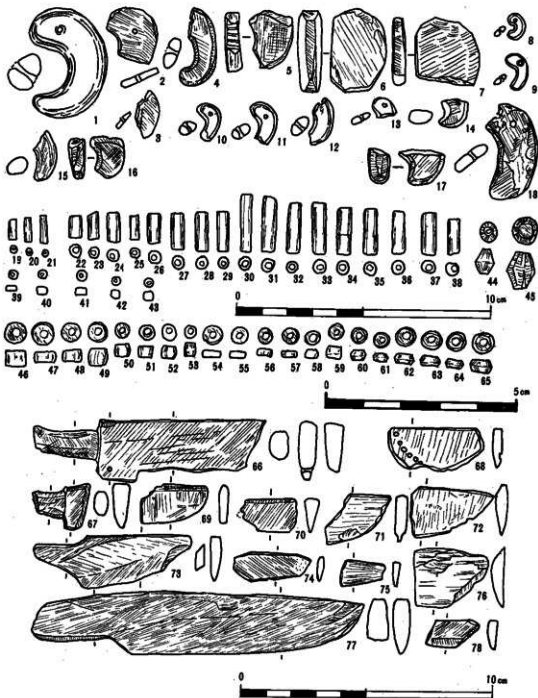
第42図 神坂峠出土石製模造品（「44. 神坂峠報告書」より）



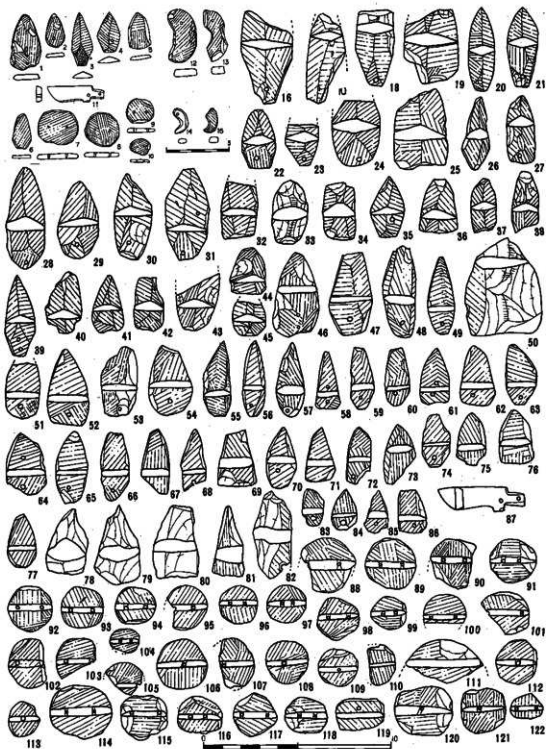
第43図 神坂峠出土石製模造品（「44. 神坂峠報告書」より）



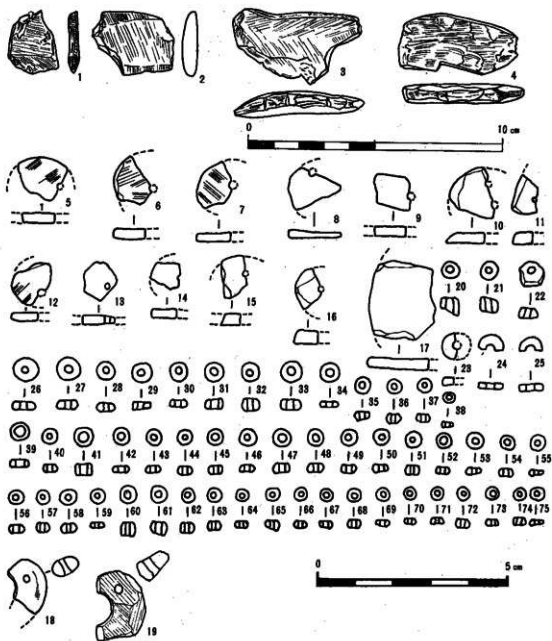
第44図 神坂峠出土石製模造品 (「44. 神坂峠報告書」より)



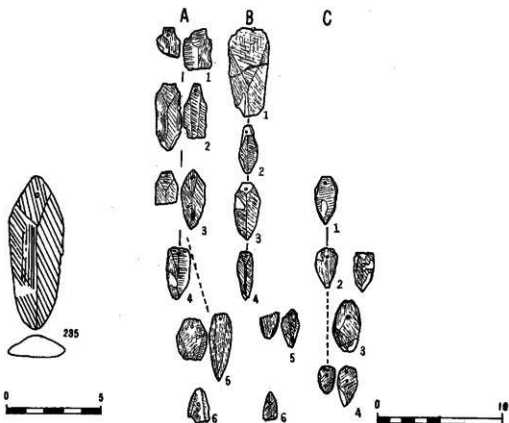
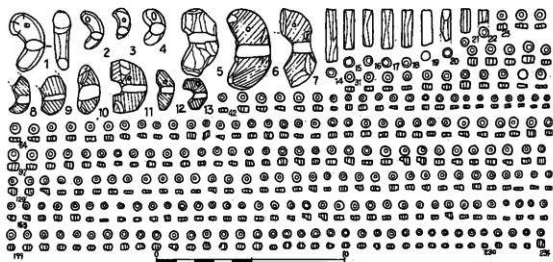
第45図 神坂峠出土石製模造品（「44. 神坂峠報告書」より）



第46図 神坂峠出土石製模造品（「45. 中央連絡会報」より）

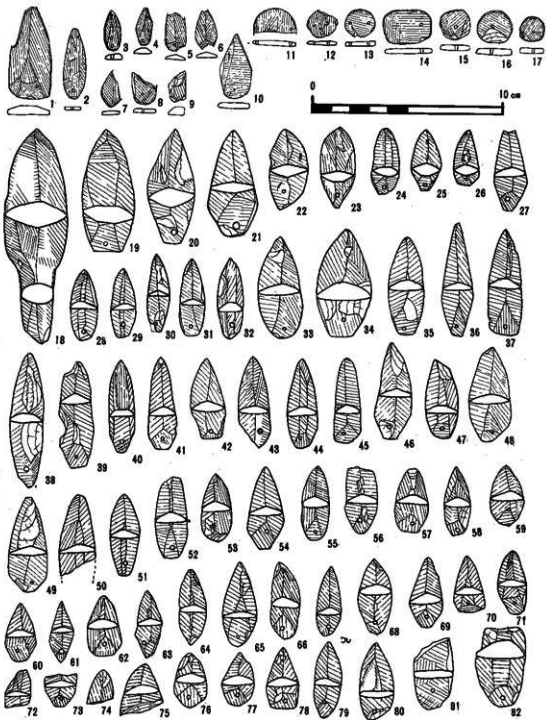


第47回 神坂峠出土・地表採集石製横道具 1-4 神坂峠出土 (「44. 神坂峠報告書」より)  
5-75 神坂峠地表採集品

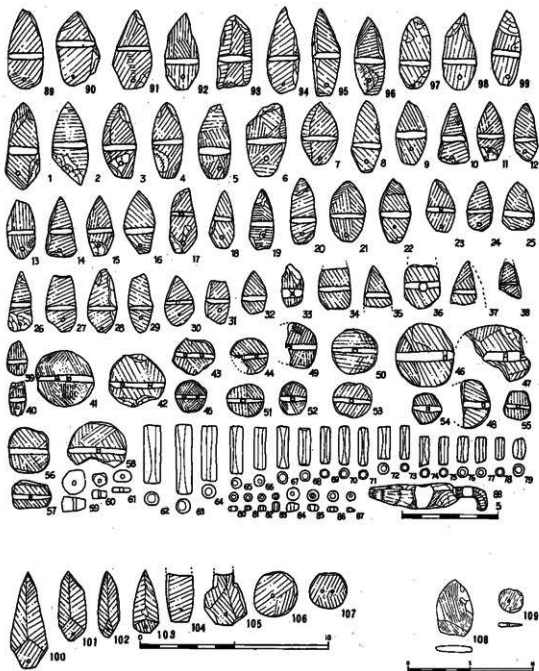


第48図 神坂峠・三壺淵遺跡出土石製模造品（「45. 中央道報告書」より）1～234 神坂峠・235 三壺淵遺跡別形石製模造品分類図（神坂峠出土品による「44. 神坂峠報告書」）

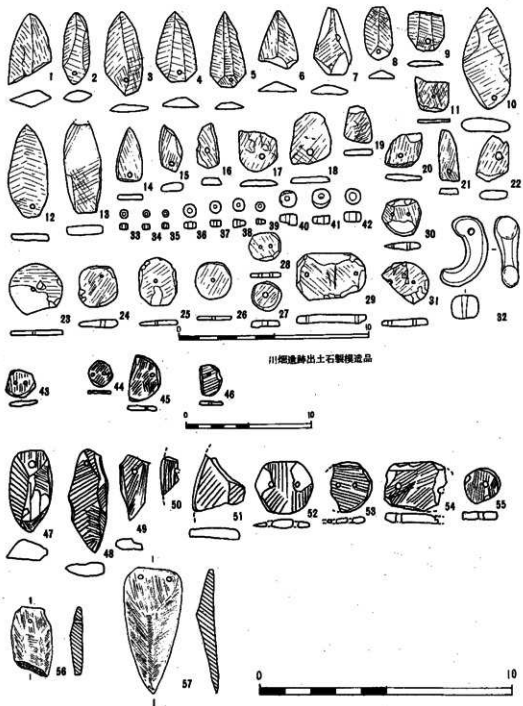




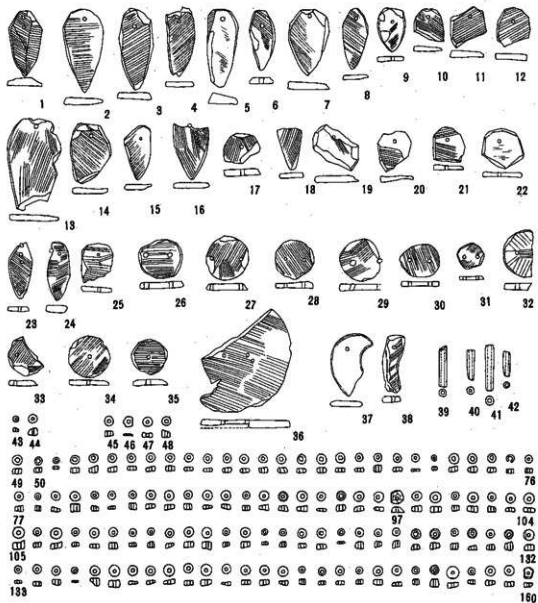
第49図 杉の水平(A)遺跡・大垣外遺跡出土石製模造品(「45. 中央報告書」より)  
 1~17 杉の水平(A), 18~82 大垣外



第50図 大垣外遺跡・大平神社（頭権現）遺跡・川畑遺跡出土石製横遺品（「45. 中央道報叢書」より）  
 1～99 大垣外遺跡，100～107 大平神社（頭権現）遺跡，108・109 川畑遺跡



第51図 川畑遺跡・杉ヶ洞遺跡・森下遺跡・山岸遺跡・赤坂遺跡・中原遺跡出土石製模造品 1~42 川畑遺跡, 43 杉ヶ洞遺跡, 44・45 森下とがり遺跡, 46 山岸遺跡, 47~55 赤坂遺跡, 56・57 中原遺跡 (45. 中央道報告書, 46. 森下とがり報告書, 47. 赤坂報告書, 48. 中原報告書より)



第52图 中原遗址出土石製模造品

## 4 杉の木平遺跡の調査のまとめ

杉の木平遺跡は、神坂神社前林道弯曲部から東北方、林道沿い山麓斜面と林道東南園原川に面する崖端部までの段丘状崖面上に立地する。信濃坂（神坂峠）を頂点として、その東麓、園原下位段丘まで続く東山道関連遺跡群の一つとして、注目される遺跡である。この遺跡の中央や、東寄りや南北に浸食して流れる梨の木沢によって、2つの東南面する崖面に分離されている。梨の木沢から神坂神社前までと、梨の木沢と、東下方見の宮遺跡に接するこの傾斜地に、恵那山トンネル飯田方斜坑掘削が計画されたので、この斜坑広場の発掘調査が昭和46年と昭和48年の2度にわたって実施された。

梨の木沢から園原川の上流側をA地域、下流側をB地域と区分する。両地域共、園原段丘Ⅲと呼ばれる平坦な地形面に、崖性の堆積物が覆い、西と北側には、恵那山や富士見台に続く山地を背にして、東・南の園原川に面する日だまり地形をなしている所である。発掘調査前の地形は、階段状の耕地が造成されていて、A地域の方が急傾斜であったが、遺物は多量に表採できる所であった。発掘調査の結果、A地域の地形は複雑、堆積砂質土が厚く、B地域は地形は比較的単調で、巨礫を含む転石が多く、砂質土の堆積は予想外に薄かった。従って、遺物包含の様相も自ずと差異が見られる。土層の堆積を見ると、層序的には、上層から耕土（1層）、黒色砂質土（2層）、黄褐色砂質土（3層）、茶褐色砂質土（4層）が堆積し、所によっては、下部黒褐色砂質土（5層）の堆積層をはさんで、角礫まじりの黄灰色砂礫土が地盤に続く地山となっている。しかし、A・B地域の堆積層の厚さには、大きな差異があり、とくに、黄褐色砂質土の堆積差は大きい。A地域では所によっては100cm以上の厚さに及ぶのに、B地域では、厚くても30cmである。これは、平安時代と中世期の遺物包含量に、その差異が如実に現われている。確認された遺構も、A地域においては建築的遺構と炭層、B地域では、道路状遺構等、その差異も大きい。

### 1) A地域の調査のまとめ

遺物包含層を見ると、亜角礫を含む黄灰色砂礫土の地山の上に、炭混り黒色砂質土（4層b）、茶褐色粘質砂土（4層a）、炭層Ⅱまたは炭混り粘質土（3層c）、黄褐色砂質土（3層b）、炭混り茶褐色土＝炭層Ⅰ（3層a）、黒色砂質土（2層）、耕土（1層）がのり、2層と3層の堆積が厚い。4層が、古墳～奈良時代の包含層、3層bまでが平安時代の包含層、3層aから2層が中世の包含層で、はっきり文化層が確認できる。確認された主な遺構は、石製模造品出土地（古墳～奈良）、住居址2（平安）、柱穴群2（平安と中世）、配石遺構（平安と中世）、炭層（奈良・平安と中世）等である。

多量の遺物を伴出する建築性遺構の確認があったこともさることながら、炭層の分布状況とその性格が、とくに重要と考えられる。中世以降の炭層は、最上段H地区の中層と、F地区柱穴群2の西側で検出されている。平安時代の炭層は、H地区の下層、G地区の1・2号住居址周辺、F・D地区の中央部や、東寄

り、C地区の東側で検出されている。奈良時代の炭層は、D地区の東寄りとC地区の東側で検出されている。時期は異っていても、その場所が、帯状に連なっていることは、炭の堆積し易い地形所在を暗示している。一図5の……線参照。即ち、A地域の東南面傾斜地を、ほぼ東から西へ、対角線状に凹地が続いていると想定し得る。各遺構の検出時に確認した土層地積を見た時、山地寄りの北側から傾斜を示すのは当然であるが、圓原川に面する崖端の方が土塊状に高いのを奇異に感じた。各所で、南西からと北からの傾斜の事実が検出され、変形V字状の地形を示し、中間部に凹地の存在を裏証している。帯状に凹地が続いているとすれば、帯状に炭層が堆積して当然である。そうなれば、この低地中で検出された配石遺構1の性格も自ずと明確化されよう。人工的なものというよりは、山道路の一種ではあるが、より強まるであろう。帯状に並ぶ炭層を境にして、下方圓原川側には、テラス状地形に立地した石製模造品出土地と柱穴群1（図33）が位置し、上方山寄りの緩傾斜面には、1号・2号住居址と柱穴群2、中世の土壌等が存在しているのも、偶然ではなからう。各期の遺構も、帯状に走る炭層の両側にほぼ平行の位置にある。多量に遺物の出土した、古墳時代・平安時代・鎌倉時代・室町時代の遺構が、炭層帯の左右の緩傾斜地にあるようで、中間地に山道を想定し、その両側のテラスを生活の場と考えたいのである。なお、古墳時代～奈良時代の遺構・遺物集中場所は、炭層帯の下側、中世のものは、上側に偏っていた。

## 2) B地域の調査のまとめ

遺物包含層を見ると、角礫を含む灰褐色砂質土からなる地山の上に、所によっては、下部黒褐色砂質土（5層）、茶褐色砂質土（4層）、暗褐色砂質土又は黄褐色砂質土（3層）、黒色砂質土（2層）、攪乱の多い耕土（1層）となっている。a面下方土堤下、d面北側炭層堆積地を除けば、3層・2層の堆積が薄く、1層の耕土と埋土が厚い。2層は、中世陶磁器類、3層は、平安時代、4層は古墳～奈良時代の遺物包含層に区分できるのは、A地域と同様である。

検出された主な遺構には、縄文時代後期の住居址、古墳～奈良時代の土壌・炭層・テラス、平安時代を中心とする道路状遺構・炭層・土壌、中世の竪穴・墓石址などがあり、それらに伴う土器・陶器類を中心とした遺物の出土量は、A地域ほどにはのぼらないが、それぞれ資料性の高いものである。

A地域の調査結果を影射して、今回の調査結果について成果をあげれば次のとおりである。

- 1、調査区の北側山裾から、縄文時代早期・中期の土器が1個体づつ発見された。また、西端の梨の木沢岸頭では、縄文時代後期の住居址1軒が検出されている。神坂神社前の石礫出土、神坂峠頂上検出の縄文時代後期土器と合わせれば、東山道開削以前から木曾川水系と天竜川水系を結ぶコースがあったことがわかる。
- 2、テラスと呼称した緩傾斜地で、巨礫のかたわらに置くような状態で、石製模造品と土師器が出土した。テラス1・2のような例は、神坂峠西山麓の山畑遺跡の事例に共通しており、A地域の石製模造品出土地や、その西側の模造品出土例のような、転石もしくは石畳状の石を部分的に取り除いて、土師器片などと共存していた例とともに、山神祭祀の一形態とみられよう。
- 3、炭層1・2のように、焼土と炭混り黒色砂質土中に石製模造品と土師器を伴出したり、灰粘陶器片の

散乱状態を確認した所は、テラス1の灰軸陶器の出土例や、A地域の炭層1に類似例が見られ、この遺跡に見られる祭祀場の一形態か、仮泊の場の一例かも知れない。

- 4、信濃坂を頂点とする古代東山道関連遺跡群の一つであるA地域の調査を裏付けるものとして、道路状遺構の検出があげられよう。全部で7本を数える。個々にわたれば、多少の相異はあるにせよ、その形状はほぼ規を一にしている。地山を断面幅広のU字形状に削り、小さいものから、径20~30cm大までの礫を置くものであった。傾斜の強い所では、当然上方からの転石も混っており、それらは概して大形の礫であり、選別は可能である。遺構の断面を見ると、U字状に凹めた底からは、地山の上にうすい酸化鉄沈澱層があり、その上の灰色の砂礫土層は固く締り、その上に石敷が重ねられる状態が観察できたこと、石敷の上面に灰軸陶器片を中心とする遺物が多く発見されたこと、幅120~200cmの平面は、雨水によって凹められる浸食地形とは確実に区別できることなど合せ考えれば、人馬に踏み締められた路址と考えてよい。また、1本でなかったことについては、傾斜地なるが故に、時々出水により、路面が荒れたり失われたために、峠へ向う道筋は幾本かになったと思われる。中世遺物が重複する所と、中世のもののみが検出される所があったが、路址という性格からすれば、重複する時期にまたがって遺物が発見されるのは当然である。

(以上4項目 宮沢)

7本の路址中、要注目のものは、1号と3号路址である。3号路址についてそのコースを辿って見ると、A地域との関連が強そうである。下方b地区で検出された3号路址は、テラス2の南側をかすめて西へ登り、傾坂を直進状に進むが、d面山裾で南へ弯曲している。その先は不詳となっている。若し、そのまま直進すれば、梨の木沢に面する。ここで渡河すれば、その対岸にはA地域炭層1が存在する。コースが結ばれるならば、A地域の炭層が堆積する凹地は、やはり道筋ではの想定が強まることになる。それを強めるもう一つの理由として、凹地地形の共通点があげられよう。B地域では、北側山地帯から岩盤が大きく南へ突出し、西南側圓原川の崖端付近は高く、巨礫転石も多い。中央部はや、幅狭の東面U字形地形を示し、上方で西南に曲折している。中央部ではこの凹地を通り、上方急傾斜面で分岐しているのであろう。路址中、1号・3号路址は、その幅、構造、コースの条件から見て、中心道路と見られる。

杉の木平周辺の地形を見る限り、古道は、尾根伝いのコースもあろうが、南の圓原川に沿いながら、帯状に屈曲して続くU字形低地は、道として最適で、峠の登り口、川の出口に位置する神坂神社との関連等で、東山道の道筋の一つと考えたい。しかし、それを実証するものは、ほかには発見されていない。

東山道コース決定の課題を解明する鍵は、尾根道筋の遺物分布調査と、A地域最上段に残る炭層の再究明、B地域の東に続く見の宮遺跡の実態把握である。尾根道は、2回にわたる分布調査によって、数か所で、須恵器・灰軸陶器・常滑陶器片を採集してはいるものの、実態把握の一端に過ぎない。見の宮遺跡は、伝承地朝日松・姿見の池を含む所、幅狭い東面緩傾斜地に、多量の土師器片を主体とする遺物包含地である。しかも、1・3号路址はこの地に接するあたりまで続き、テラス1の東端、用地境界に近い所から、土師器の杯・変形土器が集中検出された事実は、見の宮遺跡の一端を暗示している。圓原遺跡群の実態把握を含めて、見の宮遺跡の学術調査が望まれる。しかし、それ以上に、自然景観と史跡が調和して残る数少ない遺跡の一つとして、その保存の重要性が痛感される。

(今村)

## あとがき

昭和48年7月25日に始まった斜坑広場その2(杉の水平遺跡B地域)の発掘調査は、10月20日に終り、その後連日の整理作業により本報告書が発刊されるまでとなった。とくに山深い園原の里で、しかも、地形条件に恵まれない傾斜地で、深い覆土と巨礫とに悩まされ、時に危険さえ感じられたが、幸い無事発掘作業が終了し調査結果のまとめの作業も予定通り進捗できたのは、関係機関・関係者のご協力、ご支援のおかげと、調査員一同の精励の結果である。団長として厚く感謝したい。

園原の里は、長野県人のみならず国民全体の歴史のふるさとであり、史跡と伝承とそれを取りまく自然景観とが調和して、古代の姿をありのままに近い姿を残す地域であるため、その一部でも開発のために破壊されるのを見るに忍びないのは、ひとりわたしだけではなく、関係の者全員この自然景観の保全を強く念願してきた。しかし、恵那山トンネル斜坑掘削のために開発が余儀なくされ、杉の水平遺跡の記録保存が決定されるや、調査団の任の重さを痛感せざるを得なかった。幸い全面発掘の方針に基づき、2回にわたる学術的・総合的な発掘調査が許されたことは、調査団長とし喜びに耐えなかった。

調査結果は、第1次・第2次調査報告書に見るごとく、予想以上に出土遺物が多く園原の歴史性を解明するに足る貴重な資料となっている。特に、古代東山道にまつわる園原の史跡を如実に物語る諸遺構の確認さえあって、調査の成果は極めて多大であった。長野県のみならず、広く古代交通路解明のために大きな手がかりになったと自負している。深い地積層は、層序的に分類でき、各期単独の文化層が確認され、石製模造品の出土状況も祭祀形態とおぼしき遺構を伴い、平安時代住居址の発見をはじめ、多量の緑釉・灰釉陶器の出土は、下伊那地方へ移入される中央文物の玄関口と予想された園原の地域性を実証し、加えるに数条の道路状遺構の確認は、古代アズマのヤマのミチの通過点として園原を史実へと実証する最重要資料となっている。中世資料も又豊富で、中央文化の交流を物語るだけでなく、解明の遅れがちな考古学による中世史研究のためにも大きな指針となるであろう等、枚挙にいとまのないほどである。

この2回の調査成果が大きければ大きいほど、調査員を含めて歴史を研究するもの、考古学を研究するもの、郷土の自然を愛するものとしては、この成果を活用し、さらに園原の歴史を、下伊那の歴史を、長野県の歴史を深める努力と、残された園原の自然保護を積極的に進める意欲が要求されよう。

B地域の調査結果にあたっては、県文化財専門委員一志茂樹、県考古学会長藤森栄一、(昭48・12逝去)、等の諸先生が、わざわざ現地に来訪され、つぶさに御指導くださったことに深く感謝の意を表したい。

終りに、10月初め発掘現場でご指導くださった藤森栄一先生が、12月に急逝されたこと悲しむとともに、調査員とともに、先生の御冥福をお祈りしたい。

(大沢)





1. 東から園原を



2. 駒つなぎ坂から



3. 西から園原 - 中央道を



4. 対岸から



5. 対岸からA地域・B地域を



6. 第1期斜坑口工事場



7. A地域調査後の整地



8. B地域調査前



9. 斜坑々口



10. 斜坑口前



11. 斜坑貫通式



12. 夜烏山 (竹下寿氏撮影)



13. 恵那山 (竹下寿氏撮影)



14. 中央道工事と綱掛山



15. 神能御坂道



16. 式内阿智神社(昼神)



17. 式内阿智神社奥宮



18. 鶴巻湖の碑



19. 犬山洞から園原を



21. 長者が池



20. 園原川



22. 月見堂を



23. 仲正歌碑



24. 駒つなぎの桜



25  
マサゴヤヤから



27. 姿見の池



26. 千代沢旧道



28. 暮白の滝



第9回 アズマのヤマのミチ点映(4)

30 朝日松歌碑



29 朝日松



32 帯木歌碑



31 帯木



33. 五輪塔





34. 名号碑



35. 神社から網掛山を



37. 神坂神社境内



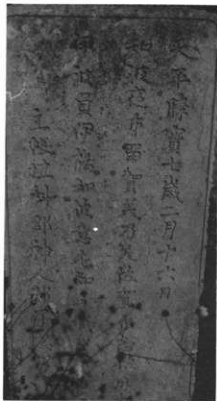
36. 神坂神社



38. 腰掛石と團原碑



39. 万葉歌碑



40. 万葉歌碑  
(会地早雄神社)



41. 神社前の歌碑



42. 尾根道から園原を



43. 尾根道(ソブ沢付近)



44. わる沢の池



45. 千本立



46. 千本立手前



47. 尾根道から神坂峠を



48. 峠への尾根道



49. 神坂峠遺跡(頂上)



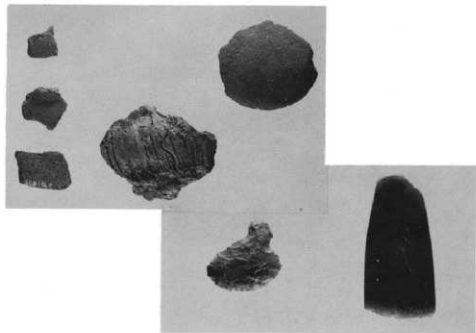
50. 峠から伊那谷を



51. 峠から木曾谷を



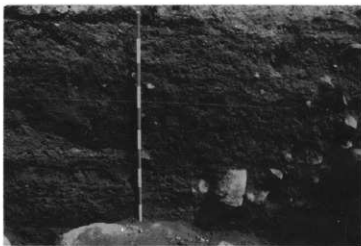
52. 遺構



53. 土器片と石器



54. 北から



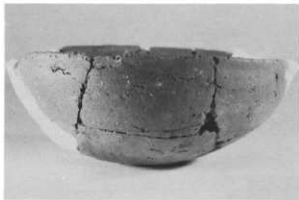
55. 土層状況



56. 円板形模造品



57. 剣形模造品



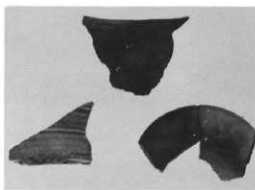
58. 土師器 杯



59. 杯出土状況



60. 土師器 杯



61. 土師器・須恵器



62. 灰釉 椀

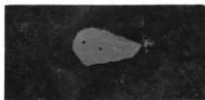


63. 黒書陶器

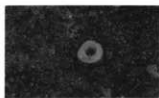




64. 全景（東から）西側1号路址



65. 剣形模造品



66. 白玉



67. 土師器 杯



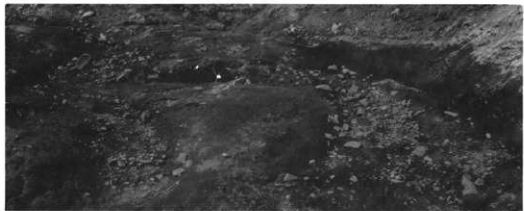
68. 杯出土状況



69. 下方部



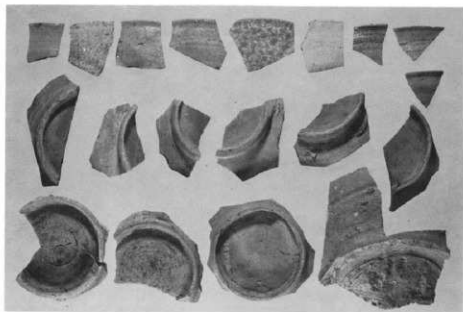
70. 中央部



71. 左3号路址 右1号路址



72. 上方部 右5号路址



73. 出土土器



74. 東方から



75. 須恵器



76. 須恵器・山茶碗



77. 須恵器・山茶碗



78. 下方部 東から



79. 中央部 西から



80. 中央部 東から



81. 中央部 覆土土層



82. 上方部 東北から



83. 上方部 西南から



84. 平罐出土状况



85. 須惠器出土状况

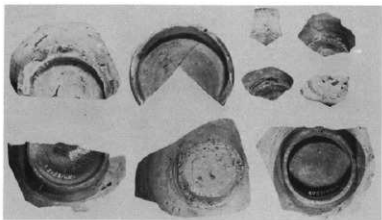


86. 須惠器

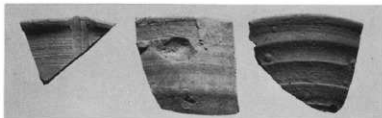




87. 灰釉陶器・山茶碗



88. 灰釉陶器・山茶碗



89. 須惠器



90. 上方部 南から



91. 土師器



92. 土師器出土状況



93. 5号路址 東から 上方1号路址



94. 7号路址 南から